



そよ風の中でつかまえて

沖之司 拓

目次

序章	【めざめ】	……………	三
第一章	【恋するだるまストーブ】	……………	八
第二章	【月夜の決闘】	……………	二四
第三章	【人形造りの夜】	……………	四〇
第四章	【墓場の鬼ごっこ】	……………	六四
第五章	【あわてんじゃねえよ】	……………	九〇
第六章	【頭から煙】	……………	一一七
第七章	【君よ知るや南の国】	……………	一三五
幕間	【赤い糸】	……………	一六三
第八章	【永遠に失ってしまうより】	……………	一六八
第九章	【猪突猛進】	……………	一九三
第十章	【僕は君を必要とする者だ】	……………	二二三
第十一章	【再会】	……………	二三五
第十二章	【さらば友よ】	……………	二五三
終章	【メビウスの輪】	……………	二八一

【序章】

ヨゼフ爺さんは、大あくびをした。

窓の向こうを、燕が飛んだ。

遠く白く高いアルプスに映えて、斜めに大気を貫いたのである。

陽は優しい。

春じゃな、とヨゼフ爺さんは、ひとりごちた。

やれやれ、今年もどうやら冬を越した。五体はまただいぶ萎えてしまったが、よわい 齢七十、相場であろう。他に格別不平不満の種もない。ともかく春が来たんじゃないかな。

「こんにちは。よろしいでしょうか」

「客が骨董屋を覗くのに、いちいち断ることもあるまいよ。入りなされ」

「失礼します」

東洋系の顔立ちをした、上品な青年紳士である。

もつともヨゼフ爺さんから見ると、大概の人間は若く見えてしまうし、まして東洋人はみんな幼く見える。実際は四十を越えているのかも知れない。

「……牧師さんかの？」

「近いと言えば近いんですが、カソリックですからね、神父です。どうしてお判りになりました？」

言葉は東洋訛りのスイス語だ。

つめえり

「話襟は珍しくもないが、この陽気にコートのボタンなんぞ掛けとるのは、あほうと牧師だけじゃからの」

「そういえば、そうですね」

「何をにやけとるんだか」

「いやあ、私、とても嬉しいんですよ。都会まちから臨時の仕事で麓の村に来て、もう半年になります。アルプス山麓の古き良き農村。都会の者なら、誰だっ
て期待するでしょう。ところが村の農家の屋根には、モダンな衛星アンテナ
が林立している。少々、風情というものが——」

「近頃の神様は、崩れかかった田舎でないと、お恵みは下さらんのかの？」

「失礼いたしました。失言でした。実は帰宅を許されたばかりなもので、少々
浮かれておりました」

「……正直な牧師つてのも、珍しいもんじゃの」

「土産を探しているのです。麓の村にも土産屋はたくさんありますが、ご主人、
さきほど何を下で勧められたとお思いですか。『旅の思い出・アルプスの
そよ風』。銘菓だそうです。無論、真空パックです」

「観光客には、よく売れとるらしいが」

「いやあ、なかなか、どうも。諦めかけていたところで、こちらを見つけてま
した。けばけばしい装飾も無く、目を凝らさないと見えないような薄暗い——
失礼、奥ゆかしい棚に、時代物ばかり並んでいる。それぞれ甲を経て燻つ
て——失礼、時代づいてはいますが、埃ひとつ被ってはいません。その上、
店の奥の古椅子に、あなたのような——風雅なご主人が、座っていらっしや
る」

「儂わしのような汚い爺いがな」

「めっそもありません」

客はあくまでも真摯らしかった。

「娘になにか持って帰ってやりたいのです。まだ中等なんです。どうした
訳か骨董趣味がありますね」

「神父のくせに、娘がある？」

「神父の妻帯は、もう何世紀も前に、許されております」

「世も末じゃな」

「いいえ、ご心配なく」

神父は窓の外遙かに聳えている、山の頂を指し示してみせた。

「神はまだまだあのあたりで、頑張っておいでです。どうぞ、ご安心を」

屈託のない客の瞳が、ヨゼフ爺さんを和ませた。

ヨゼフ爺さん自身は、現在、無神論者である。

もし神様とやらが存在するならば、遠い昔の春も夏も秋も、そしてあの辛い冬の間までも温和に微笑んでくれていた妻のぬくもりを、易々と奪ってしまはずがない。そしてまた、その妻が清廉に育ててくれた四人の子供たちを、自分より先に墓場に埋めてしまはずがない。

しかしこの牧師、いや神父の若僧が、信じると言うならそれもよかろう。昔は自分も信じていたものだ。今となつては口にするさえ気恥ずかしい、目には見えぬ、心の中の何かを。

「……奥に来なされ。前の棚にある物は、古いだけのガラクタじゃ。蔵の中なら、きつとお嬢ちゃん好みの土産も見つかるじゃろうて」

「恐縮です」

ヨゼフ爺さんは、客を奥の蔵に導いた。

小さな天窓からの光りに、淡く彩度を失っているその蔵の中は、ひとつの人形館だった。

人差し指ほどのミニチュアから等身大のものまで、あらゆる世代の人形たちが、思い思いの佇まいでくつろいでいる。

神父は絶句して、しばしの間、見とれていた。

「——びっくりしたかね」

ヨゼフ爺さんは、何年ぶりかで見せる、悪戯っぽい顔で言った。

「……驚きました。美事なものだ。今時、博物館でも、これだけのものは」

神父は、けして欲望ではないある種の情動を押さえ切れず、白い手袋を緩めながら訊ねた。

「……触れても、よろしいですか」

「ああ。このところ、この爺にしか触ってもらってないからの。人形たちも喜ぶじやろう」

神父は神妙な面持ちで、中ほどのアーム・チェアに座っていた貴婦人の、ドレスからのぞくつつましい手の甲に、そっと触ってみた。

無論、暖かくはない。しかし、死んではない。

神学校を卒業したその年の冬の夜、初めて口づけた女性ひとの手に似ている、と、神父は思った。髪の色や肌の色は違っても、この感触が同じだ。

——冬の星空のもと、氷遊びで悴かじみながらも、その奥には間違いなく熱い血潮がたぎっていた掌。そう、妻の手に似ている。

「……そのご婦人は、残念ながらもう動けないんじゃない。水素バッテリー自体の集積回路がとんでもない秘匿回路での、儂でも、どうにもならなんだ。動かせそうな仲間は、もう何十年前も前にくたばっちゃまったの」

「どうして公開なさらないんですか？ セクサロイド、いや失礼、禁忌機能があるとは思えませんし、第一、この皮膚感はここ二世紀のレベルじゃない。少なくとも五世紀は以前の——」

「あんた、有名人のミイラや死骸を見たことがあるかね。ガラス中でさらし者にされとる、あれじゃ。儂は子供のころ町で見た。ひどいもんじゃ。あんた、自分や身内の骸を、人前にさらしたいと思うかね。儂はごめんじゃ。この子たちだって、おんなしじやろうからの」

「なるほど、確かに。——しかし、生きておりますなあ。いや、すみません。私がそう言うてはいけない。どうもヒューマノイドに関しては、教会の立場も見解もいまだに不透明でして……」

「そのヒューなんじややらつてのは、どこぞの大企業で大昔に商標登録しち

まった、量産の機械人形じゃろう。この子たちは、そんな物とは違うよ。五百年前には、みんな人と同じように生きていた。当時のメカトロニクス職人組合が、ひとりひとり手塩に掛けて仕上げたんじゃ。だから、昔ながらのロボットと言つとる。儂ら仲間内では、アンティーク・ロボット。たしかサザビーズのオークション・リストにも、そうなつてるはずじゃ」

「知っております。話には聞いております。もつとも、いわゆる、はるか高嶺の花ですがね」

神父はゆつくりと歩みながら、人形たちの一人一人に、惜しみなく慈愛の視線をなげかけた。ふだん説教壇から信徒たちを見守る時と、同様の眼差しだった。

ヨゼフ爺さんは嬉しかった。

ここ二十年ほど、オークションの下見で訪れた金持ちたちは幾人かいたが、こんな眼差しを人形たちに与えてくれた人間は、一人もいなかった。いや、セクサロイドと同様の視線を厭うほど、ヨゼフ爺さんも若くはない。——そりゃ、若いうちはナニしたくなることもあるじゃろう。でも、そんなことじゃない。そう、そんな次元の問題じゃあない。

愛せるか——ヨゼフ爺さんは、口にするさえ気恥ずかしいその言葉を、心の中で口にしてしまっていた。

そして嬉しさが高じて、ついに思わず三度ばかり、手拍子を打ってしまった。

「さあ、ライラ、お立ち。お客さんじゃよ。お相手してさしあげるんじゃ」

三度繰り返された、ヨゼフ爺さん固有の手拍子の波長は、蔵の中のしんと沈んでいた空気を漣のように震わせ、その片隅で眠っていたある精緻な回路に蠢動を命じた。

きゅん、と、つつましい、小鳥のような囁きが響いた。

——朧げな春の光の中で、少女が目覚めた。

【第一章】

1

僕の名はマリオ。マリオ・ラインハルト・フォン・ファツハ。中等学校ミテルシューレの二年生だ。

なにゆえドイツ系の伯爵家の世継ぎ名に南欧系の名前が乗っかってるのか、よく聞かれるのだが、これは母親が地中海の方で生まれた人だったかららしい。でも、母は僕を産んでまもなく、死んでしまった。遺志という奴で、僕はこのドイツの生まれ育ちなのに、マリオになってしまった。自分では柔らかくてなんだかい名前だと思ってるんだけどね。僕は言いたくないがちよつと、いや、正直言つてかなり太っているの、柔らかい語感の方が合つてると思う。だってほら、『我こそはラインハルト十九世』なんて堂々と名乗つた時、そこに立ってるのがおでぶの中等生だと、なんだかなあ、つて感じになつてしまひそうだし。

「こら、マリオ、なによそ見してる。その第二問、間違つてるよ。まったく、こんな関数まで忘れちゃつたの。おしりぺんぺんするよ」

隣でガリガリやかましく電子音をたてているのは、一見だるまストーブみたいだけど、しかしてその実態は、相棒のブルフィンチ。

「なあ、ブル、僕は宿題なんて、やってる場合じゃないんだ。今夜は大事な約束が——」

「どうせまた悪戯事の相談だろ」

「そんなんじゃないったら、ほんとにもう。お前、とりあえずどっかに行っちゃえよ。隣でガリガリ言われてたんじゃ、宿題なんてできないよ」

「だめ。また逃げ出すつもりだろ」

ブルフィンチは本当に融通がきかない。デートの約束があるなんて白状したら、それこそ柱に縛りつけられかねない。でもこのガリガリは、ほんと、なんとかならないかな。

ブルがなにか言いたい時、まずブザーが鳴る。こっち向いて、という合図だ。

それから胸のあたりに3Dのグリーン・モニターが浮かんで、チカチカとアルファベットが並ぶ。考えてみれば、ずいぶんまだるっこしい会話だが、もう慣れてしまった。赤ん坊の時からいっしょなのだ。



ブルはひいお祖父さんが作ったロボットだ。夏休みの工作だったらしい。だから外観もきわめておそまつで、早い話、酒場裏のビヤ樽に台所のボールをかぶせたような格好をしている。

当時、ひいお祖父さんも今の僕と同じ中等だったが、僕と違って理数系に強かった。夏休みの自由課題で、ロボットを自作するくらいはお茶の子だったらしい。でも僕とおんなじで、お金はからきし持っていないなかった。ジャンクのボードやある程度のメカトロニクスは買えても、スマートな筐体など買いきろえる予算はなかった。当然、ありあわせの物で筐体を組まなければならぬ。

さつき頭は台所のボールに似ていると言ったが、文字どおり、台所の合金（もちろん超はつかない）製のボールなのだ。その中に、ジャンクでそろえた思考回路や、視覚・聴覚ユニットが詰まっている。視覚ユニットのレンズ

の前に小穴をふたつ開けようとしたところ、手元が狂って、左右にまたがる楕円形の大穴を開けてしまった。で、それをごまかすために、手持ちのミラーグラスを貼ったところ、怪我の巧妙、なかなか古典的モダニズムっぽい顔になった。ちよつと見ると、クラシカルなSF映画に出てくる、宇宙服のヘルメットみたいだ。

胴体の方は、さすがに酒場裏のビヤ樽ではない。物置から持ち出した、古いだるまストープだ。それにお手製のハンド・ユニットをくつつけた。そして推進機関は、電動キヤタピラ。なんのことはない、戦車の模型と似たような物だ。

さて、以上ひと通り完成し、ほつとして隠れ煙草をふかしていたとき、日記によると、ひいお祖父さんはいきなり自分の頭を殴り始めたそうさ。発声回路を忘れていたのだ。そのあたりは、いかにも僕の先祖のやりそうなことだと思う。ちよつと恥ずかしいが、そういう一族なのだ。もうスロットの空きはないし、そもそもジャンクさえ買ってくる予算がない。そこでひいお祖父さんは考えた。そうさ、物置に壊れた3D投影モニターがあつた。筐体の胴体部の内部はまだ空きがあるし、もとがだるまストープだけに、増設用の蓋までついている。でもこれだけじゃ、なんか言っても黙殺されちゃうよなあ。よし、あれだ。お子様時代に使つてた、ひよこの目覚まし時計のブザーをはずして……。

こうして一応組み上がったロボットは、電源投入すると、「おはよう。君、だあれ？」などと、いきなりタメ口をきいて来た。どうも少年型の電腦だったらしいのだが、もとがジャンクなので、ひいお祖父さんにも予測不能だったのだ。



——さて、僕が生まれてまもなく母さんが死んじゃったのは、もう言ったと思う。祖父母はその前に亡くなっており、もちろんひいお祖父さんもこの世の人ではなかった。その上、父さんは典型的な零落貴族で、乳母を雇うお金などなかった。R16S（『ラインハルト十六世の夏』）と仮称されただるまストーブだけが、だだっ広いおんぼろ館の中を、無邪気にしぶとく動き回っていた。

父さんは苦肉の策として、ロボットに安価な育児ソフトをインストールして、ついでに新しい名前をつけた。ブルフィンチ。父さんが昔から愛読していた、『伝説の時代』^{ザ・エイジ・オブ・フエイナル}の作者にちなんだ名前だ。英語で書かれた、ギリシャ・ローマ神話の本だ。どうせならアキレウスとかオデュッセウスとか、劇的な人物名を借りればよかったのに、あえて作者名をいただいたのは、特別な意味がある。

みんなも知っているかもしれないが、あのあたりの神話というのは、かなりいやらしい。いや、ものすごくいやらしいと言っても過言ではない。だってあそこの神様たち、こんな言い方は僕としてもしたくないのだが——ヤリ逃げしほうだい。でも、アメリカ人トマス・ブルフィンチの本に限っては、そこらへんが実にうまく流されているのだ。作者自らが『良風美俗を犯すごとき物語や語句はひとつも収めていない』などと、巻頭で居直っているくらいだ。これが生来ロマンチストの父さんにとって、大いに魅力だったらしい。

でも考えてみれば、やっぱりブルフィンチで良かった。なんとすれば、僕がマリオでよかったのと同様、『これが幼なじみのロボット、アキレウスです』なんて紹介して、そこにだるまストーブが置いてあったら、やっぱり詐欺に等しいんじゃないかと思うし。

ブルフィンチは父さんの新事業が軌道に乗るまで、ひとり（一台かな）僕を育ててくれた。だから子供の頃は、僕はブルの奴に頭が上がらなかった。

ブルは僕の乳母であり、お気に入りのティ・ベアであり、友達だった。でも、今はもう違う。相棒だ。僕はもうブルと同じくらいの精神年齢なのだから。

それでもブルは保護者面をやめない。奴にしてみれば、僕はあいかわらず育児の対象なのかもしれない。

赤ん坊の頃、ブルはピヨピヨとひよこみたいな音をたてながら、一日中僕に話しかけていた。まだ字が読めない僕は、子守歌のつもりで音だけ聞いていた。今ではすっかりブザーが老朽化してしまい、ガリガリとやかましい。

3Dモニターの文字の内容も、厳格な家庭教師さながらだ。

そろそろブザーは換装してやらなきゃな。3Dモニターの方は、まあ、正論だから仕方ないか。



「よし、終わった終わった」

「うそつくな。英語とラテン語、まだだろ」

「うえーん」

「うそ泣きするな」

正論にも限度がある。僕はブルの頭にくずかごをかぶせ、満身の力をこめて、引っくり返してやった。

「こら、何をする。負けないぞ。負けないぞ」

「十時までには帰るよ。それまで休んでろ」

「負けないぞ。負けないぞ」

いくら暴れても、ひいお祖父さん自作のハンド・ユニットには、ブルの自重を支えるだけのパワーはない。足元のキャタピラも、かなりの勾配や障害物は乗り越えて移動できるが、さすがに真横になったらお手上げ、いやお足

上げ状態だ。

僕は内心ブルにすまんすまん謝りながら、二階の窓から壁の蔭を伝って、夜の庭に降りた。

英語やラテン語なんて、詩人を志す身として、とっくに読み書きできる――たぶん、おおむね。

そんなことより、今夜は本当に、とっても大事な約束があるんだ。

2

聖子ちゃんは眼鏡をかけている。

僕は聖子ちゃんと眼鏡が大好きだ。

半年前、新学年の初めの日、担任のマイヤー女史が、転校生を連れて教壇に立った。

教室中が、ざわめいた。

転校生の髪は真っ黒で、まっすぐ背中まで垂れていて、おまけに眼鏡をかけていたからだ。

「こちらは、日本地方ヤーバンからいらしたお嬢さんです。お名前は、セイコ・イトー。今日から皆さんのお友達になります。仲良くしてあげてくださいね」
まだ小学生にも見えるようなおチビさんは、東洋訛りのたどたどしい、でも心地よく耳をくすぐるような小声で挨拶したあと、東洋のお姫様みたいに、おしとやかに頭を下げた。そして、眼鏡のレンズをつやつやと光らせながら、なんとも言えない優雅な足取りで、一番後ろの空席に向かった。

あんまり毛色が違っていたせいか、最初の日は、誰もあまり話しかけなかった。おしゃべりな女子たちだけでなく、あのハンス・ホルムさえも。

ハンスは級長のくせに、実は好き嫌いの激しい奴で、かわいい女子には例

外なく親切だが、他の生徒にはおつきあい程度の好意しか見せない。そのくせ先生の前では良い子づらのうまい、ほんとにいやな奴だ。

その日の昼休み、みんな昼食をとるため家に帰ってしまい、そのおチビさんだけ、お弁当をかかえて校庭のベンチに座った。僕も数少ない弁当組のひとりだった。やったね一番乗り、と思いながら、僕はいそいそとベンチをめざした。

「……座ってもいいかな」

おチビさんはちよつと驚いたようだったが、やっぱりちよつと他に類を見ないくらい、あでやかにうなずいてくれた。

——漆黒の髪に纏わり 陽の光溢れ流るる——
シュトルムふうに表示すると、こんな感じだ。

「……君の髪の毛、真っ黒で、まっすぐで、すごくきれいだね」

言ってしまったから、あんまり見え見えだったかなと後悔したが、案の定おチビさんはツンとして、そっぽを向いてしまった。

でも、うんうん、それが正しい反応なのだ。

「……ちよつと、それ、見せてもらってもいいかな」

「これって……眼鏡？」

「そうそう。眼鏡っていうんだろ。べつにからかったりしないよ。ただ、見たいんだ」

「……どうぞ」

僕は生まれて初めて手にする骨董品を渡されて、おそろおそろ光に透かしてみた。

レンズの向こうは景色が大きくぼやけて、ただの校庭が別の世界のような。そして琥珀色の太い縁が、なんとも神秘的に輝いて見えた。

「すごく、きれいだ」

眼鏡を外したおチビさんの、切れ長でつつましやかな瞼の奥の瞳も、よく

見れば深い琥珀色だ。

「……鼈甲っていうのよ」

「ベッコウ？」

「亀の甲羅で作るの」

「へえ、すごいや。百科事典の『眼鏡』んどこにも、もう出てないよね」

自慢じゃないが、僕の福々しい——ただのデブという説もある体型は、初対面の人の緊張をほぐすには、かなり威力を発揮するらしい。

おチビさんは転校初日の緊張がようやくやく解けたらしく、日本訛りの小さな声で、いろいろ話を聞かせてくれた。

近眼じゃなく、生まれつき遠視であること。

お父さんはカソリックの神父であること。

カソリックはいまだに最低限の人工臓器しか認可していないので、みんなのように眼球調整が受けられないこと。

でも、古い物が好きだから、眼鏡も好きなこと。

そして、セイコは聖子で、聖なる娘、ということ。



聖子ちゃんに会うまで、僕は女子というものの存在を、実は軽蔑していた。女子なんて、実に奇妙な生物だ。ひとりのときは変におどおどしているくせに、三人よると日がな一日べちゃくちやべちゃくちや、ブルの奴のガリガリよりやかましい。

聖子ちゃんは違う。つつましく、しとやかで、頭がいい。頭がいいってのは、ただ勉強ができるだけじゃない。要するに、きれいなだ。きれいなってのは大事なことで、僕のような頭でつかちの文系っぽい人間の相手には、必要不可欠なことなのだ。

——決めた。僕はこの娘と結婚する。

ところが、聖子ちゃんが教室で真価を發揮するにつれて、僕の望みはほとんど断たれてしまった。

女子たちはかわいがる。

男子たちはつきまとう。

ハンスまで色目を使う。

ハンス・ホルム。——あれでも男なのだろうか。馬鹿長いまつげ、とろんとした気色悪い瞳。あれは、どう見ても異常だ。まして雨上がりに、水たまりに上着をかぶせて女子を渡らせるなど、狂気の沙汰だ。そりゃあ運動万能かもしれないが、運動なんて男の証明じゃない。女子だってできる人はできる。第一ホルムなんて姓からして、なんか、締まりがない。フォン・ファツファア方が上等だ。堂々たる伯爵家の姓だからな。……むなしくはないぞ。でも残念ながら聖子ちゃんは、ハンスのお世辞にも微笑を返す。豪州ではすでに絶滅したというカンガルージみたハンスの走り高跳びに、めいっぱい の声援を贈る。

——うう、ハンスなんて死んでしまえ。

と毎日頭を抱えていたところへ、今日の夕方、聖子ちゃんから電話があったんだ。

『ねえ、今夜の七時、公園広場の噴水の前で待ってて』

——ねえ、今夜の七時、公園広場の噴水の前で待ってて——

この世界に、これほど美しく尊い詩句が、他に存在するだろうか。

そんな訳で、僕はやむなくブルフィンチを引っくり返したのだった。

しつこいようだが、僕は胴長短足首なしデブだ。せめて時間を守るくらいが、誠意と忠誠の証しなのだ。……くどいようだが、むなしくはないぞ。

ぴったり七時、公園に着いた。

聖子ちゃんは、まだ来ていなかった。

街灯に映える噴水の水芸を眺めながら、ベンチで待ち続けたが、七時半になっても聖子ちゃんは現れなかった。

そのかわり噴水の向こうの暗い森から、知らない女の子がひとり、こちらに近づいてきた。

歳は僕や聖子ちゃんと同じくらいだろうか。金髪の巻き毛を、ゆらゆらと夜風に遊ばせている。美形だ。単に造形的な美しさで言えば、聖子ちゃんより上かもしれない。

女の子はひと言も口をきかないまま、僕の隣に腰を下ろした。

僕は仰天した。

嘘だ。こんな現象が、この身に起こりうるはずがない。

なんか熱暴走してフリーズしそうな心臓を抱えて、僕はひたすら事態の収拾を模索した。

女の子は、つつ、と僕に身を寄せて来た。しなだれかかるといふ奴だ。

僕がたとえばハンスだったら、もう迷わず口説きにかかるところだろう。これによったら、いきなり押し倒すかも。でも、僕は違うぞ。僕は僕だぞ。いくら美形だって、あの聖子ちゃんの東洋の神秘満載のエレガンスな姿には、かなうものか。

横目にちらちら飛びこんで来る、その娘のきめ細かな白い肌の誘惑を断ち切って、僕は毅然として立ち上がり、そのまま家に帰ろうとした。——はた目には、未練たつぷりのスロー再生に見えたかもしれないけど。

「あ、待って」

背後の繁みから、いきなり聖子ちゃんが現れた。

面白そうに、くすくす笑っている。

昼間のおしとやかな笑顔とはうってかわって、小悪魔とでも呼びたいような頬笑みが、いつもより百万倍は愛らしく見えた。

「ごめんなさい。ちよっと、ふざけてみただけなの。紹介するわ。こちら、ライラ」

「なんだ、お友達？」

僕はさつきとは別の意味でどきどきの心臓を心配しながら、なんとか冷静に言った。

大丈夫だよな。浮気もんには見られてないよな。

「始めまして。いつも聖子がお世話になっていているそうですね。ありがとうございます」

なんとなく教科書を朗読するような口調だった。

でも、その声の響きは、ナイチンゲールの囀りのように可憐だった。

聖子ちゃんの声の感じにも、よく似ている。

お行儀よく会釈をするその姿も、聖子ちゃんに負けないくらい典雅だ。ヤーパーン式で言うところ、やっぱりルイ君はトム君を呼んだりするのだろうか。

「は、始めまして。いやあ、なんだか、ちよっとびっくり」

聖子ちゃんとライラは、僕を真ん中には喜んで、ベンチに腰を下ろした。両手に花だ。

「ライラ、きれいでしょ」

聖子ちゃんは、相変わらず謎めいた微笑を浮かべたまま、僕の顔を覗きこんだ。

「う、うん……きれいでしょ、だよ」

「昔のルノワールの女の子みたいでしょ。どきどきしちゃうでしょ」

どうも解らない。試されてるのだろうか。普通女の子というものは、僕はまだ十四年ちよっとの人生経験で言っても、おすましタイプの美人にはとり

あえず反撥するもんじゃなかったか。でも同クラスの美少女同士なら、お互い花を持たせ合えるってことなのか。

「今夜、お父様が帰ったの。だから、ちよつと遅くなっちゃった。ごめんなさいね。お土産があんまり素敵だったから、今まで見とれちゃってたの。お土産って、ライラのことよ」

そう聞いたとたん、僕の疑問は氷解した。でも氷解した理由そのもので、僕は三度心臓が破れるんじゃないかと思った。

「……アンティーク・ロボット？」

ライラはまたお上品に、こつくりうなずいて見せた。



二世紀ほど前、人間そっくりのヒューマノイドが全世界で流行したことは、これも図書館のP-R-O-Mで知っている。まあ、あれやこれやナニや色々と思ひ道があつたんだろうけど、結局、半世紀ももたずに流行は去つてしまつたはずだ。なによりも本物の人間の方が、当時は種の維持の限界を越えるほど増えてしまつており、そつちの関係で労働基準法やら児童福祉法やらは破綻してしまつていたので、結局、経済学上の大原則どおりの結果になつたわけだ。需要とコストが折り合わなかつたのだ。

でも、さすがに僕も十四年以上生きてると、歴史のR-O-Mに残された理由以外にも、ほんとはいろんな社会的なからみがあつたんだろうな、と推測できたりする。なぜそれと同じ時代に、かつては全世界を覆つていたというインターネットが、急速な終焉を迎えたか。だって人類は、それなしでは社会的活動ができないレベルまで、行っちゃつてたはずなのに。

小学校の頃から、もう頭だけでつかちだつた僕は、そこらへんの歴史の曖昧さが、どうも腑に落ちなかつた。でも、ある日をきつかけに、なんとなく

理解できたような気がした。えー、ほんとには言いたくないんだけど、だって女の子が読んでたりしたら、まさか聖子ちゃんまで読んじゃったりしたら、あんまり恥かしいじゃないか。でも話が終わらないので、思い切って言ってしまおう。はい、精通です。ああ、言っちゃった。

たぶん当時の人類という奴は、夜ベッドのなかで聖子ちゃんの入浴姿を思い浮かべる僕とおなじように、歯止めが利かなくなってしまったのではなからうか。裏と表、現実と仮想、分離不能。お猿さん状態。でもそのままでは、いずれ種そのものが自壊して行くしかない。となると――。

――まあ、このくらいにしておこう。どっちにしてもローマ法王庁は健在だし、聖子ちゃんのお父さんは、元気に神父さんやつてるわけだ。

その時代のヒューマノイドは、歴史的資料として、各地の博物館で展示されている。僕もベルリン博物館で見たことがある。正直言って、死体みたいだった。でも、それが動くのを見たい人も多いので、たまに作動状態で展示される。これは昔お父さんと旅行したイギリスの、大英博物館で見たことがある。正直言って、死体が動いてるみたいだった。

でも、ここで念のため。ライラはそんな時代のヒューマノイドではない。さらにさかのぼること三世紀――今からだと五世紀ほど昔、まだ単機能的なロボットしか出回っていなかった頃、ごく一部の民間の電脳職人や精機職人や、その他もろもろの伝統工芸技術者たちが趣味的に集い、芸術目的で生きた人形を造っていたのだ。当時わずか十数体だけ公開されて、今ではほとんど伝説的存在になっている。天文学的な価格――僕の実感としてはただの数字で、オークションの目録に載ることもある。でも、その現物自体が公の場で見られることは、まったくくない。秘蔵されてしまうからだ。

ライラたちが生まれた当時は、それは売買の対象というより、スターテスそのものだったらしい。たとえば、こんな伝説もある。

プレ・ネット時代、石油王としてその業界に君臨していた米国の大富豪は、

若く不遇な時代、あるスポンサーの邸宅でかいま見たアンティーク・ロボットにひとめ惚れしてしまい、ただそれを手にせんがために、南米奥地で死を賭しながら油田を掘り当て、さらに七転八倒を経て巨大コンツェルンを構築でも結局、その巨利の実に九十九パーセントをスポンサーに譲渡して、残り一パーセントとひとりのアンティーク・ロボットを抱え、南太平洋に浮かぶ得体のしれない共和国に移住してしまった。理由はただひとつ、そこが地球上で唯一、無生物とも法的に婚姻可能な国家だったからだ。

◇

◇

「やっぱりマリオ君、ほんとに貴族のお家の人なのね。ひと目で判っちゃうんだ」

「れ、れ、れれきしててき——歴史的発見だ。眼鏡よりすごい」

「眼鏡なんかと比べないで。眼鏡なんて、まだ日本にはいくらでもあるわ」
聖子ちゃんは居場所を移して、ライラを抱きかかえるように座りなおした。
「からだ中ぜんぶ、何から何まで手造りなの。瞳は天然の青水晶でしょ、ほつぺたはモンゴルの羊さんの、えーと、特殊永存加工ですって。このくるくる巻き毛だって、ちゃんとお手入れしないと、伸びちゃうの。えーと……」

「頭部皮下クローニング植毛加工」

ライラは例の小鳥声で、なんか学術用語っぽい助け舟を出した。

「で、でででも、なんでそんな子が、こんなところに……」

「だから、お父様のスイスのお土産」

僕は、やっぱり人種間の文化的認識の差異はちよつと結婚の障害になるかなあ、と心配になった。

そんな僕の煩悶も知らずに、聖子ちゃんはぎゅっとライラを抱きしめ、
「仲良くしましょね」

「はい、聖子様」

「ううん、お姉様って呼んで」

あまつさえ頬擦りまでし始めた。

ここに至って、いかに聖子ちゃんを慕う心において人後に落ちない僕であっても、さすがに一抹の虚脱感に襲われ始めた。早い話が、しらけてきたのだ。これでは三歳児とぬいぐるみの会話だ。

「……で、今夜は、これだけ？」

「あ、ごめんなさい。忘れてた。——これなの」

聖子はポシエットから、便箋を取り出した。

「きれいな紙だね。……和紙？」

「うふふ、ほんとに何でも知ってるんだ」

聖子ちゃんとの会話を少しでも盛り上げるため、僕は常時の情報収集を怠らない。市中の日本関係の書籍やROMは、全部熟読熟覧している。

「お父様が、ライラを譲ってくださいました方に、お礼状出さないって。とっても親切なお爺さんなんですって。きつとピノキオのお爺さんみたいな人よ。私も、すごくお礼したいの。でも私、あんまりドイツ語上手じゃないし、きちんとしたお手紙書けないし、あなた、作文、得意でしょ。お願い、手伝って」

「——お父さんは？」

「『下手でもいいから自分の言葉で書きなさい』」

「じゃあ、ライラは？」

「うーん、頭はとってもいいの。でも言語回路は、ちょっと単純なの」

「ごめんなさい、お姉様」

「あらら、いいのよ、いいの。あたし昔から、おとなしくてかわいい妹がほしかったんだもの」

「……じゃあ、書こうか、お礼状」

なるほど、代書屋が必要だったのか。どうせ僕はその程度の男だ。

でも、こうして神妙にペンを走らせる聖子の横顔を、添削しながら眺めていられるだけで、この緑深い夜の静寂は、甘い旋律しじますら奏で始めるのだ。

そう、甘い旋律——甘い旋律って、ガリガリ言うか？

「こら、マリオ、見つけたぞ。おしりペンペンするぞ」

「……お前、どうやって起き上がったんだ？」

「わ、マリオが女の子とくつついてる。わ、二人もくつついてる。大変だ大変だ。推定非行レベル4、非行レベル4、お父さんに報告」

そんなに非行っぽい状況なら、どんなに幸せだか。

僕はベンチの前でガリガリ言い続けるブルの頭を、無気力にべんべんと叩いてやった。

「まあ、かわいい。あなたのロボット？」

「うん。造ったのは曾祖父だけだね。ブルフィンチ。いつもはブルって呼んでる」

聖子ちゃんはブルの手をとって、まるで子猫や子犬を愛でるような、とろけそうな笑顔を見せた。

「始めまして、今晚は、ブル君。私は、聖子。この子は、ライラ。ライラはあなたとおなじ、手造りロボットなのよ。仲良くしてあげてね」

くそう、こんな笑顔、僕の正面だったら僕は即死してるぞ。

ミラーグラスの奥で、ブルの視覚ユニットが聖子を認識し、それから隣のライラに移る。

と、そこで視覚ユニットが、ぴたりと止まった。

ガリガリも止まっている。

3Dモニターに、次々とドットが並び始める。

間もなくモニターは、ドットの羅列で埋まってしまった。

——つまり、ブルは絶句したのだ。

【第二章】

1

親愛なる リーバル セイコへ

お手紙、どうもありがとうございます。

まだ一度も会っていないけれど、私は君が実の孫のような気がするよ。

私にとってライラは実の孫と同じだし、君のお手紙によると、君はライラのお姉さんだからね。

ライラを私から買ったことについて、お父君が心配しておられるそうだが、ご心配はご無用と伝えておくれ。女の子は、いずれ家を離れて行くものだ。

私は子供たちを早くなくしたものだから、この齢になって初めて、娘を手放す父親のような気持ちに味わえて、かえって喜んでいくくらいだ。やがて君のお父君も、同じ気持ちを味わうのだろうね。いずれ君のお家を訪ねて、君とライラの仲良しぶりを拝見したいものだが、どうも都会の空気というものは、残念だが私の体には合わないらしい。

一度、ご家族ともども、私の家に遊びに来ないかね。今までお客様など泊めたこともないあばら家だが、心から歓迎するよ。

それでは、ご家族の皆様にも、そしてライラにも、よろしく。短い手紙だが、かんべんしておくれ。

君の友人 ダイアン ヨゼフ・ミユラー



招待状　　マリオ・ラインハルト・フォン・ファッハ殿

来たる五月十日午後七時より、当教会に於いて、親睦舞踏会を開催いたします。

風薫る初夏の宵、当教区の皆様には、心を一いっにして、神の御恵みめぐみを語らつて頂きたく、ささやかな宴を催す次第です。

神父　ユーザー・イトー

ブルくんもいつしよにねー！　　聖子



「ねえ、マリオ。僕のこのブザー、なんとかならないかな」

木曜の午後、学校から戻って来ると、ブルが突然そんなことを言い始めた。

「ほうほう、お前もいよいよ思春期か」

「そんなもの、僕のRAMにはないよ。けど、なんかおかしいよ。倫理警告は出てないけど」

ブルの思考回路は、僕の見るところ、ちゃんと愛情というものを知っている。いくら大もとが育児プログラムとはいえ、それだけでこの僕の恥多き乳

幼児期を、いつしよに過ぎしてくれたいとは思えない。愛情を知っているならば、それなりに容量があるのだから、当然恋もするだろう。まあ本来、『感情』なんて禁忌機能は現在違法なのだが、なんとと言っても中身が百年前のジヤンクだし。

こうこなくちゃいけない。いよいよ相棒らしくなってきたぞ。

晩御飯までにはまだ間があったので、僕はブルを連れて、煉瓦通りのパーツ屋に出かけた。

このあたりは、昔は普通の電気屋や問屋が並んでいたそうなんだけど、今ではほとんどDELLINUXのマシンの本体や、パーツを扱う店ばかりになっている。

僕は文系頭なんだけど、学校でDELLINUXは必修だし、今度の夏休みあたりにはブルのメンテナンスもやってやりたいので、その下準備で最近けっこう常連なんだ。

「えーと、これなんかどうだ。『朝の目覚め』」

もとが目覚まし時計の一部というのが頭にあっただので、試しに訊いてみる。

「夜もしゃべりたいよ」

やっぱり、そりゃそうだろうな。

「『雄馬のいななき』 ってのは？」

「派手すぎないかな」

「『ナイチンゲールの囁き』」

「『情弱だ』」

「……お前、案外、好みがうるさいな。お、これ、いいぞ。『甘えん坊の子猫』」

「あの、もしかして僕をからかっている？」

「大まじめだよ。絶対、女の子に受ける」

「そ、そうかな」

「ミヤオ、なんて言ったら、絶対だつて」

「でも、猫嫌いだったら？」

「うーん、なるほど。じゃあ、候補にしとこう。えーと、それから……」『ひよこの行進』。あれ？ これなんか、今付いてる奴に近いんじゃないかな」

「うそだあ」

「そんなことないよ。僕が小さい頃、お前びよびよ言ってたもの。よし、これも買つとこう。製作者の意図も尊重しなきゃな」

意図というより、製作者およびに僕自身の、懐の事情なのだ。この二つくらいなら、なんとか小遣いで出せる。

ブルの社交デビューと恋の成就に、もつと協力してやりたいのは山々だが、ここでこれ以上散財してしまつては、土曜の夜に聖子ちゃんに贈る花束が買えなくなってしまう。

レジで購入タグをスキャンしてもらっていると、顔なじみの親爺さんが、ふと首をかしげた。

「……ありや、すまんすまん。こいつ、タグまちがってるなあ。こっちの奴は、ジャンクのはずだ。またバイト君、値付け間違ってるなあ」

『ひよこの行進』の方だ。

「でも、心配いらんよ。ジャンクつて言つても、アルプスのあっちっかわの時計工場で、倒産処理で出した奴だから」

もしかしたら、と僕は思った。

「それつて、古いメーカー？」

「ああ、二・三世紀続いてたんじゃないかな。でも、しょうがないよねえ。今時こんな部品で目覚ましや柱時計、組んでたつてんだから」

普通の客なら購入中止しかねないようなことを、いつもさらつと言つてくれるので、僕はこの親父さんの固定客なのだ。

もしかしたらもしかするのかもしれない、そう思いながら、浮いた予算で

クリーナーも追加し、僕たちは家路についた。



晩御飯の後の宿題チェックは、いつもよりずいぶん甘かった。

まあ、恋する少年なんてものは、そんなもんだ。自分もだけど。

プリントアウトしたひいお祖父さんの日記を参考に、だるまストーブの蓋——3D投影モニターユニットを外し、ケーブルの長さに注意しながら、横の床に置く。

生まれが古い割には、ブルは案外故障知らずなので、実際中までいじったのはまだ二・三回だけだ。

日記の構造図によれば、右のハンド・ユニットの付け根の上あたりに、音声端子と目覚まし時計の一部が見えるはずだ。

「こりゃひどい。目茶苦茶に錆びてる」

「なおる？」

「心配ご無用。錆びてるのは時計のボードだけだし」

幸い、音声端子自体は現行規格と大差なかったので、とりあえず直結できそうな『甘えん坊の子猫』を接続してみた。

奇怪な音声おんじやうが、部屋中に響き渡った。

ごろなーご、おんなーご、ぐるるるるるるる。

……この猫、めいっばい発情してる。

「ぎゃあっ！ は、早くはずして！」

3D投影される悲鳴つてもおかしなもんだ、などと感心してる場合じゃない。僕はあわてて端子を引っこ抜いた。

「そつとやって。壊れちゃう」

「ごめん。こいつ、お前の電源に合わないらしいや」

「ひよこも、がおー、なんて言わない？」

「これはたぶん、大丈夫だと思っただな、なんとなく」

こちらの端子は古めかしい二ピンだが、ちゃんとアダプターも物置の道具箱から見つけたのである。

案の定、今度はつつがなく適合した。

ブルは昔に戻って、ピヨピヨと鳴き始めた。

「あれ、これって……」

「うん、懐かしいなあ。お前とは、ずいぶん長いつきあいだもんなあ」

僕はしみりとしてしまって、ブルの頭を、またぺんぺんと叩いた。

そしてタオルにクリーナーを浸し、夜半を過ぎるまで磨き上げてやった。

2

——神秘的な、日本のキモノ。

絢爛たる花々の彩りは、間近に見れば、一本一本の細やかな絹糸の交差でできている。

そしてそれを纏い、満月の下、優雅に踊る娘ときたら——これはもう東洋の妖精。初夏の花園の蝶。

大人も子供も、およそここにいる全ての男が、いや、女性までもが聖子ちゃんと踊りたがる。

ライラはむしろおとなしめの白いドレスを着ている。でも、もちろんお相手には不自由しない。それはそうだろう。もともとこの世のだれよりも美しく、可憐なのだから。

でも、僕は舞踏会が嫌いだ。

あまりの眩しさにくらくらしながら聖子ちゃんに花束を渡し、『ありがとう

う』なんて、どんな古典詩にも負けないフレーズに身を震わせるまでは、不覚にもその事実を忘れていたのだ。

僕は舞踏会が嫌いだ。

ひとごみも嫌いだ。

踊りも大嫌いだ。

踊れないからだ。

——我は眠りを望みしも　されど汝は踊らんとや——

そんなシュトルムの詩句をしみじみと反芻しながら、僕とブルフィンチは、会場の庭の片隅で、並んでベンチに座っていた。

教会の主催だから、お酒は一滴も出ない。

アルコール抜きフルーツ・ポンチ。それはすでにフルーツ・ポンチではないのであって、舞踏会にのこのこと顔を出した踊れない男と同じくらい、役立たずの代物だよ。

ああ、なんか『皇帝円舞曲』が、アズナブールの『私は一人片隅で』に聞こえてきたぞ。

「……今度の舞踏会まで、お前のキャタピラの回転機構、なんとかしてやるよ。そうすりゃ、お前だけでもライラと踊れるからな」

「マリオも、踊り、習った方がいいみたいだね」

そうなんだ。

僕は踊りを習いたいのだ。それも絶対、聖子ちゃんから。

芸術として完璧ではあるが、機能的には力いっぱい窮屈そうな、あのキモノという民族衣装——どうして聖子ちゃんは、あんなに軽やかに踊れるのだろう。あんなにくるくると回りながら、どうしてキモノが乱れないのだろう。そして、言いたくはないが——どうしてハンスの奴も、あんなに美しいのだろう。何がゆえに、あれほどしなやかに舞えるのだろう。

教室ではひたすらうとうとしいだけの長い睫も、運動場ではお前カマキリ

かと突っこみたくなるような四肢も、無念ながらこの夜会の踊りの輪の中では、まるで白鳥の王子さながらじゃないか。ああああ、聖子ちゃんの後には、ライラとまで踊り始めた。……完璧につり合ってる。

そんな注目のカップルから力無く目をそらせば、父さんまでがあああの粉屋の未亡人と、陽気に語らいながら踊っている。

お父さん。僕は本当にあなたと、あの暖炉の上の額縁でああなたと並んで笑っている美しい女性との子供ですか。ほんとはあなたが夏休みの工作で作った、酒場裏のビヤ樽なんかじゃないんですか。

——音楽が止んだ。

今度こそ聖子ちゃんが話しかけてくれる、と思ったら、ハンスと腕を組んだまま、人ごみに紛れてしまった。

ブルのぴよぴよも、絶えて久しい。

……寒いなあ。

「よう、マリオ、元気で楽しそうだなあ」

美少女の代わりに、最悪な奴がやって来た。

前歯三本出っ歯が目印の、カール・ウェバー。ハンスの腰巾着だ。

「……あっち行け。しゃべりたくない」

「なんだよ。せっかく面白いもん、見せてやろうと思ったのに。退屈してんだろ。こっち来いよ、そのストローブも連れてさ。見物みものだぜ」

確かに退屈なのは事実だった。

カールは僕たちを、裏庭の木陰に導いた。

「そっと覗けよ。面白いぞ」

五月の宵の微風にそよぐ枝々の下で、淡い月光に照らされながら、ほっそりとした二つの影が、軽く接吻キスを交わしている。

それは確かに極めて絵になっているが、そんなものは夜の公園を散歩すれば、いくらでも見られる風物だ。

「……ふん、つまらん」

「……よく見ろって」

——聖子ちゃんとハンス。

まいった。

完敗だ。

お手上げだ。

それはもう光景として文句のつけようのない美景だけに、僕はほとんど再起不能になってしまった。

放心したまま、会場の方に戻る。

ブルも僕の心中を察してか、ぴよぴよもなく、ゆっくりと従う。

「へへ、うらやましいだろ」

「黙れ」

「おーおー、詩人さんは、プライド高くていらっしやいますこと」

このまま決然と会場を去れるほどのプライドがあれば、どんなに幸せだろう。

僕はそれでも——あの二人があんまりお似合いだったからこそ、舞踏会が終わるまで、聖子ちゃんの艶姿を見続けるといふ誘惑を、断ち切ることができなかった。

そうして未練たらしく裏庭の方を見返した時、小走りに裏庭から駆けてくる姿があった。ライラの白いドレスだった。ライラも二人を見ていたのだろうか。でも、そんなことは、この際問題じゃない。

「……ブル、行けよ。行って、ライラと話すんだ。踊るのは無理だろうけど、お前、そのために来たんだろ」

「う、うん。行ってみるよ」

そうだ。ブルだけでもそう来なくちゃ。

ところがほんの数歩分進んだだけで、ブルは前進を止め、その場でぐるぐ

るとスピンを始めた。

「おい、あれ、ひとり寂しく踊ってんのか」

まだ横にいたカールが、茶々を入れた。

「あ、あれ？ あれ？」

とまどってスピンを止めたブルのキャタピラをチェックすると、さつき裏庭の繁みで引っかけたのだろう、長い木の根が、左の車輪に絡まってしまっている。

思いきり引っ張っては見たが、植木鋏でもないと切れそうにない。

——くそ、どいつもこいつも。

ちなみに、どいつは僕で、こいつはブルだ。

いらいらと木の根を引っぱり続ける僕の横に、カールの顔が降りてきた。そして実に奴らしい、にやにや笑いを浮かべて言った。

「へへ、荒れんなよ。別にお前の望みがなくなったわけじゃないからさ」

「……どういう意味だ？」

「ハンス、言つてたぜ。変わつてて面白い娘だから、ちょっとひっかけてやるつて。ちょっとひっかけて、ものにしちまつたら、あとは——」

ぶち、と、物理的な音が、僕の頭の中で響いた。

カールの顔がのけぞった。

三本出っ歯の内の二本が、口の中に消えた。

「ひい！ な、な、な……」

今までさんざん堪忍袋に溜めこんでいた鬱屈が、いつべんに袋ごと破裂した。

——け、決闘だ。決闘の時だ。



決闘状

唾棄すべき男である、貴様、ハンス・ホルムよ。
貴様とセイコを、昨夜、教会の裏庭で見かけた。その後、カールの前歯
が二本折れた。

こう言えば、もう理由は理解できるであろう。

日時、武器、場所は、すべて貴様に任せる。

僕が勝利した暁には、生涯二度とセイコに近づかないと誓約していただ
く。無論、僕とも。以上。

マリオ・ラインハルト・フォン・ファッハ



承諾状

カールから事情は伺った。

君の高潔だが愚かなる申し出、喜んでお受けしよう。

なお、日時、武器、場所の件だが、紳士としては、残念ながら君の採択を
仰がねばならない。どこをどこきえても、君の方が肉体的に、圧倒的に不
利だからね。

ハンス・ホルム

「くそ、どこまでもこしやくな奴だ」

カールの出っ歯のおかげで切れた指の傷は、なかなか塞がらないし。

「いよいよだね。作戦、立てなきゃね」

「作戦？ そんなものはいらない。奴と背中合わせに立つ。立会人が、手袋を投げる。それぞれ十歩進んで、振り向きざまに撃つ。これが昔からの真まっとう当な決闘だ」

「それだと、勝てっこないよ。マリオの反射神経は、同世代の男子の水準を、遥かに下回って——」

「言うな。僕は男になるんだ」

「わかった。もう、止めないよ。がんばってね。……死なない程度にね」
死んでもかまうもんか。

指の絆創膏を張り替えながら、ハンスからの返事を読み終えると、僕は教会に向いた。

お父さんは教区巡回で外出中らしく、舞踏会の夜にも挨拶した、福々しいお母さんが取次いでくれた。

「あらまあ、マリオ君、こんにちは。ちょっと待っててね。聖子、お二階にいるはずだから」

お母様、あなたもお美しい。ちょっと膨らんではいましたが、あなたのおキモノ姿も、それなりに魅力的でした。僕はあなたのお嬢さんのためなら、死も厭わぬところの若者です。しかし今ここで、それを告げるわけには参りません。どうか勝利の暁には、お嬢様との婚姻をお許しください。あるいは……敗残者の墓碑に、せめて一輪の薔薇をお供え下さい。墓碑銘は、マリオ・ラインハルト十九世・フォン・ファッハ。

「お待たせしちゃって、ごめんなさい。どうぞ、お二階にお上がりになって。

聖子が、なんだか、作文の宿題が難しいらしくて……お時間があつたら、教えてあげてくださらない？ マリオくんって、詩とか作文、お上手なんですってねえ」

前言撤回。あなたはちつとも膨らんでなんかおりません。あなたのキモノ姿も、たいへんお美しゅうございました——。

◇

◇

聖子ちゃんの部屋は、まことに女の子らしい、絞りたてのミルクのような香りがした。

もつとも、女の子の部屋に入れてもらうのは初めてだったのだから、たぶんそうだろうと思っただけだ。

ほんとはショウジとかコウシドとか、ボンボリなんかがあるんじゃないかと想像していたのだが、家具や調度品は、案外僕の部屋と大差ない。古風な飾り棚に、P-R-O-Mで見覚えのある東洋の骨董品がいくつか並んでいるが、これもちゃんと部屋の空気に溶けこんでいる。

でも、地味なベージュやブラウン系の色で統一されているながら、どこか華やかで、やっぱり女の子の部屋だ。

「どうして、この前の晩は先に帰っちゃったの？ まだいっしょに踊ってなかったのに」

こんなふうは無邪気に切り出されてしまうと、さつきまでの高揚も、なんとなく萎んでしまう。

「……ライラは？」

別に訊く気もなかったことを、訊いちゃったりして。

「夕御飯のお買い物に行ってるの。ほんとは私もいっしょに行きたかったの。でも、宿題、全然手がつかなくて……」

さらにこんなふうにも上目使いにお願いされたりすると、僕も内心のざわざわをあえて抑えながら、女の子っぽい文章を綴ってあげたりしちゃうわけだ。でも、それはやがては綴り終えてしまうし、窓の日差しも陰ってくる。「……今度、ハンスと決闘することになった」

予想どおり、眼鏡の中で、いつもは切れ長の知的な目が、真ん丸になった。

「——どうして？」

聖子ちゃんの目は、真ん丸になったたで、それはそれは素敵な目だ。

「訳は言えないんだ。でも、君に立会人になってほしい」

「やめて。そんなことしたって、なんにもならないのに。だって、私……」
「やっぱり自分をめぐる単純な恋争いと、思ってくれたらしい。」

それでいい。

聖子ちゃんの気持ちは、あの晩、痛いほど判っている。ハンスの本心なんて、とても教えられない。だって日本女性というものは、愛し合ってもいい相手と接吻などしてしまったら、迷わずハラキリしたり、喉をカイケンで突いたりしてしまうはずだ。この街のあらゆる文献にそう載っているからには、事実には違いない。となれば、これはもう、ハンスの方から引いてもらえないのだ。



そうして五月十五日、東のライン河の土手に月が昇る頃、町外れの草原で、僕とハンスは背中合わせに対峙(?)した。

おのおの、その手にはスタン・ピストルを握っている。防犯用のちゃちな奴だが、射程距離約十メートル、直撃すれば即座に失心する。

立会人は、しぶしぶ承諾してくれた聖子ちゃん。万が一にも射程に入らないよう、かなり離れて立っただけだ。

そして草原を見下ろす丘の上に、ライラと我が友ブルフィンチ。

「マリオ、がんばれよ。負けたらお尻べんべんするよ」

遠すぎて見えはしないが、あのモニターのチカチカは、たぶんそう言っ
てくれている。

もう、勝つしかない。

「行くぞ、ハンス」

「お好きに、どうぞ」

背中合わせでも、あの人を見下すような頬笑みが見えるようだ。

聖子ちゃんが、手袋を外した。

白い手袋が、夜空に舞った。

五歩目まで歩むうちに、なんとか武者震いが治まった。

七歩目あたりで、深呼吸してみる。

九歩目、ハンスの立ち位置を想定する。

十歩目――。

振り返りざまに撃つ。

その瞬間、ハンスの放った瞬光が、僕の左肩をかすめて行った。

僕の放った光は――やった、ハンスの胸のあたりを直撃している。

ハンスの影が、ゆらりと傾く。

草原に倒れこむ影の後ろに、また影が立っている。

――なんだ、これは。

「ライラ！」

聖子ちゃんが叫んだ。

蒼白になった顔の下半分を、全部口にしながら、こちらに駆けて来る。

ブルもすでに丘を駆け降り、草原を走っていた。木の根と違い雑草なら、

全力疾走の妨げにはならない。時速六十キロを越えていたのではなからうか。

しかし、ちよつとしか前のめりという態勢のとれないブルが、平地でその速

度を維持するのは不可能だ。そのうち重心が狂って、仰向けに引っくり返ってしまった。

ハンスはまだ呆然と突っ立っている。

足元の影を助け起こすなり、そのまま突っ立ってるなりすりゃいいものを、ハンスはじりじり後ずさりし始め、しまいには一目散に逃げ出してしまった。

今はあんな奴を気にしている場合じゃない。

なぜだ。

なぜ、ライラがそこにいる。

僕は駆け寄ってライラを抱き起こした。

月明かりの下、青水晶の瞳は、すでに光を失っていた。

聖子ちゃんが横からライラを奪い取った。

その名を何度も呼び続けながら、泣きじゃくり始める。

遠くでブルが鳴いている。

でも、モニターは雑草に隠れて、見えなかった。

【第二章】

1

愛娘はワーゲンの後部座席で、ライラの頭を膝枕にしたまま、まだ就学前の時のように泣き続けている。

助手席の顔見知りの少年——聖子に何度かドイツ語の手助けをしてくれたという太った少年は、どうやら先程までの混乱から、持ち直したようだ。「……僕が悪いです」

その言葉が現実的に正しいのか正しくないのか、まだ判断はしかねるが、少なくとも嘘の匂いの全くない声だ、と優蔵は思った。

この車に乗り込む時、その少年は自身が混乱のさなかにもありながらも、真つ先に後部座席のドアを開け、ライラを横にしてやると、泣きじゃくる聖子をいたわりながらその横に導き、それからいかにも重量のありそうな無骨なロボットを自分の膝に乗せて、助手席に乗り込んだ。

そうした少年の動作を、僧衣のままの優蔵は、発進前の一連の機械的な動作とともに、しっかりと見定めていた。少なくとも、頭の悪い少年ではない。そして、ライラを物として見てはいない。さらに聖子への気遣いも充分だ。最後の点は、必要以上かも知れない。

「その件は、後日ゆつくりと聞こうじゃないか。——この道でいいんだね」「はい、次の通りを右に折れて下さい」

少年の指示に従って何度か道を折れると、裏路地の暗い迷路の末に、よう

やく看板が現れた。

ドッケンマッハー

そのみすばらしい木看板には、ただそっけなく『人形造り』と彫り付けてあるだけで、ウインドーに一応電飾は施してあるものの、話や地図だけでは、見落として当たり前の店構えだ。

「……本当にここでもいいのかね」

優蔵は、ただの場末の玩具店ではないのかと訝しんだ。

「はい。ライラがアンティーク・ロボットなら、五世紀以前の、機械語で制御されてるはずです。その時代のメカトロニクスならここしかないって、煉瓦通りのパーツ屋さんたちは、みんな言ってます」

「君はその方面に詳しいのかね？」

「いいえ、まだ……ほんとは、こいつのメンテを、いつかやってやりたいと思って、煉瓦通りを歩いているうちに、聞きかじっただけで」

ロボットは、少年の膝の上で無音のまま、不安げにあたりを見回している。「でも、他のどこに行っても、今夜中にライラの容態を見極めてくれる場所なんて、ないと思うんです」

これも正論だ、と優蔵は評価した。



ヨゼフ・ミュラーからライラを預かった——少なからぬ出費にもかかわらず、優蔵はそう心得ている——時に、通常の人間の住める環境なら、水分の補給だけで半永久的に稼働すると聞いていた。充電の必要もない。ライラはアンティーク・ロボットの中でも最後期の作品で、当時実用化されたばかりの軽水核融合プラズマ・ユニットを搭載している。あくまでも『永遠の美』のために生まれた存在として、あえて『電源を切る』という行為そのものが、不可触領域となっている。自己メンテナンスのために、人間の『睡眠』に似

た状態はあるが、それは単なる待機状態だ。

ならば純水を用意しておいた方が良いのかと問うと、それも不要のことだった。その水がたとえ不純物を含んでいても、フィルター・ユニット内で分解され、最終的に呼気として排出される。

寝ているだけなら、空気中の水分だけでも充分なんじゃが、毒物などは飲ません方がいいね——そう言つて、老人は笑つた。ライラは無事でも、周りの連中が死にまうかも知れんよ。でも、もしライラが何か不調を訴えることがあつたら、あんたのお国なら、ベルリン大学で古美術やつとる、デンナーさんつてのに診てもらおうといい。ただし胸部右、人間で言えば心の臓のあたりじゃな、ここへの局部的な高電圧だけは、注意しておくれ。神経回路の中樞が収まつとる。まあ、そんなものを食らつたら、人間だつて、いちころじゃろうかの——。

あの老人は、スタン・ピストルなどという半凶器が都会に溢れているのを、念頭に置いているだろうか。確かに人なら死にはしない。しかしアンティーク・ロボットであれば、機能を損なうかも知れない。無論デンナー教授には、すでに法王庁を介して、理由を自著の神学書なみに糊塗しつつ、アポイントメントを取つてある。しかし、教授はイギリスの学会を終えたばかりで、明日の夜にならないと戻らない。

優蔵はあの日会つたきりのヨゼフ・ミュラーを、今まででもっとも気の合つた老人だと思つている。思つてはいるのだが。

——ヨゼフ爺さん、あなたは、なぜ電話すら引いていないのですか？ 今時、手紙や電報でしか連絡の取れない場所に、人間は住んでおりませんよ。神はおられるでしょうが。



優蔵は、そろそろ泣き疲れたらしい娘の膝からライラを預かると、改めてウインドーを覗いてみた。

その棚には、看板から連想した木彫りの人形ではなく、古風なビスク・ドールたちが無造作に陳列してあるだけで、いずれにせよ電子機構などというジャンルへの関連性は、髪の毛一本ほども見当たらない。

そして、さらに薄汚れた扉の前に立った時、優蔵は、確かにある空気を感じ取った。

——ここに子供たちを、入れてはいけない。

「お前たちは、車で待つておいで。こんな小さな店に、大勢で入っちゃ、かえって迷惑だ」

柔和に絶対的な警告する、そんな表情を、優蔵は職業的に身につけている。すぐ後をついて来ようとしていた聖子も、その背後の少年とロボットも、渋々ながら納得してくれたようだ。

取っ手のない扉は、施錠されていないようだ。

優蔵はライラを抱いたまま、肩で扉を押し開いた。

「今晚は。失礼します」

店の中は、街路より暗かった。

せいぜい幅二メートルほどの空間の両側に、ウインドーと同じような古風な人形たちが、延々と並んでいる。しかしそれも、気配、と言いたいほどの薄暗さで、その空間がどれほど奥まで連なっているのかは、目を凝らしても判らない。

「夜分、申し訳ありません。どなたか、いらっしゃいますか」

返事は来ないのではないか、そう予感しながら、優蔵はもう一度声を張った。

「どなたか、いらっしゃいますか」

予感やはり正しかった。

しかし、この間口程度の商店であれば、この時間起きていたとしても、主人ひとりだろう。たまたまなにか用を足しており、五分も十分も待たされる、そんな経験は過去に何度もしている。

優蔵は逸る気持ちを押さえて、少し待ってから、もう一度呼ぼうと考えた。こんなところで、ライラのために有要な情報が本当に得られるのだろうか、そんな疑念もあった。

ふと子供たちの様子が気になって、街路側の小窓から外の車を窺うと、聖子たちはまだ車に戻っていなかった。

グレーのワーゲンのこちら側で、立ち話をしている。

いや、それは立ち話というよりも、あの少年が思いつめた表情で何か訴えているのを、聖子が無視し、そっぽを向いている構図である。

そのうち聖子は、少年の頬に、微塵の容赦もない平手打ちを食わせた。ぱん、という見事な破裂音が、店の中まで明瞭に聞こえた。

少年の痛みが窓越しに伝わり、優蔵は思わず首を竦めた。

聖子はワーゲンに乗り込み、荒々しくドアを閉めた。

残された少年は、俯いたまましばらくじっと立ち尽くしていたが、やがてあのロボットを従え、とぼとぼと裏道を遠ざかり始めた。

今回の件の張本人であるというその少年を、優蔵は、なぜかそれほど疎ましく思えなかった。

——この教区は治安上の問題はほとんどないし、君は道もよく知っていたから、今夜は無事に家まで帰りつけるだろうね。しかし明日の朝、鏡の中の君の顔は、さぞかし壮絶な状態になっていることだろう。マリオ君、と言ったかな。悪意の有無に関わらず、人はなかなか結果でしか判断してもらえないものだよ。そして聖子は、良い娘であることは保証するが、見かけの割に、あれでなかなか手ごわい娘だ。何と言っても、私の妻かみさんの娘だからね——。

他者の第一印象を、どれだけの確に捕らえられるか、それもまた神父とい

う職業上の適性である。

2

呼びかけから何分たったか、ようやく店の奥に明りが灯った。

奥行きは四メートル程度だろう。

小さな帳台の横の、元は黄色だったらしい色あせたカーテンが開き、小柄な影が覗いた。

「もう少々お待ち下され。年寄りには便所が近うてのう」

定形句そのままであることを、意識している口調だった。

同時に、店内の明りも灯った。

古風なタングステン系の褐色の光を受けて、両側の棚の無数のビスク・ドルたちは、いつせいに双眸を見開いたように見えた。

「夜分お騒がせして恐縮です。実は、知人の紹介で参ったのですが——」

老人は優蔵には目もくれず、彼の抱くライラの、灰白い顔を見つめている。老人の顔は、ヨゼフ老人と同じほど、多くの深い皺に被われていた。

似ている、と言ってもよい。

しかし優蔵には、外面上は似たような老人顔でも、その皺に隠された部分の肌が、全く違う色味を帯びているように思われた。

昼の色と夜の色——それほど印象の違いがある。

「……あんたはまた、えらいものを持ち込んでくれたのう」

「お判りですか」

「それはお判りなんじゃが、儂はあんたの方を、お判りじゃないのう」

「失礼しました。この教区の担当の——」

「ああ、名刺などは、いらんよ。どうせもらっても、すぐにどこかにしまい

込んで、それつきりになつちまう。それよりあんた、そのまんまじゃ話しくかろう。こちらにおいで」

老人は優蔵を、奥の部屋に招いた。こうした算段もヨゼフ爺さんに似ているのか、そう思いながら黴臭いカーテンを潜くぐると、想像とは大分違っていた。

奥は広い土間になっており、木製のテーブルと数卓の椅子がしつらえてあった。そして右の入口のカーテンと、同じ壁の左端にある両開きの扉を除く、四面の壁すべてに棚が切つてあり、また無数のビスク・ドールで、埋め尽くされていた。

「そのお嬢ちゃんも、窮屈じゃろう。ここに寝かしてあげたらどうかの？」
優蔵は素直にその老人の言葉に従った。

そして老人の干からびた手の動きに指図されるまま、ライラの横たわる古いテーブルを挟み、部屋の奥、老人の対面に腰を下ろした。

ライラのすっかり血の気を失った顔が、間近に見える。

扇のように広がった巻き毛が、まだ生き生きとしているからこそ、優蔵は不安だった。

まるで、通夜のようなようだ。ライラの白革のヒールの先で、底知れない能面の翁おきなのような笑みを浮かべている、老人と二人きりの。

二人きり——いや、そうではない。幾つかの人の視線が、確かに周囲の人の形たちの間から覗いている。

優蔵はそんな不吉な想像を、無言のまま意識から振り払った。

「まあ、とりあえず、お茶でも一服」

老人は軽く三度ばかり、手拍子を打った。
それもまた優蔵に、ある既視感を与えた。

しかしその感覚も、アルプスの大気と、淀んだ穴蔵の空気ほどの違いがあった。

とん、優蔵の足元の床が鳴った。

背後の棚から、ビスク・ドールが降り立っていた。

三〇センチほどの、黒いタキシード姿の少年である。

人形は恭しく優蔵にお辞儀をすると、入口とは別の扉の方に小走りに駆けて行き、その両開きの扉を器用に抜けて、奥に消えた。そちらが老人の居室なのだろう。

この程度の物か、と優蔵は思った。通常の玩具的なメカトロニクスで、充分可能な動きだ。

とん、とん。

右の棚の手前、そして左の棚の中央あたりから、少女のビスク・ドールが、ライラを挟んで降り立った。

その人形たちは、ライラと同じように白い膝丈のドレス姿で、金色の巻き毛を持っていた。

ライラの周囲をとことこと周りながら、時折腰をかがめ、物珍しそうにその端正な顔を覗き込んだり、白いタイツに覆われた伸びやかなふくらはぎを、つついてみたりしている。

間近にいた方の人形が、しげしげと優蔵の目を見上げた。

人形の目は、好奇心に溢れていた。

ただのメカトロニクスか、それとも、ライラやあの少年の連れていたロボットと、同類のものか。

優蔵は臆せずに、人形の視線に応じた。

人形の頬が、ぽつ、と桜色を浮かべた。

それから身を翻し、今度はライラの巻き毛の下に、潜り込み始めた。

もう一体の人形は、ライラの観察に飽きたのか老人の膝に降り、色あせた薄茶色のベストのポケットを足掛かりに、老人の肩によじ登ろうとしている。

奥の扉が開いた。

少年の人形は、紅茶の乗った自分の背丈ほどもあるトレーを、軽々と片手

に支えていた。

そしてなんの危なげもなく、土間から卓上に跳躍した。

「お茶が入ったようじゃな。そらそら、お前もこちらにおいで。あんまりお茶目をしとると、お客様にご迷惑だぞ」

ライラの巻き毛の下から、ごそそと人形が這い出した。

立ち上がり、ドレスの裾を整えながら、老人と優蔵を交互に見比べている。人形は優蔵の膝に降りた。

僧衣の胸をよじ登り、右肩に這い上がり、すまし顔でそこに座を占める。

陶器の質感とはうらはらに、柔らかさと温もりが感じられた。

「おやおや、あなたの方が、お気に入りなのよ。安い茶じゃが、あんたも飲みなされ」

何食わぬ顔で紅茶を啜り始める老人に、優蔵は、彼には珍しく苛立ちを覚えた。

「私は結構です。それよりも、お願いですから、この娘を——」

「儂はあなたの方を知らん、と言ったじゃろう」

老人は優蔵と同じように、柔和な表情による威圧を会得していた。

「まあ、そろそろいいか。それじゃあ、お伺いしよう。この三人の中で、本当に生きているのは、どの子とどの子じゃな？」

予想していた質問だった。

「……失礼、いただきます」

優蔵は紅茶に口を付けた。

緑茶ほどのカフェインは期待できないが、少しでも覚醒効果を得たかった。第六感というものを、彼は天上からの意志として認識している。

先程からのショーはじっくり観察していたものの、天上からの意志は、まだ降りて来る気配がない。

あらためて、三体の動く人形たちを凝視する。

老人の肩の少女はそっけない会釈を返し、タキシードの少年はうやうやしく返礼し、右肩の少女はまた頬を染めて俯く。

——残念ながら、今夜の神は、どこか別の場所でお遊びのようだ。優蔵は即座に、意識を習得的なものに切り替えた。

「……あなたの肩の、そのお嬢さんだけですわね」

物証はない。単なる状況判断である。

そう答えた刹那、自分の右肩の人形が、何か意気消沈するのを感じた。

ふう、と溜め息をつき、肩を落としてうなだれる、そんな気配の身じろぎだった。

しまった、はずしたか——。

しかし、その疑念を顔に出してしまつては、宗教者として失格である。

老人はにやりと黒い笑いを浮かべ、また紅茶を啜り始めた。

「……年寄りをこんな夜中に寢床から引つ張り出したんじゃ。神父さんとしちゃ、これくらいで順当じゃろうな」

カップを置くと、手拍子をひとつ打つ。

優蔵の肩の人形から、がくりと力が抜けた。

転げ落ちそうになるのを、あわてて優蔵が抱きとめると、老人はまた能面の笑顔に戻つて言った。

「それはまだ一度も生きたことがないよ。見てくれだけの、失敗作じゃ。でも、あんまり見てくれが良くできてしまったんでな、未練がましく、まだつぶさないでおる」

給仕の少年人形は、小走りに働き始めていた。トレー片手に、空になったカップの回収に余念がない。

「こっちは、まだ仕事が残つとるでの」

正解だったらしい。

優蔵は安堵して立ち上がり、腕の中の人形を、もとの棚に戻してやった。

「こちらでよろしいですね」

「ああ、すまんの」

老人は、自分の肩の少女を抱き下ろし、赤ん坊をあやすように、両脇をつかんで宙に揺らし始めた。

少女の心から嬉しそうな笑声が、席に戻った優蔵にも聞こえて来る。

「しかし、この子も、明日には客が取りに来るよ」

老人は少女を膝に戻した。

そして、その少女の首を鷲掴みにすると、力任せに引き抜いた。

優蔵は驚愕した。

それなりに周到に築いてきた自分の立場が、一瞬、白失した。

老人は、僅かに繋がりが残っている外皮を引きちぎるように、無造作に少女の首を振じった。

青く濁った得体の知れない粘液が、老人の着衣にしたたり落ちる。

少女の身体は、断続的に痙攣している。

——落ち着け。あれはあの老人が拵えた人形だ。生きていようがしまいが、人形だ。しかし、神よ、私はあの老人を殴り倒して、この場の幕を閉じてはいけませんか。

優蔵は震える拳を、太ももに押さえつけた。

老人は、左手に少女の身体を逆さに持ち、右手の首といっしょに丹念に揺らして、青い血を残らず着衣の上に振るい落とす。

「……殺した者の血は、すべて自分で受けてやるのが、殺す者の礼儀じゃないかね」

優蔵の方を見ようともせず、老人は呟いた。

そして無造作に、少女の首を胴体に嵌め込んだ。

「はい、できあがり」

少女は、何があつたの、というような顔で老人を見上げ、それからまだ収

まりが悪いのか、自分の首を自分の手で、胴体に落ち着けた。

「——外皮などはすぐに修復できる」

青い血は揮発性の高い成分が主体らしく、老人の着衣の表面で、早くも固まり始めている。

「儂はここんどこ、流動性の生体感情回路を、自分で調合して使つとる。殺してやりすいんでな。老いぼれたもんじゃよ」

老人は乾いて痂のようになった青い血を、ばさばさと払い落とした。

「なるほど……先程の人形と、同じ物になったということですね」

優蔵は努めて平静を装った。

「さすがじゃな。面倒そうな客が来ると、大概これで帰つてくれるんじやが」
老人は僅かに親しみの籠もった目で、優蔵を見返した。

「儂は、一度も生きたことのない人形を、客に渡したことはないよ。でも、みんな殺してから渡すことにしている。昔は腕がなかったから、うっかり殺し損ねて、生きたままの人形を、渡しちまったこともあったがね。——あんな、生まれはどちらじゃね。中国かね」

「日本ですが」

「ほう、なるほど。あの地方の方なら、お解りかも知れんの」

古代の人形師は、生きなかつた人形は破棄し、生きた人形だけを殺してから手放していた——そんな話を、優蔵も記憶している。

「しかし、なぜ、生かしたままではいけないのですか」

老人は答えず、その顔に侮蔑の色を浮かべた。

「そりゃあ、今のお前さんなら、解りそうなもんじやないか」

老人はライラを指さした。

「こうなつちまうんじやよ。みんな、帰つて来ちまうんじや。辛そうな顔で、みんなおんなじことを願いながらな」

優蔵には、老人の言葉の意味が、まったく理解できなかった。

ライラとビスク・ドールが、どう同じであるのか。

「よろしい、見せてあげよう。このお嬢ちゃんが、何を願っているのかをな」

老人は、今度は二度、手拍子を打った。

タキシードの少年人形が、ワゴンを押して現れた。

ワゴンの上には、3D投射型のモニターと、古いテン・キー付きのテスト
ーのような、大仰な器具が乗っている。

あの少年が連れていたロボットなみに古そうだ、と、優蔵は思った。

人形はワゴンを老人の前まで推して来ると、一礼して、扉の奥に戻って行
った。

どうやら今度のプログラムは、そこまでらしい。

老人はライラの頭の左横に、自力でワゴンを着けようとした。

時折見せる鋭い視線には似合わない、そのおぼつかない足取りに、優蔵は
寄り添って手を貸した。

「すまんの。口だけは達者なんじゃが……意気地がないわい」

がたがたとワゴンの位置を整えながら、老人は独り言のようにつぶやいた。

「……今度ヨゼフの奴に会ったら、言つといてくれ。とつとくたばつちま
え、とな」

優蔵は驚かなかった。初めて会った時から、そんな予感があった。

優蔵が口を開こうとすると、老人はそれを遮った。

「ちよつと黙つとつてくれ。アンティーク・ロボットは三十年ぶりでの」

ライラの巻き毛の左側頭部を、しきりに探っている。

優蔵はふと不安になったが、黙って老人の言に従った。

今はこのヨゼフ老人と繋がりのあるらしい老人から、少しでも情報を得た
い。

「心配いらんよ、ああ、ここじゃ」

老人は一度確信すると、足取りとは打って変わった確固たる指技で、一〇

センチほどもある針のような端末を、巻き毛の間に打ち込んだ。

眠ったままのライラの、ちょうど顔の上あたりに、半透明の3Dグリーン・モニターが浮かんだ。

並び始めた大量の機械語の羅列に、優蔵は思わず弱音を吐いた。

「……私には、残念ながら、理解できそうにありません。仕事でDELINE UXを使うくらいで」

「……若いもんは、これだからのう。これはたぶん、奴が引き渡しの時リセツトした後にはこの娘が習得した、環境適応用の後得的動作パターンのデータじゃろう。生得的な動作パターンは、五世紀前でも、ROM化されとる。大丈夫。じきに終わるよ。これが終われば、識域下の要約テキスト・バックアップにアクセスする。降順に——つまり、この娘の現在の意識から、始まるはずじゃ」

機械語は延々と続いた。

この娘は家に来て僅かな間に、これだけの環境適応用データを新しく学んだのか——。優蔵は内心で感嘆しながら、もはや点滅に近い機械語のスクロールを見つめ続けた。

「そろそろじゃな」

老人はワゴンの上の本体の、テン・キーを押した。スチルやアップ・ダウンを兼ねているのだろう。

機械語の流れが、老人の指の動きに呼応した、リズミカルな動きに変わる。

「さあ、このあたりじゃ」

老人は指を止めた。

「さあ、これがヨゼフやあんたがこの娘にしたことじゃよ」

淡い緑の光の文字は、こう告げていた。

——シナセテクダサイ。

優蔵は絶句した。

「そ……そんな」

老人は冷静に答えた。

「……店うちに帰って来る子は、みんなこう言うよ。理由はそれぞれじゃがね」
「しかし、なぜ……」

「さまざまだと言うとるじゃろう。まあ、儂が思うに、人と人形の違いはただひとつ。人はただ生まれるためだけに勝手に生まれて来る。なにが楽しいやうてか知らんがの。人形は違う。人形は愛されるために生まれて来る。少なくとも、儂やヨゼフめが扱つとる人形はの。これをうっかり生きてまま客に渡しちまうと、人形は愛される味を覚え、そのうち愛することの味まで覚えてしまふんじゃ。人形は人形である限り、それを続けるよ。でも、人はどうじゃ？ だから儂は、殺してやった人形だけを、人に渡すんじゃ」

「しかし、ライラには、そんな——」

「だから人形ひとさまざまだと、言うとるじゃろう。——続きを見てみるかい？」
老人はキーを操った。

光の文字が続く。

——シナセテクダサイ、オトウサマ。

——コロシテクダサイ、シラナイオジイサマ。

——ウタシハモウウゴケナイ。

——ウタシハモウハンストオドレナイ。

——オネエサマモハンストオドリタイ。

——ウタシハハンストオドリタイ。

——ハンスハブリジ？

——クルマノオネエサマニモウフラカケテアゲテクダサイ。イツモナラモウ
ネットイルジカンダモノ。

——ハンスハブリジ？

—ワタシハオネエサマモスキ。
—オネエサマモハンスガスキ。
—ワタシハハンスガスキ。
—ハンスハトテモウツクシイ。
—セイコハオネエサマ。
—マリオハオモシロイ。
—オカアサマモヤサシイ。
—セイコハヤサシイ。
—オトウサマハヤサシイ。

「……哲学的な自殺論でも期待したかね？ 現実はそのような複雑なもんじゃないよ。儂の見たところ、ありふれた三角関係の纏れっぽいね」

優蔵は答えられなかった。

「この様子だと、もう視覚も聴覚も、おぼつかないもんじゃろう。おそらく、じきにダウンするね。皮膚の残存感覚で、ある程度の外界の認識はしばらくできるかもしれないがの」

老人は冷徹な口調で続けた。

「まあ、赤ん坊の片言みたいで見にくいじゃろうが、これがこのリーダーの限界での。でも、この時代のRAMを読むのは、当節これ一台くらいなものじゃろう。もともと容量の都合で、圧縮されとるし。この『2』んとことを押しとれば、リセットん時まで溯れるよ。儂はお嬢ちゃんの胸を診察させてもらおう」

老人はワゴンの下の物入れから、幾つかの治具らしい物を取り出した。

双眼ルーペ型のマイクロ・スコープも、準備している。

「高価たかそうなドレスじゃが、裂いてしまってもいいかね」

「お任せします」

優蔵はリーダーのテン・キーを押し続けた。

3

小一時間が過ぎて、ようやく優蔵はライラのおおよその心情を理解した。涙はすでに乾いていた。

老人はすでにスコープを外し、隣の椅子で煙草をふかしながら、モニターを見ている。

その煙草が欲しかった。妻の意見で禁煙して、もう二か月になる。

「……助けてやれそうですか」

「無理じゃな」

あまりにも冷淡で、無慈悲な口調だった。

自分でも意識しない内に、優蔵は老人の胸倉を掴み上げ、背後の柵に押し付けていた。

「なぜこの娘が死ななきゃならない！ 私や妻や聖子や、今まで会った全ての人間や、草や花や鳥や……世界の全てを愛しているような娘が……」

幾つかのアンティーク・ドールが、床にこぼれ落ちた。

老人は能面の翁のままと言った。

「神の御心じゃないのかね、神父さん」

激昂は瞬時に引いて行った。

——大学院からローマの神学校に留学し、それまでの理想論ではない、時には神を疑うことすら避けられないような生臭い現実に組み込まれ、二千年の歴史を持つ巨大な組織の中で泳ぎ、そしてようやく一つの立場に達した。その間、武器は論理であり、調和であり、狷介さを含んだ人脈の構築だった。精神的には殴り合いに近い抗争もあったが、それでもいわゆる武力行使は、

少なくともこの一千年、組織から排除されている。その自分が今、我を忘れ、この非力な老人に手を上げてしまっている——。

「……失礼しました」

力無く引き下がった優蔵に、老人はシャツの襟を直しながら頬笑みかけた。「あんた、今、いい顔しとったよ。始めの頃のキリキリしてた顔が、嘘のようじゃ。儂が子供んとき世話になった、村の神父さんみたいじゃった。神学校出立ての、若い人じゃったなあ。もつとも、じきに仏教に改宗しちゃったがの。——思うに、神父さん。あんたは普通の神父ほど馬鹿じゃないのかも知れんが、今まで失ったもんが、少なすぎやせんかね」

「……一言もありません」

「そうか、じゃあ、そう素直に出られたところで——」

ぐん、と優蔵の周囲が回った。

この老人の干からびた腕の、どこにそんな力が残っていたのか、優蔵は先程の老人と同じように壁に押しつけられ、胸倉を掴み上げられていた。

老人は般若の形相だった。

「五百年前の初心うぶな十四歳の娘っ子が、生まれて初めて街に出る！ 見るもの総ては、キラキラ輝いとる！ 新しいお父様もお母様もお姉様も、みんな優しくていい人！ 極めつきは、月夜の舞踏会！ 生まれて初めての舞踏会！ 初めて着る、お姫様みたいなドレス！ 挙句の果ては、素敵な素敵な王子様と来た！」

言葉が切れるごとに、老人は優蔵の後頭部を、繰り返す柵の縁に叩きつけた。

がくがくと揺れる視界の中で、この老人の乾いた目の端に滲み出てきている物は、涙なのだろうか。——朦朧とし始めた意識の隅で、優蔵はそんなことを考えていた。

「……これでお姉様と王子様が恋仲だと知った日にゃ、感情回路のキヤパも

越えようつてもんじゃろ！ この娘ならな！」

それが最後のひと押しだった。

老人は力尽きたらしく、手近な椅子に力無く座り込んだ。

優蔵の頭の中で、激痛と老人の叫びが、反響し続けた。

優蔵は椅子に掛ける気力も失い、その場に腰を落とすとした。

「……大昔の娘なんじゃよ。昔の日本あたりじゃ、男でも恋患いとかで、しよつちゅう寝込んだったそうじゃないか。その程度の感情容量なんじゃ。そう、この娘の出自なら、さしずめ湖に身を投げて、ウンディーネのお仲間になつとるところかのう。始めから、もう死ぬ気だったんじゃろうよ」

老人はライラの冷たくなった手を、愛しげに撫でさすった。

「じゃがのう、娘さん、すまんのう。残念じゃが、儂の腕じゃあ、あんたを救つてあげることとはできん。楽にしてあげること、できん」

優蔵はようやく口を開く気力を取り戻した。

「……明日、デンナー教授のアポを取つてあるんですが」

「無駄じゃ。彼奴の腕だと、この時代の神経回路や思考回路は、表を開くのが精一杯じゃろ。もともと、表皮のクローニング再生が専門じゃし、プラスチック・ユニット程度もよいじりきらん奴じゃ」

「……やはり、ヨゼフさんですか」

老人は、暗い表情のまま、どっこいしょ、とつぶやきながら椅子を立った。

「ちよつとこつち来てくれんか」

優蔵はまだ目眩の残る頭を回しながら、老人に従って立ち上がった。

老人は、横たわるライラの胸を示した。

ドレスは首から上腹部まで切り開かれており、つつましい乳房の右内側が、十センチほど左下にかけて切開されていた。

「あんたにやちつと酷いかもしれんが、見ておくれ」

老人は優蔵にスコープを渡した。

優蔵は言われるままにそれを掛け、切開部に顔を近づけた。

これが本当に人形なのか——優蔵は改めて目眩を覚えた。

どう見ても皮下脂肪にしか見えない薄いピンクの組織の内側に、複雑に入り組んだ網のような筋肉組織が覗いていた。そして、筋肉組織の一部が縦三センチほど押し分けられ、その奥に何か黒い物が見えた。黒い物——それは単なる黒一色ではなく、これもまた複雑な回路らしいのだが、優蔵はそれを形容することができなかった。

「真つ黒にみえるじやろう」

「……はい」

「真ん中二ミリ、白いはずなんじゃ」

「それは、どういう……」

老人は沈んだ声で言った。

「……ヨゼフの奴でも、無理ってことさ」

「し、しかし、あるいは……」

「……今が現代である限り、誰にも無理なんじゃよ。ヨゼフの奴に見せるのはかまわんがね。むしろ、その方がありがたいね。もうあいつの小屋まで出て、あんたみたいにおつむを引っかけ回してやる手間が、省けるから。今のこの娘を見りゃ、あいつも二度と生きた人形を世に出そうなんぞとは、思わんだらうよ」

「しかし、あるいは……」

思考がまだ曖昧らしい優蔵を見て、老人は苦い諦念の笑みを浮かべた。

「この神経中枢の場合、修理という概念の外にあるんじゃ。今の道具じゃ、奥を覗きもできん。儂のナノミクロン・スコープなら、覗いて覗けんこたあないが——そもそも、もう焼けつぶれちまつとる。互換パーツという概念も、この娘には通用しない。そんな安直な時代の娘じゃあない。このお嬢ちゃんの後期型らしいから、プラズマ・ユニットくらいなら、出力調整でカバーで

きるかも知れんが……神経中枢とはなあ」

老人は白髪頭をかき回した。

「なんとまあ、どんぴしゃ、来ちまったものよ」

「しかし、あるいは……」

やり過ぎてしまったのか、と、老人は不安になった。しかし、すでにスコップを外したその表情を見る限り、もう呆けているようではない。解答のない数式を解こうとしているように、思考がループしているだけらしい。

「互換パーツが無いとおっしゃいましたが、他のアンティーク・ロボットがあれば……」

やっぱりやり過ぎた、と、老人は後悔した。

「だから、その概念そのものがないの。現存するアンティーク・ロボットは全部で六体。それが全部、回路から何から、一体ごとの手工芸品」

「しかし、ヨゼフさんのお店には、いくつも並んでおりましたが……」

「すっかり奴の手に乗せられとるようじゃな。それとも、あの貴婦人を見せられたか。あれをみると、たいていの奴は目が眩んじまう。あいつが持つとった本物のアンティーク・ロボットは、おそらくあれと、このお嬢ちゃんだけじゃろうよ。もつとも玄人目に見ても、どこか開けない限り見分けがつかんがね」

解答のない数式をまだ解こうとしている優蔵に、老人は、久しく覚えたことのない、生身の人間に対する憐憫すら感じた。

「……死なせてあげることじゃ。このままだとこのお嬢ちゃんは、死にたいと思いつつながら、永遠に寝たきりでこの世に存在することになるよ。儂に殺してやれるもんなら、あんたにつまりらん講釈なんぞしとらんで、とつくに楽にしてやつとるところじゃが、因果なことにごのお嬢ちゃん感情回路は、頭部のほぼ中央、思考ユニットの中心に位置しとる。ここもまた、ヨゼフだろぅが誰だろぅが不可触領域じゃ。と、いうことは、このあたりでは……」

老人は最後の通告を続けた。

「ローゼンレックの特殊廃棄物処理ラインに乗せてやることじゃな。あそこなら、苦しまず、一瞬に分子化できる」

4

優蔵は無力感に捕らわれたまま、ライラを抱いて店を辞した。

背後で店の明りが消えた。

街路はすでに街灯も消え、月明かりの中で目に入るものは、ワーゲンの僅かな明りだけだった。

後部座席では、待ちくたびれた聖子が横になり、健やかな寝息をたてている。

起こしてしまわないよう、そっとその隣にライラを横たえる。

ライラが言ってくれたように、毛布で二人いっしょに包んでやる。

——少し窮屈かも知れないが、今夜はいっしょに寝ていておくれ。

優蔵はすぐに車を出す気になれず、ワーゲンの傍らに佇んでいた。

もう一度、車内の二人を見返ってみる。

淡い室内灯の下では、どちらも幸せに眠っているとしか思えない。

潮が引くように、無力感も薄れてゆく。

優蔵は無意識に、僧衣のポケットを探った。そして、苦笑して手を戻した。

ぬ、と目の前に、灰皿が突き出された。

「……おまけじゃよ」

老人はシガレット・ボックスも手にしている。

優蔵は目礼して灰皿を受け取り、一本の煙草も拝借した。

老人に対する警戒心は、とうに消えている。

老人は優蔵が辞去する前、僅か二十分ほどの間に、開いたライラの胸を跡

形もなく閉じてくれた。年頃のお嬢ちゃんが、おっぱいに穴が開いてたんじや決まりが悪かろう——そんなことを呟きながら。それに、胸ん中がスースーして、風邪をひいてもいかんし。

「……明日、やはり、ライラを連れてベルリンに発ちます」
くわえた煙草の前に、ライターが現れた。

「……ご自由に」

老人は自分でも煙草に火を着けた。

「ま、それまで、あなたの神様にでも、よく祈つとくんじゃな。溺れる者には藁一本くらい、くれても良かろうとな」

夜半を過ぎて、流れる薄雲の間の月明かりは、なお清冽に街路を過ぎつてゆく。

「……ライラの相方を、あいかた 拝ませてもらってもよいかな」

「……どうぞ」

後部座席を覗き込む老人の姿は、池の魚を品定めする、五位鷺のようだった。

「……なるほど、いい勝負じゃの」

「ライラも聖子に遠慮などしていないで、張り合えばいいんです。今度は、良く言つてきかせます」

「あなた、明日のスケジュールは、ベルリン行きだけじゃなからう」

「はあ」

「……神父じゃから、当然、朝のお務めをする」

「はい」

「朝飯も食うじやろう」

「そうですね」

「それから、こつそり娘の後をつけて学校へ行き、こつそりハンスとやらの素行を窺う」

——この人は、私の気を、引き立てようとしてくれているのだ。

優蔵は笑い出しそうになった。

無力感はまだ消えている。

「……何年ぶりの客の注文が出来上がった晩に、何十年に一度の、珍客来訪。ま、これも何かの縁かの。そのこの聖子ちゃんが新しい人形が欲しいと言ったら、またせいぜい散財しておくれ」

優蔵が吸い殻をもみ消すと、老人は横から灰皿をさらい、店に戻って行った。

「いまのは世辞じゃよ。本音を言えば、儂や神父の顔なぞ、二度と見たくないがね」

遠ざかりながら、顔の横で、ひらひら手を振っている。

——ご老人。あなたは、本当はヨゼフ爺さんが、お好きなんじゃありませんか？

優蔵は思わずそう訊ねそうになったが、やめておいた。

それは彼が言うべきことではなく、あの老人形師の人生だ。



まもなく街路から、すべての灯ともしびが消えた。

【第四章】

1

あう、歯ブラシを突っこむ隙間がたりない。

血は止まったみたいだが、左のほつぺたの内側は、まだどんどん腫れ続けているみたいだ。

外側に関しては、あんまり言いたくない。

今朝はこっちの奥歯まで磨くのは、無理みたいだ。

でも、僕は死ぬほど痛い方が良かった。痛くて眠れない方が、つらくて眠れないだけより、ずっとましだからだ。

昨日の晩、ブルといっしょに家にたどりついてから、僕とブルは僕の部屋で、夜が明けるまでずっと黙りこんでいた。

ブルはもともと眠るということをしないので、ふだん夜は階下の居間に控えて、自分でコンセントから充電したりしているのだが、昨夜はこの部屋で充電した。たぶん僕と同じで、独りきりになりたくなかったんだろう。今は階下の台所で、朝食の準備をしている。

父さんは、僕の帰りや不在に関して、ふだんから何も言わない。自分もしょっちゅう酒場に寄って遅く帰って来るし、僕を信用しているそうなんだが、あの性格だと、ほんとは面倒臭いだけなんじゃないかと思う。

たぶんあの人は、僕が夜中に街の銀行を襲撃して、十中八九逃げ遅れて逮捕され、留置所から呼び出しを食らったとしても、しれっとしてありあわせ

のパンかなんか持つて、差し入れに来ると思う。『おやおや、マリオ、お前
またずいぶんえらいことやったもんだなあ』とか、陽気に笑いながら。で、
その帰りには、しつかり粉屋の未亡人の店に寄つて、いりもしない小麦粉を
ひとかかえ買つたりするんだ。

でも、やつぱり聖子ちゃんとブルの次に、好きなんだけどね。

身支度を終えて厨房をのぞくと、ブルはエプロン姿でじゃがいもを茹でて
いた。このあたりの普通の家では、朝晩はあんまり食事で火を使つたりしな
いで、お昼に一番手間をかけるんだけど、家はいわゆる家庭の事情で、その
逆だ。

「……おはよう、ブル」

ずっといつしよにいたのに、声をかけるのは昨日の夕方以来だ。

「おはよう。……ごはん、ちょっときついみたいだね」

ブルは鍋を手に、テーブルに向かった。

エプロンの真ん中の、ティティ・ベアの鼻のあたりに、ちゃんと穴を開けて
あるので、会話に支障はない。

「うん。牛乳とコーヒーだけでいい。……なあ、ブル」

僕は昨日から気にかかっていただけを、おずおすと口にした。

「お前も殴りたかったら、殴つていいんだぞ」

ブルは黙つて、フォークでジャガイモを器用に皿に盛りつけてから、こつ
ちを向いた。

「いつしよにいたのに、気づかなかつたのは、僕だ。マリオの目で、気づけ
るはず、ない。あそこで止めてやれるのは、僕しかいなかった。でも、僕は、
気づいてやれなかった。それに——」

ブルは僕のほつぺたを、つくづく見上げて言った。

「僕までやったら、マリオのほつぺた、破裂する。ぱーん。風船みたいに」
ブルは本当にいい奴なんだ。

「ちよつと、教会に行つてくる」

〔学校、休んじやだめだぞ。遅刻もだめだぞ〕

……できすぎてるかもしれない。



石畳の街路を走り、湯気の立つパン屋の角で右に折れると、教会はすぐそこだ。

たぶん、朝のお務めを終えた神父さん——聖子ちゃんのお父さんが、庭の手入れをしている時間だ。

昨夜、あの後どうなったにしろ、毎朝のお務めを欠かす神父はいない。

思った通り、神父さんは花壇の紫陽花に、如雨露で水をやっていた。

「おはようございます」

僕は息を整える暇も惜しく、声をかけた。

「やあ、おはよう。昨日は大変だったね」

「……すみません。先に帰ってしまった。どうしても、用事があって」

神父さんはブルと同じように、僕のほつぺたを、つくづく感心したように眺めた。

「ああ、ちゃんと冷やしてくれたか、心配してたんだが……無駄だったようだね」

神父さんは、なんで知ってるんだろう。もう店の中にいたはずなのに。

神様って、ほんとに見てるのか？

「私もねえ、あの細っこい体のどこからあんな力がでるんだか、いつも不思議に思うよ」

「……でも、力は、あつた方がいいと思います」

「どうして？ 女の子なんだから、もうちよつとおしとやかな方が、いいん

じゃないかね」

「……えーと、でも、あの、その、お料理で、大きなお鍋——中華料理作る時なんか」

神父さんは、くすくす笑っている。

その様子があんまり普段と変わらないので、僕は、ライラがなんとか息を吹き返してくれたんじゃないかと期待した。

「あの、ライラは——」

神父さんは、じょうろ如雨露を芝生に置いて、僕の肩に手を置いた。

「せっかく君に教えてもらったんだが、やっぱり、あそこじゃ治らないそう
だ。いい勉強は、させてもらったけどね。意識はあるようだが、動くことは
できない。午後、ベルリンの専門家の所に連れて行くよ。結果が判りしだい、
君にも連絡しよう」

やっぱり——でも、首都の専門家なら、なんとかしてくれるかも知れない。
「それから、これは聖子にはまだ言っていないんだが、君には言っておかな
きゃ、フエアじゃないと思う。事情はどうあれ、君がライラにスタン・ピス
トルを命中させてしまったのは、事実だからね」

ああ、やっぱり神様つてのは、ほんとに見てるらしい。聖子ちゃんは、あ
んな馬鹿な成り行きなんて誰にも言えないと涙ぐみながら、僕のほつぺたを
膨らませたんだ。

僕はなぜこの神父さんが僕を怒鳴りつけないのか、不思議だった。神父さ
んは神父さんだが、やっぱり聖子ちゃんのお父さんであり、ライラの保護者
でもある。どうしていつもの朝と同じように、この人は優しげに穏やかに頬
笑んでいられるんだろう。

神父さんは落ち着いた声で、ゆっくり後を続けた。

「——ライラは、もう治らないかもしれないよ。ベルリンに行くのは、万が一
を求めていることだ。それが駄目だったら、もとの持ち主に見てもらおう。で

も、私は父親として聖子に嘘はつけるが、神に仕える者として、君に嘘をつくことはできない。ライラがまた元気になる可能性は、きわめて低いらしい。ライラも自分で判っているようだ。聖子には、いずれ私が話すまで、黙っておいて欲しいんだが」

放心しちゃいけない——僕は一所懸命、自分に言い聞かせた。

それは僕のしたことだ。

「……聖子は、今、どうしてですか。ライラは——」

「ああ、まだ、いつしよにベッドで寝ているよ。聖子がどうしても、いつしよに寝たいと言うんでね」

駄目だ。

それを聞いたとたん、昨日の夜からこらえていたものが、こらえきれなくなってしまった。

朝っぱらから教会の庭で、男がそんな姿を晒しちゃいけない。

そうは思うのだが、僕はまだそこまで男じゃなかったみたいだ。

結局、僕は紫陽花の根元にしゃがみこんで、おいおい泣き出してしまった。

止める、自分。どこかにいる、強い自分——でも、そんな自分は、まだどこにもいないんだ。

神父さんはしゃがみこんで、情けなく泣き続けている僕の肩に、そっと手を置いた。

大きくて暖かい手だった。

「……できれば、涙が涸れるまで泣いていて欲しいところなんだが、今の君に、どうしても訊いておきたいことがある。これは、ふたりの父親としてだ」

神父さんは、僕の顎にその大きくて暖かい手をそえて、顔を覗きこんだ。

「——君はどうして、泣いているんだい？」

泣いている最中の人間に、そんなことを聞かれたって、答えられるはずがない。しつかり頭で説明できるくらいなら、泣いたりしないんだ。

神父さんは、いつもの優しい顔のまま、じつと僕の目を見つめている。

どうしても答えなければならぬみたいなので、僕はたぶんしどろもどろに、幼稚園児みたいなことを答えたんだと思う。

——聖子がかわいそうだ。ライラがかわいそうだ。元気な聖子と、もう動けないライラが、おんなじベッドで寝てたりして、聖子はライラがたぶんまだ元気になれると思つて、ライラはもうたぶんずっと動けなくて、聖子はきつと目が覚めたら、お姉さんがきつと元気にしてあげますからね、なんてライラのほつぺたにすりすりしたりして、そんな聖子をもう僕が動けなくしてしまったライラは、どう思うんだろう。どんな悲しい気持ちで聖子を見るんだろう。そしてその悲しくてかわいそうなのは、全部自分のしたことだ——

泣いていたのは、たぶん五分くらいで済んだと思う。

五分も泣いてれば、男度まだ推定一〇パーセント程度の僕でも、さすがにもう泣いてる場合じゃない、つてくらいのことは解つてくる。

「……すみませんでした。学校があるので、帰ります」

僕はシャツの袖で顔を拭いながら、立ち上がった。

ほつぺたにさわったとたん、また死ぬほどのやつが脳天に突き抜けたが、今はこのみつともない涙を、消してしまうのが先決だ。

神父さんも立ち上がり、僕の肩をまた静かに叩く。

「……まあ、そのほつぺたで充分なのかも知れないが、他の誰かに怒鳴られ、その誰かに謝つて、そんなことを期待してはいけないよ。神もあれでなかなか忙しいお方なんでね、ひとりひとりの人間やロボットに、天罰を下したり、憐れみをかけたりは、めつたにして下さらない。——君を罰するのも、君を許すのも、君しかない。神への懺悔は、その後のことだ」



昨夜と同じように——今朝はあのロボット君はいないが——肩を落として去って行く少年を見つめながら、優蔵は、改めて評価を少し上げてやってもいいと判断した。

その少年が、昨日の聖子と同じように赤子のように泣きじゃくりながら、ごめんなさいだの許してくださいだの、聖子やライラに会わせてくださいだのと言いだしたら、即座に怒鳴りつけてやるつもりでいた。その言い訳によつては、拳を使ってしまうかも知れない、とさえ思っていた。

それは神父としては相応しくない行動かも知れないが、二人の娘の父親として、やらなければならぬことだろう。

他人に手を上げるといふ神父としての禁忌を、優蔵は昨夜あの店で、すでに犯してしまっていた。故国での神学校高等科時代、深夜に寮の仲間と十字軍史を論じるうちに口論になってしまい、近所の河原で殴り合つて以来だろうか。

優蔵は昨夜の人形師に、内心で語りかけた。

——ご老人、あなたは私のパンドラの箱を、開いてしまったのかも知れません。

しかし昨夜からの自分を、優蔵は自分でも意外に思いながら、素直に受け入れていた。

優蔵は空になった如雨露の滴を払うと、まだベージュ色のカーテンが引かれたままの、二階の一室を見上げた。

人事を尽くして天命を待つ、そんな故国の言葉が心に浮かんだ。その天命の主は、正確に言えば神ではなく、故国で言う仏なのだろう。しかし、古いにしえの賢人も言っている。神と云えば神、仏と云えば仏、所詮信する者の心ひとつ。

——でも、聖子、今は無理かも知れないが、そのうちあの太った少年に、

『おはよう』のひとつも言っただけで、お前が、まだお追従を使
いこなせない、無垢な少女でいられるうちに。

◇

◇

とぼとぼと家に引き返しながら、僕は思った。

あの神父さんは、いい。

あの人がいるから、きっと聖子ちゃんも、あんなに素適に育ってるんだ。

僕の父さんは父さんでなかなかいい所があるんだが、やっぱりあの聖子ち
ゃんのお父さんにはかなわない。

ああいう人が側にいてくれれば、僕のこの情けない人生、少しは立派にな
るんじゃないか。

それはともかく、僕はなんとしても自分の蒔いた種を、刈らなければなら
ない。

聖子ちゃんや、ライラや、ライラに恋してるらしいブルフィンチのために。

——しかし、今の僕に、何ができる？

家に着くまで考えてみたが、とうとう結論は出なかった。

だって、専門家にさえ難しいらしいライラの修理を、僕自身にできるはず
はない。

少なくとも現時点では、僕がいくら張り切ったところで、なんにもできる
ことはないのだ。

——いったい、僕は、何をすればいい？

◇

◇

僕は自問自答——それも×印の奴を、日々、繰り返しているばかりだった。

聖子ちゃんはその夜以来、学校で会っても、ぜんぜん口をきいてくれない。僕が視線を会わせようとすると、それはもう拍手したくなるほどの見事な瞬発力で、そっぽを向いてしまう。

それだけならいいのだが、逆に僕が聖子ちゃんを見失っている間に限って、頭の後ろや斜め後ろのあたりに、ものすごい重圧感を感じたりするんだ。殺気、といっても過言ではないみたいだ。これが東洋の人々が能くすると聞いた『気』というものなんだろうなあ、と僕は思った。やっぱり聖子ちゃんは無敵だ。

ただひとつありがたかったのは、ハンスの奴が、あの日以来聖子ちゃんにあまり近づかなくなったことだ。でもそんなことは、大河の一滴どころか、世界中の海の一滴程度の慰めにしかならない。

神父さんがライラを連れてベルリンに発つてから、三日目の夜、やっと居間の電話が鳴った。

『——やはり、ここでは駄目だったよ、マリオ君。ライラは、ここから直接、故郷に里帰りしてもらうことにした。こちらのデンナー教授も、一縷の望みを託すなら、それしかないとおっしゃっている。私も一緒に行きたい所だが、これ以上代理神父に教区を任せるのは、立场上許されないものでね。君といっしょに、その街で待つしかないようだ。それじゃあ明日、また街で会おう』

半分子想していたとはいえ、居間の天井から十六トンの巨大な分銅が真上にどーんと落ちてきて、その下敷きになって床下まで落ちてべしやんこになったような気分だった。その分銅があんまり重すぎて、世界中の誰にも持ち上げられないといい。そしたら僕は、一生その下で、べしやんこのままदैられるし。

電話を切って、ブルといっしょに自分の部屋で、宿題も手につかず滅入り続けていると、今度は玄関のベルが鳴った。

お父さんは今夜も酒場で飲んでいるらしく、まだ帰っていない。

僕はブルといっしょに階段を降りた。

「はい、どちらさま……こ、こんばんは」

玄関には、天罰が立っていた。

神父さんは、あの朝あ言っていたが、実はやっぱり神様ってのは、いつもちゃんと見てるんだ。その証拠に、こうやって天罰を宅配までしてくれる。それはとってもかわいい天罰だった。

でも、さすがに天罰だけあって、まるで悪魔のように怒っている。

東洋の『気』は、真正面に受けると実際熱いもんなんだな、と僕は思った。

天罰ちゃんは、わなわなと身を震わせながら、まず右手を振り上げた。

でも、神様の使いだから、ちゃんと憐れみの情があるらしい。

やっと腫れの引き始めた方をまた張っては、あまりにむごいと思し召したのだろう。

代わりに左手を振りかぶって、ストライク・ゾーンに投げこんだ。

利き腕じゃないからはスピードは落ちるかな、と思ったら、両利きの天罰だったらしい。

ごく最近聞き覚えのある音が、頭蓋骨に響き渡った。

ぴよ、と、斜め後ろでブルが鳴いた。

僕は庭を遠ざかって行く天罰係の天使を、成す術もなく見送った。

振り返ってブルの3Dモニターを見ると、

〔あう〕

と、ひとこと浮かんでいた。



ユーザー・イトー神父殿

確かにあなたは、ライラに対する責任を、多少は怠ったかも知れ
ん。

しかし今になって、責任云々は無意味というもんじや。

きのうの晩は、ライラとひと晩、ゆっくり語り明かしたよ。あん
まり星が綺麗で、風が穏やかな夜だったんで、ライラの寢床を庭
に出してやっての。もつとも、さすがにまだこっちは年寄りには
寒いんで、焚き火にあたりながらじやがの。

あなたは、彼奴あやつにお会いなされたそうじやの。まさか、彼奴がそ
の街に流れ着いとるとは、さすがの僕も知らなんだ。

そんなら、何もベルリンまで出向いたり、ライラに長旅の気苦労
をかけることもなかったんじや。

彼奴は僕のできることの半分もできんが、癪うざにさわることに、僕
の知つとることはほとんど知つとる。でも、彼奴の持つとる古い
RAMリーダーなんぞより、僕はもつといい奴を持つとるよ。自
分で造るんじやがの。一応プリントアウトもしといたから、同封
しておこう。

きのうは、本当にいい星夜ほしよでの。あんたも、ライラといつしよに、
焚き火を囲んで話をさせてあげたかったよ。奥さんや聖子ともな
でも、もう無理のようじや。明け方、アクセスがとぎれたよ。あ
とは、あんたがもう知つとるようなことが、感情回路の奥で反復
されるだけじやろう。

明日、ライラを汽車に乗せるよ。あんたの街で、天に召されたい
と言つとつたんでの。

あんたがあんたの神様とやらとの間で愚痴をこぼしとる、自殺
（ほんとはこんな言葉は使いたくないんじやが）ではないと思
うよ。

そもそもライラは人ではない。人よりも、もうちつとましにでき
とる。

あなたのお国に、螺鈿細工らでんというものがあるじやろう。そう、夜
光貝なんぞのいっとう綺麗なところを薄く剥いで、漆器おもての面にち
まちまと貼って行く、あれじゃよ。

儂は昔、若い時分、巡回の博覧会で見たことがある。えらい綺麗
なもんじやった。でも、あれらの貝も、ずいぶん昔から、もう採
れんそうじやな。

あの螺鈿の文箱が、ちよつと片隅欠けちまつて、床中さがしても
かけらが見つからなかつたら、あなたならどうするね。プラスチ
ックで埋めるかね。たぶん螺鈿の文箱にしてみれば、それ以上生
き恥を晒したくないと思うよ。

それに、いわゆる安楽死つて奴も、あなたが奥さんに聖子を産ん
でもらったのと同様、もう何世紀も前に、認められたんじやなか
つたかね。

ヨゼフ・ミュラー

◆ ◆
親愛なる セイコへ

いつぞやは、ライラとご一家のお写真、ありがとう。

一生の宝物になりそうな気がするよ。

ライラをかわいがってくれて、ありがとう。

短い間だったが、ほんとうに、ありがとう。

優しい君のことだから、きつといっぱい泣いてしまっただろうが、

あまり悲しまないでくれ。天国のライラが、心配してしまうからね。

それから、君が光栄にも唯一この年寄りにだけ打ち明けてくれたという、例の決闘騒ぎの件だが、お望みどおり、お父君には秘密にしておこう。

君がどちらの少年を選ぶのか、興味深々だね。

まあ、ここは年寄りらしく、ひとつだけ忠告したいと思う。

昔から言われていることだが、人の善し悪しは、外見ではないよ。そして、これはあんまり言われていないことだが、心でもないよ。ただひとつ、私が間違いないと思うのは——少年は、数多くの愚行を重ねて大人になる。大人は愚行を重ねて、老人になる。老人は、愚行を重ねて土に還る。大切なのは、そのとき今、自分が愚かであることを、悟っているかどうかだ。

今の君には、ちよつと難しかったかな。

まあ、君のそのかわいらしい眉根に、皺がよらない程度に、考えておくれ。

君の友人　ヨゼフ・ミュラー

2

その晩は、珍しく早く帰ってきた父さんと、いっしょに夕食をとった。

「会社の帰りに、教会の前で神父さんに会ったよ」

養殖の鹿肉を切り分けながら、父さんは言った。

「あのかわいいお人形さんは、かわいそうに、プレスされちゃうんだそうだねえ」

僕の前のテーブルに、噛みかけの鹿肉が、ぽとりと落ちた。

僕の口から落ちたのだ。

後ろで大皿の割れる音がした。

デザートフルーツ・プディングが飛び散る音といっしょだった。

「おやおや、ブルフィンチ、君が粗相をするとは珍しいね」

〔ごめんなさい〕

「マリオ、ブザーを換えてやったとき、どこかしくじったんじゃないのか」

「……かもね」

父さんは、なんだか妙だと思ったみたいだったが、もともと呑気な人なので、すぐに気を取り直して鹿肉をつつき始めた。

「……プレスって、つぶされちゃうの？」

こぼした噛みかけを皿に戻しながら訊ねると、

「いや、それは言葉の綾って奴で、正確に言えば、粉碎——でもないな。言ってみれば、消滅かな。一瞬で分子化するわけだから」

このあたりは父さんの会社の専門分野なので、詳しいらしい。

「ほら、父さんの会社は、ローゼンレックの設備保全会社やってるだろう。この前、何年ぶりかでプラズマ・ユニットを内包した物件を処理するから、設備をチェックして欲しいって依頼があったんだ。そんな代物は、民需用じゃ普通ないだろう。妙だなとは思っていたんだが——たぶんそれが、あのお人形さんなんだろうな」

「……それって、いつ？」

「ああ、確か来週の木曜の夜にはチェックが終わるから、多分、その後すぐなんじゃないかな。あの手のリインは稼働待機してるだけで、けっこうコストがかかるから」

このところ無口だった息子が、いろいろ訊いてくれるのが嬉しいのか、父さんはどんどん教えてくれる。

「それにしても、何も処分してしまうことはないだろうにねえ。壊れたら壊れたで、あれだけの工芸品なら、飾っておくだけでも大変な値打ちなのに」
僕はナイフとフォークを皿に戻した。

もうお腹の中に収めたぶんまで、皿に戻って来そうだった。

「……これから、ブルを連れて出かけてもいいかな」

「ん、夜釣りか？ それとも、いい娘でも見つけたか？」

こういう時、こういう父親は本当にありがたい、と僕は思った。



聖子ちゃんのお母さんは、どこまで知っているのだろう。

いつもの福々しい笑顔で、あらあらまあまあと、僕の左右非対称に腫れの残っているほっぺたを心配してくれながら、神父さんは教会の方にいると、わざわざ案内してくれた。

「やあ、今晚は。来てくれるんじゃないかと、思ってたんだ」

神父さんは、祭壇の前の信者席に座っていた。

隣にはワインの瓶があり、ワイングラスは半分になっていた。

この教会では、お酒は出さないと思っていたが、別に禁止されているわけではないし、赤くなるほど飲んでもいない。

「聖子も、呼んで来てくれないか」

奥さんへの言葉も、いつものようにはつきりしている。

神父さんは、ワインの反対側に置いてあった紙束のようなものを膝に移して、空いた席に僕を手招いた。

「——なぜ知らせなかったか、不思議、いや、さぞかし不満だろうね」

確かにそんな気持ちもあったが、それ以上に、ライラが処分されてしまうなんて——ただ、やりきれない。そんな気持ちで、来ないではいられなかつ

たんだ。

神父さんは、ほんとうに申し訳ない、そんな顔をしてくれていた。

「他意はなかったんだが……聖子がね、泣かないんだよ」

「……はい？」

「あの、ライラが倒れてしまった晩、あれだけ泣いていた子がね。まあ、君に教えてあげたことも、聖子には教えてなかったんだが……私の間違いだっただのかもしれない。まだ希望があつたから、明るくふるまっていたのだろう。でも、これを読んでからも、まったく泣かない」

神父さんは、紙の束を軽く振ってみせた。

「今のライラの気持ちだが、これなんだ。ライラの里の店で、読み出してくれたものなんだがね」

僕が思わず手をさしだと、神父さんは、残念ながら、というように手を振った。

「君にも見せてあげたいのは山々なんだが……半分以上が、家での暮らしの思い出なのでね」

それはそうだ。僕は、この家の人間じゃない。

それは解るのだが、やっぱり寂しかった。

「でも、ライラが自分から神に召されたいと願っているのは、事実なんだ。……一晩中、いや、二晩かかって家族会議をしたよ。そうして、やっぱり、ライラの希望どおりにしてあげるのが一番いいだろう、そういうことになった。そうなたんだが……」

神父さんは、グラスの残りを飲みほした。

「――泣いてくれないんだねえ、聖子が」

僕には聖子ちゃんの気持ちが、よく解った。

聖子ちゃんも、ただ、やりきれないだけなんだろう。

神父さんだって、同じ気持ちのはずだ。でも神父さんは、きつとあんまり

強すぎるんだ。そして聖子ちゃんは——たぶん、まだ僕くらい弱い。

「……感情回路、という言葉をも、神父さんはご存じですか」

「……いや」

「僕も煉瓦通りで聞いただけなんですけど、古代のロボットなんかで使われて、最近の倫理回路と機能はおんなじなんですけど、今では禁止されてる自律的短絡処理機能があつて、えーと、でも大昔だから、容量はすごく少ないみたいなんです……」

「……ほう」

「人間も、おんなじような……ごめんなさい。なんだか、言つてて、よく解らなくなっちゃいました」

「まあ、なんとなく、解つたような気がするよ」

ほんとはもう全部解つてるんじゃないかな、そんな気がした。

そのとき、すぐそばに人の気配が立った。

聖子ちゃんだった。

でも、そこに立っているのは、まるで白いワンピースを着けたマネキンみたいで、まるで生きてる感じがしなかった。

ほんとうに、これが聖子ちゃんなのだろうか。

僕は自慢じゃないが、ふだん学校では、壁などの障害物がない限り、前方一〇〇メートル、左右五〇メートル、後方二〇メートルくらいの、索聖子能力を持っている。その僕が、いかに暗い教会の中とはいえ、こんな間近に来るまで、聖子ちゃんの接近を感知できないなんて。

「——ご挨拶、しないのかね」

神父さんが、戸惑つたように言った。

聖子ちゃんは、もう、どうでもいいや、というような顔で、ぺこりと頭を下げた。

違う。眼鏡の奥に、いつもの光がない。……これじゃあ聖子じゃない。聖

子の形の抜け殻だ。

神父さんが心配していた訳が、これで解った。

死ぬほど誰かに何かをしてあげたい時に、何もできないと悟ってしまった時——両方の気持ちで、気持ちが膨らみ切ってしまう。それはほっとくどんどんどん膨らんで、しまいには破裂しそうになる。それを押さえるためには——心を閉じてしまうしかない。心を殺すんだ。ちょうど僕が、あの晩天使の宅配を授かるまで、そうなりかかっていたみたいに。

僕は思わず立ち上がった。

もう神父さん——聖子のお父さんの目の前であろうと、ためらってる場合じゃない。

僕は聖子の顔の前に、思いきり顔を突き出した。

でも、聖子の目は確かにこつちを向いているが、どこにも焦点は合っていない。

僕はさらに顔を近づけてみた。

はてな？ というような表情が、わずかに浮かんだ。

僕はさらにぎりぎりまで顔を近づけた。

——さあ、聖子、諸悪の根源がここにいるぞ。

こんどは、はてなが二つくらい浮かんだ。

さらに接近しようとする……。

覚悟していた、いや、それを期待していた渾身の三発目は、炸裂しなかった。

そのかわり、うひゃあ、というような顔をして、まさに脱兎のごとく、外に逃げ出してしまった。

「……追いかけていただけると、ありがたいんだがね」

神父さんは、呆気にとられたように言った。

そりゃそうだ。僧衣というのは、全力疾走にはまるで不向きだし、外はも

う暗い。

僕はあわてて聖子を追って、教会の外に駆け出した。



聖子は街路には向かわないで、裏庭に回り、さらにその奥の、墓地の方へ駆けて行った。

僕は懸命に追いかけた。

走るの嫌いやないのだが、胸やお腹なかで揺れる自分の贅肉は、やっぱりもどかしい。

青い月明かりの墓地は、教会の暗さに目が慣れていたので、走るのにそれほど苦労はなかった。

白い墓石の群れは、なんだか靄がかかったように、夜の中で滲んでいる。その曖昧な白い林の間を、足早に遠ざかる聖子は、なんだかそのままこの世ならぬ所に消えて行ってしまいうそで、僕は懸命に追いか続けた。

でも、墓地の広さは有限だ。全力疾走していると、じきにはずれの柵に行き当たってしまう。

いきおい、追手から逃れるには、色々な形の白い墓石の間を、くるくる巡ることになる。

それを追いかける方も、くるくる巡ることになる。

なんのことはない。墓石の下で眠っている人たちには、さぞかし騒々しくて迷惑だっただろうが、そのうち鬼ごっこ兼隠れんぼが、始まってしまった。

時々追いつけそうになると、聖子の活発な息づかいが耳に入る。

今ちらりと墓石の陰から覗いた顔は、笑ってはいないにしろ、かなり充実してなかったか。

もう大丈夫だとは思ったのだが、あんまり楽しいので、僕はくるくと聖子を追って走り続けた。

やがて、聖子はかなり大きい石碑の後ろに走りこんだ。続いて回りこむと、聖子はさすがにくたびれたのか、膝に手を当て中腰になって、はあはあと息を整えていた。

さすがに僕も自分の目方をもてあまし、その前にしゃがみこんでしまった。でも、楽しいことの疲れつてのは、案外すぐに回復する。

僕は聖子の前に立って、手を差し出した。

「……さあ、家に帰ろう。お父さん、心配してるよ」

聖子は答えずに、じっと僕を見つめている。

黒髪が少し乱れて、顔を一面に濡らし、はあはあと荒い息をついているその姿は、昼の妖精とはまた違った風情で、まるでこの墓地に棲まう何物かのように、妖しいが、やっぱりとても美しい。

このままお墓の下に引きこまれてもいいかな、とさえ、僕は思った。

でも、その妖しい物は、すぐにいつもの聖子にもどって、それからくしゃくしゃと顔を歪めた。

そして、わあっ、と泣き出して、僕の胸にしがみついて来た。

そのまま泣き続けている。

聖子の頬が、僕の胸に、柔らかく、暖かい。

シャツの内側まで染みてくる熱いものは、聖子の涙だ。

この僕の指が梳きあげている絹糸は、聖子の髪だ。

これが一場の夢ならば、僕は久遠に眠っていたい。

——ほんとは、解ってるんだ。

今の聖子に必要なだったのは、ただ泣き濡らすための抱き枕だ。

それでも僕は、僕が今ここに居られたことを、生涯忘れない。

時よ、終われ。僕がこの愛しい人を、この腕に抱いていられるうちに。

でも、その甘美な夢は、永遠の中のほんの少しをかすめただけで、間もなく終りを告げてしまった。

「……ねえ、マリオ」

僕の貸したハンカチで、涙をふいたり眼鏡をふいたり鼻をかんだり、顔のお手入れを済ませてから、聖子はぽつりと言った。

あとにどんな言葉が続くのか不安だが、とにかく僕の名前を呼んでくれたんで、良しとしよう。

「……あなた、自分のこと、愚かだと思う？」

いきなり根源的な質問を受けて、僕は面食らった。

「え、えーと、馬鹿か、ってこと？」

「……うん。たぶん」

これはいったいなんなんだろう。でも、いまさら格好をつけても、かえってみっともないし。

「う、うん。馬鹿……だよ。少なくとも現時点では、かなり愚かだと思うよ。それなりに利口になろうとは、いつも思ってるんだけど」

「ふうん……」

それから、お手上げの視線が来た。

女の子特有の、品定め視線だ。

でも、そのうち、それは天罰の視線に変貌して行った。

今は、これでいい。

僕はまだ自分を罰しても許してもいない。

どうぞ、と僕は目をつぶった。

鼻の左横から右の脇にかけて、渾身の一撃が炸裂した。

くらくらする頭を、なんとか振り戻して顔を上げると、聖子はもう墓地の門を駆け抜けて行くところだった。

でも、ハンカチだけは返してもらえばよかったかな、と僕は後悔した。ティッシュを忘れて来ているので、鼻血を止めるものが、何もないのだ。鼻血を拳で塞ぎながら、僕も墓石の間を歩き始めた。

ブルは墓地の門の横で、遠ざかってゆく聖子を見送っていた。

〔楽しそうだったね〕

ブルが振り返った時、一瞬そんな台詞が読めたが、それはすぐに次の台詞に変わった。

〔あうあう〕

〔なあ、ブル〕

僕はかまわず言った。

「お前、ライラが、好きなんだよな」

〔あうあう、そんなことより、その顔〕

「だから、それは、もういいんだ。これからは、お前の出番なんだ」

僕の恋は終わっても、ブルの恋は、まだ打ち明けてさえない。

「お前、ライラが好きだな」

〔うん〕

「ライラに、永遠の忠誠が誓えるか」

〔うん〕

「よし、決まり。決定」

〔な、なにが？〕

「ライラに会おう」

ブルはしばらくびよびよを止めていたが、

〔うん！〕

ちゃんと『！』が付いていた。

僕は両手でブルの丸い頭を、ばん、と叩いた。
それに両手を使ってしまったので、見事な鼻血の滝ができた。

3

見違えるほどの生気を宿して駆け戻って来た娘を、優蔵は妻に預けた後、また教会の信者席に戻り、祭壇に向かい合った。

やはり自分の判断は間違っていないかつたらしい。少なくとも、愛娘とあの少年に関する部分は。

優蔵は祭壇の背後の壁に向かって、ワイン・グラスを軽く上げて見せた。
——主よ、御異存はございませんね。あなたはこのところ、ひたすら沈黙を守っておられるだけなのですから。

この世の総ての罪を背負っているという、その三位一体の者は、今夜も祭壇の壁で、悲惨だがそれだけ気高い姿を示し続けている。

——私がライラにしてやれることは、もはや、あなたの御元にお届けすることだけです。それはあなたが今宵も沈黙を保たれている以上、正しいことなのでしょうが。

優蔵は、近頃法王庁でも新世紀版の『改約聖書』ネオ・バイブルに組み込み始めている、多元宇宙論などを思い浮かべていた。

——それとも、主よ、現在あなたはこの世界のどこかではなくて、お隣の宇宙にでも、その御座みくらをお移しになっているのでしょうか。

背後の扉の軋む音に、優蔵は振り返った。

あの少年が、何か潰れたようなくぐもった声で、『すみません、またお邪魔します』、そう言っているようだ。

ロボットを従えて通路を近づいて来る少年の顔は、優蔵が首を竦めて済む

レベルを、遙かに越えていた。

「聖子は、戻りましたか」

「……あ、ああ。ありがとう。今、家内が風呂に入れてやってるよ。今夜はきつと、ぐっすり眠ってくれると思うよ。それより、君、大丈夫かね」

少年の鼻は完全に曲がっている。その下に当たった拳の間から、血が流れている。そして、片目も腫れ塞がっている。

「すみません。その階段で、ちよつと転んじやつて。ハンカチ、貸していただけますか」

その階段は、推定で少年より十数センチ身長が低く、しかも右ストレートを決めて来る。

ああ聖子、と優蔵は心の中で嘆息した。人間の顔を、サンド・バッグにしてはいけないよ。たとえそれが、お前がこの世で最も慕いたくない相手であつて、にもかかわらず慕い始めてしまっているにしても。

優蔵は手持ちのハンカチを四つに裂いて、少年に手渡した。

「もつとスベアがあつた方がいいかな」

「……ありがとうございます。大丈夫です」

少年は端切れを鼻につめてから、思いつめた瞳を優蔵に向けた。

「神父さん、お願いがあるんです。こんな夜遅くで、申し訳ないんですが」

今夜は大概の望みは叶えてあげたいものだな、と優蔵は頷いた。聖子に会いたいというなら、それでもいい。

「こいつを——ブルフィンチを、ライラに会わせてやって欲しいんです。こいつ、ライラが好きなんです。でもまだ、ちよつと会ったつきりで、ほとんど口もきいてないし。だから、せめて……」

優蔵は落胆した。

「済まんが……それはもう、叶えてあげることができない」

「……どうですか？」

「済まない。今夜は、君をこれ以上苦しめたくはなかつたんで、あえて黙っていたんだが——ライラは、もうローゼンレックの工場に行けば……」

「じゃあ、ローゼンレックの工場に行けば……」
「駄目なんだよ」

少年の顔に浮かぶ幾つもの疑問符を痛々しく思いながら、優蔵はしっかりと、両手を少年の肩に置いた。

「ライラが天に召されるには、その前に数多くの事前処理が必要なそうなんだ。そのためには、多くの化学薬品なども必要だ。高電圧の処理などもある」
私はこの少年の、最後の退路を断とうとしている、と優蔵は思った。

それでもこの少年に、嘘を言っではいけない。

「よしんば、君の友達ならそこに行けたとしても……もう今のライラには、誰の言葉も届かない」

少年の隣のロボットが、なにか小鳥の囁きのような声を出した。

しかし、いつものモニターには、幾つものドットが浮かぶだけだ。

ロボットの頭は、少年の血で汚れていた。

「……そんなの、駄目だ」

少年は、苦しげに声を絞り出した。

「……いなくしちゃ、だめだ」

祭壇の背後を指さしている。

「そんなの、神様が許しても……その人が許しても……僕が許さない！」

それだけ叫ぶと、ロボットを胸に抱え上げ、暗い教会の通路を駆け去って行く。

優蔵はゆっくりと通路を歩み、開け放たれたままの扉を閉じ、そしてまたゆっくりと祭壇に戻った。

グラスにワインを注ぐ。

——いやはや、主よ、あの少年は、私の故郷の、山寺の山門の、仁王様の

ような顔をしておりましたなあ。

主と同じ存在であるはずの青年に、軽くグラスを捧げてみる。

——いずれにせよ、人間である以上にあなたの下僕しもべであることを誓ってしまつた私には、今回の件に関して、もうできることはございません。

グラスに口を付ける。

——しかしあの少年は、あんな罰当たりなことを申しておりますぞ。よろしいのですか。

沈黙が続いている。

——よろしいですね。それでは、主の御心のままに。

優蔵は、最後のワインを飲み干した。

【第五章】

1

ヨゼフ爺さんは、大あくびをした。
頭の上を、雲が流れた。

アルプスはその山肌に雲の模様を移ろわせながら、今日も泰然と聳えている。
陽は暖かい。

もう初夏の雲もすぐじゃな、とヨゼフ爺さんは思った。

——それにしても、写真屋の小倅、ずいぶん遅いな。まったく近頃の若い者は。
蔵の人形たちの支度は、とうに終わっている。

どこに出しても恥ずかしくないよう、着付けもお化粧も念入りに済ませてある。
ただ、それらの子供たちと、それ以上家の中で一緒に待つのが辛くて、ヨゼフ爺さんは前庭に椅子を出し、昼前から麓に続く山道を眺めていた。

山道といっても、そのあたりは勾配の緩やかな草原なので、目を透かせば、麓の村の家々から立ち上る、竈の煙も見える。

昼食の黒パンを、もそもそと山羊の乳で飲み下していると、ようやく遙かな道筋に、土埃が立った。

草々の鮮緑と、雲の作る濃緑の流れの間を、ライトバンが一台登って来る。

横腹に『写真馬車』と大描きされた、いかにも観光地の営業車じみた装飾だ。

「やあ、ミユラーさん、毎度どうも」

初めて見る細身の青年が、陽気に挨拶する。

「やっと来おったか。日が暮れちまうぞ。何が毎度どうもじゃ。呼ぶのは初めてじゃ」

ヨゼフ爺さんは、ライトバンの俗な木目模様を、生ゴミを見るような目つきで睨め回した。

「やだなあ、お忘れですか。あなたがご結婚なさった時、祖父がお伺いしたでしょう。それから、お子様がお生まれになった時、父が——」

「わかった、わかった。もういい。さつさと奥に行つて、人形たちを撮つてやっとなんか」

若い写真屋は、大仰なカメラバックをかついで、店に入つて行つた。

しかし、またすぐに戻つて来てしまった。

「だめです。暗すぎます。表で撮りましょう」

「そんなポンコツしか持つとらんのか」

「えーと、なんと申しませうか、それはそれで記録写真として、なかなか時代の重みが出せるのかもしれないが——」

写真屋は、芝居がかつて両腕を広げた。

「雄大なアルプスと、緑の草原と、この朽ち果てた——失礼、古色豊かな一軒家。こんなうつつつけの背景を、見逃す手はありません」

——なるほど、小俣の言うことも、もつともじゃな。

写真屋とヨゼフ爺さんは、せつせと人形たちを、庭に運び出した。

それから、写真屋がバンから持ち出した、商売用の折り畳みの雛段を組み立て、五十体に及ぶ大小の人形たちを、綺麗に並べた。

写真屋は、おっと失礼、とか、そこちよつと詰めてね、などと人形に向か

つて独り言を言いながら、手際よく見場を整えている。

「さて、こんなもんでしよう。じゃあ、ミユラーさん、こちらへ」

最前列の真ん中を、また芝居がかった手つきで示して見せる。

「儂や、ええ」

「それはいけません」

「ええと言つとろうが」

「えーと、ミユラーさん」

写真屋は、妙にかしこまって言った。

「私、これでも、ウィーン大学の芸術学部を出ております」

何を言い出すんじゃ、とヨゼフ爺さんは訝った。

「そのままあちらでサロン写真家として立つつもりでいたんですが、父が通風を患いまして、どうしてもということ、村に戻りました」

「……それと儂がここに座ると、なんの関係がある」

写真屋の後継ぎは、何か深くて遠い目をしている。

「その時私は、心に誓ったのです。生涯、記念写真や観光写真を暮らしのたつきとする、それが私の宿命ならば——私は私にとって、真の記念写真や観光写真しか撮るまい、と」

若造は若造なりに、色々あるもんだな、とヨゼフ爺さんは思った。

幾分の親近感が、なかったと言えば嘘になる。

「と、言う訳で、さあどうぞ。こちらにお座りください」

——こりや、逆らつても無駄じゃ。

ヨゼフ爺さんは、渋々そこに座った。

写真屋は見慣れない写真機を、三脚に据え始めた。

「……妙な写真機じゃな」

大昔の八×一〇インチ乾板写真機ほどの大ききで、所々磨き出しのクロームが眩しい。

「アメリカはウォーレンサック社の最新型でして——仕上がりは、見てのお楽しみ」

真正面いっぱいモニターがあるのは、それを見て心構えをしろということなんだろうな、とヨゼフ爺さんは思った。

「はい、チーズ」

写真屋が妙な口つきをして、どこかのシャッター・ボタンを押すと同時に、ぽん、という剽軽な音が響いた。

「——商売上、お子様受けも必要でして」

写真屋は、照れくさそうに笑った。

ごそごそと写真機の後ろを弄くり回し、何か水晶玉のような物を取り出し
ている。

「でも、何と言っても最高級機ですからね、はい、この通り」

水晶玉にしては、ずいぶん大きい。小ぶりの西瓜ほどはありそうだ。

「うわあ、こりゃ傑作だ。これは、いい」

写真屋は自画自賛しながら、その玉を運んで来た。

「はい、どうぞ」

ヨゼフ爺さんは、麓の土産物屋に置いてある、雪嵐のガラス玉を想像した。
細かい銀色の粉のような金属片と、小さな教会の模型などが、水といっし
よに封じてある、あれだ。

しかし写真屋から渡された玉は、掌に乗ると、意外にもほとんど重みがな
かった。

透明な薄膜の球体の中に、学校の卒業写真のように並んだ自分と人形たち、
自分の店、そして背後の山々までが封じられていた。

くるくる回して見ると、人形たちの後ろ姿も、店の裏も、しっかり見て取
れた。

アルプスの裏側は、と期待して見たが、そこには茶色の岩の断面のような

物しか見えなかった。

「どうです。まるで魔法みたいでしょう。驚かれましたか？」

ヨゼフ爺さんは、写真の仕上がり自体には大満足だった。確かに驚くほど良く撮れている。しかし、そうした写真術が現れたことに関しては、さほど驚いていなかった。自分自身、人形の眼球の光学的メカニズムは熟知している。人間という物は、造りたい物を、結局造ってしまう生き物なのだ。

——あの写真機の種板は、光学的な撮像素子ではないな。たぶんこの玉そのものが、直で成型されとるな。

それがヨゼフ爺さんの結論だった。

「お願いなんです、そちら、一晩拝借願えませんか。複写して、店に飾りたいんです。そうしていただければ、今日のお代は無料ということ——」

「さよなら」

ヨゼフ爺さんは、ポケットの封筒を無造作に突き出した。

それから黙って店に入り、大切な写真を戸棚にしまった。

前庭に戻ると、写真屋は商売道具を片付けながら、まだぶつぶつ呟いていた。

「まあ、いいや。明日にでも、山向こうの湖を撮ってこよう。漣なんか、すごいだろうなあ。——ああ、そのお人形さんたち、お店に戻すんでしょう。

お手伝いしますよ」

「いいや、結構」

「お一人では大変でしょう」

「それもそうじゃな。じゃあ、裏庭に運んどくれ」

「裏庭って、どうなさるんですか？」

「——さよなら」

また黙り込んで、一人で人形を運び始めるヨゼフ爺さんを、写真屋は仕方なく手伝い始めた。

何回か前庭と裏庭——裏庭といっても、ただ草を刈って地固めをしただけだが——を往復し、あらかた人形を運び終えた頃、一台のトラックが山道を登って来た。

荷台には、何か大小の白木の箱のような物が、山積みになっている。

「ちわあ。『世界をつなぐヤマト』のもんです。これ、ここでいいですか」

写真屋のライトバンの横にトラックを停めて、配達員が訊いてくる。

「裏庭の方に周っとくれ」

それから、裏庭の人形たちの横に、三人がかりで木箱を降ろす。

配達員は、一刻も早くこの作業を終えて次の仕事に回り、少しでも歩合を稼ぎたいらしく、大汗をかきながら、次々と荷台の木箱を送ってよこした。

ヨゼフ爺さんも写真屋も、汗だくになってそれを受け取る。

写真屋は、人の背丈ほどの箱の片側を支えながら、これは人形たちの箱らしいな、と思った。

「ありゃーたんしたあ」

慌ただしく配達員が去って行くと、ヨゼフ爺さんは早速、手近な木箱の蓋を開けた。

白いサテンの内張りが、綿を含んで膨らんでいる。

写真屋も手元の小箱を手にとってみた。

ほんの一〇センチほどの小箱だが、やはり丁寧に内張りされていた。

ヨゼフ爺さんは黙り込んだまま、人形たちを箱に収め始めた。

特に生けるがごとき一人の婦人を手にした時、さすがに躊躇の色を浮かべたが、結局、丁寧に木箱に寝かせた。

——そうか、この人形たちは、みんな売られて行ってしまっただな。それで、最後の記念写真という訳か。

写真屋も、ヨゼフ爺さんの寂しさが解ったような気がして、黙々とその仕事を手伝った。

裏庭の中央に、木箱の山ができた。

ヨゼフ爺さんは、裏口から家庭用の四角い灯油缶を、両手に下げて来た。黙って木箱の山に、油を撒き始める。

ただの灯油ではなく、白油の匂いが広がった。

白油は燃えても、鬱陶しい黒煙を上げない。

「あの、ちよつと、何を？」

写真屋はあわてて訊ねた。

「……焼くんじゃ」

ヨゼフ爺さんは、ぼそりと答えた。

「そ、そんな、もつたいない。それに、かわいそうじゃないですか」

「……今はもうみんな、生きとらん。今日は、みんなの葬式じゃ」

写真屋は思わず木箱の方に歩み出しかけたが、ヨゼフ爺さんの厳肅な面持ちに打たれ、結局身を引いた。

ヨゼフ爺さんは、マッチを擦った。

木箱の山は、瞬く間に、蜜柑色の陽炎に包まれた。

——身内の骸を、後生大事にミイラにしとつたのは、儂なのかも知れんな。

ヨゼフ爺さんは、そう思っていた。

彼奴——アレクの奴の話聞いたからなどではない。少なくとも儂が世にあやっ

送り出した人形は、泣きながらこの家に帰って来たりはしない。あいつは、まだまだ未熟者だ。ライラは、愛され、愛したからこそ、ああなつてしまったのだ。

しかし、儂もただの未熟者だ。

妻に先立たれた次の年、そのときの全財産の大半を投げ出して、ようやくこの家に招いた『貴婦人』。そんな破天荒なわがままを、笑って許してくれた子供たち。その子供たちも、もうこの世にはいない。最後に残った末娘が、まだ中等にも満たぬ歳の冬、新型肺炎で息を引き取ってしまったから、自暴

自棄であちこち彷徨っていた時、異国で出会い、やがて迎え入れたライラ。でも、結局僕は『貴婦人』に命を吹き込むこともできず、ライラを幸せにしてやることもできなかった。僕は臆病者の彼奴あやつよりも、もっと未熟者なのかもしれない――。

ヨゼフ爺さんは、けして自分を失っていたわけではない。

人形たちを自分の手で昇天させてやるため、不可燃危険物を人形たちから取り除く、そんな準備もきちんと終えている。そしてそれらのパーツは、古い先短い自分の生活を、なんとか支えてくれるはずだ。結局、人形たちが自分を生かしてくれるのだ。

アルプスの峰に向かつて、白煙が流れてゆく。

木箱の間から、ぱちぱちと何かの爆ぜる音が響き始めた。

写真屋の跡継ぎは、一見惨たらしいこの光景を、なぜこれほど清々しく感じるのか、不思議に思っていた。

ヨゼフ爺さんは、流れる白煙を、どこまでも目で追いかけた。

――さようなら、私の子供たち。神様とかいう奴が、本当に空の上にいるならば、存外物好きらしいから、きっとかわいがってくれるじやろう。

峰の向こうに沈み始めた夕陽に、白煙が戯れている。

その時ヨゼフ爺さんは、誰かが自分に呼びかけたような気がした。

「……お前さん、何か言ったか」

「いいえ、僕じゃありません。山の方から何か聞こえましたね。『あわてんじゃねえよ』とか怒鳴ってたな。大方、樵の爺でしょう」

空耳ではなかったのだ。

ヨゼフ爺さんは、身震いした。

あの声は、いったい何者だろう。男でもなく、女でもなく、大人でもなく、子供でもない。

それは確かに、こう言った。

——汝、早計なり。

はつと目を見開いて、炎の山に駆け寄ろうとしたヨゼフ爺さんを、写真屋はあわてて抱き止めた。

「は、早まつちやいけません。ミユラーさん」

「馬鹿、そんなじゃない！」

ヨゼフ爺さんは写真屋の腕を振り払い、炎の山を覗き込みながら、慌ただしくその周囲を駆け回った。

白髪頭が炎に嘗められて、ちりちりと焦げる。

まだ火の回っていない柩が、ひとつだけある。

ヨゼフ爺さんは、躊躇なくそれに跳び付いた。

写真屋が裏庭の隅の水道から、ホースで水を掛ける。

ようやくその柩を引き出した時、炎の山はがらがらと崩れ落ちた。

写真屋はホースを構えたまま、放心している。

「……ありがとうよ」

水浸しのヨゼフ爺さんが眩くと、写真屋はようやく放水の向きを変え、蛇口をひねった。

ヨゼフ爺さんは、柩の蓋を上げた。

やはり、『貴婦人』が眠っていた。

ヨゼフ爺さんは、炎よりも灼い^{あか}アルプスの峰を見上げた。

「——汝、早計なり」

「え、なんですか？」

「いや、お前さんにや、関係ないよ」

まだ何か言いたげな写真屋の跡継ぎを追い返し、燻り続ける裏庭に、とりあえずの始末をつける。

そして、がらんとしてしまった蔵に、貴婦人を座らせる。

——すまんのう。ひとりつきりで寂しかろうが、しばらく、ここで辛抱しと

つておくれ。

ヨゼフ爺さんが、ようやく旅支度を終えた頃、朝の小鳥たちが囀り始めた。

2

「ヨゼフ・ミユラー様が、お見えでございます」

三十路にさしかかった秘書が、いつものように慇懃無礼な声音で、客の来訪を告げる。

そろそろこの秘書もお払い箱だな、とベントレーは思った。

数年前、栗色の巻き毛がなかなか艶然としている、ただそれだけの理由で雇ってみたのだが、未だに自分に靡かない。仕事は普通にこなしているのだが、初老の太った男性は好みではないなどと、どこかで口にしたらしいとも、他の従業員から聞いている。一代で名も成し財も成した、欧州でも指折りの美術商が、太っていてなぜいけない。それは恰幅かつぶくというものだ。

第一、今朝は来客の名前まで取り違えている。ミユラーなら、ハンブルグのヴィンセント・ミユラー氏か、いかさま師のマンフレットのどちらかだろう。このところ、ろくにアルプスの山を降りたこともないはずの老人形師が、海を渡って英国のロンドンなどにまで、わざわざ訪ねて来るはずがない。

「お通ししてくれたまえ」

様々な内心をお首にも出さず、ベントレーは鷹揚おつように頷いた。

組んだ両手を黒光りのする櫛の机に乗せると、誰であろうと私の餌だ、そんな自信が湧いて来る。

「やあ、しばらくじゃの」

スイス訛りの英語で屈託のない挨拶を投げられ、ベントレーは仰天した。

あの老人形師が立っている。

当人は正装のつもりらしいが、その色あせた山着姿は、数年前オークションの下見の客を伴って、あの山小屋のような店で会った時と、まったく変わっていない。

「これはこれは、ミユラー先生」

ベントレーは相好を崩して立ち上がり、小柄な老人を抱え込むようにして、客用のソファーに導いた。

老人の持ち物を、すかさず横目でチェックするのも忘れない。

肩に下げている薄汚れた革の旅行鞆はともかく、右手で引きずっている、キャスター付きの大型の革ケースは気になる。旅行鞆同様薄汚れてはいるが、確かにゼロ・ハリバートンの特注耐衝撃ケースだ。等身大の人形が、屈曲姿勢で収納できる。

これはもしかや引っ掛かってくれたのか、とベントレーは期待した。

机上のベルを鳴らして秘書を呼び、符丁を使って、最上級の紅茶を淹れさせる。

紅茶を啜りながら、役体もない無沙汰の挨拶などを交わした後、老人は切り出した。

「ところで、ベントレーさんや。去年と一昨年おとしの古美術会報が、届いておらんのじゃがのう。オークション・リストは、きちんと届いとるんじゃが」

少なくとも良い線で進んでいるらしい、とベントレーは腹の奥でほくそ笑んだ。

この老人は、三十年ほど以前にベントレー経由で『貴婦人』——通称・眠れる貴婦人を購うために、何体も自作を放出してくれた。その後も放出は続き、特に老人自身が『ライラ』をオーストリアの古都で発見した後は、作品自体の品質が格段に上がった。それはたぶんライラを購入し、また修復するために、かなりの資金が必要だったのだろう。しかしここ数年は、小物しか

手放していない。世界全体が不況でもあり、顧客側の購買意欲も希薄だった。もっともその程度の商売でも、老人の数年の生活費としては、有り余るほどの取引だったろう。しかし噂によるとこの老人は、未だに高価な職人道具を、毎年買い揃え続けていると聞く。そろそろまとまった資金が必要になる頃だ。『眠れる貴婦人』や『ライラ』のような特級の古美術品を、また欲しくなる可能性もある。現在不況は好転し、再び天文学的な価格の取引が、できそうな流れになって来ている。ここで、老人の蔵にある作品の内の何体かでも、オークションに引き出すことができれば――。

そのために、あえてここ二年ほど、ベントレーは老人との接触を不完全なものにしていた。老人が他の美術商と取引がないことは、すでに確認している。孤独と、撒き餌――老人を取引に巻き込むための基本条件だ。食いついて来たら、さらに切り札を提示すれば良い。

「それはそれは、失礼いたしました。手配はきちんとしてある筈なのですが、配送の方に手違いがあったのかもしれないな。なんともはや、お詫びのしようもございません」

「まあ、そんなに大したことじゃ、ないんじゃないが」

「いえいえ、お恥ずかしい限りです。大事なお客様であり、人形の大家でもあらせられるミユラーさんに、そんな失礼を働いていたとは。至急手配させていただきます」

ベントレーは、頭を机に擦りつけるように、大袈裟に詫びて見せた。

「古美術会報が届いていなかったとすれば――あの件も、ご存じないのでしような」

「あの件とは？」

「ご説明するより、現物を見ていただいた方が早いでしょう」

ベントレーはまた秘書を呼び、資料の整理番号を告げた。

しばらくして運ばれて来たのは、アクリル製の書籍保管ケースだった。

「ほう、アンティーク・ロボットの目録か。古そうじゃの」

「マルセーユの古書店から掘り出された物なんです。南洋航路の船員が持ち込んだ、とまでは判明しております。残念ながら、これが果たして本当にその当時の出版物であるのか、それは証明されておられません。何分五世紀も以前の話ですから、出版記録も穴だらけです。ただ私としましては、当時の好事家の私家版、という可能性が高いと見ました。収録内容の性質上、充分ありうる話です。いずれにしても、現存するアンティーク・ロボットが写真入りで網羅されているのは事実です、その他の現在では伝説化してしまっている作品も、その詳細が写真入りで記されておるようです」

「見せてもらっても、ええかの」

「それはもう、先生に見ていただけのならば」

ベントレーはケースの電子ロックを解除し、中身をうやうやしく差し出した。

老人はまず本の外観を矯めつ眇めつしてから、食い入るように内容を確かめ始めた。

その視線だけで、風化しかかった古書が崩れてしまうのではないか、そう思われるほどの凝視だった。

「……ラトビア語のようじゃな」

「さすがですな。奥付も、当時のラトビアの首都リガのようです。しかしあのあたりは、ロシアに併合されて、もう何世紀にもなりますからね。翻訳自体が非常に困難、という難点もあります」

「こいつを、しばらく拝借できんかな？」

よし食いついた、とベントレーは思った。

「お貸ししたいのは山々なんです……その本自体が、資料価値以上に、大変商品価値のある品物です」

「……貸してくれたら、次のオークションでは、考えんこともないぞ」

ベントレーは、しばらく熟慮するようなそぶりを見せた。

そして、さぞ思い切ったように答えた。

「よろしいでしょう。他ならぬミユラー先生のためです。お貸しいたしましょう。先生のご勉強のご参考になれば、その書物も本望でしょうから」

それから二人は、積年の友人であるかのように、大仰な別れの抱擁を交わした。

ベントレーはすかさず、老人のキャスター付きの革ケースに手を差し伸べた。

「玄関まで、お送りしましょう」

思ったより重みがない。治具などは備わっているようだが、メイン・スペースはまだ空のようだ。

多少の落胆はあったが、それは話の流れで予感していた。

「残念ながら、そこにはまだ出物は入っとらんよ」

老人は見透かしたように笑った。

「山で引き籠つとると呆ける一方じゃし、何十年ぶりかで、田舎の蔵巡りでもしようと思つての」

「ほう、それは結構ですなあ！」

ベントレーはその日初めての本音を吐いた。

この老人は世間の老人なみに与し易いが、人形に対する技術と眼力は、超一流だ。『フライラ』のような掘り出し物を、また見つけ出す可能性は高い。

そしてそれを購う財力が、現在枯渇していれば——いずれにしても、自分の利益に繋がる。それも、結構な利益に。

「お見送りは、結構。今日は本当にありがとうよ」

「旅先の水には、充分お気をつけて」

「階下のアトリエの、玄関口までの見送りは、もう不要だろう。」

そう判断したベントレーは、事務所の入り口まで付き合つて、老人と別れ

た。

後ろ姿を見送りながら、思わず破顔する。

あの本に、それほど骨董価値はない。それを当時の本物と判断できる規範が、すでに存在しないのだ。となれば、せいぜい好事家の散財を促すために、サービスとして利用できる程度だろう。そんなものと引き換えに、あの老人の作品——時にはアンティーク・ロボットに近い値を呼ぶことさえある、完璧な人形を商うことができれば。

事務机で端末のキーを打っている無愛想な栗毛を、ベントレーは見返った。

——来年は、天然の金髪娘にしよう。給料は倍になるかも知れないが。いや、場合によっては、どこか零落貴族の館でも買い取って、あのパインウッドの新人女優を、住まわせてやってもいい。

ベントレーの期待は、しだいに膨らんだ。

老人の作品がすでに灰とパーツになっていることなど、神ならぬ身のベントレーには知る由もなかった。

3

——やれやれ、あいつも、あいかわらず女の尻ばかり追いかけてもらいな。ちつとも目が利かん。もつとも、この本を必要とする物好きは、もう儂とアレクの奴くらいしか、おらんかも知れんがな。

ヨゼフ爺さんは戦利品を抱えて、意気揚々とアトリエを引き上げた。

——おとついで山から聞こえてきた、な何やらよう解らん空の上の講釈垂れの言葉は、このことだったのだろうか。そういえば、そいつは昔、こんなことも言うとしたそうじゃな。豚に真珠。

無節操な車の流れと排気ガスの匂いに辟易して、ヨゼフ爺さんは、早々に

ハイド・パークに逃げ込んだ。

昔、あの傷心の放浪の初春、ヨゼフ爺さんはこの土を踏んだことがある。ベントレーのオフィスに行く途中で渡ったテムズ川は、あの時よりは少し浅かったが、やっぱり溝とびの匂いがした。

しかしこの公園は、相変わらず別世界だ。木々と芝生と、池と湖。ヨゼフ爺さんの故郷と違い、なのでこぼこもなくあまりに整然としてはいるが、奥に入れば、きちんと森の匂いがする。

サーペンタイン湖の辺ほとりの東屋で、遅い朝飯を食う。

辻売から買った、フィッシュ・アンド・チップスだ。

まだ昼休み時でもないのに、湖には幾艘ものボートが浮かび、水鳥たちと遊んでいた。

——この国の奴ら、相変わらず働いとらんなあ。

故郷では、平日の真つ昼間から遊んでいる大人など、一人もない。

ヨゼフ爺さんはさっさと朝飯を済ませ、油の付いた指を湖で洗い、戦利品の検分に入った。

ラトビア語なら、今でも大意の見当くらいは掴める。一般の人々にとってはもう失われた言葉だろうが、数世紀前、大戦前のラトビアは精密工業製品の産地として、世界有数の技術を誇っていた。ロシアに併合された時、アンティーク・ロボットを連れてドイツに亡命したグループなどもあったと伝えられている。人形師として一本立ちするには、ある程度のラトビア語の資料を、理解する必要があった。

ライラや貴婦人の肖像写真は、さつきベントレーの事務所で確認している。最後の作品だけに、末尾に近いページだ。どちらも味気ない資料写真ではない。

たとえばライラの項には、暖炉の前の揺り椅子で『鏡の国のアリス』を読んでいる、そんな姿が写っている。印刷の顔料は色褪せてしまっているが、

それだけゆかしく、暖かい情景だ。

貴婦人は、秦皮とねびしの木の淡緑色の細花の下で、微笑を浮かべて佇んでいる。背景は田舎の牧師館のようだ。貴婦人の名は、マリア。聖母の名を持っているた。

——なるほど、これは資料としての目録じゃなく、愛好者のための娯楽書籍らしい。それぞれ数頁に及ぶ著述も、技術用語は散見できる程度だ。ライラの項がやけに長く写真も多いのは、当時からそれだけ注目を集めていたのだろう。しかし、技術資料が含まれていないとすれば——あの声が言ったのは、このことじゃないのか。

ヨゼフ爺さんは、考え込んでしまった。

たとえ技術資料があつたにしても、ライラを救うことができとは思えない。たとえ神経中枢の完全な回路図が手に入ったとしても、それを再現するには、おそらく独自の職人仕事以前に、当時の製造プラントをそのまま再現してベースを造らねばならない。だからこそ、あの声の言った『早計』とは、貴婦人——マリアを天に送るのを、空の上の講釈垂れが諫めたのだと、ヨゼフ爺さんは解釈していた。貴婦人の水素バッテリーに内封された秘匿回路が解析できれば、あくまでも電源回路の範疇のこと、自分の手で再現できるかも知れない。たとえそれが、蔵いっばいの巨大な電源になろうと。

ベントレーを訪ねたのは、そこが唯一、貴婦人との繋がりのある場所だったからだ。あくまでも行脚の起点であつて、具体的に何かを期待していたわけでもないのだが——。

ヨゼフ爺さんは東屋の椅子から腰を上げて、天を仰いだ。

——おい、あんた。言いたいことがあるんなら、もうちつと言い方っちゅうもんがあるうに。

しかし空には、故郷の雲に比べるとずいぶん覇気のない薄雲が、茫洋と漂うばかりだった。

——ま、もともと、あんたにや期待しとらんがな。

生きている限り、できることを探せ——その程度の無責任な助言だったのかも知れない。そんなことなら、余計なお世話だ。

ヨゼフ爺さんは気をとりなおし、今度はその書籍自体の出自を見定め始めた。

旅支度は、もう整っている。行こうと思えば、どこにでもいける。銀行預金が続く限りだが。

奥付はベントレーの言ったように、当時のラトビアの首都、リガになっていた。日付は旧西暦一九三五年の十一月四日。ただ、今そこに行くとなると少々疑問なのだ。ロシアの経済拡大による再開発で、旧バルト三国は都市構成や地形自体が、五世紀前とは変わってしまったているはずだ。そんなところで、当時の貴婦人に関する何かが発見できるのか。

——とりあえず、行ってみるしかないか。

そう決心して本を閉じかけた時、ふと、本の小口に目が止まった。

小口自体が茶色く風化しかかっているのに、今まで見落としていたのだが、蔵書印らしい滲みが見える。

ヨゼフ爺さんは東屋を出て、その蔵書印を日に曝した。

——これは……大昔、見たことがあるぞ。

しかしさすがに七十を過ぎると、ふだん使っていない知識や記憶は、それが頭の奥にあるはずだと判っても、どのあたりの引き出しに入れてあったものやら、容易には思い出せない。

しばらく自分の頭を揺すったり叩いたりした後、ヨゼフ爺さんは荷物をまとめ、足早に歩き始めた。

ハイド・パークを抜けて、タクシーを拾う。

今朝ヒースロー空港から市街に向かう途中でも、赤いバスの二階から何度も懐かしく見下ろした、丸まっこの黒のオースチンだ。そのデザインは、二

十年前からほとんど変わっていないように見えた。

——しかし、またあん時みたいに、行き先を言ったとたん断られるんじゃないかな。なかるうな。

「この街で、一番大きな図書館に行つとくれ」

ドアを開けてそう告げると、中年の運転手はぶつきらぼうに答えた。

「大英図書館でいいのかね」

「ああ、そこでええ」

そう言いながら、実際そこがどんな図書館であるのか、皆目見当もつかない。その昔大英博物館を訪ねて、ギリシャの神殿のような威容に圧倒された時、何やら図書館がくつついていてと聞いた気もするのだが、記憶が定かではない。

タクシーはセント・パンクラス駅の方に向かっていた。しかしそんなことさえ、ヨゼフ爺さんには判らない。それでも運転手の気配から、無愛想ではあるが、確かな仕事人の匂いを感じ取っていた。旅馴れない老人を相手に、貪^ほつたりはしないはずだ。

十分ほど走つて、タクシーは大英図書館に着いた。

——チップは、こんなもんでええかな。

見当で色を付けて料金を支払うと、運転手はチップの半分を、ヨゼフ爺さんの手に返してよこした。

「そんなに仕事はしちやいないよ」

またぶつきらぼうにそう言つて、自分も車を降り、大型ケースで苦戦しているヨゼフ爺さんに手を貸してくれる。

——この国でも、働いとる奴は働いとるな。

ヨゼフ爺さんは、いい気持ちでタクシーを見送った。

——さて、問題はこれからじゃ。

大英図書館の外観は、予想とずいぶん違っていた。

大きさは大英博物館に劣らないが、妙にモダンな建物だ。

煉瓦色の、小山のような巨大な段々——ヨゼフ爺さんは、気後れした。

これいっぱい書物が詰まっているとしたら、自分ひとりで調べていたのでは、二日や三日そこらでは、とても終わりそうにない。

ヨゼフ爺さんは入り口を探して、石畳の広々とした前庭を、しばらくうろつき回った。

これは手っ取り早く、誰かに訊ねる方が得策だ。

昼飯に出てきたのか、職員らしい二人の若い娘が通りかかったので、ヨゼフ爺さんはすかさず声を掛けた。

「すまんが、お嬢ちゃんたち。ここの本を見せてもらうには、どこに頼んだらええかいのう」

お嬢ちゃんと呼んだのはあくまでもヨゼフ爺さんの主観であって、ひとり『司書』の名札を付けた三十代後半くらいの女性だし、『司書見習』の方も二十代半ばだろう。

二人は愉快そうに笑いながら、顔を見合わせた。

しかし、きついスイス訛りの老人の、いかにも旅先らしい姿を見定めると、二人とも顔を曇らせた。

「申し訳ありませんが、当館の蔵書は、一定の資格を満たさないと閲覧できないんですよ。館内の見学だけなら、どなたでもさしつかえないんですが」
司書の女性が、心苦しそうに説明する。

「そりゃあ困ったのう。どこかに、こういった古本の件が判りそうな所を、ご存じないかの」

ヨゼフ爺さんは先程の戦利品を、司書の女性に差し出した。

「失礼ですが、旅の方ですよね」

職業婦人の視線になって、古書を見定めながら訊ねてくる。

「はいな。今朝、着いたばかりじゃが」

「そうしますと、公営の図書館では、どこも難しいかと……。チャーリング・クロス街の、古書店をご紹介しますでしょうか」

当惑するヨゼフ爺さんの横で、先輩の品定めを見守っていた見習が、あら、と声を上げた。

「アンティーク・ロボットの写真集ですよね」

先輩の女性も、そうね、と頷く。

「当時の物かどうかは判らないけど、これは——とても興味深い物よ」

やっぱり餅屋は餅屋だ、とヨゼフ爺さんは思った。お嬢ちゃん方は二人とも、きっちり仕事人の目になつとる。

もつとも見習娘の方は、本だけでなく自分の顔にも、何やら妙な視線を送ってくる。

「失礼ですが……ヨゼフ・ミユラーさん？」

ヨゼフ爺さんは首をかしげた。英国には、若い娘の知り合いなどいない。

「そうじゃが、どつかでお合いましたかの」

見習娘は、突然、素つ頓狂な嬌声を上げた。

ヨゼフ爺さんの手を両手で握って、ぶんぶんと上下に振り始める。

「すごいすごおい。私、子供の頃からファンなんですよう。先生のお人形の本、みんな持ってますう。サインして下さいさあい。どちらにお泊まりですかあ。

家の本持つて、伺つてもいいですかあ」

人気歌手に遭遇した、馬鹿な小娘の口調だ。

ヨゼフ爺さんは、その現状にすぐには適応できなかつた。

確かに昔、ベントレーの奴が何やら甘つたるい写真叢書を出版した時、人形製作者近影、などというものを撮られた記憶がある。つまらない子供だましの童話などが大半だったので、すぐに里の土産物屋に売り払ってしまったが。

あきれてその場を眺めていた司書は、ようやく事態を把握したらしく、改

まっつて訊ねてきた。

「失礼ですが、パスポートをお持ちですか。できれば、お国の市民証も」
ヨゼフ爺さんは、見習娘の手をなんとか振り払い、旅行鞆を探った。

「はいな」

司書は受け取った二つの公式カードを、じっくりと確認した。

「失礼いたしました。お収め下さい」

「はいな」

満面の微笑が、ヨゼフ爺さんに注がれた。

「芸術家の方の研究活動であれば、なんの支障もございません。歓迎いたしますわ、ミュラー先生」

4

大英図書館の第十六司書・ハント女史は、本来母国の郷土史にまつわる古文書の研究・分類・整理が、主な仕事である。

著名な老人形師を案内するのは、当然美術担当の内の誰かが望ましいのだろうが、とりあえず彼女は自分のオフィスの応接スペースに、ミュラー氏を案内した。

実際の閲覧許可を得るには、正式な書類の提出等、さらに様々な手続きを経ねばならない。

しかしその前に、とにかくこの異国の偉大な芸術家を、自分自身でもてなしたかった。

さきほど研修生のミス・ジョーンズが繰り広げた痴態を、その後ハント女史は上司としてやりわり審めたが、実は内心、妬ましくも思っていた。さすがに現在の彼女の立場としては、憧れの芸術家の両手を取ってぶんぶん振り

回す、そんな歓迎法は許されない。たとえそれが自分の願望そのものだったとしても。

新館のオフィスは、最近の民間企業同様、オフィス・オートメーションで統合された味気ない環境だ。

——ああ、この方を、旧館にお連れしたい。私が学生時代に何度も通って憧憬していた、あの大英博物館時代の、イオニア様式の閲覧室に。この枯淡の境地に達したお方が、あの壮大なドーム天井の円形閲覧室を歩む。外壁に巡らされた、三層の典雅な書架の間を、もの静かに歩んでゆく。それはきつと神々しさに震えてしまうような、至福の情景に違いない。

しかし現在の彼女の仕事は、ほとんどDELINUX端末への入力作業だ。「さきほどミス・ジョーンズが申ししておりましたお作は、私も拝見させて頂きました」

内心のときめきを隠して、ハント女史は言った。

老芸術家は、もの静かに頬笑んだ。

「ああ、あれは、儂のもんじゃないよ。儂は人形を作っただけでな。あんなちやちなもん、ほんとは出して欲しくなかったんじゃが」

——ほうらご覧なさい、ミス・ジョーンズ。このお方は、あのような米国の人工甘味料まみれのロリ・ポップのような、愚劣な書物を編んだりはしませんよ。

さすがに、ふふふふ、勝ったね、とまでは考えなかったが、それに近い感情だ。さきほど先手を取られてしまった悔しさが、幾分治まる。

ミス・ジョーンズが、紅茶を運んで来た。

「あなた、お昼の方はいいの？」

「お昼なんて食べてる場合じゃないですよ。ハントさんは、よろしいんですか？」

ちっ、なんて気の利かない小娘、などと思っではいけない。

「ミユラー先生、ジャムはお入れになりますか？」

かいがいしい新妻のように訊ねると、

「いや、儂^きや、生のままがええのう」

さすがだわ、とハント女史は嘆息した。何がさすがなのか、そのあたりは感性の領域だ。

「先生は、お食事はよろしいんですか」

「ああ、儂^きや、もう食った」

何げないスイス訛りの言葉が、いかにも奥ゆかしい。

「それより、この本のことなんじゃが——」

訊いて訊いて。本のことなら、なんでも訊いて。本のことなら、死んでもミス・ジョーンズの若さになど負けはしないわ。

「あんたとここで、この蔵書印に心当たりはないかの」

いささか拍子抜けのする質問だった。

過去に一度でも公になった蔵書印は、全てデータ・ベースに記録されている。つまり、記録があれば瞬時にかつての持ち主が判明するし、なければないで、心当たりがないという事実だけは、やはり瞬時に判明する。

できれば午後の一とときを、この老芸術家と共に、書架の間で過ごしてみたかった。しかし、ミス・ジョーンズでも知っている単純な作業を、あえて引き伸ばすわけにはいかない。

「今、お調べいたしますわ。どうぞ、こちらへ」

ハント女史は、仕事机の情報端末に、老芸術家を導いた。

書籍の小口の蔵書印は、辛うじて識別できる状態だ。

この程度のコントラストがあれば、スキャナーの自動補正の許容範囲だろう。

ライト・ボックス型の3Dスキャナーに小口をかざして、ハント女史はデータ・ベースの蔵書印検索にアクセスした。

事務用のそつけない3Dフルカラー・モニターに、鮮明な形で蔵書印が浮かび上がった。

天に吼える獅子の紋様を、古風な書体のギリシャ文字が取り巻いている。続いて既知情報が表示された。

「旧西暦一九六五年に、米国のマイケル・ソーン氏が寄贈して下さった蔵書と、ほぼ一致しますね。主に当時の石油経済に関する資料ですが、ソーン氏の自著なども含まれております」

「ちょ、ちよつと待つとくれ。マイケル・ソーンと言やあ……」

「はい。その時代経済界に君臨していたと言われる、石油王ですな」

老芸術家は、ぽん、と手を打った。

「なるほど！ 読めた！」

ハント女史は突然生気の漲った老芸術家を、惚れ惚れと見つめた。

——この方はこんなにお齡を召しても、まだご自分の芸術を、情熱的に追っついていらつしやる。

「お役に立てまして？」

「す、すまんが、そのソーンという御仁、昔話じゃ引退して南の島に行つたつきりということになつとるが、その島の名前は判らんかの」

「……寄贈者のプライバシーにつきましては、誠に残念ながら、お教えできないんですが」

ためらうハント女史の手を、老芸術家の両手が、がしりと掴んだ。

「そこをなんとか。儂の最後の仕事なんじゃ。この老いぼれが、楽な気持ちで死んで行けるかどうか、そんな仕事なんじゃよ」

老芸術家のまだ若い情熱が、掌を通して伝わって来る。

ハント女史は、今更ながら、自分の性癖をはつきりと自覚していた。

——ああ、私って、懐古主義で老人趣味。

「……もう五世紀も前の方ですものね。よろしいですわ」

声が半ば陶然としている。

「……ミス・ジョーンズ、検索してさしあげて」
手を放すのが惜しかったので、研修生に命じる。

——こんな時には役に立つのよね、この子。

「はいな」

ミス・ジョーンズの返事には、老芸術家の訛りが伝染^{うつ}っていた。

——ノリのいい子は好きよ。

ハント女史には、すでに勝者の余裕があった。

「えーと、オベリスク島です」

「それって、どのあたりじゃろう」

「えーと、ちよつと待って下さいね。えーと、こっちのソフトにリンクして……はい、出ました。ツンガル諸島の、ちよつと東の方ですね。赤道と日付変更線が、ちよつと交わるあたりです」

◇

◇

ヨゼフ爺さんは、荷物を引きずって駆けに駆けた。

あの二人のお嬢ちゃんには——ジョーンズさんにはサイン入りの人形を、ハントさんには大英博物館をいつか案内されるのを約束しちまったが、それはとにかくこの仕事を終えてからじゃ。

図書館の前庭を駆け抜け、通りで黒いオースチンに手を上げる。

「ヒースロー空港まで、ぶっ飛ばしておくれ！」

ヨゼフ爺さんは、気が急ぐままに叫んだ。空港からの便など、まだ確かめでもないのだが。

公園で蔵書印が頭に引っ掛かったのは、昔読んだアンティーク・ロボットにまつわる伝説集に、それと似た挿絵があったからだ。人形と結ばれた男の、

一族の紋章だ。

その蔵書印の押された本を、南洋航路の船員が、マルセーユの古書店に持ち込んだ——ベントレーは確かにそう言った。

そしてマイケル・ソーンは、アンティーク・ロボットと結ばれるために、南の島に消えた。実際にそうであったのかは、正式な記録がない。生前の彼のかなり奇矯な言動から、引退後の生活まで伝説化したと思われる。

しかしそれが事実だったのなら、現実的に考えれば背徳的な行為であり、スキヤンダルだったはずだ。狂人扱いすら、されてもおかしくない。それを嫌った彼の関係者が、経済力をもって事実を隠蔽する。あるいは彼自身が、人ならぬ妻との生活を邪魔されないために、事実を隠蔽する。曖昧となった噂が、やがて伝説化する。いずれにしてもオベリスク島に渡ったことだけは、大英図書館のお墨付きなんだから、間違いない。

——行こうと思えば、どこにでも行ける。銀行預金が続く限りはな。

ヨゼフ爺さんは疾走するタクシーのシートで、しゃっきりと腰を伸ばした。

【第六章】

1

まあ、僕の顔の日々の変貌については、学校でもずいぶん前から話題の種だった。

校長先生なんかは、ひとりひとりの生徒の家庭事情なんて知らないから、本気で家庭内暴力まで心配してくれたみたいだ。

でも担任のマイヤー女史は、何度も家庭訪問に来て、僕の父さんの脳天気な実態を把握している。

職員会議の席で、彼女はこう断言したそうだ。

「マリオ君のお父様は、それは確かに毎晩酒場で酔ってはおりますが——」
あくまでも、そう言ったらしいという噂だけだ。

「——悪酔いして人に殴られることはあっても、けして人を殴るような方ではございません」

マイヤー女史は、地味で厳格で中年で未婚だが、とても観察力があり、しかも公平だ。

それでも今朝の僕の顔は、彼女のあんまり大きくない胸を、かなり痛めてしまったらしい。

昼休みに職員室に呼び出され、心配顔で事の次第を訊ねられたので、僕はきっぱり答えた。

「これは、神様からの天罰なんです」

こう堂々と宣言してしまえば、敬虔なカソリック信者であるマイヤー女史は、もう不承不承うなずくしかない。それ以上の事情聴取は、教会の懺悔室に座っている神父の仕事だからだ。

僕はもう、昨夜、神様とは絶交している。だから神様を言い訳に使うくらい、なんでもない。

日中、興味深々で寄って来るクラスの仲間たちには、こう言っておく。

「いやあ、商学校の連中と、なかなか決着つかなくてさあ」

どう見てもそう見えるんだから、かえって箔が付いたりする。

聖子は朝からやっぱり口をきいてくれないが、以前のほつぺたの時とは違って、心配そうに愁眉を見せてくれたりする。東洋の『氣』も、今日はなんだか柔らかい。

おかしいのはハンスの奴で、顔を合わせると、明らかに腰が引けている。クラスの仲間たちの手前、態度には出さないようにしているが、顔色で判る。これなら次の決闘は僕の勝ちだ。でも、それは当座の計画が終わってからだ。

僕は学校が退けると、駆け足で家に戻った。

珍しく、ブルの出迎えはない。

朝、父さんがお弁当を忘れて行ってしまったので、会社まで届けるとか言っていたから、その帰りに買い物でもしてるんだろう。

僕はかねて準備の双眼鏡を首に下げ、庭の納戸から自転車を引き出し、町外れの河畔に向かった。

今日は河向こうまで行かなければならないので、駆け足ではちよつときつい。

あの決闘の草原を、苦い思いで走り抜け、あの日ブルやライラが立っていた土手を、自転車を引いて登る。

その向こうは、もうライン河だ。

僕の町はラインラント・プファルツ州の南寄りにあり、河幅はせいぜい三〇〇メートルくらいしかない。

それでも、夕暮れにはまだちよつと間のある五月の日差しの下で、ライン河は清く豊かに、ゆつたりと流れている。

僕は鉄道の鉄橋にくつついた橋を渡り、対岸の土手に立った。

ローゼンレックの廃棄物処理場は、その眼下に広がっている。

廃棄物処理場なんて言うと、なんだかごみごみして薄汚れた語感だが、実際は白亜のハイテク施設が五棟、木々の緑の中に点在している。

——ご家庭内の生ゴミから、前世紀の核廃棄物まで、匂う物は素から消さなきゃだめ。世界を白で染め上げる、ローゼンレック、ローゼンレック、ローゼンレックにお電話を。

そんなふうに関中で宣伝している大企業だ。

僕は土手の草むらに座って、双眼鏡を覗いた。

あたりには野鳥観察の人達が、けっこう同じような姿でいるので、怪しまれる心配はない。

五棟の配置図とそれぞれの処理分担は、すでに頭に入っている。

昨夜家に帰ってすぐ、父さんの書斎からパンフレットを探し出し、熟読暗記したのだ。

今日の目的は、その実地照合——敵状視察だ。

パンフレットから想像した通り、ここの警備態勢は、案外甘そうだ。

何世紀も前は、核廃棄物を狙うテロリストが侵入したりするので、軍事基地なみに警備されていたみたいだが、今時そんな物は宣伝文句に残っているだけだし、もしどこかに残存していたとしても、そんな原始的で非効率的な武器を使用する馬鹿はいない。

それでも、中には換金可能な貴処理物——考えるとまた憂鬱になってしまうので、あんまり考えたくはないのだが——ライラのような存在があるので、

一応の警備態勢はとつてある。

こればかりは、パンフレットには詳しく載っていない。

でも、中央図書館のP-R-O-Mを片っ端から当たれば、なんらかの手掛かりは得られるはずだ。州の認可を受けた構造物の建設記録は、全て収まってるはずだからだ。

今日のところは、とりあえず外観上の情報を、じっくり頭に叩きこめばいい。

僕は日暮れまで、双眼鏡を覗き続けた。

夕焼けが、あたりを茜色に変えてゆく。

背中の向こうのライン河も、今頃はたぶん一面に茜色の漣を浮かべて、きらきら流れているんだろう。

でも、それはまたの日のお楽しみだ。

やがてローゼンレックの森は、緑色の夜間照明だけになってしまった。

お尻をはたいて自転車にまたがると、ライン河の河面は、もう漆黒の鏡になつていた。

2

家に帰ると、父さんはいつものようにまだ帰ってなくて、僕はひとりでブルの手料理を食べた。

フォレレ・ミユレリン
鱒のムニエルだが、なんだか味がおかしい。

塩加減が、いつものブルの仕事よりずいぶん濃い。いや、これはずいぶんなんてもんじゃない。ソースの中に、塩の塊も入ってるみたいだ。

「……しよっぱい」

〔あう〕

ブルは近頃口癖になっている台詞を浮かべながら、あわてて水を持って来た。

グラスの水を一気飲みして一息ついた僕に、ブルがおずおずと話しかけてきた。

「ねえ、マリオ」

「うん？」

「僕、なんだか、おかしいよ」

そう言って、頭の横のスロットから、ぺらりと一枚のP-RAMを吐き出す。

ぺらぺらの銀青色の四角いP-RAMは、なんだか妙に生暖かった。

「何、これ」

「お父さんがお弁当忘れてったから、届けるって、朝、僕、言ったよね」

「ああ」

「嘘なんだ。僕がカバンから抜いて、隠した」

何のためにという疑問が先に立ったが、考えてみれば、これはそれ以上に異常事態かもしれない。

そもそも、ブルが人間に対して嘘をつくという行為そのものが、普通、ありえないはずなんだ。

「それで、お昼に会社のお父さんに届けて……こっそり、廊下の端末から、これ、コピーしちゃった」

「お前、そんな接続できたっけ」

「それくらいできるよ。ここらへんは、まだみんな古いハイパー・スカジー接続だもの」

「でも、パスワードは？」

「お父さんのパスワードは、いつでもどこでもおんなじだ。マリオのお母さんの、旧姓名の逆綴り」

「……中身は？」

「ローゼンレックの、メンテナンズ用の設備仕様書」

ひゅう、と僕は思わず口笛を吹いた。

やったね。

やっぱりブルは、僕の相棒だ。

こいつも、僕と同じことを考えてるんだ。

僕はブルを抱き締めて、ばんばん背中を叩いてやった。

でもすぐに、なんだかおかしいのに気がついた。

まあ話の始めからおかしかったのだが、そうではなくて、今夜のブルはやけに暖かい。熱いと言ってもいいくらいだ。いくら元がだるまストーブでも、これはおかしい。

「……知恵熱かな？」

「こっち、もっと熱いよ。お塩の分量、よく判ないくらい」

ブルは自分の頭を指さしてみせた。

よく見るとPスロットの透き間から、うつすらと煙が漂っている。

なんでこんな当たり前のことに、気づかなかったんだ。

馬鹿の上塗りだ、と僕は思った。

「ブル、もういい。何も考えるな。じっとしてろ」

「う、うん」

僕はとりあえずタオルを濡らして、ブルの頭に乗せ、うんしょと抱えて二階に駆け上がった。

もし僕の危惧が正しければ、ブルはこのままだと自分で回路を焼いてしまう。

市販のキットだったら、電源のセーフ・ダウン・スイッチも、リセットボタンも付いている。ひと押ししといて、あとでゆっくり対策を練ればいい。でも、ブルは貧乏人（ひいお祖父さんのことだ）の自作なので、バッテリー

ーが直でボードに繋がってたりする。

このまま三日も通電しっぱなしにすれば、いずれそこまでの記憶をバックアップして停止するのだろうが、その前に回路が焼けてしまったら、もう取り返しがつかない。

と行っていきなり電源ケーブルを切ったりしたら、十中八九、メインRAMのデータがクラッシュする。

僕はまたひいお祖父さんの日記を持ち出し、今度は頭のボールを外し始めた。

たったそれだけのことにも、手探りで小一時間かかってしまった。

きな臭い煙が漂い、ブルの頭部構造が、やっとむき出しになった。

人間の脳味噌ほどではないが、うねうねとケーブルやらがうねっている回路の塊というのは、やっぱりなんだか気味が悪い。

「……グロだな」

「ごめんよ」

「あ、すまん。いいから、なるべく何も考えるな」

〔無理みたいだ〕

「そりゃそうか」

物置から持ち出した工具箱には、眼鏡型マイクロ・スコープも、ちゃんと入っている。

僕は僕なりの耳学問と文系頭を駆使して、思考回路を探った。

ありがたいことに、ブルの古臭いボードは、階層構造にはなっていないかった。

「……やっぱりなあ」

古臭い思考回路の横で、倫理回路が黒化しかかって、煙を上げてている。

倫理回路というのは、いわゆる、あれだ。旧態依然のロボット三原則。あの修身の教本みたいな奴が、いまだにロボットの思考を制御しているんだ。

相反する行動指令がその中で拮抗すれば、普通、自動的にセーフ・ダウンするはずだ。

しかし、ブルにはそれができないとなれば——いずれ焼き切れる。

〔なおる？〕

ブルが心細そうに訊ねた。

僕はすぐには答えられなかった。

僕は部屋の隅の洗面所で、じゃあじゃあと頭を冷やした。

回路自体を外すのは、もしかしたら僕にもできるかもしれない。でも、それではブルはどこにでもあるような、ただの機械仕掛けの実用ロボットになつてしまう。

それじゃ、意味がないんだ。

ブルは僕と同じ目的のために——いや、僕が恋してるのは聖子なんだが、ブルはライラに恋してるんだから、僕より何倍も強い気持ちで、今、文字どおり感情を焼き焦がしている。

パーツ交換？——駄目だ。またすぐに焼けてしまう。第一、こんな古臭いパーツがどこにある。

倫理機能だけを切り離す？——無理だ。違法だし、たとえそれに目をつぶったとしても、僕にはとてもそんなスキルはない。

『ドッケンマッハー人形造り』——あそこにしかない。ライラは無理でも、たぶんこいつなら。

「ブル、もうちょっとだけ、がんばってくれ」

〔う、うん〕

僕はボールや接合部品を大きめのスポーツ・バッグに放りこんだ。

そしてそれを肩に下げ、ちよつとグロなままのブルを抱えて、部屋から飛び出した。

耳を閉ざそうとしても、街の噂というものは、いつのまにか耳に入ってきてしまうものだ。

たとえば早朝、ショー・ウィンドーの人形たちの埃を払ってやっている時。あるいは午後、買い物ついでに井戸端会議を交わしている婦人たちのさざめきが、店の小さな窓から漏れて来る時。

老人は、いつもの時間に床についてからも、なかなか寝付けなかった。

——来週があのお嬢ちゃんの葬式か。

その方がいいと、老人は信じていた。そうしてやるのが、あの娘のためだ。

しかし、あの晩から胸の奥にわだかまって、雨の夜に迷い込んで来た猫のように、一向に去ろうとしないこのもやもやは、なんとしたものだろう。

——だいたい、あの神父の面つらがいかん。神父なら神父らしく、最後までもつともらしく、悟ったような顔をしてりやいいもんを。

何度も寝返りを打った末に、老人は、ようやく眠りに落ちた。

しかし眠りの救いは、じきに断られた。

恐ろしい勢いで、どこかの馬鹿が店の扉を叩いている。

——なんてこった。厄年でもなかるうに。また飲んだくれが、罪滅ぼしの土産でも探しに来たか。

老人はのろのろと立ち上がり、土間を抜けて、店の明りを点けた。

「開いとるよ」

無愛想に、ひとこと怒鳴る。

この店の人形は、易々と盗めるような甘い人形ではない。

扉がおずおずと開いて、見知らぬ太った少年が、何かを抱えて入って来た。

「すみません。急いで診てほしいロボットがあつて」

——こいつはまた、えらい面をしておるなあ。まあ餓鬼の面なんてもんは、こんくらい元気にひん曲がつとった方が、いいのかも知れんな。抱えとるのは、てつきりだるまストーブかと思っただが、そう言や、おかしな頭とちっこの腕が生えとるのう。

「……診てやらんこともないが、その前に、ちよつとそのストーブとバッグ、横に置いとけ」

少年は怪訝な顔をしながらも、おとなしく老人の言に従った。

——素直そうな坊主じゃの。じゃあ今夜は、ちつと軽目にやつといてやるか。

老人はいつもの翁笑いを顔に浮かべ、ぱちん、と指を鳴らした。

両側の棚の人形たちが、一斉に立ち上がった。

全ての人形は、悪鬼の表情に変わっていた。

そのまま雪崩のような音をたてて、少年に殺到する。

少年は瞬く間に、蠢く人形の山に埋まってしまった。

だるまストーブの方は、何か巢を荒らされる親鳥のように、慌ただしい鳴き声を立てている。しかし足元のキャタピラは、ぎくしゃくと震えるだけだ。

——なるほど、ほとんど壊れかかっとなるの。さて坊主、どうする。

少年はじたばたともがいていたが、やがて反撃を開始した。

人形の塊ごと転げ回りながら、必死に振り払おうとしている。

塊のあちこちから、次々と人形が弾き飛ばされる。

飛ばされた人形たちの中には、棚に当たって壊れる物もあつたが、老人は全く動じなかった。

——ほほう。そうそう、手加減しとると、息が詰まって死んじまうよ。それから、千切っては投げ、千切っては投げ……。

やがて人形たちの山が崩れて、激高に正気を失いかけた、少年の顔が現れた。

まだじゃぞ、と老人はほくそ笑んだ。

一体の少女人形が、赤いレースのドレスをはためかせ、真正面から少年に襲いかかる。

その人形は悪鬼の形相で、鋭い短剣を振りかざしている。

少年は、からくも両手で人形を受け止め――。

そこで少年の動きが、ぴたりと止まった。

その人形を放り投げるのを、ためらっているらしい。

――ほう。

老人は細い目を、一瞬丸くした。

――この街は、近頃なかなか面白い街じゃの。

老人は、また指を鳴らした。

少年の体に纏わりついてた人形たちは、瞬時に動きを止め、それからばらばらと床にこぼれ落ちた。

少年は、最後の少女を目の前に捧げたまま、固まってしまっている。

――そりゃそうじゃろうな。目の前の悪魔が、いきなり天使の笑顔になって、おつむをいい子いい子し始めりゃな。

少年はあつけにとられた顔のまま、少女をそつと床に立たせた。

そして半身を起こそうとした時、うっかり床に捨てられた短剣に手をついてしまい、一瞬体を硬直させた。

その短剣は少年の掌の下で、ゴムのように柔らかく曲がっていた。

老人は、とことこと自分の方に戻って来た少女を抱き上げ、少年を手招いた。

「そのだるまストーブ君を、奥に連れといで。どんな病気かな？」



少年が土間に運び込んだ時、そのロボットはすでに鳴き声も出せなくなっていた。

道具類は仕事の流れで、昼間のままテーブルの上に広げられていた。

電子作業用のDELIUNIXマシンも鎮座しているが、無骨な古い縦置きタイプなので、古風な道具類に混じっても違和感がない。

向かいの椅子に座った少年が、不安げに老人の手元を覗き込んでくる。

さっきの少女人形は少年を気に入ってしまったのか、その肩に腰を下ろして、いっしょになってロボットの頭の中を覗いている。

「……なおりますか？ プラータンさん」

少年は、老人の眼鏡型スコープすれすれまで顔を寄せてきた。

滑り落ちそうになった少女人形が、あわてて髪か顔に掴まったらしく、少年は、いて、と呟いた。

「爺さんで、ええ」

「は、はい。プラータンさん」

「……アレクで、ええ」

他人に名前を呼ばれるつてのは、くすぐったいもんじゃな、と老人は思った。

自分で名乗るのは再三だが、呼ばれる時は、ご主人、あなた、爺さん、おむねこれで済んでしまう。

このロボットの素性を訊ねる前、少年が見かけによらぬ妙に立派な名前を名乗ったので、老人も礼儀として、少年に名を教えた。

アレキシス・プラータン——どんな老いぼれにでも、名前はある。

「……マリオ、これはお前さんが開けたのか」

だるまストープの頭の中——ブルフィンチとか言ったか——の構造をチエックしながら、老人は訊ねた。

「はこ」

ソーセージのような指をしている割りには、手先も器用らしい。仕込めるかもしれないな、と老人は思った。

「そう心配しなさんな。大したこた、ないよ」

スコープを着けているので良くは見えないが、少年の方から、一気に弛緩する気配がした。

肩の人形も、「ふう」と口真似をした。

「お前さんなら、どうするね」

少年は口ごもった。

「別にいじりかたを訊いとるんじゃない。どうして欲しいかと訊いとるんじゃない。焼けた回路をとつばらうだけなら、すぐに終わるぞ。その方が、言うことも良く聞くようになるし、金もかからん」

少年は逡巡しているようだったが、やがておずおすと答えた。

「倫理機能だけ分離する……ってのは、駄目ですか」

「それは違法じゃな」

「……そうですよね」

「しかしまあ、この際、延命措置として考えられんこともないわな」

少年の方から、希望という名の気配が伝わって来る。

——なんとまあ、解りやすい坊主じゃ。こういうのは、会社や役所じゃ、うだつの上がらん口じゃ。やっぱり職人向きじゃな。

「でも、どっちにしても、この焼けた奴はもう使えん。ここまで古くて安いチップだと、さすがに店のストックにもない」

少年の肩の人形が、また「ふう」と溜め息をつく。

「——その鬱陶しい顔は、もうやめてくれんか。ただでさえ、もどから鬱陶しくなつとるのに」

老人は一旦スコープを外すと、テーブルに広がった治具の間から、一本の薬瓶をつまみ上げた。

「さて、ここに取り出だしたる、魔法の小瓶じゃが」

老人はその青い粘液を、少年の前でゆらゆら振って見せた。

「当店オリジナルの、流動性生体感情回路じゃ。互換性はフリー。倫理機能は、始めっからない」

「でもそれって、やっぱり違法なんじゃ——」

「所持しとるだけなら、違法じゃあないよ。合法なんじゃ。ただし、これを乗せた人形を売って、そしてそれが公になれば、僕は

刑務所むしよ行きになる。したがって——とても高い」

「……おいくらくらいですか」

「お前さんの年頃じゃと——小遣いの十年分くらいじゃろうな」

少年は俯いて、考え込んでしまった。

あるいは老人に言われた『鬱陶しい顔』を、隠そうとしたのかも知れない。

「お前さん、中等かな？」

「二年です」

「じゃあ、こうしよう。高等に上がってアルバイトできるようにになったら、放課後は毎日、うちの店で働く。もちろん無給じゃ。いつまで続くかは、お前さんの働き次第。これでどうじゃ」

「お願いします！」

少年は即座に答えた。

肩の人形が、ぱちぱちと手を打った。

——やれやれ、馬鹿なんだか正直なんだか。ま、やっぱり職人向きじゃな。

これでひとつ老後の楽しみが増えた、と老人は思った。

「なら、決まりじゃな。僕はもう眠気が飛んじまったから、これからすぐやってやろう。明日の朝までには仕上がると思うよ。放課後にでも、取りに来るんじゃな」

「ここで待ってても、いいですか」

「僕はかまわんが、お前さんの家の方は、いいのかね？」

「——お店の電話、お借りしていいですか」

「ああ、かまわんよ」

少年が肩に人形を乗せたまま、カーテンをくぐって出て行くと、老人はまたスコップを付け、仕事にかかった。

こんな旧式の単純なボードから、焼けた回路を外すのは、兎戯に等しい。

老人はピンセット型の指感アームを使って、一瞬にそれを取り除いた。

——さて、ここに自前の流動回路を、どう馴染ませるかじゃな。

老人は、それが自分の矜持——『生きた人形を外に出さない』に、反する行為であることを、すでに自覚していた。

しかしこんな心中での言い訳で、自分に黙認した。

——まあ、生きただるまストروبなら、いてもおらんでも、おんなじじゃろうよ。

流動回路の配置を決めるには、少年の開けたスペースでは、かなり足りない。

老人は二本のアームを器用に操って、微細なケーブルの不規則な網を、楽々と押し広げた。

そこで老人の手が、ぴたりと止まった。

……なぜだ。なぜこんな所に、こんな物が入っとる！

老人は立ち上がって、だるまストロブの回りをうろつき始めた。

すでにすっかり目は覚めていたのだが、さらに急速な覚醒を、老人は感じていた。

ああ、頭に甘味が来ると、と老人は思った。

遠い昔、まだ二十歳にもなっていない頃の感覚だ。

修行時代、親方は商売物の人形になど、手も触れさせてくれなかった。

彼奴——ヨゼフの奴や他のボンクラどもといっしょに、工房の雑用をこな

すだけで、もう深夜になっていた。

勢い人形造りそのものを覚えるには、深夜から明け方まで、親方の昼の仕事を思い出しながら、自前の素材で模索するしかなかった。

そうやってヨゼフと二人つきりで、明け方まで根を詰めていると、もう半ば意識が失われ、手だけが動いている状態になる。

そんな時、優しいおかみさんが、いつも駄菓子と茶をふるまってくれたのだった。

ヨゼフと並んで、それらをががつと腹に収めると——頭と手がいつしよになつて、ようやくひとつの技術が身につく。

そんな感覚が、老いさらばえた今になつて、頭に戻つて来ている。夜食を摂つたわけでもないのに。

——しかし、有り得るのか。

老人は自問した。

——あつてもおかしくはなからう。ボードになつちまえば、それはたかだか数センチ径の似たようなボードじゃ。どこかの目のない馬鹿が、それと知らずにどこかから掘り出し、それをまたどこかの目のない馬鹿に売りとばし、使用不能の回路はその時代時代の回路に置き換わつて、ボード自体にもオタクどもの手が加わり、原型が見えない状態になる。——ただし、ただひとつ、奴らにはわけの解らん回路だけが、他の凡百の回路から切り離され、単独で生き残る——。可能性はどんなに低くても、それが百年前の煉瓦通りのジャンクに混ざり込む確率は、けしてゼロじゃあない。

老人は勢いよく、数回手拍子を打った。

電話を終えたらしい少年が、ちょうど帰つてきた。

今度は人形を肩車にしている。

「用事、ありますか？」

「お前さんじゃないよ。それより、そんなとこに立つとると、危ないぞ」

少年が立ち止まっている背後の扉が開き、タキシードの少年人形が、ワゴンを押して駆けてきた。

今夜のワゴンには、眼鏡型マイクロ・スコープに似た何かと、それにカー・コードで繋がった、前世紀のカード型電卓のような何かが乗っていた。ずいぶん古そうだ——少年の目は、そう言っているようだ。

老人は、先程までの翁顔とは別人のような顔で、にやりと笑った。

「旧西暦一九三三年型の、単一目的の特化ナノミクロン・スコープじゃ。使うあてもないのに欲しくて欲しくて、若い頃、十年分の貯金はたいて買っちゃった。職人の道具つちゅうのは、みんなそんなもんだ。死ぬまで使えんかと思つとつたんじゃが——まさか、使える日が来るとはもう」

老人は、本命の彼女との約束を控えて、春の街路を急ぐ若者のように見えた。

よほど興奮しているのか、テーブルの小瓶に肘を当てて倒してしまう。

青い粘液が、ぼとぼとと土間にこぼれ落ちた。

少年は泡を食ってしゃがみこみ、友人の命の綱をなんとか救おうとしたが、結局どうして良いのか判らず、途方にくれて老人を見上げた。人形も床にしゃがんで、その粘液を指でつついている。

「ほっとけ。そんなもんは、いつでも造れる」

老人はいそいそと、しかし慎重に、その電卓のような物をロボットの頭の奥にセットした。

それから、震える指でキーを叩く。

スコープを顔に掛ける手も、小刻みに震えている。

直後、老人の眼界いっぱいには、桜色の世界が広がった。

無数の桃色の神経組織に覆われた、桜色のハート——それは、そんなふうに見えた。

——ちよつと美意識は疑っちゃうが、まあ、ロマンの花盛りの時代じゃか

らなあ。それにしても、これが本当に人の手による造化か――。

「……お前さん。あんたのブル君に、新しいパーツは、いらんよ」

老人の声は、明らかに酔い痴れていた。

「スペアがちゃんと入つとる。本物のアンティーク・ロボットの、感情回路がな」

【第七章】

1

パプア・ニューギニアのポート・モレスビーから、ツンガル諸島のタラワ環礁までは、観光用の双発水上離着陸機が、一日二便定期運行していた。

数年前までは、フィジーなどから週一便程度の航空便しかなかったらしいが、近年アメリカ資本による南太平洋海域の観光開発が進み、独自の観光ネットワークが形成されたらしい。

今朝、すんなりとタラワまで乗り継げたヨゼフ爺さんは、幸運に恵まれたと言っているだろう。

それでも、ヒースロー空港の案内所で、オベリスク島に最も早く到達できそうなルートの航空券を揃えてから、もう丸二日が過ぎていた。

ヨゼフ爺さんは、澄んだ水色の礁湖や濃青の外洋を、できることならしばらくは、観光客たちと一緒に嘆賞していたいと思った。

無論ここまでの間も、すでに南太平洋の真つ只中だったわけだが、定期便を僅かな時間差で乗り継ぐため、飛行機の外では、とにかくいつも駆けずり回っていた記憶しかなかった。まさか常夏の国にまで出張とは思ってもいなかったの、夏向きの服を調達するのにも、大あわてだった。

今、オベリスクへの最後の中継地に着いて、ようやくじつくり異国の風物を眺めている。

むやみに派手な赤い花柄の開襟シャツに身を包み、椰子の葉葺きのビー

チ・ハウスに憩っていると、しみじみと旅情が身に染みてくる。白いショートパンツやウレタンのサンダルも、生まれて初めて身に付けた物だ。

甘ったるい果実のジュースが、大汗をかいた後の喉に心地良い。

七十を越して、図らずも訪れた南の海だ。

——ああ、君よ知るや南の国。

ヨゼフ爺さんは、薄幸の乙女ミニヨンに思いを馳せていた。

ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に登場する、旅芸人の少女だ。

その物語を元にしたポピュラーなオペラの一節も、頭のどこにしまっていたものか、ちゃんと心の耳に響いてくる。

——あなたは南の国を知っていらっしやる？ レモンの花が咲き、緑濃き葉陰には黄金色の果実がたわわに実り、薔薇が色づき、やさしい風の吹いているところ——そんな国を、あなたは知っていらっしやる？ ああ、その国へ、あなたといっしょに行きたい。

もつともミニヨンが歌っているのは、遙かなる故郷イタリアの風物だ。ヨゼフ爺さんの周りには、今のところあまり花々は見当たらない。その代わり、アルプスの山の湖水とはまったく違った、熱い風と澄んだ海がある。

しかし今回の旅は、物見遊山ではない。

ヨゼフ爺さんはジュースを啜り終えると、ポート・モレスビーの観光案内で紹介された、チャーター機のパイロットを捜し始めた。

案内嬢の説明によると、テンガロン・ハットを被った、髭もじやの中年太りのヤンキーで、名はスミスというらしい。カウボーイが歩いてるから、すぐ判るわ——案内嬢は、そう言って笑った。

「よう、あなたがミユラーさんかい」

いきなり肩を豪快に叩かれて、ヨゼフ爺さんは面食らった。

あわてて振り返ると、案内嬢の説明そのものの男が、葉巻を横ぐわえにし

て笑っていた。

「よくわかったのう」

「ここじゃ、ひとり旅の爺さんなんて、めったに居ねえよ。でっかいハードケース引きずってる奴もな」

「確かにの」

スミスは礁湖側の砂浜に舫った水陸両用セスナに、ヨゼフ爺さんを案内した。

パイロット同様、かなり古びてはいるが、汚れてはいない。

二人の乗り込んだセスナは、礁湖のまだらな浅瀬を器用に縫いながら、北西に向かつて飛び立った。

「急ぎだそうだから、まっつぐ行くぜ」

スミスは東に向けてセスナを旋回させた。

ヨゼフ爺さんの眼下で、巨大な環礁が斜めに回転した。

まるで大鰐の口のようにやな、とヨゼフ爺さんは思った。

西に向かつて、差し渡し二〇キロ近い大口を開いている大鰐の顎。上顎の

先には、ご丁寧に牙まで生えている。

セスナはほぼ赤道に沿って、東に飛び続けた。

「オベリスクタあ、また妙なところに行くね」

「ちよつと、捜し物でな」

「そんなら楽だわ。ちよつぽけな島だし、ろくに人もいねえし」

「あんだ、オベリスクのことは詳しいのかい」

「二遍ばかり泊まっただけだがな。大昔はけっこうでかい火山だったって話だが、今じゃ死んだ火口が、ちよつぴりとんがってるだけって感じだな」

「そこに、こんな昔話は残つたらんかな。——大昔、白人とロボットが、二人きりで住み着いていたとか」

「それは、『ホワイトハウス白い館』のことを言ってるのかい」

「——あるんじゃないな」

「良くは知らないが、北の浜近くに、そういう館があるってのは聞いたことがあるよ。人が住んでいたかどうかは知らんがね」

無駄足じゃなかった、とヨゼフ爺さんは安堵した。

「なんでも何百年も昔から、薄気味悪いロボットが住み着いてるって話だ。島のもんは、気味悪がつて誰も近づかんそうだよ」

「ほう。で、そのロボットの女は——」

そう訊きかけたヨゼフ爺さんを、スミスは笑って遮った。

「なんだ、爺さん。いい齡こいて、お宝探セクサロイドしかい。まさかその齡で、自分で使おうってんじゃないやなろうな」

そんな気楽な話ならいいんだがな、とヨゼフ爺さんは舌打ちした。

スミスは無作法に笑い続けながら、

「まあ、売りやあ大変な金になるって話だが。——でも残念ながら、俺の聞いた話じゃ、男だ。黒ずくめの陰気臭い男だよ」

予想を裏切られ、ヨゼフ爺さんは黙り込んだ。

「どっちにしる、この天気なら、あと一時間半も飛べば見えてくるよ。北の浜に着けてやろう。それまで退屈だったら、下を見てりゃ、イルカが跳ぶよ。

運が良けりゃ、鯨も跳ぶよ」

とにかく行ってみるしかあるまい。行つてそれを見ないことには、次の手は打てない。

ヨゼフ爺さんはそう居直つて、眼下の大海原を眺めながら、しばらく旅情に耽ることにした。

——あなたは南の国を知つていらつしやる？ レモンの花が咲き、緑濃き葉陰には黄金色の果実がたわわに実り、薔薇が色づき、イルカや鯨が、ぴちぴちと波に戯れているところ——そんな替え歌を、頭の中で歌いながら。

なんで僕が、プラーテンさんのお昼ご飯を作ってるんだろう。それももう今日で二日目だ。

例のお人形も何か手伝ってみたいらしく、ずっと僕にくっついて台所を駆け回っているが、ちょっと実際のお料理は、小さすぎて無理みたいだ。

まあ、みんなブルのためと思えば別につらくはないんだけど、やっぱり料理という奴は、かなり面倒くさい。ラテン語で韻を踏むより、面倒くさい。

父さんも同じ意見だったらしく、息子が結局土日の両方をこの店で過ごすことになっても、電話では『とにかく一日も早く治してもらえ』と言うばかりだった。あのぶんだと僕が明日学校を休むと言っても、あっさり許してくれると思う。そりやそうだ。夕御飯は酒場で済ませるにしても、朝と昼は毎日ブルの手料理に頼っていたんだから。

朝はライ麦パンとバターと牛乳、それにチーズかハムなんか添えれば完璧だと思うんだが、プラーテンさんは居職だから、お昼くらいは暖かくてちょっと立派な物を、食べたいだろうと思う。それに、一昨日の金曜の晩から、ほとんど寝てないはずだ。僕も寝てないけど、僕は非常用の皮下脂肪をかなり貯えているから、持久力にはけっこう自信がある。でもプラーテンさんは、どう見ても脂っ気が足りない。結論として、やっぱりお昼くらいは立派な物を食べさせてあげたい、そう思ってしまったわけだ。

立派な物と言っても、僕にできる料理なんてたかが知れている。一度ブルに習ったことのある、カッセラーあたりが無難だろう。あれなら、豚の塩漬けばあばら肉と玉葱を買って来れば、後はプラーテンさんの台所にもとからあった、赤ワインや小麦粉だけでできる。作り方は簡単だが、ちょっと時間がかかるから、いかにも家庭料理って感じでいいんじゃないかなろうか。付け合

せのジャガイモや、ザワークラウトの瓶詰めなんかも、台所にもとからある。僕は十時半頃までには買い物すませ、店の壁向こうの台所に籠もり、オーブンの肉とお付き合いを始めた。オーブンは確か華氏四〇〇度弱。ただの焼きっぱなしではなく、天板にたまった肉汁や、熱湯を少々振りかけたりしながらしばらく焼いて、途中で四つに切った玉葱を入れて、またしばらく焼く。こちらへん、肉汁や熱湯の掛け具合が、主婦の腕の見せ所だ。——誰が主婦だ。

肉の焼き加減を見ながら、付け合わせのジャガイモを茹でている時、僕は徹夜続きのとんがった感覚の端っこで、意外な気配を感じた。

索聖子アンテナが、聖子の接近を感知したのだ。

そんなはずはないと思いつながら、通りに面した小窓の方に目を向けると、たなびく黒髪の端っこが、あわてて引っこむのが見えた。

そういえば、もう教会の日曜のミサは終わった時間だ。

ザワークラウトを瓶から皿に盛ってくれていたお人形が、その気配を察したのか、窓の方にとことん駆けて行った。

僕も窓を開けて声をかけたい——でも、今は、できない。僕は今の計画を終えるまでは、聖子断ちしてるんだ。今度の聖子がアツパー・カットを狙ってくるにしろ、それとも許してくれるにしろ、それはライラにブルの気持ち伝えてからだ。そしてそれが本当に叶わないものならば——その後のことは、まだ考えていない。

オーブンの肉が焦げそうになったので、僕はまた天板の肉汁を振りかけた。鼈甲の眼鏡の縁が、ちらりと窓を過ぎったような気がしたが、僕は自動的に窓の方を向こうとする自分の首をねじ曲げて、あえてジャガイモの茹で加減を見るのに専念した。

眼鏡の主が、外を覗いたお人形と鉢合わせしてしまい、あわてて引っこむ気配もした。

僕の今の気分を、きつと聖子の国の諺で、断腸の思い、と言うんだろう。それきり聖子は、僕のアンテナの受信範囲から、去ってしまったみたいだった。

痩せ我慢をしている自分はつくづく馬鹿のような気もするが、馬鹿は馬鹿なりに、思うところがあつたりするんだ。

でも、なんで聖子は僕がこの店にいたことが判つたんだろう。

カール・ウェバーの奴が、また、あることないこと言い触らしてるんだろうか。

カールの奴とは、昨日の朝の朝の買い物に出たとき、角のパン屋の前で会ってしまった。奴の家なんて知りたくもなかったのだが、たぶんこの店の近所なのだろう。この前折つてやった三本出っ歯のうちの二本は、ちゃんと差し歯で復活していた。

あいつのことだから、マリオは商学校の連中との勝負に負けて、人形屋の丁稚奉公に入ったらしい、とかなんとか学校で触れ回ったのかもしれない。もしそうだったら、いつか残りの一本も、折つてやった方がいいのかもしれない。わざわざ出っ歯の差し歯を入れたのは、残り一本に合わせたのだろうから、三本とも揃つて差し歯にしてやつて、みつともない出っ歯とさよならさせてやった方が、あいつのためだと思うし。

そんなことを考えているうち、お人形が窓から戻つて来た。

冷蔵庫の上のコンセントに、ドレスの裾から引つ張り出したプラグを繋ぎ、壁に背中をもたれて、眠ってしまったみたいだ。充電状態に入ったらしい。まもなくカツセラーが焼き上がった。

天板に溜まった肉汁をフライパンに移して、赤ワインを入れて小麦粉も少々、これでちよつと火を入れれば、ソースの出来上がり。味見してみると、おお、けっこう美味しい。聖子にも御馳走したかったな、なんて、つい考えてしまう。——いかんいかん。

自信作を仕事場に運んで行くと、プラーテンさんはまだブルの頭をナノミクロン・スコープで覗きながら、沈思黙考していた。

もう半日も、おんなじ格好だ。

一昨日の夜、ブルのボードに五世紀前の感情回路を発見してから、二人で興奮してしまって、しばらくフォーク・ダンスを踊ったりしてしまったのだが、さてその後をどう処理したらいいのか、さすがの名人でも判断に困っているみたいだ。

それでも昨日の昼あたりまでは、たまには『おうおう』と嬉しそうに手を打つてみたり、『こりゃあまた』と感嘆してみたり、『ひええ』などと叫んだりしていた。その後はだいぶ静かになったが、それでもたまに立ち上がって、スコープを外してブルの回りをうろつきながら、ぶつぶつ独り言を言ったりした。

でも、この半日は、トイレに行く時にも、無言で腕組みをしたままだ。

夕御飯や朝御飯は冷製だから、皿を膝に置いて手掴みで食べてしまう。

「お昼、できました」

うるさくならないように小声で伝えると、当座はなんの反応もないが、聞こえてはいるらしい。多分そこまでの考え事に区切りをつけてから、反応を開始するんだ。このあたりの呼吸は、もう慣れた。

邪魔にならないように、店へのカーテンに近い作業台の端っことで、先に自分の食事を始めていると、やがてプラーテンさんも腰を上げて、僕の斜め向かいに座った。作業台の上は、あの時から散らかったままなので、そこしかお皿やなんかを広げられない。

「旨そうじゃな」

どうやら考え事から、こちらの世界に戻って来たらしい。

昨日の昼のジャーマン・ポテトフライントカル・トツフェルンの時なんかは、あっちの世界に行ったままま食べるので、テーブルの上が大変だったんだ。

「どうぞ」

僕は赤ワインを注いであげた。

プラーテンさんは、僕にもグラスを持って、というような手振りをした。ちん、と乾杯する。

プラーテンさんは、一息にグラスを干して、目を細めた。もともと細いので、目だか皺だか判らなくなる。

それからカッセラーをほお張って、

「……旨いじゃないか」

「ありがとうございます」

僕もほっとして食事を続けた。

職人よりは料理人向きか、と聞こえたような気がしたが、食べながらなので、良く判らなかった。

「ビールもいいが、あれは頭がお休みになっちゃうからの」

プラーテンさんは外国の生まれらしく、このあたりで食事に付きもののビールは、それほど好かないらしい。その代わりワインやブランデー、それにこの国ではあんまり好かれないウイスキーなんか、台所にたくさんあった。「……で、やっと読めたんじやが」

プラーテンさんは、フォークの先つぼの肉片を、くい、と上げて言った。

「あの時代の感情回路は、従来の定説とは、ずいぶん違ったもんじやな」

「どんなふうですか？」

「とんでもない容量と処理速度を持つとるんじやよ。現在の倫理回路を、遙かに凌ぐほどにな」

「でも、僕の読んだ本では、すぐ感情が破綻しちゃうくらい、小さかったって書いてありましたけど」

「そこじゃよ。アンティーク・ロボットの感情回路なんて、完成した時点から、誰も直接は見られないもんじやった。造った側でも、一切の記録を残し

とらんのぞな。殺す覚悟で頭を中心まで開ける馬鹿もいなかったろう。したがって、外部で確認できる行動から、仮説を立てるしか無かったわけだな」
「でも、外部からそう見えたということは——」

プラーテンさんは、口に入れた肉をくちやくちや噛みながら答えた。
「じようほうしよりそのものもんだいじやよ」

情報処理そのもの問題じゃよ、と言ったらしい。

ごくりと肉を飲みこんだので、僕はプラーテンさんの空いたグラスに、またワインを注いであげた。

「ありがとうよ」

カッセラーの味をワインの味といっしょに飲みこみながら、プラーテンさんは、さらに目を細めた。

「僕の見たところ、あの感情回路は、まったく情報を圧縮しないで駆動してる」

「えと、あの、それは、とどのつまり……」

僕が驚きと疑念でしどろもどろになっていると、プラーテンさんは意外そうに言った。

「ほう、マリオ、お前さん、その意味が解るか」

「——アナログのまんまで、感情を処理してるってことですか」

「一言で言えばそうなんじゃが、もうちつと、詳しい解説が欲しいの」

「えーと、たとえば、僕は詩が大好きなんですけど、その詩が詩人の膨大な情動を、いくつかのフレーズに結晶させたものだとするれば、その感情回路は、詩そのもののフレーズだけじゃなくて、その底にある詩人の膨大な情動そのものも、いっしょに処理できるんじゃないかと……」

「なんじゃやら良う解らんが、そんなもんかも知れんの」

プラーテンさんは、ザワークラウトをつつきながら言った。

「どうもブル君の焼けた回路には、ある程度この感情回路が干渉しとったら

しいよ。そんなもんがなんかの加減で流れこんだら、そりゃあ焼けもするだろう。本来の倫理回路だけなら、焼けたりする前に、とつくに諦めとる」

なるほど。圧縮されてないアナログ信号なんて、何十倍、いや、何百倍の情報量のはずだ。

「人間にきわめて近似した行動パターン、なんて言われとったが、なんのこたあない、こりゃあ人間そのもんじゃな。人が作った、人じゃよ」

「それで、ブルは……」

「問題は、そこじゃ」

プラーテンさんは、ちょっと悩ましげな顔をした。

「回路が生きとる以上、それを焼けた回路の替わりにするのは、理論的には問題ない。しかしまあ負荷の調整やら、結線そのものの物理的構造やら、今の僕には五分五分としか言えん。丁半博打じゃ」

「それは単純に、生きるか死ぬか、ってことですか」

「まあ、これはこれで切り離しておいて、僕の流動回路を載せてもいいんじゃないが——この回路を持って生まれて、それでも死蔵しちゃうというのは、このブル君にしてみれば、生まれてきた甲斐がなからうと思うよ。あくまでの僕の考えだがね」

「——お願いします」

ブルはブルに戻らなきゃいけない。それも、できるだけ早く。

「よっしゃ、合点。それじゃあ、飯を食ったらすぐにかかろう——と言いたるところじゃが、僕はちょっと奥で寝かしてもらおうよ。指の勝負になるんだ。頭だけ動いとつても、どもならん。なあに、目がさめたら十分もかからん。お前さんも、ちょっと寝といた方が良からう」

プラーテンさんの言う通り、逸る気持ちも、体の限界には勝てない。

洗い物を片付けた後、僕も借りた毛布にくるまって、まだだるまストーブのままのブルの隣で横になった。

——目がさめたら、計画の続きを練ろうぜ、ブル。
目を閉じたたん、僕は眠りの底に沈んだ。

3

根っから陽気者らしいヤンキー男は、時折イルカたちの上げるしぶきを見つけると、海面近くまでセスナを降下させた。

フロートが水面に届きかねないほどの急降下だ。

跳躍したイルカと併走——いや、併跳するように、セスナの主翼の端が、一瞬イルカの横をかすめる。

「ぶっけんでくれよ。痛そうじゃ」

「あっちもこっちも、それほど鈍間じゃねえよ。——そろそろ見えてくるぜ」

セスナは再び南国の海風を裂いて上昇した。

やがて水平線に、ちっぽけな島影が見えてくる。

「今日は鯨は跳ばなかったなあ」

「鯨だって、休みたい日もあるじゃろ」

「そりやそうだ。今日は日曜だしなあ。もつとも、あの島越えりや、土曜に戻っちゃうが」

上空から見ると、周囲十六キロ程度というその島は、南を背にして赤道沿いに横たわる、人の横顔のように見えた。

耳あたりの火口湖付近を除けば、ほとんど熱帯植物に覆われ、鼻の下あたりの入り江と、後頭部のやや窪んだあたりに砂浜が見える。あとの海岸線は、岩場だけのようだ。

「じゃあ、北の浜に降りるぜ」

セスナはいったん左に旋回し、島の北側に回り込むと、鼻の下の入り江に、

南下する形で着水した。

なんの危なげもなく、砂浜に乗り上げる直前で停まる。

大きっぱな外見に似合わず、スミスの腕は確かなものだった。

入り江の内海は池のように静かで、タラワの礁湖同様、コバルト色ラグーンに透き通っていた。

ヨゼフ爺さんは波打ち際に降り立った。

スミスが大型ケースを渡してくれる。

『ホワイトハウス白い館』は、林のすぐ奥だつて話だ。帰りはどうするね。ちよつと散歩つてわけじゃねえんだろ。俺は南の浜で飯屋に寄るから、そこで夕方までぶらついててもいいぜ。お迎えは明日つてんなら、またタラワから出直すことになるが』

「その南の浜つてのは、旅館はあるかい」

「いいや、ほつたて小屋みてえな飯屋が一軒あるきりだ。頼めば泊めてくれることもなかるうが、こつからだと、ジャングルを三キロばかり歩くことになるぜ」

「……それじゃあ、夕方、またここで拾ってもらおうかの」

「おし、じゃあ決まりだ。またな」

早々に飛び去るセスナを見送りもせず、ヨゼフ爺さんは、砂浜の奥の熱帯樹林に踏み込んだ。

道はないが、道らしい痕跡はある。

山育ちなので、悪路には慣れている。

五分も歩かないうちに、樹林の間から白いものがちらつき始めた。

切り開かれた前庭の向こうに、その『白い館』は建っていた。

館といつても、ヨゼフ爺さんの念頭にあった城館風ではない。ジョージア様式——正確に言えばマイケル・ソーンミケル・ソーンの故郷、米国南部のアトランタなどに見られる、上流階級の屋敷を模して造られた物だ。ヨゼフ爺さんの記憶に

照らせば、映画で見たスカーレット・オハラの家敷の縮小版、と言ったところか。

いずれにしても、その館は全く古びを感じさせず、ほとんど純白に、南国の空の下で光っていた。

こんな家をこんなふうに保てる奴が、『薄気味悪いロボット』や『黒ずくめの陰気臭い男』だとも思えない。

ヨゼフ爺さんは、ためらわず玄関の扉のノッカーを鳴らした。

「ごめんなさいよ。どなたか、ご在宅かの」

少々お待ちくださいませ、と、落ち着いた初老の男の声が聞こえた。

黒い燕尾服を着込んだ、執事と思われる男が姿を現わした。

「どちら様でございますよう」

執事の顔は、銀器の光沢を帯びていた。白い手袋の中身も、たぶん銀色だろう。

「僕は旅の人形師なんじゃが、ちよつとこんなもんを手に入れたんでの」

ヨゼフ爺さんは、例の書籍を差し出した。

「この家のもんじゃないかと想つての」

「ほう、これは確かに、当家の蔵書でございます。数年前、盗賊に持ち去られたと思つておりましたが、あなた様は、これをどちらで——」

ヨゼフ爺さんを値踏みするその目も銀色だ。虹彩などはなく、中央に五ミリほどのレンズが見える。

「僕はロンドンで手にいれたんじゃが、どうもその盗つ人船乗りが、マルセーユで処分したらしいよ」

「そういたしますと、あなた様はわざわざロンドンから、当家を訪ねて下さったのでございましょうか」

「いや、まあ、話せば色々長くなるんじゃが——僕はあんたのご主人様と、まんざら縁なき衆生でもないんじゃよ。たとえば、その本の最後近くに載っ

とるマリアさんなんかは、今、儂の家におる」

「——立ち話もなんでございます。どうぞ、お入り下さい」

銀の顔に表情はないが、声から察するに、疑いは晴れたようだ。

案内されるままにホールに入ると、やっぱり映画で見たのと同じように、ホールの正面の階段は踊り場から左右に別れ、二階の回廊へと繋がっていた。意外だったのは、外の南国の光の世界から屋敷に足を踏み入れても、全く暗さを感じないことだった。全ての窓が雨戸を開け放たれているにしても、それに負けない巨大なシャンデリアの輝きは、只事ではない。

そんなヨゼフ爺さんの戸惑いを察したらしく、執事は言った。

「主人あるじの言いつけで、昼も明りを灯しております」

「電気はどこから来るんじやな」

「ニュージールランドから海底ケーブルが届いております。元はと言えば、主人が個人的に引いた物を、島民にも使用できるよう計らったのでございますが、もう島の者共も、忘れておりました。私のように日々の充電が欠かさない身には、ありがたいことでございます」

執事はヨゼフ爺さんを、階段の右側の扉に導いた。その中もまた光に溢れており、古風な客間がしつらえてあった。

「こちらでお待ちください。ただいま、お飲み物などお持ちしますので」

「そりゃあ、ありがたい。なによりじゃの」

屋敷の中はある程度の空調が働いているようだったが、樹林を汗だくで抜けて来たため、もう喉が干上がりそうだ。

ヨゼフ爺さんは、執事の運んで来たレモネードを啜りながら、客間の書架に目をやった。

シェイクスピア、デュマ、トーマス・マン、ブロンテ姉妹、ホーソン——欧米の古典は、きつちり押えてあるようだ。石油成金とは聞いていたが、こうした館で変わった末期を迎えただけあって、根はロマンチストだったのだ

ろう。

「儂や、ブロンテの『嵐が丘』みたいな、怖い話が好きでろう」

「主人は、大デユマを好んでおりましたね。『モンテ・クリスト伯』など、特に好んでおりました。自身、波乱の中で生きた方でしたから。私も勧められて一度目を通しましたが、あいにく、架空の人物を己の身と仮想して楽しむ、そんな機能は備わっていないもので」

「『待て。そして、希望せよ』——か」

ヨゼフ爺さんにも、昔それを讀んだ記憶があった。

「ソーンさんをお参りしたいんじやが、お墓は遠いのかの」

「すぐ裏手にございます。主人も喜びますでしょう。他所の方のお参りは、あなた様が初めてでございますから」

執事の案内で裏庭に出ると、手入れの行き届いた南の花の生け垣に囲まれて、白い墓標が立っていた。

ただの石の板と言ってもいい、質素な墓標だった。それが当人の希望だったのだろう。

ヨゼフ爺さんは、しゃがんで墓標に手を合わせながら、土の下の『まんざら縁なき衆生でもない』男に、内心で語りかけた。

——ソーンさん、あんた、満足して眠つとるかね。

墓標の銘板には、こう刻まれていた。

『マイケル・ソーン P. A. D. 1901—1975 生の大半を不幸に

費やした男、ここに眠る。しかし最後の十年のみ、私は幸福であった。』

——なるほど、了解した。それじゃあ、儂は儂の仕事にかからせてもらうよ。

ヨゼフ爺さんは立ち上がって、執事に訊ねた。

「それじゃあ、奥さんにも、いっぺんご挨拶したいんじやが」

「それが——奥様は、このところ臥せっておられます」

「具合が悪いのかの」

「と、申しますか……自ら、充電をお断ちになりましたので」

ヨゼフ爺さんは、血相を変えた。

もしマリアに近い構造の電源を持っているとすると、百年も通電を断ってしまえば、それは永遠に使用不能となる。現在のマリアと同じことだ。

「いつだ。それは、いつのことだ」

思わず執事の肩に手をかけて、強く揺さぶる。

「六十二年ほど以前の秋です」

「よっしゃ、すぐに案内せい」

その程度なら、なんとかなる。ここであわてて充電したりすれば、液漏れや、最悪破裂の危険性があるが、スイスの工房に持ち帰って、微妙に放充電を制御してやれば、実用可能な程度までには活性化できるはずだ。

ヨゼフ爺さんは執事に従って、ホールからの階段を二階に急いだ。

また新しいアンティーク・ロボットに出会える期待よりも、使命感の方が先だった。

——さあ、マダム。お気持ちは重々お察ししますが、貴女にはまだまだ生きる意味がございませぬぞ。

東側の寝室に導かれる。

屋敷の外観と同様の白い部屋に、古風な天蓋付きの寝台があった。

ヨゼフ爺さんは、天蓋から巡らされた白いレースの日よけを、一気に開いた。

そこに眠っていたのは、想像していたマリアのようなマダムではなかった。小柄な少女——ライラ当人が眠っている。

ヨゼフ爺さんは、文字どおり、一瞬心臓が止まるのを感じた。

しかし数秒後には、人形師としての理性が戻った。

「執事さん、奥様の体ん中を診さしてもらおうが、ええか」

「——どうぞ、お任せいたします」

執事は深々と礼をした。

「客間の大きい方の鞆を、すぐに持って来とくれ」

「承知いたしました」

執事は意外なほど機敏に、階下に向かった。

◇

◇

検分と応急処置は、一時間ほどで終わった。

この後の策を頭の中で組み立てながら、ヨゼフ爺さんは客間に戻った。

「間一髪という塩梅じゃな。なんとかしてやれそうじゃ」

無言の執事が何を思っているのか、ヨゼフ爺さんには読めなかった。

「お食事の支度が整っておりますが、食堂でお摂りになりますか？ お一人でしたら、こちらでもよろしいかと存じますが」

「ああ、ここは居心地がええし、ここがええな」

「承知いたしました」

執事が運んで来た銀のトレイには、うやうやしく米国式の昼食が乗っていた。

薄紙に包まれたハンバーガーと、馬鹿でかい紙コップに入ったコーラだ。

ヨゼフ爺さんは、どこかの空港で繋ぎに食べた時の、ごてごてした食感と、くどい味を思い出した。

「……欧州のお方ですと、お口に合いませんでしょうか。主人は昼にはいつもこのメニューでしたもので」

「いやいや、結構。ありがたく御馳走になるよ」

内心不承不承に頬張って、ヨゼフ爺さんは、ほう、と感心した。南の島で食うと、案外旨いもんじゃないか。

作業の緊張で喉がまた大分乾いていたので、空港では薬臭くて閉口した茶色い液体も、結構悪くない。

窓の外では、樹林でも聞いた鳥たちの奇妙な泣き声が、遠く尾を引いている。

「しかし、ちよつと驚いたよ。ずいぶんお若い奥様じゃな」

「奥様と申しますよりも——主人のたったひとりの大事な方でございました」

「奥様のお名前は、レイラ様でよろしいのかな」

「はい。お気づきになりましたか。この本をお読みになったのですね」

「いやあ、ラトビア語は技術用語を齧っただけなんで、すっかりだまされつつたよ」

「御母堂様と、双子の妹君のことは、ずいぶん懐かしそうに語っておられました」

「そうじゃろうなあ。一度も記憶をリセットされずに、ずっとここで暮らしていたのなら、追憶という奴もまた、なかなか辛いものじゃつたろう」

ヨゼフ爺さんのカップは、もう空になった。

「お代わりをお持ちしましょう。それと——よろしければ、私が英語に訳出したノートもございますが、ご覧に入れましょうか」

「あなた、ラトビア語が読めるのかい」

「はい。主人がこの書物を手したおりに、インストールされましたのでヨゼフ爺さんは、もうおおよその母子の素性は想像できていたが、やはり完全に読めればありがたい。

手や口が付いたケチャップをナプキンで拭っていると、執事は追加のコラーといっしょに、革表紙の立派なノートを運んで来た。

無論写真は入っていないが、章構成で流れは判る。

ヨゼフ爺さんは、ハイド・パークで最初に確認したあたり——末尾に近い

ライラの章を探した。

想像した通りだった。

ライラの章が特別長いのではない。ほぼ同型の、二人の少女が存在するのだ。名前は、いずれも同じ綴りの『LEILA』。ただし、発音だけが相違するらしい。先に誕生した姉は、あらかじめ米国の富豪への輿入れが決まっていたので、その地の発音に即せば、レイラ。そして妹は、オーストリアの貴族のために生まれた、ライラ。なぜ綴りまで全く同じにしたのか、それは制作者自身にしか解るまい。単なる茶目っ気なのか、あるいは同等に愛を注いだという証しなのか。

「このノート、しばらく貸してもらってもええかの。この本といっしょに」「ノートは私の物ですから、いつこう差支えございませんが——書物の方は、主人の蔵書ですので」

「やっぱり、駄目かの」

執事はしばらく考え込んでいたが、やがて、穏やかに頷いた。

「——よろしいのではないかと存じます。亡くなって数年の間は、夜半など時折こちらに戻り、奥様と並んで書見に耽っておりますのですが……それももう、とぎれて久しゅうございますから」

ヨゼフ爺さんは、少々背中がぞくりとした。悪寒ではない。子供の頃、年寄り衆に怪談話などを聞かされた時の、可能性と期待を秘めた恐怖感だ。

——こんな人生の締めくくりを選んだ男なら、そのくらいはできて当然だろう。嵐が丘の亡霊どもなんぞに比べたら、まだ大人しいくらいだ。

執事は淡々と後を続けた。

「あの頃は——人もまた私どもと同様、滅びることのない物かと思ったのですが、やはり、違った物だったのでございますね。私はどちらでもよろしいのです。私はただ主人の生前の言いつけ通りに、日々を送ることができれば、それでなんの不足もございません。しかし奥様は——待ち続けることに、お

疲れになったのでしよう。四百年という歳月は、心あるお方には、けして短くはございません」

「——それでも、僕は奥様をここから連れ出して、治してやらなきやならん。夕方には連れて発つが、ええかの」

執事は意外にも、抵抗を示さなかった。

「よろしくお願いいたします。主人は息を引き取る間際、奥様にこう言い残しました。自分が死んだら、故郷に戻るなり新しい人を探すなり、自由に生きてほしいと。しかし、主人はあくまでも人でございましたから、奥様のために自らの真意を隠す、そんなことも、生前ままあったこととございました。この館に残っておられたのは、あくまでも奥様のご意志だったのですが、それが主人の真意になつていたのかどうかは、私には判りません。——人であられるあなたに、お任せいたします」

◇

◇

やがて夕方が近付くと、執事は北の浜まで荷物を運んでくれた。

「ちよつと奥様は窮屈かも知れんが、これが一番安全なんじゃよ」

「まだ眠っておられますから、ご不快はございませんでしょう」

ロボットらしい、合理的な判断だ。

「私などは、こちらに着いた時にはもう意識がりましたが、小分けされておりますので、自分の手足がどこにあるのかも判りませんでした」

浜で迎えを待つ間、執事は燕尾服の内ポケットから、一通の封筒を差し出した。

「奥様がお目覚めになりましたら、こちらをお渡し下さいませんか」

封筒には、数葉の古い写真が入っていた。

老人と少女の写真だった。

老人は、西欧の街角の『鶏の唐揚げ屋』前に立っている、人形たちに良く似ていた。白いスーツ姿の、太った巨漢だ。そして白いドレスの少女は、ライラではなく、レイラ。

善良で優しい祖父と、その慈しみを一身に受ける孫娘——そんな懐かしい匂いのする、家庭写真だった。

「奥様が寂しがられるかと存じまして」

「お預かりするよ」

しばらく待つと、島の背後の空から、スミスのセスナが現れた。

夕暮れの入り江を巡るように旋回し、相変わらずの見事な腕で、目の前に着水する。

「なんでえ、小ぎれいなおっさんじゃねえか」

スミスは葉巻を咥えたまま顔を出して、ヨゼフ爺さんの背後に控えている執事に、目を丸くした。

「爺さん、あんたよりよっぽど清潔だぜ」

砂浜に降り立ちながら、軽口をたたく。

「悪かったの。『白い館』には、百年分のハンバーガーとコーラが残つとるそうぞ」

ひゅう、とスミスは嘆息した。

「そんならなにも、南の浜でタロイモなんぞ食つてることあねえ。えーと、そちらのロボット紳士の方、今度寄らせてもらつてもいいかい？」

「歓迎いたします」

「執事さん、金目の物には、注意した方がええよ」

「けっ、口の減らねえ爺さんだ」

降りた時より数倍重くなっている対衝撃ケースを、スミスは何も言わずにセスナに積み込んだ。何が入っているかと、それは己の職分ではない。

ヨゼフ爺さんはセスナに乗り込みながら、執事を振り返って言った。

「あんたも来たかったら、来てもええよ」

執事は静かに頭かぶりを振った。

「私は館や主人の墓を守らねばなりませんし、それに——あなたからの新しいご命令もありますので」

「儂や、なんかお前さんに命令なんぞしたかの？」

小首をかしげるヨゼフ爺さんに、執事はレンズの瞳を向けた。

「こうおっしゃったではございませんか。——『待て。そして、希望せよ』」

二人は、どちらからともなく、握手を交わした。

やがて上空から夕焼けの入り江を見下ろすと、館に戻って行く執事の銀色が、鈍く赤く光って見えた。

『白い館』も、今はオレンジ色に染まっている。

——なるべくご期待にそえるよう頑張るよ。銀行預金の続く限りはな。

ヨゼフ爺さんは、こうしてオベリスク島に別れを告げた。



タラワ環礁に戻った時には、もう夜の七時を回っていた。

「どこかに電話できるところは、ないかのう」

みしみしと軋む栈橋で、約束のチャーター料金を払いながらスミスに訊ねると、

「そのの港灣役場でできるよ。まだ開いてるはずだ。領収書、いるかい」

「ああ、資料収集用交通費つてことで。次に来たときも、よろしく願いますよ」

「おう。またな、爺さん」

スミスは軽く手を上げて、海岸沿いの酒場らしい明りの方へ去って行った。ヨゼフ爺さんは、教えられた役場に足を運んだ。

本当は電話嫌いで自宅にも引いていない位だが、今は少しでも早いに越したことはない。

役場はただの土産物屋程度の平屋だが、郵便のマークの看板なども出ており、屋根には衛星通信のアンテナも立っていた。もつとも、それはなんだかあさって明後日の方を向いているような気がした。

「ごめんなさいよ。電話を貸してもらえると聞いたんじゃが」

故郷の村の役場を、建物まで全部木製にしたような、粗末な造りだ。

窓口に座っていた赤銅色の中年男が、木訥な笑いを浮かべた。

「すみませんねえ。電話は今、全島不通になってるんです。交換器のヒューズが飛んじゃって、ファイジーから取り寄せてるもんで」

笑って言うようなことでもあるまい、とも思ったが、男の笑顔があまりに無邪気すぎて、納得するしかなかった。

「電報は、だめかの？」

「どちらまでですか」

「ドイツなんじゃが」

「ああ、それなら、衛星経由で大丈夫です」

ヨゼフ爺さんは、申し込み用紙にこんな電文を記入した。

『ライラノソウギヲ シキユウチュウシサレタシ トウホウニ カンガエルトコロアリ イサイハキンジツ キタクヲハウモンノオリ』

ドイツ語やスイス語だと、書き間違えたり相手が読み違いしては大変なもので、英文を使った。

つつがなく窓口の係員に渡し、同じ係員から宿の在りかを聞いて、ほっとして引き上げる。これで一区切りついたと、安心したヨゼフ爺さんだったが——実は、彼の知らない大なる誤算があった。

それは、このツンガル共和国——ツンガル諸島全島に共通の、国民性の問題だった。

ツンガル諸島は、この海域の他の国々と同様、かつて欧米列強の植民地になりかけたことがある。事実、ギルバート諸島やらキリバス共和国という名称を、英国から頂戴する寸前まで行つた。しかし、ちやうどその頃欧米間に起こつた複雑な国際問題のからみで、偶発的に双方の植民地化から免れ、古来の伝統名のまま、共和国として立つことになった。それゆえに、国民性もまた、いにしへの気風を多く残している。さすがに無生物や人間以外の生物との婚姻はもう許されていないが、男女の性別などは、未だに問われない。ある意味先進的なのかも知れないが、その実質は、国民の間で日常頻繁に使用される、次の言葉に集約される。『まあ、いいんじゃないの』。

ヨゼフ爺さんを見送つた後、純朴な係員は、さつそく電文を端末に打ち込んだ。

しかし何度入力しても、エラー表示が出てしまう。ネットワークに異常がある、そんな表示だ。

係員は何度も首をひねつた末に、屋根に登つて衛星通信のアンテナをチェックした。

パラボラの真ん中に、南洋青紅鳥が巣を作っていた。もう愛らしい雛たちも孵っている。

——あの電文は、明日フィジーから交換器を修理に来る連中に、フィジーから打つてもらおうように頼めばいいだろう。電文にも、当人が近々行くつて書いてあるんだし、お葬式なんて、死んでしまったら、いつやつても同じだし。まあ、いいんじゃないの。

係員は、そう結論した。

ピンセット型の指感アームの先っぽというのは、プラーテンさんが使っているクラスの物になると、ナノミクロン単位まで追隨するものなんだそうだ。ただ、それは単純化して例えれば、直径一メートルの円柱の先端が、削った鉛筆みたいに尖って、最終的に蜘蛛の糸みたいに細くなっている、そんな構造らしい。

「ベルリン大学や、インテルのスイス工場あたりなら、先端部を見ながら細かい作業も——いや、無理か。この時代の回路は、今の機械にや、ばらさんと入らんからな。もつともこれを造った昔の名人は、もつと原始的な治具で弄つとったわけじゃからな」

プラーテンさんはそんなことを呟きながら、最後の仕上げのために、意識を整えているようだ。

でも、僕はもうほとんど、ブルの復活を疑っていないかった。

気が散るといけないので後ろから見守っているが、さっきからのプラーテンさんの背中には、自負、という気配が、まるで陽炎みたいに立ち昇っている。

いざという時には、ただの自信なんかより、ずっと頼りになる気配だ。

僕の膝のお人形は、おなかを押えられて窮屈そうにごそごそ言ってるが、こいつは手を離すとすぐにブルの頭の方へ行こうとするので、仕方がない。さつき僕のほっぺたをつつついて、起こしてくれた恩義もあるんだけど。

やがてプラーテンさんの背中から、ふっ、と陽炎が消えた。

「……はいな。終わったよ」

僕はあわてて立ち上がった。

一瞬お人形のことを忘れていたので、床に転がった女の子が、きゅう、と鳴いた。

あ、悪い。ごめん。でも、今はブルが先だ。

「案外楽勝じゃったな」

プラーテンさんは、落ち着いた声で言った。

そう言うわりには、スコープを外した額やこめかみに、冷や汗の残りが浮いている。

僕は相変わらずグロナままのブルを覗きこんだ。

ぴよ、とブルが鳴いた。

「おはよう、マリオ」

しれっとして朝の挨拶なんかしてくる。

僕は一気に体中の力が抜けてしまい、床にへたりこんでしまった。

お人形が背中からよじ登って来て、このやるこのやる、と言うように頭をぺんぺんしているが、もう好きにして、って感じた。

「おはよう、じゃないね。現在、月曜の午前〇時三十一分四十二秒……あれ？
おかしいな」

「よしよし、メインRAMにもちゃんと繋がってるな」

プラーテンさんは満足気に大きな伸びをして、テーブルの冷めたコーヒーの残りを、ちよつと顔をしかめながら飲み干した。それから僕の頭からお人形をつまみ上げ、なにやら話しかけると、お人形はとことこ台所に走って行った。

「ブル、三百六十五の五分の十三は？」

「九百四十九だけど、それって、何？」

「いや、ちよつと言ってみただけ。じゃあ、そうだな。……ライラ！」

ぴよ、と言った後、3Dモニターにドットが並んで行く。

よし、正常だ。

「記憶の混乱やら演算機能やは、心配せんでもええよ。まあ、多少訳の解らんことを考えこんだり、予測不能の行動に走ったりはするかも知れんが――いづれ、お前さんと似たようなもんじゃろ」

ブルは修理中の記憶だけはさすがに無いらしく、ぴよぴよと訊ねてくる。

〔金曜の夜、マリオがお人形だらけになって、それから……おはよう?〕

「まあ、そこんこは、話せば長いことながら——」

〔話さなければ、わからない〕

おお、なんか、いい具合に仕上がってる。

プラーテンさんは、人形が運んで来たコーヒーのお代わりを、美味しそうに啜りながら言った。

皺の奥の目が、なんだか悪戯っぽく光っている。

「さて、積もる話に水をさすのもなんなんじゃが——さつき、ブル君のPスロットのキャッシュユから、面白いもんが出てきちゃったのう」

プラーテンさんは、一枚のP-RAMを、ぺらぺらと振って見せた。

「お前さんたちは、いったい何を企んどるんじゃ?」

【幕間】

まだ夜が明けきっていない裏庭の小道を、少女は井戸に向かっていった。両手に大きな水桶を下げている。

霜を踏む下駄の音が、竹林の笹をさりさりと震わせる。

四年前美山の生家を出るとき、母親が持たせてくれた紺緋の仕事着は、もうだいぶくたびれてしまっているが、その上に浅葱色の綿入れ半纏を羽織っているの、さほど寒くはない。

しかし、下仕事続きの少女の手は、あかざれ 輝で痛々しく荒れていた。

釣瓶で汲み上げたばかりの井戸の水は、真冬でも温かい。

少女はその水に、掌を浸した。

そんなことをすれば、その後がなお辛いのは判っている。

それでも少女は、しばらくの間、掌を温めずにはいらなかった。

もうひとつの桶に水を汲もうと、釣瓶の綱に手を掛けたとき、少女の手に、背後から別の手が添えられた。

少女の掌をそっくり包んでしまうような、大きく温かい掌だった。

驚いて振り返ると、肩越しに健康な白い歯が光った。

その家では唯一の洋服姿が、覆いかぶさるように立っていた。

少女の胸が、とくとくと鼓動を早める。

「……ぼん、あきまへん。うちの仕事どす」

「ぼんはぼんでも、無駄飯食らいのぼんや。水汲みくらいせんと、罰ばちがあたるやろ」

——昭和八年十二月二十三日早朝、旧西曆一九三三年の、京都、西陣。

ある綜統業そうしゅうの旧家の、裏庭での出来事である。

「……また夜明かししりましたの？」

「ああ、堺屋さんとこの仕事が、きょうの昼までの納めなんや」

その家の次男坊である青年は、家代々の稼業——西陣織の工部の中でも重要な位置にある、綜統の仕事には就かず、西洋人形の心織しんおりの道を選んでいた。

心織と西陣織にそれほどの差異があるとは、青年は思っていない。西陣織の工程で言えば、意匠と紋彫りに相当する作業だろうか。人形の感情様式を意匠化し、型紙に打ち込む。一メートル四方ほどの樹脂製の型紙に、最終的に数億個の様式孔が穿たれる。無論、作業の大半は自動化されている。あらかじめ定型化された、数万の感情様式が組み込まれた機械を用い、それをどう配列し関連付けをするかで、感情の個性が生じてくるのだ。

その要求される繊細さが日本人の感性と相性が良かったのか、心織は欧州の工艺品の工程の一部でありながら、大半日本に発注されてくる。それは芸術性を追求する結果でもあったが、同時に完成品の膨大なコストを鑑みての、当時として現実的な選択でもあった。

「けど、次の仕事がでけるのは、いつになることやら」

「……もう、明日ですか」

「……ああ。もう明日や」

少女は心細げに、眉を顰しこめた。

青年は朗らかに笑って見せた。

「心配すること、あらへん。この家では無駄飯食らいでも、神戸に行ったら、これでも技術将校様や。戦地に行くわけやあらへん」

遠慮し続ける少女を笑顔でいなしながら、青年は二つの水桶を下げて、先に立って母屋への小道を歩き始めた。

少女は無言で、青年の背を見つめながら、その後に従った。

霜はまだ溶けていない。

朝未だきの清冽な大気を震わせて、サイレンが響いた。そして、もう一度。

「……なんですよ？」

「ああ、今夜は提灯行列が、賑やかやるなあ。加茂では花火も上がるやろ。お生まれになったんや。やっとの、親王様やなあ」

昭和天皇はすでに四子を儲けていたが、いずれも女子だった。皇后は『女腹』と噂され、皇室内では側室を勧める動きすらあった。しかしその朝、ようやく長男——皇太子を得たのである。

巷では大変な話題だったそれらの動きを、少女も耳にしたことはあったのだが、日々の下仕事一切に紛れて、すぐには実感できなかった。

竹林の間から、母屋の背戸が見えた。

青年は竹林を抜け切る前に立ち止まり、水桶を置いて、少女を振り返った。

青年の手が、少女の手に重なる。

「……あかしまへん」

そんな気持ちとは裏腹の言葉が、少女の口をついた。

「ずっと、いてくれるな？」

青年の顔からは、いつもの笑みが消えていた。

「見合いななか、するな。——きっと、迎えにくる」

幾度となく身体を重ねて、終生溶け合わない心もあれば、ただ一度掌を重ねるだけで、響き合う心もある。

しかし、今の少女には、頭かぶりを振ることも、頷くこともできなかった。

意のままに生きる、ただそれだけのことが、今の少女には許されていないかった。



結局、少女は翌年の春、美山の生家に呼び戻され、土地の地主の跡継ぎの元に嫁いだ。

そして四人の子供と十人の孫たちに恵まれ、平成十一年の秋、それなりに幸福な、八十二歳の生涯を閉じた。

しかし、彼女が夢の中で、十六歳の冬の竹林に戻りながら息を引き取ったことは、誰にも悟れなかった。

青年は、昭和二十年三月十七日未明の神戸空襲で、三十六才の生涯を閉じた。

生家を出て以降、主に海軍関係の電装品開発に忙殺されていたため、独り身のままだった。

炎に巻かれ、新川の河原に向かう路地で、多くの逃げ惑う人々と共に、焼け落ちる家屋の軒に押し潰される刹那、青年もまた、冬の竹林で少女と掌を重ね合っていた。

そしてまた、こんなことも思っていた。

——あの日堺屋に納めた心織は、無事に欧州に渡り、人形たちの桜色の回路にされただろうか。



彼は生家で過ごした最後の冬、心織の中に、ある悪戯を織り込んでいた。

少女との別離を、臙げに予感していたからかも知れない。

依頼された四つの心織の内の二つは、それぞれ少年と少女を主題としていた。
モチーフ

その二つを彩る微細な柄の一部は、青年が密かに編み込んだ一種の虫食いのようなものであるから、特に名称は無かった。
バグ

それらが桜色の回路にされた時、任意抽出法的な条件下で、ある種ランダムの

共鳴現象を生じる。

青年は心の内で、その変則的イレギュラーな綾を、『赤い糸』と名付けていた。
——小指と小指を繋いでいる、あの、赤い糸だ。

【第八章】

1

「お前たちや、阿呆か」

ブルの恩人に嘘をつくわけにもいかないのか、かいつまんで事情を打ち明けると、プラーテンさんはかなり呆れ返ったみたいだった。

ブルの頭に元のボールをぽんと被せて、僕たちの顔を交互に睨んでいる。「あのお嬢ちゃんを助け出せるかどうか、まあそれはこっちに置いてくともだな、そもそも助け出してから、なんとするつもりじゃ」

僕とブルは顔を見合わせて、考えこんでしまった。

「……とりあえず、僕の家地下室にかくまって、それから——」

「それから——」

その後が続かないわけだ。

「阿呆じゃな」

「……そうですね」

ブルも元気なく、ぴよ、と続ける。

「そうかも」

それでもプラーテンさんは、案外怒ってる顔ではない。コーヒーを啜りながら、しきりに天井を見上げたりしている。何かじっくり考えてくれているみたいなお草だ。

あのお人形はようやく僕に飽きてくれたのか、プラーテンさんの膝に座っ

て、ときどき後ろを振り返っては、プラーテンさんと同じ格好をしようとしている。

「——阿呆、その一。今の状況じゃと、まず真っ先にお前さんが疑われる。お嬢ちゃんをお前さんの家になんぞかくまっとつたら、すぐに見つかって連れ戻されて、お前さんは刑務所送り、じゃないな、感化院送りになる。で、ブルはスクラップ、とまあ、こんな線じゃな」

「……そうですね」

「そうかも」

「まあ、今の感化院は、刑務所と同じように民主化されとるらしいから、そう辛くはないじゃろ。三度三度、きつちりおまんまも出るしな。作業報奨金も出るはずだから、出所してもすぐには食いつぱぐれもない」

「……いたんですか?」

「感化院は知らんが、刑務所には二十五年ばかりおつた。なかなか居心地のいいとこだったぞ」

「やっぱりプラーテンさんは、何か劇的な人生を歩んで来た人だと思つてたんだ。きつと無実の罪で投獄されて、怨念の果てに悟りを開いた、みたいな。」

「阿呆、その二。救い出される当人が、救い出されたがってない場合、それはそもそも救うことになつたらん」

「……そうですね」

今度はブルの『びよ』が、後に続かなかつた。

あれ、と思つてブルの3Dモニターを見ると、ずいぶん間を置いた後、ようやく『びよ』が鳴った。

er beuten、モニターにはそう浮かんていた。

——『奪いとる』?

僕はあつけにとられて、ブルの視覚ユニットを見つめた。

プラーテンさんも、ぽかんとしているみたいだ。

「救えるかどうか、僕にもわからない。僕はただ、どうしても、ライラにいてほしい」

プラーテンさんの頬つぺたの片方が、ひくひくと引きつった。

「……それでも、永遠に救うことができなかつたら？」

ブルは、ためらわずに答えた。

「永遠に失ってしまうより、永遠に怨まれた方がいい」

最高だ、と僕は思った。

これがブルって奴の底力なんだ。

そう、絶対にいなくしちゃだめだ。僕は僕自身、あの夜の教会で、そう言つたんじゃないか。

僕はまたブルを抱き締めて、ばんばん背中を叩いてやった。

お人形も同意見だつたらしく、プラーテンさんの膝で、ぱちぱちと拍手している。

プラーテンさんは、くすくすと笑い始めた。

お人形を膝から降ろして立ち上がり、後ろ向きに作業台に手を突いて、ひくひく肩を震わせている。

くすくす笑いが、大笑いに変わった。

部屋中に響くような大笑いだ。

もしかして大人から見ると笑われるような場面なのかな、などと不審に思っている、プラーテンさんはまだひいひいと笑いながらこちらを向いて、ブルの背中をぺんぺん叩いた。

「——ま、その心意気に免じて、阿呆その二は撤回してやろう」

それから足元のお人形に、また何か言いつけた。

お人形はとことごと、台所の扉に走って行った。

プラーテンさんは、どっしりと椅子に腰を落ち着けた。

「阿呆その一——これはなんとでもなる。そうじゃな、とりあえず、ここに

運んでくればいい」

「いいんですか？」

「おいおい、こんな話を聞いてお上に密告チクらなかつたら、もう儂も立派な共犯者なんじゃよ」

「……そう言えば、そうかも」

「そうかも」

お人形が、今度はウイスキーの角瓶と、グラスを二つお盆に乗せて来た。チーズやソーセージの小皿も乗っている。

けっこう力はあるんだが、さすがに角瓶を抱えてお酒を注ぐのは、体型的に辛いみたいだ。僕はお人形のお給仕に、手を貸してやった。

「昼のワインの飲みっぷりじゃと、お前さんも、いける口と見た」

確かに僕は父さんの血を引いているので、お酒はみんな嫌いじゃない。正直言つて、大好きだ。

「こいつもいけると、氣勢が上がっていいんじゃないがのう」

さすがにブルは、お酒は飲めない。そもそも口がない。でも、よく男は飲めないと駄目なんて言う大人がいるが、関係ないと思う。ついでに口だつて無くともいい。ぴよぴよくらいの方が、含蓄があつていい。

ちん、と軽く乾杯してから、プラーテンさんは言った。

「まあ、儂も当然容疑者扱いに入るじゃろうが、ちゃんと地下したに隠し蔵も造つてあるし、いざとなつたら、お嬢ちゃんを変装させるつて手もある」

確かにプラーテンさんなら、それは可能だろう。

「ほとぼりが冷めたら、そうじゃな、スイスの儂の実家が空き家になつとるから、そこに行つてもらうつてのも手じゃな。ど田舎の森中だから、まさか警察さっの手も回らんじゃる。ほつたて小屋みたいなもんじゃがな。——ま、そんなことは、後から考えてもいい。問題は、最初に横に置いといた件の方じゃ」

プラーテンさんは、ソーセージを噛りながら言った。

「お前たちや、どうやってローゼンレックに盗みに入るつもりだ」

「……それは、これから二人で計画するつもりなんですが」

プラーテンさんはソーセージを啜えたまま、DELLINUXのマシンを立ち上げた。

マシンのスロットにP-RAMをセットして、リーダーを立ち上げる。

十四インチの古い3Dモニターに、ローゼンレックの敷地内の構造が、ワイヤーフレームで表示された。

ライン河の東岸を底辺として、二キロ四方程度の四角い敷地内に、五棟の処理施設が五〇〇メートルぐらいの間隔で、ほぼ五角形に配置されている。てっぺんから右回りにナンバーが振ってある。

モニターではそんな感じだが、敷地内も敷地外もどっちも森や林が多いので、ライン河の土手から実際に見下ろした時は、最初は敷地全体の外郭は無いように見えた。でも良く見れば、敷地内の樹木は公園の中みたいに剪定されていたし、密度も薄かった。

まず眼下の五〇メートルが急な坂道、ちょっと先に金網の柵があって、さらに五〇〇メートル先に、横五〇〇メートルの間隔で二棟、そこからそれぞれ外側に広がった先に一棟づつ、さらに真ん中の彼方にもう一棟、そんな感じだ。一番遠い五角形のとっぺんから、その向こう、つまり東に車道が伸びていて、さらに二キロ先の南北に走る幹線道路と交わっていた。

プラーテンさんは、煙草に火をつけながら言った。

「マリオは実地検分をもう済ませたらしいし、ブルは当然、このP-RAMの中身は全部記憶してるわけじゃから、ちつとは考えがあらう。遠慮せず、試しに言うてみい」

僕はブルの肩を、つんつんと肘でつついた。

ブルも僕の横腹を、つんつんと肘でつついた。

うーん、ここはやつぱり、形だけでも主人の僕が先になんか言わないと、示しがつかないみたいだ。

「……パンフレットから判断した限り、この手前の左側、四号棟。ここがライラのいる建物だと思います。事前処理までは判りませんが、少なくとも最終処理は、ここのはずです。プラズマ・ユニットの処理できそうな仕様は、ここしかなかったので」

〔マリオと、同じ〕

「ふんふん、それから？」

プラータンさんは、表情の読めない嫌われ者の先生みたいな顔でうなずいた。

こういう先生の質問の仕方って、答えにくいんだよなあ——そう思いながら、僕は続けた。

「このてっぺんの一号棟で、すべてのオペレーション管理が行われるそうなので、実際の処理が稼働中は、こっちの四つは無人になるはずです。もちろんいっしょに稼働するわけじゃないでしょうから、てんでんばらばらの時間かもしれないですが、少なくとも木曜の夜の一定の時間帯、四号棟は無人になります」

〔マリオと、同じ〕

おいブル、お前ちょっとズルしてないか、とも思ったのだが、今のブルなら、それはないだろう。

「ふんふん、それから？」

仕方がない。僕はブーイングが出るのを覚悟で、まだ曖昧な考えを言ってみた。

「……日中、人の出入りのあるうちに紛れこんで、夜を待つのも有りかな、と、思ったりしてたんですが」

〔それ、ちよつとマリオと違う。四号棟の西側の裏口が、一号棟から完全に

死角になつてる。暗くなつてから、ライン河の土手から忍びこむ方がいいと思つて」

「うん、それも有りだと思う。お前といっしょに、もういっぺん見に行こうと思つてんだ」

その先は、まだ具体的に考えたわけじゃない。

僕たちは恐る恐る、先生——じゃない、プラーテンさんの反応を窺つた。

プラーテンさんは、両手で大きな×印を作つて、僕に向けた。

「マリオ、お前は零点。よく駅前の百貨店なんかで、それをやるうとして捕まつとる馬鹿がいるじゃろう。残るとき出るとき、二重のチェックをやり過ぎさにやらん。棟内監視用のカメラだつて、当然一号棟でチェックしとるだろう」

やっぱりなあ。

プラーテンさんは、それから×印をちよつと小さくして、ブルに向けた。

「ブル、まあ、さすがにお粗末とはいええ電腦積んどるだけあつて、コースの選択は的確じゃな。ただ、忍びこむと言つたが、お前さん、警備体勢はどう解釈した？」

「このP—R—A—Mには、そのデータが入つてないんで、再調査の必要があると……」

「どこでどうやつてそんなデータを調べる？」

ブルは絶句してしまつた。父さんの会社で処理場の施設は把握できても、警備会社のデータ入手なんて、それこそローゼンレックに忍びこむ以上に、難しいはずだ。

「——阿呆その三じゃな。ああ、その二は撤回してやつたんじゃつた。まあ、同じ阿呆なら、どっちでもいいがな」

プラーテンさんは、続けて煙草に火をつけた。

「これが大昔のネット時代じゃつたら、ハッキングなりなんなり古典的な手

段もあつたんじやろうが、現代は、そんな個人情報守秘無視の野蛮な時代とは違うからもう」

それは僕もあの夜から、何度も考えたことだった。ネット時代初期には、僕と同じくらいの年齢の少年が、米国防省のデータにアクセスしちゃって、全世界を消滅させかけたなんて話もある。でもそんな時代だって、僕の文系頭じゃ、なんにもできないだろうけど。

「でも、これ位の施設なら、大かた見当はつくぞ。警備会社任せの機械警備じゃな。外周の柵や各棟の侵入警報器は当然として、ライン河沿いの林は侵入が容易じゃから、巡回式の夜間警備機が、十や二十はうろついておるな。半分は対人用、半分は対機用ってとこか。両用を半数という線もあるが、あれは高価たかいから、そこまでコストはかけんじやろ。どのみち盗難保険はたっぷり掛けとるはずじゃから、まあ、信用代程度のはずじゃ」

プラーテンさんの言葉があんまりすらすら出てくるので、ちよつと失礼かな、と思いつながら、僕は念のため訊ねてみた。

「……やったこと、あるんですか？」

「何をじゃ？」

「えーと、その、泥棒」

「失敬なことを言う奴じゃな。儂がそんな男に見えるか」

見えないこともないので、困ってしまう。もと警備会社の人とは、全然思えないし。

「そんなケチな真似、死んでもやるもんか。儂は、この世におらん方がいい奴をひとり、ちよこつとあの世に送ってやっただけじゃ」

これは安心していいんだろうか。

「まあ、懲役食らって二十五年も雑居房におると、大概の裏仕事の知恵は身につくぞ。お前も社会に出て表が身についたら、試しに五年くらい、行つてくるといい」

それもやだなあ。

「ま、その前に、ちゃんと手に職を付けるのが先じゃ。それさえ有れば、今は刑務所むしよ中でもちゃんと稼げるし、腕も落ちん。工場の道具運びこんで、ずいぶん人形を造ったぞ。もっとも上がりのほとんどは、お上に持ってかれちまったがな。お上も馬鹿じゃないが、まったく血も涙もない。——えーと、どこまで言ったかな」

「両用はない、ってとこまでです」

「そうか。で、そこにお前ら二人が、暗くなるのを見計らって、のこの忍びこんだとするわな」

「はい」

「外周の柵のセンサーに、まず引っ掛かる」

「……はー」

「ま、それは儂がちよこつと細工をすれば、迂回できるかも知れん」

「はい」

「しかし、林を抜ける間に、どつちが先か判らんが、マリオ、お前さんは生物反応があるから、尻だか腹だか背中だか、とにかく当たりやすいところに、ぽん、と、ちっこい赤い羽が生えるな。あの麻酔弾の尻にくつついとる、小じやれたマーキングじゃ。一秒もかからんで昏倒する。一方ブルは、これはもう有無を言わず、実弾をぶちこまれる。で、おそらく十五分もせずには駆けつけた警備会社の連中が、グース力眠つとる馬鹿と、スクラップを回収する——こんな具合じゃ」

「防弾チョッキとか、消防用の耐熱スーツとか……」

「はいな。じゃが、どつちにしても警備機のセンサーに引っ掛かった時点で、警備会社に通報は入るぞ。敷地内のどこでしよつぴかれるか、それは運しいじゃな」

僕とブルはまた顔を見合わせて、考えこんでしまった。

「よし、それじゃ作戦タイムをやろう。僕は、ちょっとはばかりに行ってくる」

年寄りには便所が近うてのう、と呟きながら、プラーテンさんは扉の奥に消えた。

「いつそ送電線を切つて、ローゼンレック自体を止めちゃうつてのは？」

「P—R—A—Mの情報だと、停電の時は、すぐに非常用電源に切り替わっちゃう」

「じゃあ、脅迫電話なんか入れて、自発的に活動停止させるとか」

「ずっとは止めとけないよ。先送りするだけだし、たぶん、その後はもっと警戒嚴重になる」

「そうだよなあ……」

お人形も僕たちといっしょになって、モニターを前に首をひねっている。結局八方塞がりの内に、プラーテンさんは戻って来てしまった。

僕たちの表情を見定めているが、明らかに、元から期待してません、って顔だ。

「結論として、こりやもう『ぶちかまし』しかなかるうよ」

きつぱりと断言する。

「……ぶちかまし？」

「ぶちかまし？」

「あつちの業界用語じゃよ」

くいくい、と人差し指を曲げてみせるところを見ると、泥棒業界の言葉なんだろう。

「工事現場からブルトローザーとトラック盗んで、夜中に現金自動支払機に突進して、機械ごとかつさらっちゃう、あれじゃ。警備会社が駆けつける前にトンスラこいちまえば、成功率は極めて高いし、足も付きにくい」

おお、これは、確かに盲点だった。こつそりやろうとしてると、どうして

も途中で細かく引つ掛かってしまう。最初から細部を無視してしまえばいいんだ——って、感心してていいのかな。

「しかし、ライラは街道筋に突っ立ってるわけじゃないからな。それほど単純にはいかん」

発想の転換さえさせてくれれば、僕だつてそれほど馬鹿じゃない。

「……現実的じゃないかも知れませんが、方法論として、いいですか？」

「おう、なんでも言うてみい」

僕はモニターに浮かんでいるワイヤーフレームの、土手から四号棟の裏口までのコースをなぞった。

「装甲付きの四駆があれば、一気に抜けられると思います。その場合、最初の柵も、時間をかけていじくつて失敗するよりは、突き抜けた方が効率的ですよ。林や裏口前の警備機は、跳ね飛ばしちゃえばいい」

「当たり前じゃな」

「僕も、現実的じゃないかもしれないけど、爆薬が欲しい」

ブルも、びよびよ言ってる割には、物騒なことを言い出した。

四号棟の裏口と、その中の通路のあちこちを指さしている。

「裏口の電子ロックは、たぶん静脈認識だと思う」

「まあ、今時パスワードやら音声やら指紋やらつてこたあ、ないじゃろうな」

「だとすると、短時間で開けるなら爆破するしかないし、その衝撃で通路に四つある防災壁が作動しちゃったら、これも爆破するしかない。最後の処理室の扉だつて、そうだ。『ぶちかまし』で行くならだけど」

おお、ブルも冴えてる、と思つたら、プラテンさんは首を横に振った。でも、顔はにやにや笑っている。

「ちよいと、詰めが甘いかな。合計六つの扉か。——裏口の扉は、多少の時間的ロスがあつても、なるべくそつと開けたいな。そうすりゃ、防災壁はなしになるかもしれん。しかし、もし防災壁まで下りたとすると——今度はい

ちいち爆薬のセットなど、しとる暇がない。なんとしても警備会社の連中が駆けつける前に、トンスラセにやあならん」

プラーテンさんは煙草を横にくわえたまま、器用にウィスキーを口にした。これは僕の父さんも時々やる仕事で、頭が良く働くんさそうさだ。

「――押えも入れて、爆薬はちつこいの二発。それに六連装のグレネード・ランチャー。こんなもんじゃろ」

なるほど、それで完璧かもしれない。でも、そんなもの、どこで手に入れるんだろう。

これって机上の空論って奴じゃないかな、と顔を見合わせる僕とブルをよそに、プラーテンさんはマウスを操って、四号棟の内部を拡大した。

「しかしまあ、この通路は、なんでこうぐりぐりと折れ曲がってるんじゃ。螺旋階段じゃあるまいし」

「放射能拡散対策も万全、なんてパンフレットに書いてありましたけど」

「そんなに古い上物にも見えんがのう」

「……環境保護団体対策じゃないでしょうか」

「なるほどなあ。いまだに軽水核融合と、前世代核融合や核分裂の区別もつかん馬鹿が、駅前で大声でどなったりするからのう」

プラーテンさんは、不機嫌そうに顔をしかめた。

「ここをブルに一気走りしてもらうとなると、少々骨じゃな」

「僕も行きますか？」

「阿呆、その――いくつか忘れちゃった。生身が直近でランチャー使うか？この程度の施設に拡散性の毒物があるとも思えんが、直接吸ったらコロリくらの触媒は、使つとるだろう」

「……すみません」

「まあええ。気持ちは解つとる。それより、ブル、お前はどのくらいで走れる？」

〔制限時速、二〇キロ〕

「でも、死ぬ気になると、六〇キロくらい出ます」

「加速段階でウィリーして、引っくり返るじゃろう」

「……はい」

プラーテンさんはブルの足元を覗きこんで、あちこち触診した。

無言のままブルの後ろ頭を押しておじぎさせたりするので、ブルは何度か、びよ、と鳴いた。

時々指を嘗めて苦い顔をしたりしているのは、多分オイルの具合でも診てるんだらう。

「もうちょい前傾姿勢が取れば、三・四〇キロは行けそうじゃな。それと、制動回路もいじらんと、曲がり角ごとにガンガン壁にぶち当たって、しまいにやバラけちまう。いじつても、激突は避けられんか。装甲を着せる必要があるな。そうすりゃ、モニター記録されても偽装になるし、もし突入前に着弾しても——」

なんだか話がどんどん膨らんで行くので、怖いような気もしたが、やつぱりわくわくの方が強かった。

プラーテンさんは、ブルのハンド・ユニットもチェックし始めた。

もう独り言はないが、想像はつく。ライラを抱いて脱出できるか、確認しているのだ。

「よし、決まりじゃ」

やがて顔を上げ、僕に向きなおって、

「マリオ、お前は家に帰って、とりあえず寝ておけ。さっき起きたばかりじやが、次にいつ寝られるか判らんぞ」

「またここに泊まっても——」

「違う違う。お前はどんな事情をでっち上げてでも、木曜の処理のきっちりした時間を、親父さんから聞き出してくるんじや。もしそれまでにブルが仕

上がらなかつたら、苦勞覚悟で、別の手を考えにやならん」

「はい」

その時なら、脅迫電話も有りだろう。

「明日は機材調達に出るから、そうじゃな、九時半頃まで来てくれりゃいい。儂も、今日はもう寝る。ブルはここで充電でもしながら、お嬢ちゃんのことでも考えとれ。本番じゃ、お前が主役なんじゃからな」

「うん！」

今夜も、ちゃんと『！』が付いていた。

2

アレク爺さんは晴れ晴れとした気持ちで、初夏の街並みを歩いていて、石造りの街並みの屋根の間を、白い雲が小気味よい速さで、行く手のライン河の方向に流れて行く。

石畳の街路は、朝の打ち水をまだ透き間に残し、きらきらと輝いている。手にした大きめのポストン・バッグの重さも、全く苦にならない。

「どうじゃ、ブル、足元の具合は。もう慣れたか」

マリオと並んで付いてくるだるまストープに、上機嫌で声を掛ける。

「ちよいと、あそこの角まで走って、戻って来てみて」

ブルフィンチは、彼方の角まで軽やかに加速すると、それまでしたくともできなかった滑らかなターンを見せて、誇らしげにこちらに戻って来た。

「いい感じだ」

「すごいや」

マリオが素直な感嘆の声を上げた。

「まあ、儂が本気を出せば、こんなもんじゃよ」

儂もまあ、よくこんな臆面もない腕自慢を、朝っぱらから口にできるもんじゃな——。

アレク爺さんは、内心、自分自身に驚いていた。

昨夜マリオを見送ってから、いったん床に着いたのだが、年寄りには眠りが浅い。明け方、ふとブルフィンチの足周りの制動強化が、手持ちのパーツ類でも可能なのに気づき、起き出して即座に改造を始めた。マリオが父親からの情報収集と、木曜までの欠席届けを済ませて店に現れる頃には、すでに改造は終わり、こうしていっしょに資材調達に出てきている。

——奪いとる。

それは、自分が再びこの世に送り出した桜色の感情が、もうひとつの存在に対して発した言葉だった。それが正しいのかどうか、そんなことは、もうどうでもいい。自分の口出しできることではない。

——永遠に失うよりは、永遠に怨まれた方がいい。

ブルフィンチのその一言で、あの晩から胸の中に棲み着いていた雨夜の猫は、また元気に朝の野良に旅立って行ったのだ。

アレク爺さんは、まだ後ろの二人は半信半疑らしい、例の買い物のお店に向かって、雲の流れと共に歩き続けた。

3

プラーテンさんは、『泥棒市場』の前の駐車場を突っ切って、店の方に向かっていている。

なるほど、名前だけは今回の目的にぴったりなのかもしれないが、ここは去年できたばかりの、ただのディスカウント・ストアのはずだ。

まあ、食品や日用品だけでなく、ちょっとした建材や道具類も扱っている

から、とりあえずそっち系の部品を仕入れるつもりなのかもしれない。

『泥棒市場』は草原の東の土手沿いで、鰻の寝床みたいな平屋になっている。平屋といっても、ちよつと一時間やそこらでは回りきれないほどの広さ、というか、長さだ。

昔はちよつとじめじめした湿地みたいだった所を、どこか別の国からやって来た人が買い上げて、やっぱりどこか別の国から仕入れてくる商品を、一年中投げ売りしている。街の商店なんかはいつも目の敵にしているが、まあ、いわゆるモノが違うという奴で、それなりに共存共栄しているみたいだ。

まだ開店したばかりの時間なので、駐車している車は少なく、店の前の特価品のワゴンなんかも、整然としていて見ている人もほとんどいない。

「ブル、お前、買い物したことあるんじゃないか」

僕はブルに訊いてみた。

家では主婦役万端勤めてもらっているの、安売り店なんかには詳しくそう
だ。

「チラシ見て入ったことあるけど、買ったこと、ない」

「なんで」

「ちよつと、安すぎ」

「あ、なんか、わかる」

「バツタもんばつかりなんじゃないかな。偽物じゃなくて、質流れとか、故買屋のとか。やっぱり家じゃ変な物食べさせたくないし、お父さん、近ごろは結構稼ぐから、家計簿だいじよぶだし」

あんまりこれから男になる奴の会話じゃないような気もしたが、まあ、しつかり者の主夫でもいいわけだ。

プラーテンさんは店の中には入らず、横手の社員通用口の方に戻った。
店の人への用事みたいだ。

「ここで待っていますか？」

「いや、いつしよに來い」

プラーテンさんは、いわくありげに笑って見せた。

「マリオ、お前はなるべくむつつりした顔で、黙って立ってりやええ。今のお前の顔は、黙って立ってりや、結構場数を踏んだ筋もの面じゃ。ガタイも横幅だけはでかいしな」

プラーテンさんはそう言っつて、自分の顔も、じわり、と変化させた。

初めて会った時みたいなの、笑顔ではあるんだが、かなり暗黒面っぽい顔だ。

ああ、やっぱりこの店で、なんか危ない物を調達するんだな。

僕は覚悟を決めて、扉を押すプラーテンさんに従った。

中は普通の会社の事務所と、そんなに変わらなかつた。左の横手に受付があつて、奥に続く両側に幾つか扉があつて、それらしいプレートが並んでいる。スーパーの事務所なんかに比べれば、むしろ綺麗に片付きすぎてる感じだ。

「ごめんよ」

プラーテンさんは、声もなんだか押さえが利いている。

受付には、けっこう美人の受付嬢さんが座っていた。

「お客様の御案内は、店の方の受付でお伺いたしますが」

満点の笑顔だが、目が笑っていない。こういう所で、よく見るタイプの笑顔だ。笑顔は無料、つて奴。

「店長さんにお会いしたいんじゃが」

「どんなご用件でしょう」

「昔なじみじゃ。懐かしくて、寄つてみた」

「失礼ですが、お名前を伺えますか」

受付嬢は内線電話で、二言三言小声で話した後、また満点の笑顔を向けた。

「申し訳ございません。店長は、お名前が記憶にないと申しておりますが」

「……それじゃ、こう言つてみてくれんか」

プラーテンさんは、なにかぼそぼそと受付嬢に伝えた。

小声なのでよく聞き取れなかったが、破壊、とか、頭部、とか言ったみたいだ。

音声識別は、ブルの方が得意なはずだ。

僕はこっそりブルに耳打ちした。

「おい、今、なんて言った？」

「下タマカチ割りの、アレク」

ああ、やつぱり。

受付嬢さんも今度は妙な顔をして、内線電話に話しかけた。

五秒もたたない内に、通路の一番奥の扉が勢いよく開いて、でつぶり太った初老の店長さんが駆け出して来た。

「いやあ、プラーテンさん、久しぶりですなあ。相変わらずご冗談がお好きで、わはははは」

『わはははは』は、笑い声というより、大声の台詞って感じた。

白ワイシャツに吊りズボンのお腹が、僕より勝っている。

プラーテンさんの肩を抱いてあわてて引っこんで行くので、僕とブルも後に続いた。

受付嬢さんはブルに目を止めると、今度は無料じゃない笑顔になって、ひらひらと手を振ったりした。

なんだ、いい人じゃないか。

僕はついプラーテンさんの言いつけを忘れて、頬笑みかけてしまった。

案内嬢さんはぎくりと身を引いて、あわてて何か仕事をしているみたいなおポーズになった。

なるほど、僕は今、かなり破壊力のある顔をしているみたいだ。



店長室の中もござっぱりして、お店のオフィスというより、事務系のオフィスに見えた。でも、それがあんまり整い過ぎてるといふか、実際そこで仕事をしている感じがしない。

それはただの僕の先入観だけではなかったらしい。

部屋の一角のテーブルを挟んで、プラーテンさんと向かい合って座った店長さんの顔は、もうさつきまでの人の良さそうな笑顔を、完全に放棄していた。仇敵とまでは行かないが、やな奴が来たなあ、そんな顔だ。

僕はこれはたとえばフランス映画の、ギャング物みたいなシーンに違いないと結論し、プラーテンさんの後ろに立って、背中で手を組んでみた。何かことが起こったら、えーと、背中の腰のあたりから、拳銃を抜いたりするんだ。持ってないけど。

隣のブルも、同じポーズだ。

プラーテンさんは、テーブルのシガレット・ボックスに手を伸ばし、おもむろに煙草をくわえた。

店長さんは不承不承といった手つきで、ライターを差し出した。

どうやらプラーテンさんの方が、格が上らしい。

「しかし、驚きましたなあ。こんな街で、あなたとお会いするとは」

「僕はもう二十年、ここに腰を落ち着けるとよ。知ってたら、お前さん、この街なんぞに店は出さなかつたじゃろうな」

顔は見えないが、苦み走った微笑が目に見えるようだ。

「そんなことは——チェーン店ですから。立地条件さえ整っていれば、どこにでも出店しますよ」

「そりゃそうじゃろう。堅気の需要が多いところなら、当然、堅気じゃない需要も多かるう」

店長さんは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「そんな顔をしなくてもええよ。あんたが出所以来、人死にが出るような荒事に手を染めとらんことは、ちゃんと知っとる」

プラーテンさんは、ボストン・バッグをずっしりとテーブルに乗せた。何が入っているのかは知らないが、朝出るとき僕が持ってあげようとして、断られた奴だ。

「別に強請に来たわけじゃない。そう邪険にしなさんな。今日は、ちょっと買い物に寄らせてもらっただけじゃ」

バッグのジッパーを開くと——一〇〇ユーロの札束が、ぎっしり詰まっている。

僕は思わず顔を崩しかけたが、あわててむっつりに戻った。

「それにしてもまあ、そのものズバリの看板を出したもんじゃなあ」

「——木を隠すには森の中、ってね」

店長さんの口調が、ちょっと変わった。仲間口調だ。

札束をひとつ手にとってばらばらさばいているが、あくまでもただの確認で、珍しくもないって顔だ。

「……軍需用の掌握センサーが、二十対つてとこかな。あんたの仕事だと」「いんや、ちよつと違う。ハンド・ユニットの八〇型が一对、これは民需用でええ。掌握センサーも、無論込みで」

「一对でいいのか？」

店長さんはバッグの嵩を眺めて、意外そうな顔をした。

「まだ続きがあるんじゃよ。まず、足跡あしの付かない防弾使用の四駆が一台。装甲もうまくカモフラージュしてあって、ちよつと見レジャー用に見える、そんなのがあったじゃろう。山の斜面から街道狙いに使えるみたいな、小回りの利く奴じゃ。それから、CFMRP（炭素繊維超強化プラスチック）の五ミリ厚が、二メートル角で、そうじゃな、五枚。それと、最低六連装の、グレネード・ランチャー。一〇連装なんてのは、できとらんかな。重すぎる

とちよつと困つちまうんで、二〇ミリ弾でええわ。最後に、電子ロック破砕用の、小型プラスチック花火がふたつ、と、まあ、そんなところじゃ」

話を聞いているうちに、なんだか店長さんの顔色が変わってきた。

険しくなったんじゃないかって、その逆だ。

しまいには、優しそうで悲しそうで、よぼよぼのお爺さんを老人ホームに送って行く親孝行の息子、そんな感じになった。

店長さんは自分でも煙草に火をつけて、ふう、と煙を吐いた。

「——悪いがアレクさん、この取引は無しだ」

「これじゃ足らんか。古い相場しか知らんから、倍持つて来てみたんじゃないが、あとはスイス銀行の口座には——」

「そういう問題じゃないんだよ」

店長さんはテーブル越しに腕を伸ばし、プラーテンさんの肩に、そつと手を置いた。

「あなたには、刑務所むしよじゃあ、ずいぶん可愛がってもらった。あんたも、みんなに一目置かれてたしなあ。でも、それはあんたがきつちりした堅気の職人だったからで、そのきつちりした職人が、あえてあの『庄屋殺し』の犯行やまを踏んだとこが、なんというか、あんたの値打ちだったわけだ」

「庄屋の息子じゃ」

「ああ、そうだったなあ」

店長さんはプラーテンさんの肩を包んだ手に、ちよつと力をこめた。

「何があつたか知らないが、こんだけありゃあ、故郷で楽に隠居できるじゃないか。あんたの稼ぎなら、その気になりゃあ、地中海のホテル住まいだつてできるだろ。なにも今更、畑やま違いの犯行やまなんぞ踏まなくてもいいじゃないか」

「……何を考えとる？」

「州立銀行、それとも都市銀か、どっちにしても『ぶちかます』と見た」

「なんで儂がそんなケチな真似をせにやあならん。勘違いするな」

プラーテンさんは不機嫌に言つて、僕たちを振り返つた。

「こいつらは、今の儂の舎弟じゃ。こいつらが男になるのに、必要なんじゃ」
店長さんは怪訝そうに立つて来て、僕を睨んだ。

目を細めて、じつくり厳しく、品定めしている。

ある意味、聖子に品定めされるより、ずっと緊張する。

僕は苦勞して、むっつり顔が続けた。

「――面構えは悪くないが、まだガキじゃないのか？」

「ガキじゃ。しかし、おとしな侠気はある」

「ふうむ」

それから、ブルに目を移した。

ブルは一瞬、ぴよ、と鳴いたが、なんとか無言で通したみたいだ。

「――使えねえな。軍需用のロボットなら、すぐ取り寄せできるぞ」

店長さんはブルの頭をぽんと叩いて、あっさりプラーテンさんに交換を進言した。

「それも勘違いするな。そっちが主役じゃ」

プラーテンさんが、もっと不機嫌そうに答える。

店長さんは、今までとは打つて変わった、なんだか気が抜けたみたいな顔になった。

目を丸くして、まじまじとブルを見つめている。

「……このだるまストーブが、『男になる』？」

「そうじゃ」

次の反応は、もう見当がついた。

でも、昨夜のプラーテンさんと言ひ、なんでみんなブルが男になろうとすると、大笑いするんだらう。そりゃあ見た目はちよつとあれかもしれないが、そんなにソファアの背中をばんばん叩いて、涙まで流して爆笑するほどのこ

とだろうか。それって、あんまり失礼じゃないか。

店長さんはハンカチで顔を拭きながら、肩のひくひくを鎮めているようだった。

でも、次に顔を上げた時には、真顔に戻っていた。

ただの真顔じゃなく、商談を続ける気になってくれたみたいだ。

店長さんは向かいの席に戻って、胸ポケットからPOSの小型無線端末を取り出した。

お店の在庫チェックなんかで、よく見かける機械だ。

「――花火は明日の午後、ランチャ―は一〇連装のロシア製が取り寄せできるが、どうがんばっても明後日の朝になる。後の物は、在庫があるよ。倉庫がちよつと遠いんで、午後の届けになるがな」

「それで、ええ。これで足りるかの？」

「けっこうお釣りが出ると思うぜ」

「じゃあ、それは口止め料ってとこで」

「見くびっちゃいけねえ。これでも信用を商う身だ。表の店の鮮度チェックだって、毎朝ちゃんとやってる」

商談成立ってことなんだろう。

プラーテンさんは、立ち上がって僕の肩に手を置いた。

そして店長さんに向かって、気軽な調子で言った。

「じゃあ、そのお釣り分で、こいつに四駆の運転、教えてやってくれは？」

「ああ。一週間もあれば、みっちり仕込んでやるぜ」

「木曜の夕方までには、帰して欲しいんじゃない」

「無茶言うなよ。『山から街道狙い』くらのテクは、いるんだろう」

「できるとこまでいい。期間優先でお願いするよ」

「いくらなんでも、三日ちよつとじゃなあ」

「そこをなんとか」

プラーテンさんは、店長さんに頭を下げた。

「あなたに、そう下手に出られちゃなあ。——ちよつと待っていてくれ。そつち関係は、カー用品のマネージャーが担当だ」

店長さんは事務機のインター・ホンに、早口でなにかまくし立てた。

でも、すんなりとは行かなかつたらしい。

「え、何、クレーム？ また、あの婆さんか？ 交換してやって、菓子折りやつとけ。何？ もうやった？ じゃあ、商品券、特クラスで。とにかくさつさと——え？ 何やってんだよまったく。大体、お前は頭の下げ方が下手なんだよ。少しはお客様の心を読めよ。たいがいのお客様の不満なんてものは、頭下げときゃ、後ろつかわに抜けちまうんだよ。——ああ、解つた。俺が出るわ」

今度は、店長さんがプラーテンさんに、深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。少々お待ちください」

もう表の店長さんになつてゐた。

まったくもう近頃は表のお客様の方が始末に負えません、などと呟きながら、店長さんが出て行つてしまつたので、僕は恐る恐るプラーテンさんに訊ねた。

「——やっぱり、僕が運転する……んですよね？」

プラーテンさんは、にこやかに答えた。

「僕はこの齢になるまで、車なんてほとんど乗つとらん。無論、免許もない。

それともマリオ、お前、ブルのキャタピラでペダル踏めると思うか？」

そうだよなあ。でも、家にも車はないし、そりゃあ友達の家のおトマ車をいっしょに悪戯したりして、走らせるくらいはできるけど、なんといつても四駆で土手で林だもんなあ。

隣のブルが、ぴよ、と鳴いた。

「生きて帰ってきてね」

うん。これはもう、やるしかないことなんだ。

「任せておけて」

ほんとは天に向かって祈りを捧げたいところなんだが、あの人とは絶交したままだしなあ。

「車なんて、軽い軽い」

僕は心の中で、めいっぱい強がりを繰り返し続けた。

【第九章】

1

まあ、それからの三日間、僕が『どこか山の中のなんかの教習所』で、『山から一気になんかやってまた駆け上がってくる練習』をやった間のことはいずれまたじっくり語る時が来ると思う。でも、今は何も語りたくない。

とにかく木曜の夜、すっかり日が暮れてから、僕はようやくプラーテンさんの店に帰り着いた。

扉には『臨時休業』の札が、月曜の朝出る時と同じように、ぶら下がったままだった。

ウィンドーも窓も真っ暗だ。きっと奥の仕事場に籠もっているんだろう。扉の内鍵もかかったままだったので、僕は仕方なく強めにノックしてみた。ずいぶん間をおいて、どちらじゃの、というプラーテンさんの声が聞こえた。

「ただいま。マリオです」

店に明りが点いて、扉がちよつと開くと、あのお人形が足に飛びついて来た。

扉から覗いたプラーテンさんは、もともと脂っ気のない顔が、さらに乾いた感じだった。

「おう、お帰り。なんとか間に合ったようじゃな」

充血した目は、しょぼつきながらも、ちゃんと光っている。

たぶん、あれからあまり寝ていないんだろう。

僕もおんなじような目をしていると思うが、顔は逆に脂っぽい。年齢の差だ。

「これ、お釣りと領収書です」

懐に入っている札束が、帰る途中ずっと気になっていたの、僕は真っ先に手渡した。

「おう、あいつも良心的じゃな」

店に入ると一気に力が抜けて、僕はその場に腰を落としてしまった。

「……すみません」

太ももから肩を指そうとしたお人形の足が、ベルトと腰の間に挟まって、お人形はきゅうきゅう鳴きながら、じたばたともがいた。

ズボンの腰も、ずいぶん緩くなっているみたいだ。

僕は無気力に、お人形を引つ張り上げた。ほんとにもう、お前は好きにしていいよ。

「座つとれ。まだ時間はある。気付け薬を持ってこよう」

ちよつとしてプラーテンさんが出してくれたのは、ウイスキーのグラスだった。

眠っちゃうんじゃないかなあ、とためらっていると、プラーテンさんは微笑しながら、グラスを僕の手押しつけた。

「大丈夫。酒飲みのウイスキーは、覚醒剤シヤブといっしょじゃ」

本当だった。喉とお腹がかつと熱くなって、頭がすきつとしてきた。

「おう、腫れが引いてみると、お前、けっこういい男じゃな」

「……これ、もう使えませんか」

僕は教習所で卒業記念(?)にもらった、偽造の運転免許証を差し出した。その写真を見て、プラーテンさんはくすくすと笑った。

教習所に着いた時点の僕の顔から、まともな時はこうだろう、みたいな毛

ンタージュで作ってあるので、全然似ていない。十八歳を想定してるみたいだし。

「まあ今夜一晩くらいは、なんとかだろう。着くまでに事故らなきゃな」

「普通の道なら大丈夫です」

「おう、自信ありじゃな」

「でも、あそこの仲間入りは無理みたいです。おっとりしすぎて、やま犯行には向かないって言われちゃいました」

プラーテンさんは、またおかしそうに笑った。

「でも、送別会でやったシュトルムの詩の暗唱は、大受けでした。酔っ払って泣いてる人もいたし」

僕はまたウイスキーを口にふくんだ。美味しいんだよなあ。未成年だけど。

「……ブルは元気ですか」

「おう、あとは最後の仕上げだけじゃ。ご対面と行こうかの」

プラーテンさんの機嫌から、改造が順調に仕上がってるのは、もうわかる。でもどつちにしろ、僕とおんなじ急ごしらえだ。

とにかく元気に丈夫に仕上がってればいい、そう思いながら、僕はプラーテンさんに続いてカーテンをくぐった。

「おかえり、マリオ」

ただいま、と答えようとして、僕は絶句した。

「かっこいい？」

「か……かっこいい」

何かすごく気合いの入った、戦闘用ロボットみたいだ。軍事用っぽいのは、つや消しの黒と暗灰色の迷彩が施されているからだ。でもデザイン自体は、むしろ中世の騎士の甲冑に近い。

キヤタピラのガードなんかも装備されて、そこがまた鎧の腰みたいだ。

胴体の前に、モニターの投射レンズの穴を挟んで、なにか取り外しの利き

そんな突起があるが、それがきつと小型爆薬なんだろう。

もともとのだるまっぽい体型も、この装甲だと、いかにも機能の凝縮された優れ物、そんな感じだ。

これなら槍を持って騎馬で突入すれば、敵だろうが火を吹く竜だろうが、お茶の子だ。

「そんなに、かつこいい？」

「最高」

アルコールとアドレナリンが僕の頭の中を駆け巡り、体中にやる気がみなぎってきた。

「ランチャーは、僕の美的感覚だと六連装を両肩に並べてやりたいんじゃが、どうしても頭のでっぺんになっちゃう。曲がり角じゃ、壁にガンガンぶち当たりながら突進する想定なんだな。そのかわり、一〇連装の新型じゃ」

美的にも、問題ないと思う。ローマ軍の兵士の兜だって、ヤーパンのサムライだって、頭に威嚇が入ってる。

いつのまにかブルによじ登ったお人形も、グレネード・ランチャーの武骨な突起を、お気に入りっぽく撫で回している。

「新しいハンド・ユニットも、なるべく横に張り出さんように、ちょい前よりになっとる。この方が、眠り姫を抱えてお城からトンズラするにも便利じゃしな。あと、キャタピラも合金の奴に換えといた。でも仕事が終わったら、強化ゴムに戻さんとな。ここは石と土間じゃから問題ないが、普通の家じゃと、床が目茶苦茶になっちゃう」

「もう行けますか」

僕はすぐにもいっしょに突進したいような気になっていた。

「あわてなさんな。まだ時間はあるし、最後の仕上げがあると云ったじゃろう」

プラーテンさんは、一〇センチ角くらいの、鈍い銀色の金属板を持ち出し

た。

「これを付けちまうと投射レンズが隠れちまうんで、最後に残しといた。お前たち、もう話はいいか」

「もうみんな解ってるよな、ブル」

「うん、だいじょうぶ」

プラーテンさんはブルのCFMRPの胸板に、その紋章らしい金属板を、ビス打ち機で固定し始めた。

天に向かって吼える獅子と、それを取り巻く古風なギリシャ文字が、レリーフになっている。

「これは、儂が子供の頃絵本で見て、ずっと憧れとった紋章じゃ。昔造って、そのうちなんかに使おうと思ってたんじゃが、ちようどええ。時間があれば、お前の家の紋章でも付けてやるんじゃが」

「こっちの方が、絶対、いいです」

僕の家紋は、月桂樹と鳩だ。それはそれで叙情的でいいんだが、この場合、雄々しさの方が大事だ。

「よし、完成じゃ」

プラーテンさんは紋章に息を吹きかけて、セーム皮で拭き上げた。

「さて、それじゃ、出陣と行こうかの」

「行くぞ、ブル」

もうくぐもった『びよ』しか聞こえないが、きつとなんか頼もしい返事を、返してくれたに違いない。

ブルの勇姿を隠すのはちょっと残念だったが、このままだと外ではあんまり目立ちすぎるので、手近のシートを掛けてやる。でも、それだって軍用列車で運ばれる兵器みたいだ。

僕について店の通路をざりざりと進む音も、ゴムの時より、すごく重々しい。

お人形もその気になって、元気に腕を振って進軍してくる。

外に出る時、プラテンさんはお人形の襟首を猫みたいに掴んで、扉の中に戻してやった。

「お前は留守番じゃ。ちっと荒事なんぞな」

しきりに抗議の声をあげているが、これは仕方がない。

窓の方に回ってちよこちよこ手を振っているお人形に、僕たちは手を振り返してやった。

見送りが一人でもいてくれるのは、これから戦場に赴く者たちにとって、心強いものだ。

戦場じゃなくて、誘拐なんだけど。

「車はどこに置いた」

「二ブロック先の駐車場です。足がつくと困るんで」

「おう、だいぶ鍛えられてきたのう」

うーん、ほんとは知り合いたくない知り合いが、どんどん増えてるだけで、気もするんだけど。

駐車場はちよつと遠かったが、この街はまだ管理人さんのいる所がほとんどなので、コイン式で近いのは、そこしか無かった。

プラテンさんには後ろに座ってもらい、サイド・シートにブルを積んで、僕は運転席に座った。

ちよつと武者震いなんかした後で、臆病風がほんの少し吹きそうになったような気がしたので、僕は両手で頬つべたを、ぱん、と叩いた。

まだ残っているあちこちの腫れから、ちよつどいい痛みが走って、弱気はどこかに飛んで消えた。

聖子、ありがとう。

傾斜四〇度の土手も、林の中も、この車なら大丈夫だ。

街道を走る現金輸送車と違って、相手はでかくて動かない建物だし。

キーを回しクラッチをローに入れハンドブレーキを外してアクセル、そんな動きは、もう考えなくても手と足が覚えている。

僕はただこの先のことだけを考えて、車を発進させた。

2

柱時計の重い弦の響きが、一度だけ居間の静寂を乱し、尾を引いて消えた。

——午後、八時半。

優蔵は読み終えた新聞を畳んで、居間のテーブルに戻した。

食後のコーヒーは飲み終えてしまったし、次の務め——神への祈りまで、まだ三十分残っている。

九時丁度には、ライラがローゼンレックから天に召される。

やり残したことがあるとは、優蔵はすでに思っていない。

夕食後、聖子は二階の自室に籠もってしまったが、昨夜までは普段のように食後の団欒に加わっていたし、学校でも普通に生活していると聞いている。

九時になれば、親子三人で、教会で祈りを捧げることができるだろう。

たとえ心が碎かれるような痛みでも、人はそれを思い出に変えることさえできれば、やがて時の流れに乗せて、緩やかに見送ってやれるものだ。そう、ちよūdō、故郷の川の夏の夜を彩る、燈籠流しのように。

祈りの時間まで、もう一度祭壇の準備を整えておこう、そう思ってソファを立った時、玄関の呼び鈴が鳴った。

台所で洗い物をしていた俊江の、はあい、という明るい声が、それに応えた。

「いいよ、僕が出よう」

優蔵も声だけで俊江を遮って、教会に続く勝手口とは反対の、玄関に向か

った。

やや和風に設えた格子戸風の玄関の扉を開いて、優蔵は啞然とした。

「やあ、久しぶりじゃの」

ヨゼフ老人が、屈託のない笑顔で手を振っている。

「駅から電話しようとも思ったんじゃないが、どうも僕は、電話つちゅう奴が苦手での」

優蔵も破顔し、老人の手を握った。

「——いやあ、お久しぶりです、ヨゼフさん」

情深いこの老人は、自分たち家族と共にライラを弔うため、はるばるスイスから訪ねて来てくれたに違いない。

老人は山で会った時よりも、ずいぶん健康そうに見えた。まるで海水浴の後のように、日に焼けているからだ。山ではもうそんな日差しなのだろうか。

台所にも、玄関での声が届いたのだろう。あらあらまあまあと姿を現わした俊江に、優蔵は老人を引き合わせた。

根っから人の良い妻は、旧知の友人を迎えるように喜びながら、老人と握手を交わした。

二人が交わす挨拶の弾んだ響きが、優蔵の心を和ませた。

すでに悟ったつもりでいても、精神の内奥では、やはりそれまで沈みきっていたのだ。

「聖子を呼んできてくれないか」

これで娘の気も幾分は晴れてくれるだろう、そう期待しながら俊江に頼んだ後、優蔵は老人の横の大きなキャスター付きケースを、家の中に引き入れようとした。

見かけは大きいが、老人の一人旅なのだから、大して重くはないだろう。そう考えて普通の力しか込めなかったのだが、それだけではケースは動かなかった。

優蔵の意外そうな様子を察して、老人は意味ありげな笑顔を向けた。

「まだ眠っておるし、ぬか喜びになつてもなんじゃから、ほんとは元気になつてから紹介したかつたんじゃが、やつぱり手元にいないと心配での。——ライラの双子の姉さんが、見つかつたんじゃ」

優蔵は、驚きと困惑を同時に感じた。

それは——素晴らしいことなのだろう。

しかし優蔵は、老人の真意を計りかねた。

今この日に、聖子にそれを伝えるということは、最愛の妹を失つて悲嘆にくれている姉に、さあこれが代わりの妹ですよと、別の娘を差し出すようなものだ。ヨゼフ爺さんという人は、その程度の心の機微も解らない人間だつたらうか。

「で、ライラは、もうこの家に戻つておるかの？」

老人は無邪気な笑顔のまま、優蔵の困惑にさらに拍車をかけた。

そんな優蔵の表情を見て、自らも不審の色を浮かべた老人の背後から、ひよい、と別の若者の顔が覗いた。

郵便配達に似た帽子を被っているが、デザインが少し違うようだ。

「今晚は。イトー様、電報です。サインをお願いします」

——これはなにか大変な事態なのかも知れない。

そんな表情が、優蔵と老人双方の顔に、同時に浮かんだ。

まず手近にいた老人が、配達人の手から、電報の用紙を引つた。くつた。

慌ただしく用紙を開いた老人の日焼けした顔が、見る見る黒ずんだ。

「……なんでこれが今頃届く？ 儂や、日曜に打つたんじゃぞ！」

配達人に掴み掛かりそうな勢いだつた。

「そ、そうおっしゃられても、さつき局に届いたばかりで……」

若者はおどおどと身を引きながら弁解した。

優蔵は老人の手から奪うように電報を取り、素早く目を走らせた。

次の瞬間、優蔵は居間の電話に向かって疾駆した。

まだ八時半を少し回ったばかりだ。

間に合うか――。

優蔵はその晩の処理について、自分で理解できる限りのことは、全て頭に収めていた。優蔵はもどかしさに苛立ちながら、番号簿を繰った。

――なぜ私は短縮にあそこを入れなかった！

番号を確認しながら、ほぼ同時にキーを叩く。

数秒の待ち時間の間に、優蔵の左手の指は、数え切れないほど電話台の角を打った。

「申し訳ありません。伊東です。ええ、ライラをお願いします。ライラの処理は、今からでも中止できますか。ええ、もちろんキャンセル扱いでかまいません」

しかし電話の応答は、ほぼ予想通りだった。

優蔵は力なく受話器を置くと、背後に姿を現わしていた老人に告げた。

「……五分五分です。最終処理炉は、もう八時からヒート・アップが始まって、それ以降はセミ・オートの工程ですから」

老人は顔をしかめた。おそらく技術者の一人として、すでに事態は読めるのだろう。

「――非常事態ってことで、回避はできんのか」

「今、クール・ダウンに転換可能か、調べてもらっています。とにかく私は、現場に行ってみます」

「僕も行こ」

先に居間を飛び出した優蔵は、廊下をばたばた走ってきた俊江と、危うく鉢合わせしそうになった。

俊江も、なぜか困り切った様子だった。

「あなた、聖子がいないの」

「風呂か、教会の方じゃないか？」

俊江は不安気に首を振った。

「それが、どこにも。裏庭まで見てみたんですけど」

「——ローゼンレックに行ってくる」

事態はそこに集約している——直感が、そう告げていた。

優蔵は足早に玄関に向かった。

後ろでは優蔵を追いながら、老人が妻に向かって、慌ただしくまくし立てていた。

「すまんが奥さん、玄関の荷物、どこか安心な部屋に預かっといってくれまいか。重くて大変じゃろうが、大事な娘が入ってるんでな」

玄関には電報配達の若者が、まだ所在なげに立っていた。

「あの、サインを……」

無意識に若者を押しつけるようにして、優蔵はガレージに急いだ。

3

午後八時三十五分、ローゼンレック一号棟のオペレーション・ルームには、三人の社員が残っていた。

構内にはもう一人若い定時社員がいるが、彼は四号棟の最終現場チェック担当で、まだ戻っていない。

今夜の処理の責任者であるシュナイダー四課主任は、顧客からの外線電話を、自らの手で受けた。

後のオペレーター二人は、モニター数台と計器類のチェックで忙殺されている。

今日の夜間稼働は四号棟のみなので、オペレーション・ルームの計器類は、

右の壁添いの三分の二ほどを残し、すでに電源が落ちていた。

「はい、ええ、キャンセルは契約時の負担条件で可能なんですけど、ご存じの通り、すでにヒート・アップがここまで進んでおりますと……。ええ、できる限りの手は、尽くさせていただきます」

シュナイダーは受話器を置くと、二人の部下に即座に命じた。

「キャンセルが入った。今からクール・ダウン可能かどうか、すぐチェックしてくれ」

そう告げた時点で、手前にいた若い社員が作業の手を止めた。

その向こう、窓よりの半分をチェックしていた年かきの社員は、逆にすばやく奥の計器に移り、慌ただしくキーを叩き始めた。

若い社員は椅子の背もたれに体を預けて、大きく伸びをした。

「ふう。——なんスか、それ。やっぱり、もったいなくなっちゃったとか」

「ヴァール、それは我々の気にするところじゃないな」

シュナイダーは若い部下を、軽く窘めた。

「でも、しゃくにさわるじゃないですか。今夜の処理のお客は、神父さんなんですよ。今時のエリート様で、すげえ年収で、家付きカー付きで、こっちは毎日残業してるってのに、気紛れに自宅からドタキャンで」

「イトー神父は、そんな人じゃないよ」

ヴァールのいわゆる『タメ口』は、常々気に障ってはいるのだが、二人分仕事のできる男なので、シュナイダーは特に強くは咎めずにいた。

四号棟の担当箇所には、現在五つの席がある。しかし、そこに座る社員は二人しかない。手が足りない時は、本来背後から全体をチェックしているべき自分も、そこに加わる。それでも三人だ。そもそも四つの処理炉と地下分子フィルター部、計五十名で構成されるべき最終処理現場に、三十名の人員しか配置されていない。しかもその内五名は、短期の定時社員である。

数年前から人件費削減で、ずっとそんな状態が続いている。

「ま、いいっすけどね。残業で稼いどかないと、新車買えないし」
ヴァールは立ち上がって、奥の先輩に声を掛けた。

「コールさん、手伝いますよ」

コールは初老の実直そうな顔を、モニターに向けたまま答えた。

「おう。じゃあ、負荷計見てくれ。今、何パーだ」

「えーと、五八」

シュナイダーはその会話を聞いて、キャンセルが十中八九不可能なのを悟った。

契約上、それにはなんら問題がない。やや心苦しくはあるものの、三日前までのキャンセルは事前処理の五割負担、一日前で八割、当日は不可、それだけのことだ。

事前処理を終えた処理物は、すでに四号棟中央、処理室の壁から伸びた^{ベッド}装填床に横たわっている。このままのペースだと、予定通り二十一時ちようどに、装填床ごと処理炉の中に吸い込まれ、瞬時に分子化する。それから気体として、敷地中央地下の巨大なフィルター・ユニットに送られるが、その事後処理は明日の午前、そちらの担当者の仕事だ。

シュナイダーはロッカーの中に収まっている、息子への誕生日の贈り物を思い浮かべた。

彼の一人息子は、明日十歳になる。少々扱いにくくなってきてはいるが、その扱いにくさも、まだ愉快的な程度の年頃だ。プレゼントには競技用のサッカー・ボールを奮発したので、きっと大喜びしてくれるだろう。

そんな息子の姿を思い浮かべていた時、また電話が鳴った。
やれやれと思いつながら、受話器を取る。

『すみません。ファツハ設備保全のファツハと申します』

八時前に作業を終えて引き上げた整備会社の、担当者ではなく、社長自らの声だった。

シュナイダーも二・三度打ち合わせで話した記憶がある。

普段は少々間延びした愛嬌のある声で話す人物で、世代が同じためか、なかなか気の許せる相手だった。

しかし今夜の彼の声は、妙に緊張しているようだ。

「はい、シュナイダーです。いつもお世話になっております。先日はどうも、失礼しました」

『いえいえ、こちらこそ。で、いきなりなんなんですが、今夜の処理は、至急停止された方がよろしいかと存じまして』

先の神父と同じ用件だが——しかし、保全会社が、なぜそんなことを。

不審に思いながら、シュナイダーは答えた。

「実はつい先程、イトー神父からも電話がありまして、停止の方向で作業中なのですが」

『ああ、それなら、ちょうど良かった』

電話の音が、一気に弛緩するのが判った。

「しかし、ファツハさんは、どうしてまた？ あなたの所の仕事なら、まさか整備に不備があったとも思えません」

『いやいや、そのところは、いつも通り抜かりなく』

そのはずだ、とシュナイダーは頷いた。少なくともファツハの会社と契約してから、整備上の問題は一度も起きていないはずだ。

『いや、差し出がましいとは思ったんですが、実はそちらの処理体自体の負荷計算を、当社^{うち}でも、このところ続けていたんですよ。めったにない処理物ですし、今後の貴重な資料にもなりますからね。まあそれと、私、少々、性的にあれなもので』

「それはそれは、さすがにファツハさんですね」

無論、それは整備会社の仕事ではない。

あくまでも設備が仕様通りに作動するかチェックするだけが、ファツハの

会社の仕事だ。

しかし、そこまで業務関係の研究を続けているからこそ、ローゼンレック
本社は、この処理場の整備をそこに任せているのだろう。

『それですね、そちらの今回のプラズマ・ユニットの負荷計算に、まことに失礼ながら、誤差があるように思われまして』

「はあ。それは具体的には、どの部分でしょう」

『うちの計算だと、励起部のトリガー・レンズの収差が、コンマ〇〇一ほど残つとるわけです』

その指摘に、シュナイダーは納得しかねた。

「しかし、あれは確かラトビアで、旧曆一九三四年に製造された人形でしょう。とすれば、プラズマ・ユニットはドイツ製に唯一存在するだけで、その製品に収差が残っているなどということは、まず考えられません。事実ここに持ち込まれた時点でも、正常な出力値で稼働しておりましたし」

『一九三五年の頭なのかも知れませんが、つまり、歴史的な推測に過ぎませんが、当時のロシア製——デッド・コピーの可能性ががあります』

シュナイダーは絶句した。

それは、破滅と紙一重の可能性だった。

思考が一気にフル・スロットルに入る。

シュナイダーは受話器の通話孔をいったん手で塞いで、作業中の二人に絶叫した。

「停まるか！」

その只事ではない語気に圧倒されて、コールはおずおずと答えた。

「ちよつと、難しいとこなんですが……」

「停めてくれ！ プラズマ・ユニットの解析は誰がやった？」

今度は、ヴァールがおずおずと答えた。

「検査二課のシュルツ主任です」

——あいつは……昨日から、過労で入院している。

シュナイダーは再び、ファッハとの電話に戻った。

「すみません。失礼しました」

『いえいえ。そちらで見落とされても無理のない出来なんですよ。通常のスキヤナーの構造解析だと、当社でも、これがどう見てもドンピシャなんですな。レンズも材質にほんの微量の誤差がある以外は、形状も全く同一です。実はうちの社員もなかなか好きなので、自宅で趣味的にこつこつ作動シミュレーションを続けて、ようやく今しがた連絡が入った次第で』

「……その収差で、作動自体に異常が無かったとすると？」

『はい、多分あの頃のロシアお得意の、現物合わせでしょうな。なに、融合炉本体の効率設定回路をちょっといじるだけで、結果の出力は誤差ゼロにできる勘定で』

「しかし……それだと融合炉本体の効率設定は、収差分の励起出力ロスを見込んで、当然大きくなりますね」

『はい、その通りですね。正確な数字は、まだうちの社員も計算中ですが、おおむね五〇倍程度かと』

「……ありがとうございます。どうも、ご親切に」

シュナイダーは、我ながら気持ちが悪く感じているかと思いつつ、ファッハに礼を言い、電話を切った。

子供の頃矯正したはずの悪癖——親指の爪を噛む癖が蘇っているのにも、気がつかない。

軽水核融合プラズマ・ユニットの詳細な部分は専門外だが、概算で想定はできる。

それが現在の設定のまま処理炉に入ってしまったら、少なくとも四号棟は全壊する。

それで済めばいい。それはシュルツが責を負えば済むことだ。

しかし最悪の場合、処理炉を中心におそらく半径二キロから三キロが、被害範囲に入る。

シユナイダーは即座に消防署を呼び出した。

時計を見ると、すでに八時四十分を回っていた。

三方は森だ。人的被害は無いだろう。しかし西側は地理的に、ライン河と草原、そして——住宅街。

「こちら、ローゼンレック特殊廃棄物処理場です。緊急事態です。ええ。そうですね。至急、付近の市街地に避難命令を発令して下さい。はい、あと二十分程度で、大規模なプラズマ放電現象が起きる可能性があります。ええ、たとえば、その範囲がそっくり激しい雷雲の中に包まれるような現象が。ええ、ええ、うちの四号棟を中心に、半径三キロ。いえ、原理的に放射能汚染は発生しません。しかし——はい、そうですね。大事をとって四キロ圏内、ええ、それで。はい、よろしく願います！」

コールとヴァールが、目の前に立った。

コールが深々と頭を下げた。

「すみません。数分は遅らせたと思うんですが……」

「君の責任じゃない。二人とも、今すぐ国道まで退避しろ。——ベルガーはまだか！」

もう一人、四号棟からまだ戻らない社員がいる。

コールがすかさず壁の無線に飛びついた。

ヴァールは備品の暗視双眼鏡を構え、西側の窓に走った。

「今ちようど、カートで出たところです！」

「そのまま国道まで走らせろ！」

「繋がりました！」

コールがカートのベルガーに、怒鳴るように指示を伝える。

「……あれ？」

双眼鏡を覗いていたヴァールが、奇妙な声を上げた。

「どうした！」

ベルガーのカートがあわてて横転でもしたのかと、シュナイダーは窓に駆け寄った。

「……裏の土手から、なんか下ってきます」

シュナイダーは暗視双眼鏡を引ったくった。

全速力で土手を駆け降りるレジャー用の四駆が、モノクロの視界に入った。

——また暴走族の度胸試しか。

「ええい、あんな馬鹿どもは、勝手に死なせとけ！」

シュナイダーはそう言い捨てて、二人と共に退避を開始した。

責任者として取るべき道が、もうひとつ残っているのは判っている。

四号棟の最終処理室——あの中央の白い部屋に向いて、カプセル状の装填床^{ベッド}が処理炉に自動挿入されるのを、物理的に阻止することだ。

しかしそのためには、あの馬鹿げた回廊を何分も走らねばならない。

シュナイダーは、会社のために殉死するつもりは毛頭なかった。市街への被害の可能性を思うと確かに心は痛むが、自分の過失ではない。それはシュルツの過失というよりも、シュルツをそこまで消耗させた会社の責任だ。そしてなにより——自分は息子と妻の待つ家に、戻らねばならない。

一号棟から東の正面出口に駆け出すと、すぐ前の駐車場に躍り込む。

遙かライン河の彼方から、警報の音が響き始めた。

他の二人がそれぞれの通勤車に飛び乗り、発進するのを確認していると、ベルガーのカートが背後から追いついて来た。

彼は自転車通勤のはずだ。シュナイダーは、カートでそのまま二台の車を追うように、腕を振って指示した。

これで部下三名の安全は確保できた。

シュナイダーは一瞬広大な施設を振り返った後、躊躇無く自分の車を発進

させた。

国道まで二キロの、森の中の一車線の道を半分ほどまで疾走した頃、前方の車たちが急に車列を乱した。

フルスピードでこちらに向かつて来る車がある。

互いに急ブレーキを踏んで、半ば接触するように停止する。

グレーのワーゲンから、イトー神父が顔を覗かせた。

「何かあったんですか？ ライラの件は——」

僅かな街灯に照らされた森の中は、ただ遠い警報の唸りだけが陰鬱に響いている。

「残念ですが、遅かったようです。それより、すぐに引き返して下さい。詳しい話は国道に出てから説明します」

神父は失望だけでなく、何か困惑した表情を見せた。

「それが——少々、別の用件も生じまして」

「とにかくそれは、後にして下さい。まもなくあの処理施設は大破します。

最悪の場合、周囲何キロかに影響が及びます」

神父の顔に驚愕が走った。

「ミュラーさん、降りて下さい！」

「お、おう」

ワーゲンの助手席から押し出されるように、一人の老人が降り立った。

「シュナイダーさん、この方をお願いします」

そう言い残して、ワーゲンは急発進した。

「イトーさん、いけない！」

シュナイダーの叫びが、森に響き渡った。

ワーゲンは見る見る内に、森の奥に消えた。

農もあっちに行こうかの、などと呟いて歩き始めようとする老人を、シュ

ナイダーはあわてて助手席に引きずり込んだ。

「神父さんは、何を？」

老人は困惑と不安の混じった顔で答えた。

「どうも、聖子——神父さんの娘さんが見えなくなっちゃって、もしや、あんたらのところに行ったんじゃないかと……」

なんとという夜だ。

シユナイダーは逡巡した。

しかし、今この車で引き返したとしても、犠牲者の数を二名増やす可能性
があるだけだ。

シユナイダーは胸元で十字を切った。

——神父さん、あなたにどうか神の御加護を。

未練げに後ろを振り返っている老人を乗せて、シユナイダーは車を発進させ
た。

【第十章】

1

最後の一人が、なかなか四号棟から出て行かない。

瞬時に発進できるよう空吹かしをしながら、僕は焦る気持ちを押えて、双眼鏡を覗き続けた。

「思ったより時間を食っちゃったなあ。まあ、人死にだけは出せんから、仕方がないが」

後ろのプラーテンさんは、たぶんいらいらと腕時計を睨んでるんだろう。

「でも、どっちにしても十五分で引き上げる予定ですから」

「そりやそうじゃ。あわてるナントカってな」

「シートベルト、大丈夫ですか？」

「おう、なんかぐるぐる巻きになっちゃったが、この方が外れんじやろ」

「発進したら、とにかく歯を食いしばってて下さい。ほんとに舌噛み切っちゃいますから」

あの山の中の教習所には、しゃべったり食べたりの不自由な人が、実際何人かいたんだ。

隣のブルも、しっかり固定してある。

もともと舌はないし、僕たちと違って目を回したりしないから、現場では即、行動に移れるはずだ。

四号棟の正面入り口は、この土手の上からでは直接確認できない。

僕は見える限りの入り口付近を、注意深く見守った。

やがて、ようやく四号棟を離れるカートが見えた。

「行くぞ、ブル！」

ぴい、という気合いの入った声が、装甲の中で響いた。

「お、おうよ」

プラーテンさんは、ちょっと気合いが今一かも。

僕は無駄なく、しかし急速に、アクセルを踏みこんだ。

ぐおん、という小気味のいい音が耳に響いた。

余計なタイヤの空転もない。

四駆は僕の思い通り、土手から軽やかに宙に舞った。

このくらい傾斜があると、山道や坂道というのは、ほとんど絶壁みたいな感じがする。

どん、という衝撃が来て、ちょっと先に着地した後輪が、車のお尻を跳ね上げる。

うおう、というプラーテンさんの悲鳴も、上下に激しく揺れている。

でも、ここで怖がって思わずブレーキなんか踏んじやいけない。

それをやってしまうと、たとえば雪山だったりすると、下に着くまで立派な雪だるまができちゃうわけだ。

この坂でこの車なら、車だけは七転八倒しながらも五体満足で下に着くだろうけど、中のみんなはシートベルトがかえって仇になって、咯血したり吐血したり、口から胃袋吐いたりしちゃうんだそうだ。

とにかくどこもかしこもがくがく揺れているが、僕はハンドルと足元に意識を集中しながら、教わった通り『ちよいアクセル』を実行した。

揺れも転落感も収まりはしないが、とにかく前転の危機は免れて、車は残りの坂道を一気に駆け下った。

「ひゃっほう、走れ幌馬車！」

プラーテンさんが、後ろで氣勢を上げている。

しゃべるなって言ったんだけどなあ。

舌の先がないと、お酒もあんまり美味しくないそうだし。

「歯を食いしばる！」

お、おう、という返事と同時に、坂が緩やかに勾配を失い、もう目の前に金網が迫った。

映画なんかだと電流が流れてたりするんだろうけど、ここにそれはない。そんなことをしたら、泥棒や高等科の不良なんか丸焼けになって、おいおいどっちが悪いんだよみたいな、おかしい裁判ざたになってしまう。でも防犯用のセンサーは、きつとここで反応するはずだ。

この車がどんなに強いかは、もう知っている。

先の林の樹木の位置は、ちゃんと計算してある。

この位置から突入すれば、少なくとも五〇メートルは直進できる。

僕は全速力のまま、金網に突進した。

でも、やっぱり頭で考えたことは、実地じゃうまく行かないものだ。

車高があるのでなんとか踏み倒す形勢にはなったが、金網は斜め上に曲面を造ってしまい、車は横転しながら宙に舞い上がった。

夜空と林がぐるぐる回る。

おお、これはなんかあれと似た感じだ。遊園地のコーク・スクリュー。

『楽しめ』——山の中で何度も聞かされた言葉が、耳に蘇った。それが男の仕事というものだ。どうしても天国に——地獄かもしれないが、行くなら楽しく行った方が男なんだそうだ。

どかん、と世界が揺れた。

目の前の幹は、まだ地上の樹木だ。天国でも地獄でもない。

僕は反射的に、ハンドルをめいっばい左に切った。

木の幹は車の右後方をガリガリと擦りながら、後ろにすっ飛んだ。

ようやく、予定のコースに入れたみたいだ。

あとは続いて林の木を避けて、蛇行を繰り返しながら、四号棟の裏に着けるだけだ。

僕はもうとにかく体で教わった通り、逆ハン切りまくりアクセルくいくいで、四号棟裏口の明りを目指した。

その間、多分三・四台の小型警備機を跳ね飛ばした。

ああ、男はやっぱり勢いだな、そんな気分だった。

だって、右に左に避けて行く木々の幹も、真正面から撥ね上がって宙に消える警備機も、それなりにちゃんと詩的なんだ。これならたとえ刑務所に行つたつて、案外詩的に生きられるのかもしれない。シュトルム方向じゃなくつて、たとえばバイロン。

——快楽は罪だ。そしてときとして罪は快楽である——

なんだか、林はほんの一瞬で終わったような気がした。

無我夢中って奴なんだろう。

林を抜けて四号棟の裏庭の芝生に躍り出ると、僕は車の右腹を壁方向に向けてブレーキを踏んだ。

スリップしながら、裏口の位置を確認する。

右斜め前、約二〇メートルつとこだ。よしよし、ほとんど予定通りだ。

「行け、ブル！」

『びよ！』と鳴いて、ブルはまだスリップが続いているうちにシートベルトを外した。

新しいハンド・ユニットで器用にドアを押し開き、片手をドア枠に駆け、一瞬キャタピラでシートを焦がし、一気に発進する。

ずん、と着地して、ブルはそのまま裏口を目指して突進した。

車もようやく停止する。

ブルはもう、裏口の扉の電子ロックに取り付いていた。

僕は破れ鐘のようにごんごん響いている心臓を、落ち着かせようと努めた。この後は、ブルがライラを抱いて脱出して来るまで、僕の出番はない。

僕は後ろのプラータンさんに声をかけた。舌と胃袋は、元通りそこにあるだろうか。

「大丈夫ですか？」

「……ちよつと待て。脳味噌がロックやつとる。これは……へヴィメタじやな」

なんか懐かしいことを言って、前後に首を振っているが、体は大丈夫みただい。

裏口のブルは小型爆薬をセットし終えたらしく、ちよつと離れた壁に背を付けた。

ぽんと行くのか、どかんと行くのか、そこまでは僕も知らない。

……あれ？

爆発が起こらない。

一〇秒待っても、二〇秒待っても、うんともすんとも言わない。

ブルも戸惑っているみたいで、いったんこちらまで引き返して来た。

ぴよぴよ、と何か言っている。

僕とブルは揃ってプラータンさんを見つめた。

「……あわてるな。あれは最新型の電子ロック専用花火じゃ。ちゃんとロックとドア機構をスキャンしとるはずじゃ。できるだけ静かに開けられるようにな」

なるほど、ぽんと行くのかどかんと行くのかを、爆薬自体が判断するらしい。

「ブル、ちよつと、こっちに下がれ」

予想外に大きな爆発になったときのことを考えて、僕はいったんブルを車の裏に回した。

ライン河の方から、なにか警報みたいな音が響き始めた。

「なんででしょう？」

「今時空襲ってこたあないじゃろう。火事かなんかかな」

プラーテンさんは、上の空で答えた。

じつと裏口を見守り続けるが、なかなかぼんもどかんも来ない。

「……でも、これはちよつとトロすぎかもな。もう一分待ってまだじゃつたら、ランチャーで開けちまおう」

そうプラーテンさんが言った時だった。

裏口よりもつと先の、左手の林の奥から、何かが駆け出した。

警備機かと身構えたら、全く毛色の違う、茶色い毛布の塊だった。

毛布の塊は、体中にいくつも赤い羽をくっつけていた。

麻酔弾のマーキングだ。

それはこちらの車にはまだ気がつかないみたいで、まっすぐに裏口のドアに向かった。

裏口の非常灯の下で、毛布の塊から人間の顔が覗いた。

山で特訓していた間も、仮眠中の夢に現れた顔だ。

「聖子！ 駄目だ！」

後ろのプラーテンさんも、何か叫んだような気がした。

気がつくと、僕はもう一直線に芝生を駆けていた。

僕はライラの時と同じ馬鹿を繰り返そうとしているのか。

しかも僕の天使を相手に。

絶対に、駄目だ。

何が何でも。

聖子は一瞬こちらを向いて、眼鏡の奥の目をぱちくりさせた。

僕はできるだけ聖子と扉の間に割りこむ体制で、力まかせにタックルした。よし、間に合った——そう思った刹那、なにかとんでもないものが扉を吹

き飛ばした。

巨大な拳でぶんぐるみたいなの、熱い空気の奔流が、下半身すれすれに抜けた。

その奔流の余波に巻き上げられて、僕たちは宙に舞った。

聖子が被っていた何枚もの毛布は、爆風にあおられて、僕の腕から聖子を奪おうとした。

毛布はどうでもいいが、中身は僕のだ。

無様なきりもみ飛行はしたものの、僕はなんとか聖子をきつく抱いたまま、ちよつと離れた芝生に転がり落ちた。

あわてて駆けよつて来たブルに、僕は怒鳴りつけた。

「大丈夫だ！ 行け！」

耳がわんわんして、自分の声もろくに聞こえない。

それでも、寝転んだままガッツ・ポーズを取る。

ぴい、と鳴いて、ブルは芝生を蹴散らしながら反転した。

この耳にこれだけ響くんだから、気合いは満点だ。

ブルはそのまま、扉の吹き飛んだ裏口に突進して行く。

腕の中の聖子も、期待の眼差しでブルを見送っている。

それから聖子は、潤んだ目で僕を見つめてくれた。

そして何かを言おうとした時、その首筋に、ぼん、と赤い羽が生えた。

ふ、と一息漏らして、聖子はくたりと力を失った。

とっさに聖子をかばって林の方を見ると、自動警備機が無表情にこちらを窺っていた。

古い円筒型の電気掃除機に、視覚ユニットを生やしたみたいな形だ。麻醉弾はもう撃ち尽くしてしまつたらしく、胴体の銃眼は、もう閉じたままだ。

大丈夫。聖子はただ眠つてしまっただけだ。

車の方を見ると、プラーテンさんも肩のあたりに赤い羽を生やして、車か

ら身を乗り出すように眠っていた。

僕もさっきのショックでか、ずいぶん目眩を感じたが、麻酔弾は食らわずに済んだみたいだ。

とりあえず半身を起こそうとして、あれ、と僕は思った。

手をついた地面が、なんだかぬるぬるして生暖かい。

掌を見ると、赤黒く濡れているようだ。

大変だ、聖子が怪我してる。

僕はあわてて聖子の白いワンピースの、赤く染まったお腹のあたりを見定めた。

でも、確かにじっとり血を含んでいるが、どこにも破れはない。

ようやく僕は、自分のお腹の方がおかしいのに気づいた。

ズボンの下腹の左側が、ぱっくり割れている。

なんだかお腹の中身も、はみ出しかけてるみたいだ。

——なんじゃあ、こりゃあ？

だって、おかしいじゃないか。頭は確かにずいぶんくらくらしてるが、痛くもなんともない。

でもその訳は、すぐに解った。

傷のすぐ後ろのあたりに、赤い羽が生えていた。ご丁寧に、二本も並んで。

これはたぶん、ほんとはものすごく痛いのと、トランクライザー二人分が拮抗しているんだ。

僕はまだきよときよとこちらを窺っている警備機に、思わずお辞儀をしてみました。

——ご親切に、どうも。

僕はたぶん、もう正気じゃないんだろう。

麻酔のせいだか、出血のせいだか、両方のせいなんだか。

頭がもつとふわふわしてきて、僕は眠っている聖子の胸に、ぽふ、と頬を

落とした。

聖子の心臓が、とくとく動いているのがわかる。

良かった。聖子は元気だ。

ああ、聖子、君の胸は想像してたよりもずっと柔らかくて、むにゅ、という感じだね。

僕はつい、頬つぺたをむにゅむにゅと揺すってみた。

ごめん。でも、最後のチャンスみたいだから、いいよね。

ああ、ブルには、悪いことしちゃったなあ。

でも、男なんだから、後は自分でなんとかできるよな。

でも、ほんとは、やっぱりいっしょに行きたかったな。

なんだか、僕を呼んでるみたいなのがするし。

……聖子、僕は結局、馬鹿のまんまで終わってしまうみたいだ。

でも、君の国のサムライみたいに、ハラキリしてるから、かんべん。

君もあんまりお小遣いはないだろうから、お墓には、白い薔薇がひとつでいいよ。

墓碑銘は、マリオ・ラインハルト十九世・フォン・ファ……………

2

ワーゲンがローゼンレックの敷地内に走り込むと同時に、優蔵は微かな爆発音を聞いたような気がした。

——もう始まってしまったのか！

瞬間、ダッシュボードのデジタル表示を視野でかすめると、まだ二十時四十八分だ。

優蔵は焦燥の渦に巻き込まれそうな理性を、必死に保ち続けた。

四号棟にライラがいることは、聖子も知っているはずだ。

しかし、そこにすでに着いているのか。

それとも入棟できずに、扉の前で途方にくれているのか。

四号棟の白い外壁が木の間隠れに見えた時、再び籠った爆発音が聞こえた。状況は把握不能だ。しかしその中では、すでに何かが始まっている。

さほど間を置かず、また爆発音が響く。

優蔵は右に急ハンドルを切って、広い前庭の芝生を円弧に挟り、アスファルトに煙を残しながら、半ば激突するように扉に突進した。

人影はない。

無論、激突するつもりもない。

急ブレーキで、扉の直前に滑り込む。

ワーゲンの左腹は、扉にほんの一メートルほどを残し、かろうじて停止した。

優蔵は身を躍らせるように、両開きのガラス扉に取り付いた。

正面玄関はオフィス・ビルと同じような造りだ。

しかし強化ガラスの扉には、堅固な電子ロックが装備されているし、ロツクに異常はなく、暗いロビーの奥にも強固なシャッターが降りている。

瞬時にそれらを確認すると、優蔵は再びワーゲンに躍り込んだ。

記憶では、建物の北側に道はない。

タイヤを焼きながら右後方にUターンし、直進加速する。

裏口に回り込むためには、右ターンが二回。

たとえ一瞬でも時間を稼ぎたい。

アスファルトの路面をしっかりとグリップした積もりだったが、焦りが勘を狂わせたのだろう、カーブに入った瞬間、スピンの予感が来た。

優蔵は瞬時にドラフト走行に切り替え、かろうじて進路を保った。

それでも左後輪が縁石に接触し、ホイールから火花が散るのが判った。

なんとか体制を立て直し、直線に入る。

さほど間を置かず現れた次の右折を、今度はグリップを保って切り抜ける。そこでいきなり、赤いテール・ランプが目に入った。

大仰な四駆車が停まっている。

しかも右後部ドアが大きく開き、半身を垂らした人影すら見える。

——跳ねるか。

すでに緩め始めていたハンドルを、優蔵はまた全力で右に切った。かろうじて四駆を避けたが、今度は大破した裏口が眼前に迫った。

既に優蔵は思考を捨てていた。

体だけが限界を超える速度で動いた。

そして、急停止の激震で目眩の残る頭を上げると——ワーゲンは裏口を左折で切り抜けていた。

ライン河方向の林を左前方に臨む形で、裏庭の中程に停車している。

優蔵は朦朧とする意識を鼓舞しながら、車を降りて裏口に向かった。

そしてすぐに、芝生に倒れている二つの人影に気がついた。

白いワンピース姿の少女と、見慣れた木綿のシャツの太った少年だ。

——聖子！

優蔵は娘の汚れた顔に頬を擦り付けるようにして、その呼吸を確認した。眠っているだけのようだ。

歓喜に震えながら、少年の確認に移る。

少年は聖子の胸に頬を乗せて、うずくまるように倒れていた。

少年の下腹部は、ズボンごと大きく裂けていた。

夜間照明の陰で、芝生に血溜りができている。

まだ助かる——優蔵はそう判断した。

現代の神父は、紛争地帯の医療布教活動などに備えて、医師に劣らぬ知識を要求される。また、戦士に近い業務遂行能力なども。だからこそ平常時、

過分の生活が保証されているのだ。

少年の傷自体は大きく、内臓も腹圧で露出してはいるが、出血はまだ生存限界を越えていないし、内臓自体にも損傷は見られない。

優蔵は続いて四駆に走った。

見知った老人形師の顔に一瞬驚愕したが、すぐに聖子と同様、眠っているだけだと判断できた。

そのままダツシュ・ボードに目を走らせ、四駆の状態を確認する。

すぐに発進できそうさ。

少々乱暴だとは思ったが、優蔵は老人の上体を起こし、思いきり奥まで押し込んだ。

全員を安全に避難させるには、ワーゲンでは狭い。少年は少なくとも頭部以外、完全に横臥していなければならない。

優蔵は倒れている二人の場所まで駆け戻ると、まず聖子を抱き上げ、四駆の助手席に運んだ。

それから慌ただしく左後部ドアに回り、老人の体制を整えた。

そしてまた最後の少年に駆け寄ろうとした時――

――？

優蔵は立ち竦んだ。

少年が消えている。

半ばパニックに襲われながら、優蔵は地面に伏して、あたりを探った。

血の跡が引き擦られるように線を描いていた。

それを追って顔を上げると、芝生を抉ったキャタピラの跡をなぞるように、血の跡が点々と裏口に向かっていた。

優蔵は跳び上がって裏口に走り、その中を確認した。

扉の破片の散乱した通路を、キャタピラ跡と血のしたたりが続いていた。

それは数メートル奥で右に折れ――あとは回廊状の通路が、幾重にも続い

ているはずだ。

——あの少年は、あの体で中に向かったというのか。腕時計を見ると、すでに八時五十四分。

安静を保たなければ、あの状態では、少年はいずれ失血死する。優蔵は脅えたように後ずさりして、白壁越しに夜空を見上げた。

——主よ、あなたは何を望んでおられる。

優蔵は啓示を切望した。

しかし夜空には星々の瞬きが広がるばかりで、警報の響きだけが遠く響いていた。

優蔵は身を翻し、足早に四駆を目指した。

——今の私は、ルシフェルのような顔をしているに違いない。

優蔵は不思議なほど冷静に、ダッシュボードのキーを回した。感情を失った、彫像のような顔をしていた。

3

ブルフィンチは、回廊を走り続けた。

——自由自在に思い通り駆け回れるということは、なんて気持ちのいいことなんだろう。去年のクリスマス、マリオがお父さんからナイキのスニーカーをもらった時、あんなに喜んでいたのは、きつとこんな気分だったんだ。防災壁は結局作動してしまい、一枚目を吹き飛ばすのには、だいぶ時間がかかってしまった。

一発目でまだ穴が空いていないのを確認するのに、煙が落ち着くまで、待たなければならなかったからだ。

しかし、次は大丈夫だ。二発続けて同じあたりを狙えば、そのまま突進し

でも抜けられるはずだ。

ブルフィンチは、プラータンの着せてくれた装甲に、すでに全幅の信頼を置いていた。

現に今も、けしてスムーズに直進しているわけではない。

回廊が直角に曲がるたびに、どんなに制動をかけても、向こうの壁に接触するのは避けられない。

接触というより、そのたびに斜めに激突して独楽のように回転し、回転したまま弾き飛ばされ、まだ回転しながら前方を確保して直進に移り、疾走を続けている。それでもCFMRPの装甲は、びくともせず小気味のいい弾力を保っていた。

——痛いってのはどんな感じなんだろう。聖子の天罰を食らうたび、マリオはずいぶん顔をしかめていた。一晚中唸っていることもあった。きっとあれは、ライラがいなくなってしまうと聞いた時に自分が感じた、あの胸が潰れてしまうみたいな苦痛を、体で直接感じていたんだろう。人間でいるのも、時にはすごく羨ましいこともあるけど、やっぱりちよつと不便そうだ。

二枚目の防災壁が現れた。

ブルフィンチは疾走を維持したまま、頭部のグレネードを二発連射した。前方の視界が、一瞬、真っ赤に膨張する。

破片が滝のように押し寄せ、爆風と共に前進を阻む。

キヤタピラが破片を踏み越えて、体が宙に浮き、転倒しそうになる。

それでもブルフィンチは、なんとかバランスを保ちながら疾走を続けた。——この回廊の中心には、ライラが待っている。ほんとは自分を待っているわけじゃないだろうけど、とにかくライラはそこにいる。このペースで走り続けることができれば、きっと救い出せる。

ブルフィンチはまた壁に斜めに激突して、くるくると回転しながら、同時に三枚目の防災壁を認識した。

直進の体制に戻ると同時に、連射する。

今度も数回は宙に舞いかけたが、なんとか通過できた。

直角の通過パターンも、学習機能が追いついて来ていた。

最後の防災壁を確認する頃には、ほとんど壁に接触せずに、可能な限り加速していた。

しかし二連射に続き、爆風をものともせずに進んだ時、ブルフィンチは破碎寸前の衝撃を受けた。

爆風の余波と共に逆方向に弾き飛ばされ、そのまま通路を転がって、十数メートル後ろの角の壁に、背中から激突する。

——わお。なんだなんだなんだ。

ブルフィンチは即座に立ち上がり、事態を分析した。

——ああ、人間じゃなくてほんとによかった。それに今度の腕は、ほんとに便利だ。転んでも、すぐに起き上がれるんだ。

立ち上がった弾みに装甲の一部が剥がれて、床に落ちる音がした。銀のエンブレムも半分外れかかっているようだ。しかしここまで来たら、装甲は最悪ばらけてもかまわない。

ブルフィンチは腰の一方に残った電子ロック破碎用爆薬を、念のためにチエックした。

信管が作動しない限り衝撃で爆発などはしないはずだが、今しがたの激突で弾け飛んでいないか、そのための確認だった。

最後の防災壁は、今までとは強度が違うらしかった。

PROMのデータにはなかったことだが、ここまでの関門も、少しづつ強度が上がっていたのかも知れない。

それでも爆煙の向こうに見え始めた防災壁は、かなりのダメージを受けているように見えた。

ランチャーには、まだ二発の二〇ミリ弾が残っている。

ここを越えてしまえば、もうランチャーもいらぬ。

ブルフィンチは再発進しながら、思考回路に直結したランチャーのトリガーを、立て続けに弾いた。

二発の榴弾は、おおむね狙った位置に着弾し炸裂した。

最後の防災壁はよほど強固にできていたらしく、以前のように大穴は開かず、見えて来たのは、やっと通れるかどうかの小穴だった。

ブルフィンチは迷わず突進した。

しかし、ブルフィンチは装甲を着た自分のサイズを、正確に把握できていなかった。

がりがりと厭な音が響いた。

金属のささくれが、あちこちで装甲に引っ掛かる。

半分ほど抜けたあたりで、がくりと衝撃が来た。

キヤタピラが空転し、床が削れて煙を上げ始めた。

——あれ？ あれ？

装甲が穴にすっぽり収まるように、詰まってしまったのだ。

前進と後進を交互に繰り返してみたが、キヤタピラは床のコンクリートを抉るばかりで、体自体はがくがくと震動するだけだ。

焦る、という以前には経験のなかった気持ち、ブルフィンチは味わっていた。

防災壁の向こうには、すでに最終処理室の扉が見えている。

せいぜい一〇メートルほどの距離だ。

ブルフィンチは、すでに穴の前に出ていた両腕をふんばり、キヤタピラを全力で回転させた。

ハンド・ユニットが、みしみしと軋む。

しかし分厚い金属製の防災壁のささくれは、装甲のあちこちで強固に食い込み、びくともしない。

思考回路の中のクロックだけが、刻一刻と時間を進めて行く。
ブルフィンチは、彼方の扉を見つめた。

それは物理現象を越えて、遙かに遠のいて行くような気がした。
焦燥感が募れば募るほど、扉は遠ざかって行った。

もがき続けているうちに、ついにクロックが二十一時に達した。

——僕はここまで来たというのに、君を失ってしまうというのか。

生まれて初めての感覚が、感情回路から思考回路に次々と逆流して来た。

それはあまりにも複雑で混迷した感覚だったので、ブルフィンチのあまり
容量のない言語回路では、到底表現しきれるものではなかった。

慟哭、ただその一つの単語が浮かんだ。

そして感じるはずのない物理的な痛みを、確かに感じた。

金属の食い込んだ装甲から、血が吹き出すのを感じたのだ。

その激痛が、絶望に至る寸前——ブルフィンチの思考の中に、別の声が響
いた。

——あなたは、だあれ？

小鳥のような、可憐な声だった。

絶望は一瞬にして、力に変わった。

ブルフィンチは持てる全てのエネルギーを一気に出力した。

——僕は君を必要としている者だ！

びいびい、とブルフィンチは叫んだ。

ハンド・ユニットが張力の限界に達し、装甲の内部から、鈍い断線の音が
響き始めた。

床に食い込んだキャタピラが、煙を吹きながら激しく震動した。

外れかけたエンブレムと胸板の透き間で、緑色の光が明滅した。

びしり、と装甲に亀裂が走った。

先ほどの激突による装甲の傷みが、幸運に転化していた。

ボールの頭頂からランチャーに繋がっているワイヤーが、装甲ごとちぎれて行くのを感じた。

胸のエンブレムが、弾け飛んだ。

次の瞬間、ブルフィンチは弾丸のように疾駆していた。

装甲の名残りが疾風にあおられ、からからと後方に散乱した。

ブルフィンチは、すでに理性を取り戻していた。

人間ではないからこそその強みだった。

電子ロック破碎用の爆薬は、しっかりと右手に確保している。

勢い余って処理室の扉に激突してしまっただが、もう痛みなどは感じない。

ブルフィンチは素早く爆薬をセットし、横の壁に背を付けた。

できればスキランを迂回したかったが、そんな操作は学習していない。

しかし、予定の時間がとうに過ぎていている以上、もしかしたら防災壁の作動そのものが、緊急事態として処理を中止させたのではないか、そんな期待もあった。

いずれにせよ、ライラはまだこの中に存在している。

なぜそう確信できるのか、それは自分でも解らない。でも、どうせ始めから解らないことばかりだ。そもそも、マリオを追いかけた行った夜の公園で、初めてライラを視覚回路で認識した時から、おかしかったのだ。いきなり思考回路をスルーして、結論が出力されてしまった。この個体は自分という個体にとって、必要不可欠なものであると。

幸運は続き、今度のロックは簡単に破碎できた。

手を掛けるのに丁度いいほどの穴が開いた。

ブルフィンチは最終処理室に躍り込んだ。



その白い五メートル四方ほどの部屋は、タングステン系の照明で、ほのかに暖色を帯びていた。

正面の壁面から、やはり白い円筒状の棺のような装填床がのぞいており、その上側は透明の強化アクリルのようだ。

——間に合った！

ブルフィンチは棺の横に取り付き、アクリル越しに、眠り姫の姿を確認した。

ライラはすでに一部のパーツを外され、壊れた人形のような姿で横たわっていた。

しかしブルフィンチにとって、それは予想していたことであり、なんらその個体の存在価値を損なうものではなかった。もともと彼の単純な視覚回路にとって、形状認識はただの識別情報であり、感情とは無関係だ。まだ生きていてくれる、それだけで充分だった。

——覚えてる？

ブルフィンチは胸を詰まらせながら、ライラに語りかけた。なぜか意識が通じるといふ確信があった。

——あなたは、だあれ？ 山のお爺さんのところにあった、ストーブさんの精？

少々残念な気もしたが、もともと二・三度会っただけだし、ライラの心はすでに芒洋としている。

それでも彼女の、ただ悲しみだけに満たされていた感情の中に、自分という存在に対する好奇心が芽生えてくれただけで、ブルフィンチはここまで来たことが無駄ではなかったと悟った。

もう外部認識は失われているようだが、自分の意識を通して、自分の姿もちゃんと見てくれている。

——さあ、いっしょに帰ろう。

しかしライラの意識は、蒼い鏡のような海に浮かんでいた。

——帰りたくないの。辛いもの。

ブルフィンチの心に、ライラの心が、滲むように染み込んで来た。

大好きな人と大好きな人を好きでいることがもうできない——。

……ああ、そうだったのか。やっぱりこの娘は、天使みたいに優しい娘なんだ。

ブルフィンチはライラに語りかけた。

——僕にも大好きな人達がいる。マリオや、お父さんや、お母さんや、お祖父さんや、お祖母さんや、ひいお祖父さんや、ひいお祖母さんや、他にもいっぱい。今一番友達なのは、君が面白いと言ってる、あのマリオだ。でも、悲しいことだけど、人間は、すぐにいなくなる。マリオだって、すぐにいなくなってしまう。小さいのがあつというまに大きくなって、またちよつと小さくなって、どこかに消えてしまう。君が今大好きな人達も、そして君がその大好きな人達のこと、どんなに辛い思いをしても、その人たちも、またすぐにどこかにいなくなってしまう。だから僕は君にだけは、絶対に消えて欲しくない。君がいなくなってしまうたら……僕は永遠に同じ寂しさの繰り返しだ。

ライラの意識の中に、困惑という名の滴が落ちた。

——みんないなくなる？ どうして？

その滴から生じた波紋が、漣のように、蒼の水面に広がって行く。

——永遠って、なあに？

ブルフィンチは絶句してしまった。

ライラの意識の奥を、さらに深く探ってみる。

……なんてこった。僕はすっかり勘違いをしていたんだ。この娘は僕の何倍も、生きてるんだと思ってた。僕とおんなじように限りなくひとり悲しみ続けるのが、怖いんだと思ってた。でも、この娘は、まだ赤ん坊とおんな

じなんだ。ほんとになんにも、聖子やハンスが、有限であることさえ知らないんだ。——やったね！　ここから連れ出しさえすれば、この勝負、僕の勝ちだ！

ブルフィンチの心に、希望と歓喜が湧き上がった。

その希望と歓喜は、ライラの意識の中で、白い光として認識された。

それは目を細めたいほど眩しい光だったが、けして刺すような鋭さはなく、思わず近寄って触れてみたくなるような、暖かい光だった。

——それはゆっくり僕が教えてあげるよ！　さあ、行こう！　僕たちには、永遠の語り合う刻が残されているのだから！

ブルフィンチは、棺の強化アクリルの端に指を食い込ませ、満身の力を込めた。

◇

◇

最初に棺に駆け寄ってから、それまでの間には、実際にはまだ一秒も経っていない。

意識の共鳴は、実時間上では一瞬の内に済んでいたことだ。

しかし、アクリルの蓋を引きはがした瞬間、棺は急速に壁の中に引き込まれ始めた。

ブルフィンチは棺に向って、飛び込むように身を躍らせた。

両方のハンド・ユニットが、かろうじて壁と棺の間に挟まり、一体化を阻止した。

お願いだ、つぶれるな！

ブルフィンチは全霊で祈った。

指の先は、ライラの頬に届いている。

柔らかい、滑らかな手触りだった。

ブルフィンチの両腕が、みしみしとひしゃげ始めた。

——ごめんなさい、優しいストーブさん。

右腕が先に壁に引き込まれ、根元からちぎれた。

……さよなら。

左腕も、やがてちぎれ始めた。

——行っちゃだめだ！ ライラ！

ブルフィンチは、流れるはずのない涙が、視覚ユニットから流れるのを感じた。

その涙は思考回路を伝い、胸まで流れて来た。

このまま同じ枢で逝けたら——ブルフィンチは心しんから願った。

その時、がん、という衝撃が、処理ユニットを揺るがした。

腕を潰そうとしている力が緩んだ。

壁の奥から、何かギヤが弾けるような耳障りな音と、断続的な震動が数回響き、やがて圧力が消えた。

ブルフィンチは半ば呆然としながら、衝撃の走った右側を確かめた。

分厚い防災壁の破片が、壁と棺の間に打ち込まれていた。

そしてその傍らに、懐かしい太った人影が立っていた。

人影はブルフィンチに向かって、誇らしげに親指を立てて見せた。

ブルフィンチはライラに向かって叫んだ。

——ほら、友達が来たよ！

そしてまた振り向いた時——人影はすでに、力無く床に崩折れていた。

【第十一章】

1

僕はずいぶんと長い夢を見ているみたいだ。

何度も何度も、どうどうめぐりしながら。

それは僕と聖子が結婚している夢だ。

住んでる家はやっぱり僕の家だが、台所ではブルといっしょに、ライラもご飯の支度を手伝っている。

ほんとは主婦である聖子がお料理しているはずなんだろうけど、聖子は育児に追われて、当分それどころじゃないんだ。なにしろ男の子を六人、まとめて産んじゃったもんだから。

これは、あれだな。いつか図書館のPROMで見た、ヤーパンの古典戯画。シリアスの巨匠テヅカじゃなくて、笑劇系の巨匠、アカツカ。たぶんあれが夢の中でも効いてるんだ。オソマテ、カラマテ、ジュウシマテ……ちょっと違ったかな。

そんなことを思ってみるくらいだから、夢だけでもないんだろうけど、なんだか起きてるんだか寝てるんだかも良く判らなくて、顔をすっぽり覆い尽くしている何かをすごく鬱陶しく感じたり、ときどき誰かが何かをいろいろしてくれる感触なんかもちここに感じたりするんだけど、それもふつと途中で消えてしまったりする。

聖子の胸は、もうむにゅつとしていて。それは確かなんだ。ほつぺたで確

かめたんだから。でも、六人の赤ん坊におっぱいをあげるほどには、まだ膨らんでいない。だから僕も哺乳瓶でミルクを飲ませたり、いちどきに合唱団状態で泣いたりするのをあやしたり、なかなか大変だ。ついくたびれて、ごめん聖子ごめんと思いがながらも、いつの間にかふらりと家の前の庭に、涼みに出てしまったりする。

そうすると、庭の向こうは門と街路じゃなくて、川が流れていることが多い。ライン河ほど広くはないが、小川よりはずいぶん広い。水の代わりに、雲が流れていることもある。どっちにしても、向こう岸はすごく気持ちの良さそうな蓮華草の花畑が広がっているから、僕はつい石造りの橋を渡って、そっちに行ってしまうようになる。だって、家の前がすぐお花畑だったら、いつべんちゃんとピクニック向きかどうか確かめとけば、聖子や子供たちやブルやライラと、また出かけて来れる。お花畑って奴は、あんがい地面が湿ってたりして、みんなで座ったりできないことも多いんだ。

でも、まだ橋を渡って向こう岸に行ったことは、いつべんもない。橋の向こう岸には、いつも古風な白い絹のドレスを着た、女の人が立っている。その人は家の暖炉の上の額の中で、父さんと並んで楽しそうに笑っている、あの美しい女性にそっくりだ。粉屋の未亡人も齢のわりにはけっこう綺麗だが、やっぱりその人の方が、ずっと若くて美しい。でも、写真と違って、橋の向こうのその人は、いつもなんだか悲しそうに微笑している。そして、悲しそうに微笑しながら、いつも首を横に振って、こう言うんだ。その声が聞こえてくるわけじゃない。それは遠すぎるからというより、僕がまだその人の声を、夢の外で聞いたことがないからなんだろう。でも、唇の動きで、ちゃんとかかる。——まだ駄目よ。さあ、家にお帰りなさい。でも、いつかきつと……。

そう言われてしまうと、僕はいつもなんだかすごく悲しくなってしまう。でも、たいていその時、家の方から聖子の呼ぶ声が聞こえたり、子供たちの

合唱が聞こえて来たりする。どっちもやつぱり、すごくかわいい。かわいいのは嬉しい。だから僕は、案外しれつと気分を変えて、あわてて家に駆け戻ってしまふ。ほんとはその女性の悲しそうな微笑も、そばに行けばかわいくて嬉しいのかもしれない。でも、それは、いつかきつと……。

——そんな夢を、なんどもなんども、繰り返し繰り返し、ずっと見続けている。

2

ヨゼフがようやくその裏路地を見つけた頃、すでに街の空は、宵の明星を夕焼けの茜雲の間に浮かべていた。

優蔵は何度も車で送ろうと言ってくれたのだが、もう半月以上泊めてもらっている遠慮もあつたし、それに山育ちのヨゼフとしては、そろそろ思う存分散歩したい気分になっていた。

ヨゼフにとつての散歩とは、気分次第で山道を歩きたいだけ歩くことだ。半日うろつき回ることもある。

それでも街路を一時間以上歩いて、ヨゼフはすでに充分歩いた気になっていた。山野の土と石畳では、脚の疲れが全く違う。よくこんな街にみんな住んでられるもんじゃな、と、つくづく思う。

裏路地の中ほどに、そっけない木看板を見つけてほつとした時、ヨゼフはふと怪訝な顔をして、足元を見下ろした。

街灯の根元で、小さな少年人形が、両目に手を当てて顔を伏せている。

なんじゃこりゃ、と思つてあたりを見回すと、少し離れたゴミバケツの陰から、別の少年人形の顔が覗いて、それからまたあわてて引っ込んだ。そして反対側の消火栓の陰では、少女人形がこちらに向かつて、しいつ、という

ように唇に人差し指をあてていた。

……人形が、隠れ鬼をやつとる。

街灯の少年人形が、数を唱え終えたのか、跳ねるように振り返ってあたりを探った。

ヨゼフの足に気がついて、ひよいと見上げると、ペこりとお辞儀をする。

ヨゼフも面食らいながら、ペこりとお辞儀を返した。

それをバケツの陰から覗いていた仲間と目があって、少年人形は何か嬉しそうな声を上げると、一散に追い駆け始めた。その追い駆けっこの先で、消火栓の少女人形も見つかってしまい、三人は歓声を上げながら、くるくると纏れるようにして、街路の彼方に駆けて行ってしまった。

首を捻りながら、ヨゼフは木看板の横のウィンドーを覗き込んだ。

そこにもまた、当惑の種になる展示品が並んでいた。

全部の展示品が動いているわけではなかったが、結構な数の人形たちが、じゃれ合ったり取っ組み合いをしたり、仲良く毛づくろいを仕合ったりしている。

ヨゼフはここに来る途中の街路で見かけた、ペット・ショップのウィンドーを連想した。

——まあ、これはこれで、別に問題はないんじゃないだろうが。

それでもまだ首を捻りながら、ヨゼフは店の扉を押した。

「いめんよ」

ヨゼフがなんとなく予感していた通り——路地裏に入るまでの予想とは逆だった——店の中も賑やかな歓声が飛び交っていた。

その時アレキシスは、店の奥の小さな帳台で、このところ訳の判らない数字の続いている売上げを、懸命に記帳していた。

またか、と言うように、大儀そうに顔を上げる。

彼が一見不機嫌に見えるのは、あくまでも頭に登っているタキシード姿の

少年と、記帳する下腕を木馬代わりにしている赤いドレスの少女が重いからであって、別にその来客を疎んだのではない。

——こいつも、全然変わつたらんなあ。

二人は、ほとんど同時にそう思った。

顔を合わせるのは四十数年ぶりだが、初等科を出てから十年以上、同じ工房で修行していたのだ。顔はお互い情けない皺で覆われているにしろ、中身の匂いがほとんど変わっていないことくらいは、すぐに見当がつく。

片や笑顔のまま、片やしかめ面のまま、無言で挨拶の視線を交わす。

ヨゼフは遠慮なしに近寄って、帳台の手前の、粗末な木の丸椅子に腰を降ろした。

鞆から取り出した土産のワインを帳台に置きながら、店の外を顎でしゃく
る。

「二・三人野良になりかかつとるぞ。いいのか？」

「なんでだか、あれらは夜遊び好きになつちまつての。夜明けになれば戻る
じゃろ」

アレキシスは無愛想にそう答え、少年人形を頭に寄せたまま、のそのそと
店の奥に引つ込んで行った。待つてくれ、の一言もない。

それもまた昔と同様なので、ヨゼフはすっかりくつろいだ気分になった。

帳台に残った少女人形をつついてからかったりしながら、棚で遊ぶ人形た
ちや、通路を駆け回る人形たちをのんびりと眺める。もはやペット・シヨッ
プというよりも、幼稚園と言った塩梅だ。

やがてアレキシスは、コルク抜きとグラスの二つ乗った盆を持って戻つて
来た。

二人とも無言のまま、ワインを注ぎ合い、そして軽く乾杯する。

「……一生、出て来んかと思つとつた」

「……おとなしく仕事しとつたら、二十と五年で、追ん出されちまつたよ」

アレキシスは上目使いに、ヨゼフを睨んだ。

「別にお前にや、頭を下げるいわれはないぞ。親方にや申し訳ないことをしたかな」

ヨゼフは頬笑んだまま抗議した。

「それは心外じゃな。儂も、儂が造つとつた人形も、彼奴の脳味噌あやつでべたべたになつちまつたというに」

アレキシスも、幾らか表情を緩めた。

「そうか。……その人形にや、悪いことをしたな」

二人とも、工房で最後に別れた晩のことを思い出していた。

アレキシスにとつて、それは思い出したくもない晩だった。罪の意識からではない。一人の馬鹿が命を奪ってしまった自分の人形への、哀惜の思いからだ。その馬鹿を地獄に落としてやったこと自体は、それから四十数年の間、一度も悔やんだことがない。もつともそのせいで、陪審員たちの内心の同情にも拘らず、無期懲役を言い渡されてしまったのだが。

ヨゼフにとつては、自分の長い友人でありライバルでもあった若者が、最も彼らしくふるまつた晩として、忘れられない夜だった。あの庄屋の馬鹿息子が、『悪いけど、代わりくんない？ もう壊れちゃつてさ』とほざいた声の、苦勞知らずの軽薄な響き。工房に投げ出された少女人形の、引き裂かれたドレス。そして、そのドレスの下を検めた時の、アレキシスの鬼のような顔。それでもアレキシスは、少し離れて作業していたヨゼフにも聞こえるほど、ぎりぎり歯を食いしばりながらも、必死に激情をこらえていたのだ。それは相手が工房の上得意だったからなどではなく、親方やおかみさんへの義理からだったのだろう。しかし若者は、続いてさらに軽薄な声で、こう言い放った。『そんなに睨むなよ。金なら幾らでも払うからさ』。

ヨゼフは、あれが人殺しだったとは思っていなかった。さすがにこの齡まで生きていると、愛する相手を傷つけないければ真に愛せない、そんな人間が

この世に存在することも、もう悟っている。しかし、それはあの庄屋の息子とは、遥かに掛け離れた存在だ。少なくともあの晩は、ただの人でなしに、人が始末を付けたのだ。

ワイングラスを一息に空けるアレキシスの、悲しげな目の意味を気取り、ヨゼフはすかさず話題を変えた。

「しかしまあ、商売繁盛、けっこうじゃないか」

自分のグラスを物欲しげに覗き込んでいる少女人形を、またつついてみる。「迷惑じゃ。ろくに寝る暇もない」

「まあ、何しろ英雄さんじゃからな。それくらいは、有名税じゃろ」

「ふん。あんな無様な真似をさらして、何が英雄じゃ」

アレキシスは自分の髪をかき回している少年人形を、膝の上に降ろした。座り込んだ人形の腹を、軽くぽんぽんと叩きながら、

「……あの坊主、どうしてる？」

「……集中治療室で、まだ眠つとる。お前も見舞ってやればいいに」

正確には生死の境を彷徨っている状態なのだが、ヨゼフはただ『眠っている』と表現した。

——しかし、こいつは結局、あの坊主の目が覚めない限り、見舞いには行けないだろう。最後まで目が覚めなくとも、葬式にも行けないだろう。昔から情が深過ぎるのだ。工房でも始終むつつりと黙りこくっていたので、周りのぼんくら連中は冷血漢呼ばわりしていたが、自分と親方夫婦だけは、良く解っていた。そして、こいつは自身の造る人形にも、情が深過ぎた。情を籠め過ぎた人形は、所詮、造った人形師としか通じ合えない。それが自分とこいつの、腕の差だったのだ。

ヨゼフは、しかしそれだからこそ、アレキシスを愛していた。無論、妻や子供たちに対する愛情とは別の次元で。

外はすっかり陽が落ちて、街灯の明りが窓から漏れ込んでいた。

帳台の上の少女と、アレキシスの膝の少年が、ひよい、と床に飛び降りた。

少年は上着のポケットから呼子を取り出して、元気よく一息鳴らした。

棚や床でてんでに遊んでいた人形たちが、え？　もう？　と言うように顔を上げた。しょうがないなあ、といった様子で、二人の方に集まって来る。ウインドーの中で遊んでいた人形たちも、自分で内戸を開けて、小走りに寄って来た。それから少年と少女は、前後から他の人形たちの世話を焼きながら、奥の部屋に下がって行った。

なるほど、あの二人が年長さんというわけか——ヨゼフは目を細めて、カーテンを潜くぐってゆく行列を見守った。最後でぐずついている小さな人形の尻を押しながら、なにかきゆうきゆうとぼやいている赤いドレスの少女に、ヨゼフは軽く手を振ってみた。少女はちよつとはにかんだように笑って、奥の部屋に消えた。

鎮まった店の中は、帳台のランプの光が、ほのかに揺れるだけになった。

「もうお眠ねむの時間かい」

「ああ。なんせ数が多すぎるんでな。後ろでまとめて充電させとる。分配器が焼けそうで心配じゃ。ブレーカーはすぐ落ちよるし、まったく」

アレキシスは警察の事情聴取を終えてまた店を開いてから、次から次へと現れる親子連れの客たちに、流体的感情回路を載せたままの人形たちを、そのまま連れ帰らせていた。もはや『殺してやる』必要性は感じなくなっていたし、第一そんな暇もない。またしよつびかれるにしても、今度の警察での扱いは、あの晩とは雲泥の差だ。むしろこれで刑務所に戻れたら、外でわいわい騒がれるより、まだ気が楽なくらいだ。

「しかしまあ、世間様なんてのは現金なもんじゃのう」

ヨゼフは少し前に読んだタブロイド新聞の、特集記事を思い出して言った。そこでは当然、アレキシスの前科も暴かれていた。しかし書かれている事象は大昔と同じでも、当事者の意識については、まさに『見て来たような嘘』

が連なっていた。横暴な地方地主の悪行に、我が身を顧みず、反逆を試みた若き職人——まあ、ある意味、当たっているのかも知れない。いずれせよ大衆は、英雄の犯罪に関しては、何が何でも正当な反逆行爲に置き換えてくれる。

「……そんな話をしにきたわけじゃあるまい」

アレキシスはまた苦虫を噛み潰したような顔に戻って、ヨゼフを睨んだ。

「ああ。お前さんとこに、モンゴル羊の皮が、まだ残つとるじゃろう。自己クローニング処理されとる奴じゃ。できればまるまる一卷、譲ってくれ」

「……なぜ判る」

「とぼけるな。最初にあのお嬢ちゃんの胸を診てやったのは、お前さんじゃろが」

「……ライラはそんなに可哀相な様子か」

「ちよつと、見た目はな。体の方は、大した変りはない。今日、ようやく警察から戻った」

アレキシスは、黙って奥に向かった。

ヨゼフはその背中に、追加を入れた。

「それと、例の旧西暦一九三三年型の、特化ナノミクロン・スコープ」

それは誰にも秘密の買物だったはずだ。

アレキシスは立ち止まって、後ろ向きのまま訊ねた。

「……ブルの頭も、覗いたのか」

「ああ。なんせお前が三日もグース力寝とつたもんで、僕もぼーつとしとるわけにはいかんかったからな。あれはなかなか、見事な仕事じゃったよ」

「……あいかかわらず、ごうつくばりめが。お前はいつもそうじゃ。誰彼だれかれのいいとこばかり盗んで、どんどん先に行っちゃまう」

そう言いながらも、アレキシスははけして渋々ではなく、それらの品物を抱えて戻って来た。

ヨゼフはワインやグラスを、盆ごと床にどけた。

アレキシスは几帳面に品物をパッキンで包み、店用の無印の手付き茶袋に収めた。

「持っつけて、泥棒」

「……言いにくいんじゃないが、ちょっと色々あつて、今、金欠でな。払いは待ってもらえるか」

「金を置いてく泥棒はおらん」

「おう、言えとるな。じゃあ、また……またがあるかどうか、判らんが」

別れを告げて立ち上がったヨゼフに、アレキシスは、今までとは少し違つた、気の抜けたような顔を向けた。

「もう発つのか？」

「ああ、ライラが戻つたら、もうこの街に用事はない。夜行で連れて帰るよ」
暗い通路を去って行くヨゼフの背中に、アレキシスは帳台に座つたまま、ぼそぼそと声を掛けた。

「……これでお前が、あのお嬢ちゃんをなんとかしてやれんかったら、山まで頭をカチ割りに行くぞ」

もう苦虫顔に戻っている。

「ご心配、ご無用」

ヨゼフは振り向いて、にやりと笑つて見せた。

「お前もあいかわらず、僕の知つとることは確かにほとんど知つとるが、全部は知らん。それにあいかわらず、僕のできることの半分もできん」

くそつたれ、とつととくたばつちまえ、というアレキシスの罵声とともに、鉛筆と消しゴムが宙を飛んだ。

ヨゼフはひよいと避けて、今度は振り返らずに、ひらひらと手を振つただけで店を辞した。

——まあ、おたがい元気だ。とりあえずは、めでたい。

ヨゼフは路地を歩みながら、アレキシスに対する親愛の情を、改めて深くしていた。それに、手付き袋の重みをこれほど頼もしく感じられるのも、アレキシスがいてくれたからこそだ。

そして同じ頃、奥の作業場で人形たちの寝顔を確かめながら、アレキシスもまた、ヨゼフに対する親愛の情を、癩に障りながらも認めざるを得なかった。

◇

◇

暗い街路を引き返す内、ヨゼフはふと横の雑貨屋から漏れる明りに目をやっつて、ほう、と呟いた。

あの鬼ごっこの鬼だった少年人形が、店の売り場の中ほどで、棚を背にして眠っている。

棚のコンセントに勝手にプラグを入れて、充電しているようだ。

奥の帳場に腰を掛けている中年男は、全くそれを気にしていないらしく、のんびり新聞など眺めている。

——これもまた、別に問題はないんじゃないだろうか。

そう納得しながら歩を進めると、今度は逃げ役だった少年を、横の路地で見つけた。

太った汚い猫と、睨み合っている。

猫は背中を逆立てて、さかんに唸っている。そして対峙する少年も、パンチを繰り出すタイミングを見計らっているようだ。これはどう見ても、縄張り争いだ。

——そうになると、あの娘が、ちよつと心配じゃな。

ヨゼフはあたりに気を配りながら、裏路地から広い街路に抜けた。

そこはもう賑やかな商店街になっており、夜でも結構な人通りがあった。

しやれたガラス張りのパーマ屋が、ヨゼフの目に止まった。

まだ残っている二・三人の客たちに混じって、あの少女人形がすまし顔でちよこんとシートに座り、金色の巻き毛をカーラーだらけにしていた。

美容師や客たちの楽しそうな笑い声が、街路まで聞こえてきた。

——まあ、野良猫や野良犬がおるんだから、野良人形がおっても、おかしくはないな。

ヨゼフはアレキシスの腕が大分上がったらしいと喜びながら、賑やかな街路を、教会に向かって歩き続けた。

やっぱり山の方が気持ちいいが、街は街でそれなりに悪くない、そう思っていた。

3

……ごめんね。

何に対して申し訳なく思っていたんだか良く判らないんだけど、カプセルみたいな容器の中で目が覚めた時は、なぜかそんな気分だった。

なんだか思いきり見得を切って、壮絶な最期を遂げたはずの記憶もぼんやりあつたりするんだけど、結局、僕はそういう向きじゃなかったんだろう。たぶんよぼよぼになつてから、ベッドの上で、小市民的に死んで行くタイプなんだと思う。

意識がはっきりしてくると、僕はとたんに容器の蓋にマスクごと顔をぶつけて、駆けつけた看護婦さんに、ブルやらライラやら聖子やらプラーテンさんやら、まとめて狂ったように口走り始めたみたいなんだが、確かなところは覚えていない。ただ、またすぐに注射を打たれて眠りにつく時、ああ、よかった、とつくづくほっとしたことだけは覚えている。

だから、次に一般病棟の個室で目が覚めた時は、案外気分は悪くなかった。枕元の白いレースのカーテンが、風でひらひら揺れている。鉢植えの撫子の、白とピンクの花も、ゆらゆら揺れている。

この季節にしては、ずいぶん外の日差しが強いような気もしたが、風は気持ちよく乾いている。

「おう、目が覚めたか。いやいや、マリオ、お前またずいぶんえらいことやってくれたもんだなあ」

父さんが僕の顔を覗きこんだ。

明るいい表情も言葉も予想と同じだったが、ちよつと別人なんじゃないかと思うほどやつれてしまったのは、やっぱり僕のせいなんだろう。父さんごめん、と思うのといっしょに、やっぱりものすごく嬉しかった。僕が父さんを好きなのと同じくらい、父さんも僕を好きなんだと判ったから。

とりあえず起き上がって素直に謝ろうと思ったが、まだ体がついて来ないみたいだ。

「おいおい、無理するんじゃないぞ」

父さんは毛布の上を軽く叩いた。

仕方がないので、僕は横になったまま謝った。

「……ごめん」

頭の中がなんとか正気に戻って来て、これまでの色々なことを、考える余裕が生まれていた。

聖子やプラーテンさんはたぶん僕よりも早く目が覚めただろうし、ブルは僕と同じように、どこかで修理されているんだろう。

みんな無事、というのは確かに嬉しいことだが、でもそれは結局、ライラを連れ出すあの作戦が失敗したということだ。

ということは、僕たちはあの処理場を目茶苦茶にぶっ壊したあげく、結果として、ライラを消さずに済んだだけだ。

ごめんで済んだら、警察はいらない。

それでも椅子に腰を下ろした父さんは、全然怒っている様子は無く、なにか照れくさそうに笑っている。

「ははは、まあ、父さんとしては、まあ、とりあえず生きてればOKってとこだな」

ああ、ほんとうにありがたい父さんだ。息子が感化院送りになっても、見捨てはしないってことだ。

僕がなんだかうるうるしそうになっていると、廊下の方から、なにか騒々しい音が響き始めた。

困りますほんと困りますからお願いですから困ります、などという聞き覚えのある看護婦さんの声と、いやいやもう大丈夫なんでしょ医師せんせいに聞きまじりたよ夕刊トップなんすから十万の読者の希望なんすから、とかいう大勢の声が、入り乱れた足音といっしょに近づいて来る。

身構えする暇もなく、扉が開いたとたん、立て続けに眩しい光が目を射貫いた。

残像が幾つも視界に残ってしまい、目をしばたいたいて戸惑っていると、父さんは立ち上がって、その新聞の腕章を付けた人達に抗議を——いや違う、結構上機嫌で話しかけた。

「おやおや、皆さん本当に耳がお早い。親子水入らずの暇もありませんなあ。いやいや、なにぶん当人も目が覚めたばかりなもので、ここはまた私がということで、さあさあ、そちらへ」

お得意ののほほん口調で、大勢を要領よく廊下に押し出してしまう。

結局いっしょに出て行ってしまったんだが、最後に僕にウィンクして見せたのは、なんだったんだらう。父さんに全部まかせとけ、というありがたい親心なんだろうけど、いくらなんでも新聞に載るような大犯罪者に対して、たとえ自分の息子でも、甘すぎるんじゃないだろうか。そういう育て方をして

いると、きつと子供が将来愚連てしまうんだ。ああ、子供って僕か。なるほど、もう愚連てる。

僕は今後の感化院での生活を、いろいろ考えてみた。

プラーテンさんの話だと、案外普通っぽくて悪くない所みたいだし、去年そこに行ってしまったひとつ年長のライナーなんかは、男らしくて好きな生徒だった。ライナーほどの奴といっしょなら、確かに楽しい所かもしれない。ああ、でも、高等科のブルーノの馬鹿も行ってるんだよなあ。やっぱり気が重い。

父さんはほんの二・三分で戻って来た。やっぱりどう見ても、上機嫌な顔だ。

「いやあ、夕刊に載るんだったら、市長さんの感謝状も持って来れば良かったなあ」

……話が全然見えない。

きよとんとしてしまった僕の肩に手を置いて、父さんは意味深に頬笑んだ。「なあ、マリオ。人間、正直なのは確かに大事なんだが、誰にも迷惑をかける嘘は、いくらでも広げていいと思うぞ。特に、それが期待されている場合はな」

そう言って、父さんは新聞を差し出した。

タブロイド判の、この州の地方紙だ。扇情的な書きっぷりで良く売れているし、僕も眉唾で時々楽しんでる。

『ハルマゲドンを阻止した英雄たち』——そんな派手派手の装飾体の見出しが、一面トップだった。

記事の文章はあいかわらず少なく、元祖総天然色といった感じの画像が、大きくふたつ、目についた。

上の画像は一見普通の写真風だが、どう考えても合成で、なにかこの街全体がものすごい数の稲妻に打ち砕かれている、そんな光景だった。その隅っ

こに、虫眼鏡で覗かないと判らないくらい小さな活字で、『想像図』と記されていた。

そして下の画像は、これは明らかに手描きの、リアリズムっぽいけれどもあまり上手くない絵だった。遅しくて凜々しい少年と、戦闘用みたいな迫力満々の小型ロボットと、この筋肉質の体にこの顔が乗ってちゃおかしいだろうみたいな老人が並んで、どう見ても軍用装甲車にしか見えない車から、派手に突撃して来る絵だ。当然その端っこにも、マイクロ・スコープが欲しくなるような活字で、『想像図』とあった。

なんじゃこりゃと思いつながら、わずかな本文に目を通すと、なるほどそれはなにか僕の知らない大変なことが起きていたんだなあ、とは理解できたが、一方ラインハルト少年やプラーテン師やスーパー・ロボットの活躍に関しては、その根本的な部分で、決定的な誤解があるように思うんだ。本当のことはひとつも書いていないが、嘘も書いていない——そんな聖子の国の、天逝した娯楽作家の言葉が頭に浮かんだ。

僕はちよつとまた頭がくらくらしてきて、新聞を伏せてしまった。

父さんはまた意味ありげに笑いつながら言った。

「まんざら出鱈目でもないんだよ。実際、正確に計算したら、二十ブロックは瓦礫の山になってたはずだ。これでお前がもし目を覚まさなかったら、公園広場に銅像が建つてたかも知れん。人間なんて、結局、みんな結果で判断されてしまうものなのさ。市長さんからの感謝状は、この前父さんが代理でもらっちゃったが、ふたつ目の新聞に、そのあたりが載ってるぞ」

ああ、新聞はふたつ重なってるのか、そう思えばらした時、僕はなんだか日付がおかしいのに気がついた。ひとつ目は五月の末だから、なんの不思議もない。でもふたつ目は、七月一日になっている。

「……僕、ひと月も寝てたの？」

「ん？ いいや、もうふた月近いぞ。今日はもう二十二日だからな」

ひええええ。じゃあ、もうすぐ夏休みじゃないか。そして九月になったら、もう新学年だ。

「お腹の傷はとくに塞がったんだけどな。あそこの現場の化合物で、肺や頭の中も大変だったんだよ。まあ今だから笑い事だが、何度も脳死宣告受けそうになってな。正直、いやあ、まいったまいった」

——それはまあ、後でいろいろ考えたり謝ったりするにしても、じゃあ、なんでここにブルがいないんだろう。今までは僕とおんなじように、どこかでちょっと修理されてるんだとばかり思っていたんだ。ふた月も経ってるんなら、とつくにプラーテンさんが治してくれてるはずだ。みんな助かったっ
てのは、もしかしたら、ただの夢なんじゃないのか。

「……じゃあ、ブルは？」

恐る恐る訊ねると、父さんは、ぺん、と自分の頭を叩いて見せた。

「こりゃあ、すまんすまん。まずそいつが先だったな」

父さんは椅子から立ち上がって、枕元のカーテンを開いた。

窓の外を顎でしゃくつているので、僕はベッドの縁に手をかけ、ちよつとまだ重たい体を半分起こそうとした。

父さんが腋の下を支えてくれた。

陽の光と風が、僕の中の澱を洗い流した。

たぶん、ここは四階くらいなんだろう。

眼下に病院の前庭が広がっていた。

芝生のベンチの前で、ブルが元気いっぱい両手を振っている。

ぴよぴよもここまでは聞こえないし、モニターの字もちよつと遠すぎて見えないが、やったねとか最高とか、景気よく叫んでくれてるに違いない。

気がつくと僕はベッドに膝立ちになって、負けずに両手を振り返していた。「ブルたちは、どうも電磁波対策が甘いんで、どうしてもあそこまでなんだそう。お見舞にしては、ちよつとあれだなあ」

これ以上のお見舞はないと思う。

だってブルの隣では、初めて見た時みたいに綺麗で元気そうなライラが、ぺこりとお辞儀をしてくれたりしてるんだ。

僕は、この夏空のどこかにいるかもしれない誰かに、絶交宣言を撤回してやってもいいかなと思っていた。

【第十一章】

1

でも、僕はいつまで手を振り続けていればいいんだろう。だつてブルたちのいる庭まで走つて行こうにも、どうも僕の脚はまだ膝立ちが精一杯みたいだし、といつて手を振るのをやめてまたベッドに寝てしまふのは、気持ちの方が納得してくれないわけだ。

映画なんかだったら音楽がめいっばい盛り上がつて、ドーンとエンド・マークが出て、あとはクレジットにお任せすればいい。でも現実つて奴は、そうは行かない。

ブルやライラも、案外おんなじ気持ちだつたりして。

ちよつとずつ振りを緩めて、ひらひらくらいにして、それから鉢植えと並んで窓枠に頬杖をついてずつと見つめ合つたりしても、気持ちの方は納得してくれそうだけど、なんだかちよつと間が抜けてるような気もするし。

プラーテンさんくらいに修行を積みば、きつとなにか男らしいクールな再開シーンを決められるんだろなあ、などと考えながら、結局、僕は力尽きるまで手を振り続けている路線しか思いつかなかつた。

でも、そんな心配はいらなかつたみたいだ。

父さんがぼんぼんと僕の肩を叩いてくれたからだ。

父さんは僕の横から、外のブルたちに手を振つて、それからカーテンを引いてくれた。

「まあ、いずれ好きだけけいっしょに走り回れるだろう。今日はこのくらいにしておけ」

ほんとにありがたい父さんだ。僕はまだこんな場面さえ、一人ではうまく治められないんだ。

僕はまたベッドに横になった。

これまでのいろいろなことについて、ずっと言おう言おうと思っていて、なんとなく切り出せないでいた言葉が、ちょうどいいきっかけで、僕の口から漏れてくれた。

「……ありがとう」

父さんはちよつと困ったような顔をして、なんだか照れ臭そうに、あつちを見たりこつちを見たりしている。

これはこれでまた、なんだか背中がこそばゆい気もするんだが、言いたいんだから仕方がない。

その時、ドアをノックする音と、失礼します、という、あの聞き覚えのある看護婦さんの声が響いた。

「おう、回診の時間か」

こりや間がいいわ、そんな感じで父さんは立ち上がった。

ドアが開いて、なんだかずいぶん丸くて大きい人が、にこにこ笑いながら入ってきた。

白衣もここまで膨らんでいると、お医者らしい威厳というよりは、何か病院ネタのコントでも始まるんじゃないか、そんな感じだ。それともハンプティ・ダンプティが主役の病院ドラマ。

でも、その人は自分でドアを開けて入ってきたのではなく、ちゃんと別のいかにもキレそうなお医者が先にドアを開けて、それから一步引いて、うやうやしく外でお辞儀しているのが見えたから、たぶん相当に偉い人なんだろう。

「やあ、若き勇者君が、ようやくお目覚めと伺ったんでね」
声もちゃんと丸かった。

その人に続いて、後から後から何人もお医者が入って来る。顔がどんどん若くなって行くのは、たぶん偉い順に並んでいるんだろう。

最後に入って来た二人の看護婦さんが、さささ、と足を速めてベッドの横についた。

お父さんは院長先生らしいその太った人と、力のこもった握手を交わした。

「ありがとうございます、ハルトヴィック先生」

「なんのなんの。マリオ君を殺しちまったら、私やもう街を歩けませんからな。ということは、もうサロンでファツハさんと楽しい酒も飲めないわけで」
なんだか二人で親しげに笑い合っている。父さんとは、お酒繋がりもあるらしい。

さあ診察よ、と、僕の頭の方にいた看護婦さんが、小声で話しかけて来た。きつとこの人が、カプセルにいた時もいろいろやってくれた人なんだ。親しみ深い感じの笑顔でも、たぶんそうなんだろうと判る。

僕も頬笑み返して半身を起こすと、看護婦さんは優しい手つきで、僕のパジャマをたくし上げてくれた。

自分のお腹を見るのは、目が覚めてから初めてだ。

そんなに寝たきりだったら、ずいぶん引っこんでくれているんじゃないかと期待したが、残念ながら、出陣の時とあんまり変わっていないみたいだった。でも、左の脇腹に残ったでこぼこと大きい縫い傷は、堂々としてかなりいい感じだ。

院長先生は聴診器であちこち聴診したり、触診したり、あーん、と言ってペロを出させたりした後、あっさり断言した。

「はい健康」

こんなんで判るのかなあ、という僕の顔色を読んだんだろう、院長先生は

傷のあたりをぼんと叩いて、笑いながら言った。

「お約束という奴だよ。儀式と言つてもいいかな。君の体は一度目覚めてからこの三日、隅から隅までスキャンしてある」

おお、僕はそんなかつこいいことまでされていたのか。残念、それはぜひ自分でも見たかった。

「五十四日も眠って、筋力の衰えも最小限だし、栄養状態も良好。床擦れもない」

院長先生は、並んでいたお医者の方を振り返った。

なぜだかちよつと別人のような鋭い目をしているのが、僕にもちらりと見えた。

「これであのS I C U（超集中治療ユニット）の新規導入が、ただの私の道楽じゃないと判ったかね？ ルッツ君」

さつきドアを開いていた、いかにも理知的なナンバー・ツーらしいお医者さんが、ぴくぴくと頬を引きつらせた。

「理事会にも、そう報告しておいてくれたまえ」

後のお医者さんたちは、私はなんにも聞いてませんが、そんな顔で直立不動だ。

前言撤回。やっぱりちゃんとシリアスな病院だったんだ、ここは。

でも次に僕に向き直った時には、院長先生は元のハンプティ・ダンプティに戻っていた。

「さて、マリオ君。君の命の恩人を、改めて紹介してあげよう」

僕がきよんとしていると、院長先生は楽しそうに笑って、

「さあ、この方だ！」

と、いきなり僕の下腹のお肉を、わしつ、と掴んだ。

「いやあ、君のこの立派な皮下脂肪君に感謝したまえ。この方が守ってくれなかったら、最初の爆発で即死していたところだ」

……感謝したいんだが、なんか、嬉しくないなあ。ぶるんぶるん言ってるし。それに院長先生の喜び具合は、もしかしたら同類に対する親近感が主なのではなからうか、そんな気もするし。

院長先生は大笑いしながら、お医者様の列を従えて去って行った。隣の父さんも、大笑いしている。

結局あの院長先生は、シリアス・ドラマをやりに来たんだらうか。それとも、ラストのギャグをかましたかったんだらうか。どうもラストの方が、メインだったような気がする。

僕はあつけにとられて、ドアに消えて行く行列を見送った。

すると最後に出て行った看護婦さんは、すぐにはドアを閉めないで、廊下で待つていたらしい誰かに、さあどうぞと言うような手振りをした。

「お待たせしました」

それから看護婦さんは僕に顔を向けて、二・三度目を丸くしてみせた。やるじゃん、みたいな顔だ。

その横から、見慣れた白いワンピース姿の、眼鏡っ娘こが現れた。

もじもじと決まり悪そうにしている聖子は、もう涼しげな半袖だった。

——か、かわいい。

あのさらさらで長い黒髪は、なぜだか肩にも届かないほど短くなっていた。断髪の令嬢、そんな感じだ。ちよつともつたいたいような気がしたのも確かだが、それはそれで、文句なしに似合ってる。これはきつと、森の妖精ニンフが小鹿に姿を変えたんだな。僕は今更ながら、ちよつとまた惚れ直したりしてしまった。

後ろに立っていた神父さんが、やあ、というように明るく頬笑んで、聖子の背中を押してくれた。

聖子は下を向いたままで、なんだかもじもじを通り越して怒ってるようにも見えたんだが、東洋の『氣』はぜんぜんきつくないし、むしろ部屋の中が

ふわふわしてきたみたいだ。

神父さんはいっしょに部屋の中には入らずに、こちらに向かつて深々と頭を下げた。

さっきの『やあ』が僕向きで、今度のお辞儀は当然父さん向きなんだろうと思ったから、僕はちょっと目礼を返しただけで、聖子鑑賞を続けさせてもらった。なんというか、少しでも目を離すのが、もつたない気分だったんだ。

父さんも何も言わずに、深々とお辞儀を返した。そして神父さんといしょに、部屋を出て行ってしまった。

出掛けにまたウインクしてくれたんだけど、さすがにこれは気が利きすぎてるんじゃないだろうか。

まあなんというかあれこれあった後だけに、いきなり二人きりというのは、僕にはまだ荷が重い。

だって、なんだか胸がいつぱいになってしまって、何を言えばいいやら見当もつかない。

聖子はうつむいたまま、しずしずとベッドの枕元に来てくれた。でも、顔をこちらに向けてくれないし、何も言ってくれない。

椅子にも座らないで、窓辺の撫子の花を、指でつついたりくるくるしたりしている。

それもまた綺麗な泰西名画みたいで、夕方まで見続けてもいいくらいだ。でも黙っている、本当に夕方までそうしているような気がしたので、僕は念のために忠告した。

「……なでしこ、散っちゃうよ」

聖子はぴくりと硬直して、それから、ふう、と溜め息をつく、おもむろに椅子に腰を下ろした。

なぜだか可愛い眼鏡を外してしまって、枕元の台に置いている。

そしてようやく目を合わせてくれた。

やっぱり怒ってはいないみたいだ。

なんだか困り切ったみたいで、上から下まで真っ赤になっている。

小さな桜色の唇が、ちまちまと動いた。

ずいぶん久しぶりに聞く、小鳥みたいな声だった。

「……イツヒ・リーベ・ディツヒ」

は？

僕はちょっと困ってしまった。いや、確かにしつかり聞こえはしたんだが、どうも頭がすぐには反応してくれなかったんだ。

これは確かに、この国の言葉だよなあ。『I c h l i e b e d i c h』
で間違いのないよなあ。『I c h』が私で、『l i e b e』が愛で、『d i c h』は
どう考えても貴方をだよなあ。えーと、これはつまり、『私イツヒは貴方リーベを
愛ディツヒします』、で間違いのないよなあ。

森の悪戯精霊につままれたみたいで、ぼかんとしてしまった僕の前に、その唇が近寄って来た。

顔を真っ赤にしたまま、神妙に目を閉じている。

僕は思わず、素早く四方八方をチェックしたりしてしまった。

いきなりドアが開いて、テレビのコメディアンが看板持ってカメラといっしょに突入して来るとか、天井に十六トンの分銅が吊るしてあって、不用意な反応を見せると頭上に降って来るとか、最悪の場合、四方の壁がいきなり外側に倒れて、そこは駅前の交差点でみんなが僕を見て大笑いするとか。

でも、やっぱり病室はふたりつきりだ。

僕の心臓の音に混じって、聖子の心臓の音まで聞こえて来そうに静まり返っている。

いいのか？ほんとに、いいのか？ いただいちやうぞ。後でこれは夢だったなんてのは無しだぞ。……いただきます。

ふにゅ、という感じだった。

昔読んだ本に、初めてのキスで前歯が激突してキーンとなるシーンなんかがあったので、できるだけ注意してみたんだ。

ああ、胸はむにゅ、で、唇はふにゅ、だ。聖子はとっても柔らかい。もう、夢でもいいや。

僕がもう酔っ払い状態でふにゅふにゅしていると、聖子の体が、僕の方にくっついて来た。

背中に小さな手が回って来た。

僕も聖子の背中に、腕を回した。

ほんとは雄々しくこちらから抱き締めたいんだけど、僕はベッドで半分横になってるので、どうしても最初は、聖子を引き寄せるしかできないみたいだ。

思わずそのままくると押し倒してしまいたかったんだが、そこまでやるとどこかの誰かが邪魔しに来てしまうような気がして、怖くてできなかった。

聖子の軽く開いた唇から、なんだかちよつと感じの違う柔らかいものが、僕の唇をくすぐって来た。

おおおおお、これはあれか。聖子の舌か。これはもう、絶対、夢にちがいない。それなら、夢が覚めない内に――。

僕は自分の舌で、聖子の舌を出迎えた。

ちろちろとくすぐりあっているそれは、唇同士よりもちよつと堅くてざらざらしている感じだったが、それはそれで、いかにも強く触れ合っているような気がして、いい感じだ。

聖子の舌は、なんだかしょっぱかった。

甘いなんてのはただの例え話だと判っていたが、しょっぱいというものも、あんまり聞いたことがない。

僕は薄目を開けて、聖子の顔を確かめてみた。

軽く閉じた聖子の臉から、涙が次々と溢れて、唇の方まで流れていた。

僕はもうそれを見て、完全に酔っ払ってしまったんだろう。

気がつくとき唇をろくに離しもしないで、聖子のさっきの言葉と同じ言葉を、何度も何度も馬鹿みたいに繰り返していたし、それから自分の舌を思いきり聖子の口の中まで入れてしまっていたし、聖子もそれを拒んでいないような気がした。

時よ、果てしなく続け。僕はこの愛しい人を、この腕から離しはしない。死が二人を別つまで。

◇

◇

僕たちはどれだけそうしていたんだろう。

ようやく僕の酔いが覚めた時、聖子は椅子に戻って、最後に言葉を交わしたあの晩みたいに、ただし今日は自分のハンカチで、涙をふいたり鼻をかんだり、お顔のお手入れをしている最中だった。僕はそのまんまでも、良かったんだけど。

壁の時計をしてみると、ほんの五分もたっていないみたいだ。

でも、あの晩とは違って、なんだか何時間も聖子といっしょにいるような気がした。

えーと、さて、とりあえず、僕は何を言えればいいだろう。気持ちとしては、ぜひ結婚式の日取りなんかを決定しておきたいところなんだが、やっぱり年齢的に当分先の話になりそうだし、その前に妻子を養う算段なんかも、しなきゃいけないだろうし。

聖子は眼鏡を掛け直して、上目使いに、なんだか心配そうな視線を向けてきた。

やっぱり結婚相手の将来性が、今一心配なのだろうか。僕も心配だけど。

「……間違つて、ない？」

は？

「……ほんとのキスの仕方」

うーん、なるほど。これはちょっと、僕も即答は難しい。家に帰って本棚の本を、よく読み返してみないと。

でも、あのカイケンやハラキリの日本女性がここまで思い切ってくれたんだから、ここはやっぱり最大限の賛辞を送るべきなんだろう。それに、とにかく、文字通り心が踊ってるくらい嬉しいし。

「……うん。ちゃんとしてた」

僕がそう答えると、とたんに聖子は、なぜかいきなり天罰顔みたいになつて、僕を睨みつけた。

な、なぜだ。僕はまた何かやったか。

「……したことがあるの？」

聖子の声には、なんだかすぐくまずい『気』が充満している。

うーん、やっぱり僕は、まだまだ修行が足りないみたいだ。

「い、いや、ほら、本なんかで、えーと、たぶん」

しどろもどろに答えると、聖子はとたんに天使顔に戻って、僕のお腹に、ぱふ、と頬を預けた。

そのまま、すりすりしている。

僕は心底ほっとしていた。だって、アッパーがまだ残ってるし。

「ほら、僕なんか聖子と違って、全然もてないから」

我ながら情けないなあと思いつながら、駄目押し弁解を続けていると、「マリオが知らないだけ。図書館組の子とか、文芸部の子とか、みんなおとなしいから、黙ってただけ。でも今はもう、みんな手紙やプレゼント用意して、待ち構えてるんだもの」

それは——たぶん半分間違いで、半分本当なんだろう。

聖子のすりすりが、もつと強くお腹を押ししてきた。

「でも、よかった。退院はまだ一週間くらいかかるって、お医者さんが言っていたもの。そしたら、もう夏休みでしょ。それまで毎日、放課後お見舞いに来るね。夏休みになったら、お父さんやお母さんやライラといっしょに、スイスに行くの。マリオやブル君も、いっしょに行きましょう。綺麗な空気の山だから、きつと体にもいいし、元気になったら、山の上の湖でボートに乗ったり……」

ああ、それはいいかも。湖のほとりで、星空の下で愛を語ったりして、また熱い接吻を交わしたりして、それでそのまま草の上に押し倒したりして……いかにいいかん。日本女性に、それをやっちゃいけないんだ。それは絶対結婚初夜でないと、きつとカイケンやハラキリになっちゃうんだ。

そんなことを考えているうち、僕はまだひとつ、大事なことが残っているのを思い出した。

ライラとブルをなんとかしてやれたら、真つ先に決着けりをつけようと思っていたことだ。

まだ、ハンスとの決闘が終わったわけじゃない。

それは聖子がもう僕を選んでくれていても、まだ終わっちゃいけないんだ。それは聖子の名誉のためでもあるし、僕の男としての面子の問題だ。僕はなんとしても、一対一で奴自身にはつきり負けを認めさせないと、ブルみたいな本物の男にはなれない。

僕はまだすりすりし続けている聖子の肩に手を置いて、あの日と同じお願いを繰り返した。

立会人のお願いだ。

優蔵はコーヒーの紙コップを両手に持って、廊下の角の自販機から、病室の前の長椅子に戻った。

ファツハは顔を両手で覆うようにして、ぐったりと長椅子でうなだれていた。

あの晩からもう幾度となく顔を合わせているので、ブラックが好みであることは、訊くまでもない。

「どうぞ。お疲れになったでしょう」

ファツハは首を解しながら顔を上げ、軽く片手で礼をして、コーヒーを受け取った。

今にも崩折れそうに全身を弛緩させて、それでも美味そうに、ゆっくりとコーヒーを啜る。

優蔵もその隣に座り、カップに口を付けた。

「いいお子さんを、お持ちですね」

心底の言葉である。

ファツハもそれを感じたのだろう、照れ臭そうに笑いながら、幾分精氣の戻った声で答えた。

「いやあ、ははは、見てると飽きない奴なんで、それだけが取り柄ですわ」

さらにコーヒーを啜ると、いつもの冗談好きな顔に戻ってくる。

「お宅の聖子ちゃんのように可愛かったら、寝顔だけでも充分なんでしょうが、あいつは寝てるだけだと、可愛くもなんともないですからな、つまらんだけで。ま、起きて駆け回ってなんぼの奴です」

この人は本当に強い、と、優蔵は改めて敬服した。

自分もこの二か月近くは眠れぬ日々を過ごしていたが、聖子は翌日には目覚めてくれたし、妻も自分の心中を察して、明るくいたわってくれる。しかしファツハは、ただひとりの息子の生死があやふやなまま、繁雑な社長とし

ての仕事も、日々こなしていたのだ。

「でも、そろそろ覗いてやった方が良さそうだな。あの雰囲気だと、あんまりほっとくと何が始まることやら。失礼、聖子ちゃん御本人はしつかりしてるでしょうが、何ぶん、うちのあの馬鹿息子が相手ですし。なんといっても、年頃の娘さんですからな」

優蔵は微笑して答えた。

「それはまあ、あの二人に任せましょう」

ファツハは怪訝そうに優蔵の顔を窺った。

「さすがは神父さんですなあ。達観していらっしやる」

優蔵は苦笑して、無言でコーヒーを啜り続けた。

決して達観しているわけではない。神父である以前に、父親としての娘への執着は捨て切れるものではないし、その娘の前に、すでに子供ではない存在として現れた異性に対する、嫉妬の念もどこに残っている。

しかし優蔵は、二か月に及ぶ祈りと熟考の末、その少年の存在を認めざるを得なかった。

事件の渦中にいた間は焦燥に紛れて自覚できなかったのだが、主はけして沈黙を続けられていたわけではない。たとえばあの最後の木曜日、ヨゼフ老人と玄関で再開した時、全ての事態を一瞬に把握できたのはなぜか。それは絶対に、自分の経験や知識から生まれた感覚ではない。またヨゼフ老人が旅立つ契機となったという、山からの声の件もある。それらのことを考え合わせれば、主は常にどこかで一部始終を見守られていたとしか思えない。

それならば、主はなぜライラとあの少年に関わる啓示を切望したときに限り、第六感を与えて下さらなかったのか。

そもそもなぜ自分は、あの少年と初めて会話を交わした時に、なんの猜疑心も抱かなかったのか。

優蔵は少年がS I C Uを出て以来、感謝の祈りと共に、ある問いかけを、

繰り返し神に投げかけていたのだ。

——主よ、あなたは最初から、あの少年に全てを託されていたのですか。そして昨夜、優蔵の直感はそのを受け入れた。

ならば、今後もそれに従うしかない。

たとえその判断が誤りであり、あの少年がただの愚かな少年だったとしても——彼は一度死ぬことによって聖子を救い、そして復活することによって、優蔵自身を救ってくれたのだ。

まだ病室の扉を気にして、しきりにそちらに顔を向けているファツハにも、優蔵は感謝の籠った親しみを覚えた。

と、突然その扉が開いて、何か白い空気が廊下に広がった。

優蔵は動転して立ち上がった。

白い空気と見えたのは、どうやら空気のように軽い大量の白い羽根が、一面に舞っているらしい。

その霞のような羽根の尾を引いて、白いワンピース姿が、泣きながら優蔵の胸に飛び込んで来た。

「……忘れたいのに……ほんとに後悔してるのに……」

そんな呟きを交えながら、おいおいと泣いている。

しかし、扉からパジャマ姿の少年が現れる気配がすると、聖子は優蔵の胸から離れ、おいおい泣き続けながら、廊下を駆け去ってしまった。

優蔵とファツハは、啞然としてその後ろ姿を見送った。

一瞬後、ファツハはコーヒートを床に撥ね散らしながら立ち上がり、息子に駆け寄って、その肩をむんずと掴んだ。

「おい、この馬鹿！ お前はまた何をしでかした！」

少年は舞い降りる羽根の中で、父親にがくがくと揺さぶられるまま、去って行く聖子を呆然と見送っていた。

ファツハが申し訳なさそうな顔を優蔵に向けた。

「すみません。大丈夫ですか、聖子ちゃん一人で」

「――庭にライラもブル君もいますから、大丈夫でしょう」

優蔵はすでに、少年が手にしている白い布袋を見て取っていた。

病院の備品の、羽根枕のなれの果てだ。

優蔵は最悪の事態は免れたと悟って、内心安堵していた。

何があつたか定かではないが、今日はさすがに、聖子は自前の拳ではなく羽根枕を使用してくれたらしい。もし少し前まで死にかけていた人間に、残るアッパー・カットを繰り返したりしていたら、娘の教育法を根本から考え直さなければならぬところだ。

――それにしても、マリオ君。

優蔵が手にしているカップの中身も、ほとんどこぼれてしまっていた。

――君は本当に、あの聖子を御しながら生きて行けるのかね？

軽い脱力感を覚えながら、優蔵は残り僅かなコーヒーを飲み干した。

3

決闘状

唾棄すべき男である、貴様、ハンス・ホルムよ。

先頃惜しむらくも遂げられなかった男同士の闘いを、完遂しようではないか。

日時、武器、場所は、今度こそすべて貴様に任せる。

僕が勝利した暁には、生涯二度とセイコに近づかないと誓約していただけ。無論、僕とも。以上。

マリオ・ラインハルト・フォン・ファッハ



マリオ君へ

その件に関して、また別の件に関して、少々相談に乗ってほしいことがあります。

君の体が治ったら、ぜひ都合のよい時間と場所を知らせてください。

君の友情に期待しつつ ハンス・ホルム



うーん、誤算だった。

やっぱり日本女性には、西欧的な男の意地を理解してもらうのは難しいんだろうか。

それとも、僕がただ間抜けなだけなんだろうか。

両方ということにしよう。うん、この際。

どっちにしたって、聖子は先週、神父さんや奥さんといっしょに、スイスに旅立ってしまった。

美しい湖水の辺ほとりで、僕たちが繰り広げるはずだったひと夏の青春の想い出は、朝露のごとくはかなく、夢と消えてしまったのだ。

もうこうなったら、せめてハンスの奴と壮絶に闘って、男方面だけでも勝

利を手にしておいて、新学年からの聖子戦に備えておかねばならぬ、そう心に決めて体力回復に全力を尽くしていたのに、ハンスはハンスであんな訳のわからない返事を送ってよこすし。怖じけづいて済むって問題じゃないんだぞ。

八月ももう半ばの昼下がり、僕はハンスと約束したあの草原に向かって、意気揚々と——と言いたいところだが、ほんとはちよつとだらだらしながら、街路を歩いてた。

約束は三時だから、まだ一時間以上ある。

暑い盛りでもからりとしているのが、この街のいいところだ。木綿の半袖と長ズボンで歩いても、ほとんど汗はかかない。例えば聖子の国だと、ホットカイドーとかいう北の州の、さらに北寄りなんだそうだ。

ヤーパンにも聖子といっしょに行ってみたいよなあ。ヤマデラという聖子の故郷は、どんな土地なんだろう。

残念ながらこのP—R—O—Mにも、ヤマデラの写真は記録されてなかった。でもその地名の意味や、トーキョーやキョートの写真や地図上の位置から想像すると、きつと竹や羊歯の生い茂る神秘的な山の中にキンカクジのような絢爛たる寺院があって、そして麓にはハイテクの工場地帯や摩天楼が広がっていて、その間をシンカンセンやリキシャが走ったりするんだ。でもその想像だと、マイコというキモノの女性たちがどこに棲息しているのか、ちよつと判断できないんだ。寺院の庭でお茶でも出してくれるのかな。いかんいかん。浮気心を起こしちゃいかん。僕は聖子一筋で生きるんだ。ハンスの奴みたいな、浮気者じゃないんだ。

などと色々考えているうちに、公園広場の噴水が見えてきた。

ここは家から草原への、ちょうど半分くらいの所だ。

僕はベンチの並んでいる噴水の表側を避けて、わざわざ裏手の森の陰に回り、その中の散策路を通って、噴水の裏手の林に出た。そこからだと、隠れ

てこつそりベンチの方が見渡せる。なんでそんな面倒なことをしているのかというと、ブルの奴を心配してのことだ。

あいつはもうあれ以来、すっかり鼻の下が伸びきってしまって、何かにつけてすぐ外に出たがる。朝食やお弁当の準備をすませると、掃除もそこそこに公園にでかけて、日がな一日ライラと並んで、ベンチに座っているらしい。時には夕ご飯の準備もすっぽかして、夜遅く帰ってきたりもする。これはやっぱり友人として、一度しっかり事態を把握しておかなければならない。

なんて、本当はただ、ブルのデートの首尾が気になるだけなんだけどね。なんと言っても相手は絶世の美少女で、ブルは相変わらずだるまストーブだ。ちゃんとうまくエスコートしてるだろうか。

僕は木陰からちよつと顔だけ出して、涼しげな水の踊りの間から、ベンチの方を窺った。

夏の日差しの下で、きらきら光る水の飛沫の向こうに、ブルとライラが並んで座っている。

ベンチもちゃんと向こうの林の木陰になってるので、木漏れ日がちよつと斑になってる程度だから、この陽気でもブルが熱暴走したり、ライラが日射病になったりする心配はないだろう。

仲良く手をつないで、ほんとにただ黙って座っているだけに見えるんだけど、時々ライラがびつくりするみたいな顔をしたり、くすくす笑ってブルのボール頭をポンと叩いたりするのは、きつとうまく女の子に受けのいい話題なんかも、こなしてるんだらうな。よしよし。

「具合はどうじゃ」

いきなり後ろから聞き覚えのある声がかかって、僕は心臓が止まるかと思っただって今僕がやってるのは、どう見てもアベック覗きだ。しかも真つ昼間

から。

でも、ありがたいことに、後ろにいたのはプラーテンさんだった。

僕と同じように腰をかがめて、こっそり覗きこんでいる。

「いい感じみたいです」

退院してから一度、ブルといっしょに挨拶に行ったから、プラーテンさんは僕やブルが元気なことはもう知っている。きっと、ライラのが心配になったんだろう。近ごろ噂のカップルとして、公園名物になりつつあるなんて話も聞くし。

「夜遊びなんぞは、しとらんじゃろうな」

「えーと、ちよつとたまに遅くなったりはしてますけど、ちゃんと代理神父さんの所に送って行ってるみたいです」

「よしよし。なら安心じゃな」

まあロボット同士なんだから、不純異性交遊の心配だけはないと思うんだけど、お年寄りには案外そういうことにこだわるからなあ。

「あの、僕、リハビリ終わって昼間は働けるんですけど、バイト行きますか？」

「ああ、バイトはもういらん。在庫は一掃しちゃまって、気心の知れた子供らが残っておるだけじゃ。秋からは、じっくり大きい仕事をやろうと思ってる」
「でも、結局、僕、なんにもしてないし。ブルの修理代も、あの装甲代なんかも」

「あれはただの儂の趣味じゃ。ま、趣味も仕事も変らんがな。納期があるのが仕事で、納期のないのが趣味と思つとつたが、あれは珍しく、納期のある趣味じゃったな」

話をしている間に、気が弛んでしまったらしい。

体が木陰からはみ出して、ベンチの二人に感づかれてしまった。

ブルは嬉しそうにこちらに手を振って、ライラは立ち上がってこくりとお辞儀をした。

「あとよろしく」

プラーテンさんは、そそくさと森の中に消えてしまった。本当に照れ屋なんだよな。

僕は仕方なく二人に手を振り返して、今来たみたいにしらばっくれながら、ベンチの方に出て行った。

やっぱり木陰に隠れているより、噴水のしぶきと風を感じながら歩く方が、ずっと気持ちがいい。

「おう、偶然偶然」

我ながらわざとらしいかなあ。

「ハンスのどこに行くの？」

「ああ、ちよつとな」

「僕も行くか」

「いいよ。今度は、もう闘わずして勝ってるみたいだし」

デート中の友人を、呼びつけるほどのことじゃない。

ライラがまた、丁寧にお辞儀をした。

「こんにちは。いつもお世話になっております」

ほんとにこの娘はいつも几帳面で、なんだか他人行儀な気もするんだが、いざその殺人的な美貌で見つめられると、ついついどきどきしちゃうんだよな。いかんいかん。聖子が遠くにいるからと言って、それはいかん。

「でも、ライラはなんでスイスに行かなかったの。神父さんたちも、みんな行っちゃったのに」

ライラはちよつと考えこんで、それからちらりとブルを見たりして、ちよつと顔を赤くしたりしている。

ううむ、僕は今きつと、すごく野暮な通行人を演じてしまっているんだな。

「じゃあ、また」

僕もそそくさと切り上げようとすると、ブルが、ぴよ、と鳴いた。

「あの、マリオ、今夜の夕ご飯なんだけど……」

そう。本命の彼女ができてしまった相棒とは、けして元の仲にはもどれない。それは男同士の宿命だ。でも、たまにはいっしょに酒でも飲もうぜ、友よ——って、僕は未成年だし、ブルは飲めない。

「おう、適当に食っとく。どうせ父さんは酒場だし」

僕はできるだけ渋く、軽く手を上げただけで、その場を去った。

ちよつと最後までだけは決まったかな。

4

さて、ハンスの奴はどこにいる。この前と同じ場所と返事しといたはずなんだが。

僕は下腹に力をこめて、草原を見渡した。

決闘状の返事にしては妙な手紙だったが、前回あやふやに終わったあの夜以来、初めてのまともな対面だ。気を抜いちゃいけない。

夏の風でゆったりと波打っている草原には、虫採りの子供たちが三々五々散らばっているだけで、ハンスの姿はどこにも見当たらなかった。

夏休みのライン河周辺は、公園広場と同じで、あまり街の人達は散策していない。たぶん街の半分以上の人が、どこか別の土地で、長い休暇を楽しんでいるんだ。お金持ちはお金持ちらしい所に、貧乏な人はそれなりの所に、ホームレスの人はこの時期でも食事にありつける町に。まあ僕の家の場合は、ローゼンレックが年中無休で動いている限り、長い家族旅行はできない。社長なんて言っても、結局父さんは、自分が一番働いているんだからなあ。きつと母さんが生きてたら、父さんも違う生き方をしてるのかもしれないけど。またじつくり草原を見渡すと、ハンスは向こうの土手の上に立って、こち

らに手を振っていた。あの晩、ブルやライラが立っていたあたりだ。

その手の振り方があんまり弱々しく緊張感がないので、僕は拍子抜けしてしまった。

あれじゃ、やっぱり闘志とか対抗意識とかは、もう全然ないんだろうなあ。まあ詫びを入れてくれるんなら、それはそれでいいんだけど、それなら僕はなんのために、また聖子を怒らせてしまったんだろう。それじゃただの丸損じゃないか。

舌打ちしながら土手に登って行くと、ハンスはなんだかずいぶん景気の悪い顔をしていた。夏だというのに真っ白だ。これは例年のハンスに比べるとかなりおかしい。

「悪い。あんまり暑くて、ここで待ってた」
声もかさかさと涸れている。

そうか、こいつは瞬発力はあるんだが、持久力はあるまいんだな。それにしても今日のハンスは、まるで病院で見かけた重病の患者みたいだ。

僕はもう睨みつける必要も感じなくなつて、河の見える東の木陰に、黙って腰を落ち着けた。

ハンスも素直に従って、隣に腰を降ろした。

ライン河はもう、力いっぱい夏の色だ。空と同じくらい青くて、空と逆さの入道雲を、さわさわと水面に写している。

対岸の土手の彼方では、あの四号棟の修復工事が、今日も続いているはずだ。

僕はもう、なんだかせせこましい面子やら意地やら、この風景の中では、どうでもいいような気がしてきた。

でも、やっぱり決着だけは、つけておかなければ先に進めない。

ハンスはなんだか憂いに満ちただけだるげな顔を、両手で覆ってもみほぐしたりしている。

しかしまあ、こいつはなんでここまで、何をやってもどんな顔色でも、二枚目なんだろうなあ。

隣からなんにも声がかからないので、僕は自分から切り出した。

「相談って、なんだよ」

ハンスはしわがれ声で答えた。

「……その前に、聖子にキスした件は、ほんとにすまなかった。殴るなり蹴るなり、好きにしてくれ」

どうやら奴は本気みたいだ。

たとえ本気じゃなかったとしても、今の死にかけみたいないつは、いくらなんでも殴れないよなあ。

まあ、僕はハンスが負けを認めてくれれば、それでいい。それに、あれは今にして思えば、キスなんてもんじゃなかったんだ。うん。ほんのちよつとくつついてただけ。顔と顔の間から、ちゃんと月の光が見えてたもんな。ちよつと失礼します今晚は、そんな程度のもんだ。軽いご挨拶程度。僕なんか、舌まで入れてもらっちゃったもんね。舌まで入れちゃったもんね。聖子の舌は、ちよつとしよつぱかったんだもんね。お前そんなこと知らねーだろ、やーいやーい——って、馬鹿か僕は。

ハンスはまた顔を覆って、力なく溜め息をついた。

「……俺って、駄目なんだよ。だって昔から、女の子の方から寄って来ちゃうんだもん。そりゃ、お願いしますって言われたら、お願いされちゃうだろう、普通。断ったら、なんだかかわいそうだし」

それは——解るような気がする。でも、やっぱり袋叩きにしてやりたいような気もする。

第一僕が知る限り、ハンスが他の学校の女の子なんかと、なんかこつそりやっていたのは、キスどころじゃないはずだ。

「でもさ、俺、お前だから話すけど、ほんとのこと言うと、本気でいたい娘

としたこと、一度もないんだよ。というか、本気でしたいと思ったことが、
今まではなかったんだよ」

それは——やっぱりフクロにしてやりたい一方、すごく哀れな気もする。
だってそれは、一度も恋をしたことがないってことだ。

あれ、待てよ。『なかった』ってことは、今はあるってことかな。『したい
娘』が。

ハンスは何か思いつめた顔で、僕に一通の封筒を突き出した。

「マリオ、お前、ライラと仲がいいだろう。というか、命の恩人なんだろう。

……これ、なんとか、頼む！」

なんだか女の子向けっぽい、白い花の浮かし模様の入った封筒だ。

あんまり上手くない字で、それでも力いっぱい、『ライラ様へ』と書いて
ある。

——げ、なんだこれは。

「……俺、変なんだ。聖子と裏庭にいた時も、ほんとはその前に踊った、ラ
イラのこと考えてたんだ。お前、本当に殴っていいぞ。でも、ほんとに変に
なったのは、あの晩からだ。お前に撃たれそうになった時。……マリア様か
と思った。でも、俺、怖くて逃げちゃって……どうしようもないよ、俺って」
本気で苦悩してるみたいだ。

「忘れようとしたけど、駄目なんだ。寝てても、起きてても……好きなんだ
よ！」

こ、こういう話だったのか。

でもハンスは、何か本質的に、いや、好きになるってのは充分本質的なん
だが、それ以前に、何か重大な勘違いをしてるんじゃないだろうか。

もしそれが僕の方の勘違いだったら、ハンスに対する大変な侮辱だし、逆
に奴に殴られても仕方がない。

でもやっぱり、ブルとライラに余計な気苦労をかけないためにも、確かめ

なきやいけない。僕の知る限り、それはハンスという男のためでもあるし。

「でも、ライラには……ないよ？」

「……何が？」

「えーと、ほら、つまり、要するに、その……赤ん坊の出口」

ちよつと恥ずかしくてハンスの顔は見られなかったが、隣でぴくりと震えた気配から察すると、やっぱり勘違いしてたみたいだ。

しばらく沈黙が続いてから、ハンスはめいっぱい感情を押さえた声で、ぽつりと呟いた。

「……ないの？」

僕もなるべく感情を押さえて答えた。

「……ないの」

ハンスはそれきり黙りこんでしまった。

そりやそうだよなあ。僕だって、聖子のあの小鹿のような脚の○○○んとこに、○○○○が存在していなかったら、きっと死ぬまで悩み続けるだろうし。

ハンスはたつぷり三十分ほど、頭を抱えてうなだれていた。

やっぱり、考えてどうなるもんじゃ、なさそうな気もするんだけど。

ないもんは、どう考えてもないもんなあ。

でも、次に唐突にこちらを向いた時、ハンスは奇妙にふっきれたような顔をしていた。

なんだか悟ってしまったみたいなの虚ろな瞳で、ふらふらと封筒を僕に差し出してくる。

これは困った。

ほんとに困った。

僕はもうハンスに友情に近い感情を抱いていたんだが、ここは断腸の思いで、追い打ちをかけざるを得ない。

「……ごめん。でも、無駄」

ハンスは、今度はきよとんと目を丸くして、馬鹿みたいに繰り返した。

「……無駄？」

しかしまあ、こんな呆け顔でも二枚目を保っているってのは、驚嘆に値するよなあ。

でも、嘘でごまかしていいことと、悪いことがあるからなあ。

「うん。ライラの命の恩人は、僕じゃなくて、ブルフィンチ」

「……あのだるまストーブが？」

「うん。新聞なんかじゃ脇役に回ってたけど、あいつが主役だったの。で、あいつがライラを助け出して、今、二人で熱々になってる。つまりライラにとつて、ブルは白馬の王子様なんだな。公園広場じゃ結構噂になってるみたいなんだけど、お前、知らなかったのか」

「……俺、ここんとこ、ずっと寝てたから」

ハンスはゆらりと立ち上がった。なんだか不穏な空気を漂わせている。

「……あのだるまストーブが！」

ハンスの全身から、ごう、と熱い風が吹いたような気がした。顔つきもさつきとは豹変している。

これはあれだ。文学的に表現すると、しんい ほむら 瞋恚の炎、つて奴。

ハンスは封筒をグシャリと握り締め、鬼気迫る顔を夏空に向けた。

ああ、こいつも今、誰かさんと絶交宣言してるんだろなあ。

ハンスはいきなりものすごい速さで駆け出して、あれよあれよという間に、草原の彼方に消えてしまった。



僕はなんだかすごく気疲れしてしまって、つくづくため息なんかつきなが

ら、ライン河の流れを眺め続けた。

——ブルの奴も、これから色々大変だろうなあ。

でも、そのうち、僕はある明確な事実気がついた。

——あれ？ これはすでに、僕の問題じゃないんじゃないのか？

そうだよ、うん。僕の決闘は、あの晩とつくに終わっていたんだ。そこから先は、もうブルとハンスの問題だ。

そして、僕に残された問題は——。

僕は勢いよく立ち上がって、ぱん、と両の頬に気合いを入れ、それからさつきのハンスと同じように、一散に土手を駆け降りた。

草原を駆け抜け、そのまんま街も半分駆け抜ける。

公園広場が見えてくると、ブルたちはベンチを離れて、噴水の水をぱちやぱちややっていた。きつと旧式なブルの電腦を、ライラが冷やしてくれてるんだらう。

それからまたベンチに戻る時、ライラがブルを抱えて「どっこいしょ」なんてやってるのも、ちよつとあれだけど仕方がない。

僕はブルに駆け寄って、ぴよぴよと驚いているブルの頭を、ぱん、と叩いた。

「がんばれよ！ ブル！」

「な、何が？」

「そのうち解る！」

それから、念のためライラにもウィンクしておく。

「ブルをよろしく！」

「は、はい」

うん。二人とも大丈夫だ。

僕はあつけにとられている二人を残して、また一目散に駆け出した。そのまま家に駆けこんで、まず自分名義の預金残高をチェックする。

よし、これなら充分だ。

僕は大きあわてでスポーツ・バッグに当座の下着や何かを詰めこみ、それから父さん宛ての置き手紙を書き殴って、居間のテーブルに放り投げた。

三十分後、僕はもう動き始めた汽車のデッキに飛び乗っていた。

煉瓦造りの駅舎や街並みが、煙の流れの中を、どんどん遠ざかって行く。

——とりあえず、さらば、ブル。ハンスからなんか訳のわからない決闘状が届くと思うけど、一人でなんとかできるよな。お前はもう立派な男なんだから。ちよつと無責任な気もするけど、がんばるんだ、ブル。悪いが、僕もお前の友人であると共に、やっぱりただの男だ。僕はなんとしてもスイスの山の湖畔で、星空の下、聖子と愛を交わさなければならぬ。でない、ラインハルト十九世の夏は終わらないんだ。

そして、もしまだ聖子がぶんぶん怒ってて、いつしよに湖になんか行かないと言ったら、男として取るべき道は決まっている。

僕はこの春から夏にかけて、ずいぶんいろんなことを学んだ。

だから、この決意に間違いはないと確信している。

聖子がまだ怒ってたら——そう、男らしく頭を下げるんだ。

たとえ土下座してでも、聖子に許してもらうんだ。

だって許してもらわないと、いつしよに湖に行けないじゃないか！

【終章】

ヨゼフ爺さんは、大あくびをした。
優蔵もつられて、大あくびをした。

紺青の空と、斑に白いアルプスの山肌に、爽快な風が夏雲を刷いている。
二人は店先の椅子に並んで、十時のお茶を待っていた。

神父一家が訪ねて来る日までに、ヨゼフ爺さんは、店先に小さなテーブルを用意していた。都会の喫茶店の前に並んでいるような、洒落た白い茶席だ。それは独り暮らしになってから、家族用のベッドなどと共に、何十年と納戸の奥にしまったきりの物だった。

店の庭からしばらく下った斜面には、この時期、エーデルワイスの群生が広がっている。

地球温暖化の影響は、この土地でも無縁ではない。昔に比べれば半分ほどの群生になってしまったが、それでもまだ『お花畑』と称するのに充分な広さだ。

その白と緑の群生に腰を落として、エーデルワイスの花輪をせっせと拵えている、二人のエーデルワイスが小さく見えている。

—— Edel Weiss (高貴な白)。

お揃いの麦藁帽子でころころと笑い合っているのが、遠目でも判る。

ヨゼフ爺さんは目を細めて、二人の睦み合う姿を見守った。

もし観光客などがそんな真似を始めたら、本来どやしつけているところだ。我ながら現金じゃな、と自分でも思う。しかし、花たちが花を摘んでいるの

だから、たぶんそれは特権なのだ。

優蔵も、隣で同じように目を細めている。

ヨゼフ爺さんは優蔵の僧衣姿が、来訪以来ずっと気になっていた。職業上の衣装らしいので、今までは何も言わなかったのだが、今日この場の光景の中では、ちょっと黙っていられない気がする。

「……しかしまあ、春に来た時のコートも暑苦しいと思つとつたが、神父さん、それは脱ぐと臆首になっちゃうとか、そういうもんなのかね」

優蔵はしかつめらしい顔で答えた。

「この姿でアフリカのサバンナでも汗をかかない、それが神父の条件なのです」

ほう、と真顔で感心しているヨゼフ爺さんに、優蔵は爽やかな笑顔を向けた。

「失礼、種明かしをしますとね、一見暑苦しいように見えて、これがなかなか快適なのですよ。法王庁も馬鹿ではありません。夏服は特殊加工のリネンで仕立ててあるので、見かけは禁欲的に重々しく、中身はきちんと涼しく、そんなところです」

二人で笑い合っている所へ、花輪を持った花たちが駆け上がって来た。

「はい、お父さんの分」

「はい、お爺さんの分」

聖子とレイラの声が、日本語と英語でハーモニーを奏でる。

レイラはまだ英語が主言語で、スイス語は覚え始めている程度だ。もちろん一度聞いた言葉は忘れるということがないので、じきに覚えてしまうだろう。

「先にお母さんたちに、おあげ」

その返事も二つ重なりかけたので、優蔵とヨゼフ爺さんは、苦笑しながら言葉をずらした。

娘たちは元気に頷いて、家の中に駆けて行った。

やがて、優蔵がおもむろに口を開いた。

「さて、私が種明かしをしたところで、ヨゼフさん。あなたの種明かしも、お願いできませんか」

「ん？ 何をじゃな？」

ヨゼフ爺さんは、のほほんと白を切った。

「いやあ、もうここに着いた晩からずっと考え続けているのですが、どうしても解りません。妻や娘には、解ったような顔でごまかしてはいるんですが、もうそれも、そろそろ限界というわけで」

お茶が入りましたよ、という、子供たちよりも音色の柔らかい、日本語と英語が響いた。

「まあ、それはお茶の後で、ゆっくりとな」

俊江とマリアが、紅茶と菓子を運んで来た。

それぞれ頭に花輪を飾って、横には娘たちを纏わらせている。

マリアも英語が主言語だ。ただしマリアはキングス・イングリッシュであり、レイラはアメリカン・イングリッシュ、そんなアクセントと語彙の違いは、まだ残っている。

優蔵は六ヶ国語を使いこなせるが、俊江と聖子は日英は完璧でも伊独はまだ怪しいし、ヨゼフ爺さんは母国語以外は英独がやっとなんとかだ。したがって現在この店では、様々な訛りの英語が、団欒の公用語ということになる。そんな賑やかで華やいだお茶会の後、俊江とマリアは後片付けに、聖子とレイラはまた花畑に戻って行く。

「御馳走様でした、奥さん。結構なクッキーでした」

優蔵はマリアに声をかけた。

マリアは小首を傾げるようにしながら、あでやかに微笑した。

「お気に召しまして光栄ですわ。午後のお茶では、俊江さんが、ラズベリー・

パイを御馳走してくださいますことよ」

「あなた、帰るまでには、私みたいに太ってしまいそうね」

妻と貴婦人は、笑いながら店に戻って行った。

優蔵はマリアの典雅な立ち居振る舞いに、いつもながら嘆賞の視線を送っていた。春にアーム・チェアで眠っていた時の印象が、そのまま生きて語っている。

一方ヨゼフ爺さんは、遠ざかる聖子の背中に声をかけた。

「君の騎士君にも、冠を送ってあげたらどうじゃね？」

聖子はどきりとしたように立ち止まり、それからおずおずと振り向いた。

「……あんな人、知らない！」

笑顔に一言の嘘を残して、身を翻し、駆けてゆく。

いい姿じゃな、とヨゼフ爺さんは思った。隣のレイラのように完璧ではないが、小娘らしく、活きた姿だ。

また男二人に戻ると、優蔵は意味ありげにヨゼフ爺さんに頬笑みかけた。

「さて、お茶が済みましたので、そろそろお願いしますよ、ホームズさん」

「はいな。それはごく単純な推理なんじゃよ、ワトソン君」

ヨゼフ爺さんも、悪戯っぽい微笑を返した。

「あの目録は、御覧になったはずじゃな」

「はい、原書も英語訳のノートも、じっくりと拝見させていただきました。しかしあれだけでは、なぜライラもレイラもマリアさんも現在元気になっているのか、私にはさっぱり解りません」

「同じ職人たちが、マリア、レイラ、ライラの順に造り上げた親子である、ということはお解りじゃろ」

「それは、確かにそう明記してありますから。でも、あなたのお話でもプラ―テンさんのお話でも、パーツの互換性は一切ないということでしたが」

「はいな。確かに儂もあの目録をざっと眺めただけじゃ、そう信じとつたら

う。儂自身、マリアとレイラはもう何十年も診ておって、全く互換性がないのは明白じゃった。ところが、ここにレイラという個体が間に入るだけで、まったく話が変わっちゃうんじゃない。こればかりはレイラの構造そのものを診なければ、誰にも解りようがない。そもそもレイラという個体の存在自体、あの目録以外、記録から抹消されていたんじゃないからな」

「……ちよつと待つて下さいね。少し解つて来たような気がします」

優蔵は待つたを入れた。

すでに三人が元気であるのだから、急ぐ必要は全くない。むしろ、これは休暇中の一時を楽しむための、うつつつけのゲームなのだ。

それはヨゼフ爺さんにとつても、同じ感覚だ。

優蔵は二・三分考え込んでいたが、やがて口を切つた。

「……まず、電源回路に、マリアとレイラの間で互換性があるようですね。あの大騒動の後で、あなたは『レイラは充電を自ら絶つて眠りについた』とおっしゃいましたね。ということは、おそらくマリアさんと同じ状態だったということだ。レイラはプラズマ・ユニットで作動しているのだから、充電という概念はないはずですよ」

「はいな。ごく初歩的な推理じゃな、ワトソン君」

「しかし同じ構造だからと言って、現在それを簡単に造れるとは思えませんね。あなたが何十年も悩んでいらしたような、秘匿回路が内封されているわけでしょう。でも、それ自体を作動可能にはできそうだとあなたはおっしゃっていた。でも——ひとつしかない電源を、レイラとマリアさんと共有するわけには行かない。……うーん、解らない」

「じゃあ、問題を順を追つて解決しようかの」

「はい」

「まず、マリアを動かすにはどうするね」

「……レイラがとりあえず眠つたままでよろしければ、レイラのバッテリー」

を機能回復させた上で、マリアさんに移植する、これだけでよろしいのでは」

「はい、正解。僕がやったのも、それだけじゃ。それだけで、もうマリアはぴんしゃんというわけじゃ。じゃあ、ライラを生き返らせるには、どうするね」

「……ライラが破損していたのは、神経中枢ですから、それがライラと互換性があった部分ということですね」

「はい、それも正解」

「でも、やはりそれも一つしかないじゃないですか。レイラからライラに移植したら、今度はレイラが動けない。——待てよ。情報処理回路なわけですから、電源とはちよつと違う条件ですね。どんな複雑怪奇な構造だとしても、機能的には、信号の『入力』『解析』『出力』……これは共有できそうかな」

「さすがじゃな、ワトソン君。——それは失礼かな、ここまで来るとな。さすがエリートさん、と言つとこうかの」

「ありがとうございます。でも、技術的にそんなことが可能でしょうか」

「そこじゃよ。僕も最初に島でレイラを診たときに、マイクロ・スコープのレベルでも同型らしく視認できたんで、なんとか神経中枢を共有できんかと考えた。中身をいじるのは不可能でも、外部的な結線と回路追加、それで交互処理してやれば、できないことはなさそうじゃと思った。まあ交互化すれば、当然処理速度も半分以下に落ちる。凶太いケーブルもいるじゃろう。すこぶるのんびり屋の双子が、一年中いっしょに暮らすことになるが、それでも二人はまっとうに生きて行けるわけじゃからな」

「はい。しかし、今は二人とも離れて生活してますね。——そうか、ケーブルの代わりに、何か通信的な手段で」

「この世界のどこに、神経組織の情報量とレスポンスに追随できる、通信手段があるかね？」

「……そうですね。第一、ふたりとも鈍いどころか元気そのものだ。つまり、

やっぱりひとつの回路を共有しているわけではない、と」

「はいな。まあ、これはひとえに、あのアレキシスのおかげなんじゃよ。あの大騒動の後、ブルフィンチの頭を覗いて、僕は死ぬほど驚いたね。狂喜乱舞ってとこじゃ。まあ、人目が多かったんで、しらばっくれてたがの。ブルフィンチの頭の中で、アンティーク・ロボットの回路が見事に繋がった。ということとは、僕も昔から欲しくて欲しくてしょうがなかったが、とうとう掘り出せなかった特化ナノミクロン・スコープを、アレクの奴が持つとるってことだ。他の誰が持つとつても、あそこまで使いこなせるとは思えんからな」

「しかし、ナノミクロン・スコープなんて、現行品がどこにでもありそうな気がします」

「アンティーク・ロボットの場合、話が違うんじゃ。形状がそれぞれ特殊な階層構造で、しかも有機的に融合しとる。今のスコープだと、そのロボットを壊す覚悟で回路を外してやらん限り、完全にはスキャンできん。まあ、できたとしても、この場合ただ覗けただけじゃ、どうにもならんがな」

「ということは……単に覗いて、構造を把握して、複製されたわけではない、と」

「それは不可能じゃな。この時代の電子回路の場合、ベースの材質や加工、どれをとつても、現在の製造工程とは全く違う。初期の製造工程全部、つまりプラント自体を、再現する必要がある。僕にそんな金はない」

「……お手上げですね」

「まあ、こればかりは、推理じゃどうにもならん。初めから、その知識があるかないか——というか、あれらの人形たちをどこまで知ろうとしたか、それだけの問題なんじゃよ。種明かしすれば、アンティーク・ロボットのメンテナンス専用の、正式名称『旧西暦一九三三年型単一目的特化ナノミクロン・スコープ』、これには、実はアレクの奴も知らん、裏技があるんじゃ。彼奴あやつ

は儂の知つとることはほとんど知つとるが、全部は知らん、そう言ったじゃろう」

「はい、確かお手紙にもありましたね」

「あの時代のスキヤニング技術自体は、現在とほぼ変らん。ただし、それを儂らに見せてくれる視覚部は、原始的なFED（電界放出出画）で、現在のSPAR（共時光子直視）とは、追従性の桁が違う。そのために、こいつはスキヤン情報を直視出力しとらん。いったん本体内のキャツシュに収めてから、FEDで再現可能な信号に変換して出力する。——ここまでは解るかな」

「はい。良く解ります。あくまでも、そこまでですが」

「よろし。で、そのキャツシュを必要とする、といういわば前時代的な機能を発展利用して、もうちつと生産的に使えんか、と考えた——考えたんじやないかな、と儂は思うんじやが、この機械はそのキャツシュにあえて膨大なメモリーを突っ込んで、スキヤン情報を一ラインとか一フレームとかケチな細分化はせずに、全体像の丸々の情報を、キャツシュするわけじゃ」

「……しかし、それは途方もなく無駄な機能に思えますが」

「その通り。単なるスコープとして使うだけなら、まあ既知外の仕業かな。隣の家に回覧板を回すのに、ジャンボ・ジェットで出発するみたいなものじやな。——さて、ここらで、何かひとつ、コメントが欲しいな。すぐ種明かしが終わっちゃったら、昼飯までも話をもたん」

ヨゼフ爺さんは、胸のポケットからパイプとマッチを取り出して、一服付け始めた。

のんびりと燻らせるその香りは、隣で考え込んでいる優蔵の鼻を、極めて蠱惑的に刺激した。

「……誠に恐縮ですが、ひと息だけ、拝借願えませんか」

「おう。ひと吸いでもふた吸いでも、お代わりでもええぞ」

優蔵は店の方を振り返って、俊江がまだ奥にいるのを確認してから、すば

やくパイプを借りて、深々と吸い込んだ。

ヨゼフ爺さんはくすくす笑いながら、

「聖子ちゃんには、見えとるぞ」

「あの子は、大目に見てくれますので」

「近頃は大変じゃなあ。ま、儂くらい年齢になると、かえってアルツハイマー防止にいいそうじゃが」

優蔵はヨゼフ爺さんにパイプを返すと、数秒もたたず口を開いた。

「あくまでも正気な技術者が、ジャンボ・ジェットに乗ったんですから、それは回覧板を隣に回す以外に、別の目的があったということですね」

「そりゃそうじゃ」

今度は数分間、優蔵は熟考を続けた。

「そうか。現在ライラが元気ということは——私の場合、単に、そこから逆算するだけでいいんだ」

「おうおう」

「そうですよ。現にライラが元気なんですから、神経中枢と同等の物が、現在そこにあるはずですよ。ということは……あの、あくまでも原理的な部分は何りませんが、その特化ナノミクロン・スコープという奴が、もしかして、現在ライラの胸の中に？　つまり、それは最初から単なる検査機器ではなく

——」

「はいな」

ヨゼフ爺さんは、愉快そうに手を叩いた。

「ご正解。スコープ部を外した、ちっこいカード型の本体だけが収まっとる。まあ、それなりにいじらにゃならんし、うまく繋ぐのに、ひと月以上かかったらまったがな」

拍手を受けながらも、まだ首をひねっている優蔵に、ヨゼフ爺さんは講釈を続けた。

「原理的にも何も、もう九割方説明したじゃろう。走査対象回路の物理的な構造の全てが間引きなしで記録できれば、そのデータを元にして情報処理をシミュレートするなんてのは、初めから演算回路ひとつ余分に入れとけば可能になる。で、あのカード中には、きちんとオマケが入っとる。素材情報のROMまでくつつけてな。つまり、あの特化ナノミクロン・スコープは、腕と頭次第で、アンティーク・ロボットの電子回路全ての互換パーツとしても機能する、ということなんじゃよ」

はあはあ、と言うように、優蔵は何度も頷いた。

ヨゼフ爺さんはパイプの煙を吐きながら、悠然と空を仰いだ。

「儂が思うに、それは昔の人形師の、仲間内だけの符丁みたいなもんじゃなかつたかと思うよ。俺が死んでも、子供たちをよろしく頼む——そんな親心みたいな、な」

優蔵は空の雲にまぎれる煙を眺めながら、こつくりと頷いた。

しかし、また、ふと首をひねる。

「……すみません。最初に抜いたレイラの電源が、それだと空いたままです」
「はいな。それは二番目に楽なことじゃった。レイラの電源ユニットの形式は、マリアの水素バッテリーから、ライラのプロズマ・ユニットに移行する中間の形式、つまり、上位下位共に、互換性があつたわけじゃ。レイラの水素バッテリーを抜いてもプロズマ・ユニットがあれば、接続部の随時出力調整回路の調整で、駆動可能なんじゃないや。ただし、マリアではそれはできん。水素バッテリー内封の秘匿回路という奴が、そもそも特化された随時出力調整回路であつて、マリア自身にはその機能がない。レイラの場合、両用を想定して設計されてるために、接続された電源のタイプによって、本体の調整回路はスルーされたり駆動したり、そんなわけじゃ」

「でも、やはりそのプロズマ・ユニットも、ライラの中に、ひとつしかないのでは？」

「プラズマ・ユニットなんぞ、何百年たつても構造自体に大差はない。かえって小型化されて、具合がいくらいじゃ。軍需用が、いくらでも闇で手に入る。現にアレクの奴に電報を打ったら、一週間で送ってくれたよ。——さ、これで種明かしはおしまいじゃ」

まだ納得しきれず首をひねっている優蔵をよそに、ヨゼフ爺さんはのんびりとパイプをふかし続けた。

蒼天の雲は流れ続ける。

遠くエーデルワイスを編み続ける娘たちの方から、ときおり軽やかな笑い声が、風に乗って流れて来る。

二人の婦人のいる厨房から、昼餉のシチューらしい香りが、温かく流れ始める。

ヨゼフ爺さんは、しみじみと呟いた。

「……今回の騒動を思い返すと、世の中というものは、つくづく面白いもんじゃないと思うよ。これに関わったもんいっさいがっさい、良い奴悪い奴、利口な奴馬鹿な奴、普通な奴普通じゃない奴——ま、儂はそのどれに入るかは判らんが、その内のそれこそ誰ひとり欠けても、今こうやって、儂がのんびり楽な気持ちでいることは、できなかつたわけじゃ」

優蔵は、その言葉になら何の疑問も持たず、素直に頷くことができた。

「そうですね……まるでメビウスの輪の上を歩いているようだ」

「なんじゃね、そりゃ」

「えーと、因果は巡る糸車、とでも申しましょうか……すみません。食事の時にでも、現物をお目にかけますよ」

「ほほう、面白そうじゃの」

「まあ、あまり期待なさらない方が」

眼下の花畑から、娘たちの声が届いた。

二つ目の花輪を編み上げ、嬉しそうにこちらに振りかざしている。

「……ま、神父や牧師の始める話は、どんな面白そうな話でも、最後はどうせお説教になるんじゃないやろうよ」

優蔵は苦笑しながら、娘たちに手を振り返した。

同じように手を振っていたヨゼフが、ふと呟いた。

「おや？」

麓の方を見ているようなので、優蔵も同じ方角を見据えた。

夏草の小波なつなみの中を、遥かに麓まで蛇行する道筋の彼方から、登って来る人影があるようだ。

遠目の利くヨゼフ爺さんが、先に言った。

「見慣れん、でぶつちよの小僧が登って来るが……旅姿じゃな。おい、噂に聞いたような太り具合じゃぞ」

遅かれ早かれ姿を現わすような気がしていたので、優蔵は人影の方に大きく手を振ってみた。

少年も陽気に手を振り返してくる。

そのやり取りで気がついたのだろう、中ほどにいた聖子とレイラが、怪訝そうに花畑から立ち上がって、麓を見下ろした。

少年はそれを認めると、どんな顔をしたかまでは見えないが、優蔵が普段街で見かける時と同じように、ころころと駆け出した。

「おう、元気そうな坊主じゃないか」

ヨゼフ爺さんは、かなり感心していた。ここまで山道を登って来て、たとえ先に何があったとしても、さらに駆け出す元気な旅行者はまずいない。山慣れた地元じもとの少年でも、めったにいない。

少年はまっしぐらにエーデルワイスの群生をめぐし、立ち竦んでいる聖子に駆け寄った。

優蔵の目に、やっと少年の嬉しそうな表情が窺えた。

はあはと息をつきながら、何やらべこべこ頭を下げている。

聖子はそんな少年にくるりと背を向けて、腕組みをしたまま、怒り顔で黙りこんでいる。

「……女には苦勞しそうじゃな」

ヨゼフ爺さんは、ちよつと心配になった。

隣のレイラは、ただおろおろと二人のやり取りを見守っている。

少年は、そこで初めてレイラの容姿に気づいたようだ。

首をひねりながらレイラと言葉を交わし、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、それからぺこぺこと挨拶のお辞儀を交わしたりしている。

聖子はそんな二人を肩越しにちらちら振り返っていたが、少年がまた自分の方を向くと、あわてて無視のポーズに戻った。

少年は聖子の前に回り、今度は群生に膝を落とす、懸命に土下座を始めた。

——おいおい、マリオ君、それはちよつと早すぎやしないかね。まだまだ先は長いと思うんだが。

優蔵もつくづく心配になった。

やがて、聖子がぶんぶん顔を一気に緩めて、花のように笑いながら、少年の頭に花冠を被せた。もともと怒ってなどいなかったに違いない。

少年はあつげにとられていたが、じきに笑い出した。

二言三言じゃれ合うように言葉を交わし、どんな話し合いがついたのか、少年がいきなり聖子を肩車に担ぎ上げた。

聖子が樂しげに店の方を指さすと、少年も笑いながら、聖子を肩車したまま、また山を登り始めた。

さすがに今度は辛そうだが、それでも脚をふんばって、ぐいぐいと登り続ける。

「おうおう、無駄には太つとらんようじゃな。なかなか使えそうなでぶつちよじゃ」

聖子が元気にこちらに手を振ったので、ヨゼフ爺さんも手を振り返した。

優蔵もヨゼフ爺さんの言葉に同感しながら、手を振り続けた。

◇

◇

さて、この時——その場の他の誰も知らなかったことだが——二人の後を、花輪を抱えてついて来るレイラの心に、ある新しい感情が生じていた。

ヨゼフ爺さんは今回の修理にあたって、あえてレイラの記憶をリセットしていなかった。四百年に渡る悲しい思い出もまた、それはレイラという少女のかけがえのない一部だ。これからは母親もずっといっしょだし、妹ともすでに再開し、会おうと思えばいつでも会える。そうしたこれからの無限の生の中で、過去の思い出はこれからの思い出と融け合って行くだろう、そう考えてのことだった。

したがって、当然レイラの心の中には、かつて自分をもっとも慈しんでくれた『夫』に対する、思慕の情はほとんどそのまま残っていた。しかしまた、その『夫』が二度と帰らぬ存在であることも、自ら充電を絶った時、充分悟っていたのである。つまり、その行為は悲しみからというよりも、諦観からの行為だった。そしてその『夫』は、今日の前を頼もしい姿で進んで行く少年と同じように——背丈や世代こそ違うものの——やはり堂々と太っており、島での散歩の折も、しばしば自分を肩車にして、優しく笑ってくれていたのだ。

レイラの白い頬が、ぽ、と桜色に染まった。

——まあ、なんて好いたらしいお方。

◇

◇

そんな少女の心を、ヨゼフ爺さんは知る由もない。

ヨゼフ爺さんは、麦藁帽子の下の生気に満ちた聖子の笑顔と、少年の満足げな汗だらけの笑顔を眺めながら、夏じゃな、と、ひとりごちた。

やれやれ、忙しい初夏だった。

それでも五体は、まだまだ元気だ。

よわい
齢七十、上等だろう。

当分は忙しい日々が続きそうだが、他に格別不平不満の種もない。
ともかく夏が来たんじゃないかな。



© Hiromu Okinotukasa <http://www.geocities.jp/baniladanuki/>

★ ここに文章化されたお魚たちは、
九割九分ドッコ沼の主の扶養下にあります。

★ 釣って帰ってかわいいがったり、
焼いておいしくいただいたりするのは大吉です。
お仲間との酒宴の肴・お隣へのおすそわけなどにも吉です。

★ ただし、公園の池に無断で放したり、
路傍や店先で売ったりすると、龍神様の祟りがあります。
それはもう鏡花の『夜叉ヶ池』さながら、
村中水浸しになります。

ドッコ沼の森



©ドッコ沼インナースペース Hiromu Okinotukasa (HN.Vanilladanuki)